

|      |           |            |               |          |
|------|-----------|------------|---------------|----------|
| Home | ごあいさつ     | みみより会へのお誘い | Web Page みみより | みみより会の道程 |
| 更新情報 | 例会情報とお問合せ | 掲示板        | リンク           | Mail     |

| No. | 題 名                      | 著 者 名   |
|-----|--------------------------|---------|
| 1   | 差別法の撤廃                   | 遠 藤 良 明 |
| 2   | 大阪駅のプラットホーム              | 鈴 木 克 美 |
| 3   | 耳は悪いのか？                  | 鈴 木 克 美 |
| 4   | 他人の2倍も3倍も                | 鈴 木 克 美 |
| 5   | 同障異夢の旅も道連れ               | 鈴 木 克 美 |
| 6   | おしゃれな補聴器                 | 鈴 木 克 美 |
| 7   | 3人のM先生                   | 鈴 木 克 美 |
| 8   | 春は友だちづくりから               | 鈴 木 克 美 |
| 9   | 手話のもう一つの周辺               | 鈴 木 克 美 |
| 10  | 70デシベルと80デシベルの違い         | 鈴 木 克 美 |
| 11  | 聴覚障害と英語教育                | 鈴 木 克 美 |
| 12  | 書けなかった本                  | 鈴 木 克 美 |
| 13  | 本を読むこと◆聾教育の脱構築◆耳科学－難聴に挑む | 江 時 久   |
| 14  | 35年間の合唱                  | 丸 山 一 保 |
| 15  | たかが「みみより」されど「みみより」       | 丸 山 一 保 |
| 16  | オジサンたちのお茶会               | 丸 山 一 保 |
| 17  | 手話の周辺 1                  | かとうこうじ  |
| 18  | 手話の周辺 2                  | かとうこうじ  |
| 19  | 手話の周辺 3                  | かとうこうじ  |
| 20  | 手話放送と大空社の本               | 丸 山 一 保 |
| 21  | みみより目次総覧                 | 丸 山 一 保 |
| 22  | 懐かしい弁当箱型補聴器              | 丸 山 一 保 |
| 23  | 耳硬化症                     | 丸 山 一 保 |
| 24  | 早熟とオクテ                   | かとうこうじ  |
| 25  | インテグレーション                | 丸 山 一 保 |
| 26  | 会を創る                     | 丸 山 一 保 |
| 27  | 日本ろう話学校のことなど             | 丸 山 一 保 |
| 28  | 花・人群れの中に                 | 大久保紀次   |
| 29  | 夕日                       | 岸野千鶴子   |
| 30  | 多様化の波しぶき                 | 鈴 木 克 美 |

|    |                          |           |
|----|--------------------------|-----------|
| 31 | 雨のち曇り時々晴れ                | 鈴木 克 美    |
| 32 | 新たな展開に向けて 1              | 遠 藤 良 明   |
| 33 | 新たな展開に向けて 2              | 遠 藤 良 明   |
| 34 | 素晴らしき仲間たち                | 丸 山 一 保   |
| 35 | 竹に音を聴く—杉田静山の人生—          | 杉田静山・江時 久 |
| 36 | 可能性は空の極みまで               | 江 時 久     |
| 37 | 白い浴衣(ゆかた)                | 大久保紀次     |
| 38 | 一人だけのナツメロ                | かとうこうじ    |
| 39 | ラクダのコブにまたがって             | 鈴木 克 美    |
| 40 | 愛する学び舎よ 悔いなきわが天職よ        | 前田 精・江時 久 |
| 41 | ベートーヴェンの耳                | 丸 山 一 保   |
| 42 | 変わらない熱気と、その理由            | 丸 山 一 保   |
| 43 | みみよりは心のふるさと              | 團 順一・高橋広司 |
| 44 | 「辞書」も世につれ                | 鈴木 克 美    |
| 45 | わが心の遍歴 1 聞こえなくなるまで       | 木 下 幸 雄   |
| 46 | わが心の遍歴 2 旅行ノート その1       | 木 下 幸 雄   |
| 47 | わが心の遍歴 3 旅行ノート その2       | 木 下 幸 雄   |
| 48 | わが心の遍歴 4 近頃のこと           | 木 下 幸 雄   |
| 49 | 「Take it easy!」はこうして生まれた | 橋 本 英 憲   |
| 50 | そこに聞こえない友がいるから           | 江 時 久     |
| 51 | わたしが『みみより』編集長だった頃(上)     | 鈴木 克 美    |
| 52 | わたしが『みみより』編集長だった頃(下)     | 鈴木 克 美    |
| 53 | みみより400号 よくぞここまで……       | 團 順 一     |
| 54 | みみより20年(はたち)のころ          | 千葉 登美雄    |
| 55 | 定期発行に全力を尽くして             | 佐 藤 和 夫   |
| 56 | 書き終わったロールやノートの処理         | 遠 藤 良 明   |
| 57 | 探偵物語                     | 丸 山 一 保   |
| 58 | 私の「みみより」遍歴(上)            | 岡 本 昇 蔵   |
| 59 | 私の「みみより」遍歴(中)            | 岡 本 昇 蔵   |
| 60 | 私の「みみより」遍歴(下)            | 岡 本 昇 蔵   |
| 61 | 自信をもって続けよう               | 丸 山 一 保   |
| 62 | 合同印刷                     | 丸 山 一 保   |
| 63 | 難聴を認識する                  | 丸 山 一 保   |
| 64 | 自立と幸せな結婚について             | 丸 山 一 保   |

|    |                      |                         |
|----|----------------------|-------------------------|
| 64 | 自立と幸せな結婚について         | 丸山一保                    |
| 65 | ♪初めての音楽講演会 1 ♪       | 大山明美                    |
| 66 | ♪初めての音楽講演会 2 ♪       | 大山明美                    |
| 67 | ベートーヴェンの季節           | 丸山一保                    |
| 68 | 渡りこし橋                | 橋本英憲                    |
| 69 | 座談会「参与は語る」           | 阿部正庸・丸山一保・鈴木克美・團順一・高寺志郎 |
| 70 | 忙中閑あり？               | 鈴木孝美                    |
| 71 | もっと月給があがったら？         | 北野隆雄                    |
| 72 | 補聴器から人工内耳へ戻ってきた会話の世界 | 鈴木克美                    |
| 73 | 職業にとらわれぬ考え方をもちこと     | 大倉康裕                    |
| 74 | 仕事・仕事・仕事             | 伊藤敏一                    |
| 75 | みみより会に参加して           | 岡田秀穂                    |
| 76 | 人生の再起を期して            | 植野逸二                    |
| 77 | 司書業務と翻訳              | 黒沢勝美                    |
| 78 | 民宿の泣き笑い              | 森山靖子                    |
| 79 | 独立・17年目の夏            | 金子一郎                    |
| 80 | 毎日が真剣勝負              | 庄司敏昭                    |
| 81 | 心身充実                 | 吉田金男                    |
| 82 | 人間関係を円滑に             | 荒木博子                    |
| 83 | 私の職業遍歴               | 鈴木和夫                    |
| 84 | 米作農業と運転手             | 篠原茂雄                    |
| 85 | 失聴・更生・そして現在          | 藤川浩一                    |
| 86 | 洋裁の道                 | 平田和子                    |
| 87 | みみより会の文化遺産           | 成井信子                    |
| 88 | 伝わるとはどういうことか         | 加藤光二                    |
| 89 | プログラマーと私             | 米山良一                    |
| 90 | コンピューター 思いつくまま       | 市川明                     |
| 91 | 私とコンピューター            | 下宮俊子                    |
| 92 | 鈴木克美氏と私              | 赤間悟                     |
| 93 | 母と私の終戦 北朝鮮からの引き揚げの記憶 | 窪佐恵(母)<br>前田精(子)        |
| 94 | いなごの田舎だより 1          | 加藤美英子                   |
| 95 | ゆきひょうの健康ニュース 1       | 松本佳世子                   |

|     |                      |        |
|-----|----------------------|--------|
| 96  | 人工内耳体験談・聴こえる喜び、新たな歩み | 高橋 はるみ |
| 97  | ABI体験談・聞こえの喜び、第三の人生へ | 佐藤 正   |
| 98  | 時の流れのまま              | 遠藤 勇一  |
| 99  | いなごの田舎だより 2          | 加藤 美英子 |
| 100 | ゆきひょうの健康ニュース 2       | 松本 佳世子 |

|     |                      |        |
|-----|----------------------|--------|
| 101 | 母とある日々 1 はじめに        | 橋本 英憲  |
| 102 | 母とある日々 2 変貌する母       | 橋本 英憲  |
| 103 | 母とある日々 3 トンネルのなか     | 橋本 英憲  |
| 104 | 口のきけぬ悩みについて          | 藤田 孝子  |
| 105 | 母とある日々 4 母の涙         | 橋本 英憲  |
| 106 | 母とある日々 5 最後のとき       | 橋本 英憲  |
| 107 | 信頼できる補聴器販売店          | 福山 邦彦  |
| 108 | 補聴器の適用性と誤解           | 鴻巣 健治  |
| 109 | 補聴器と共に30年            | 庄司 敏昭  |
| 110 | お世話になった補聴器           | 松本 佳世子 |
| 111 | 補聴器なかりせば             | 佐藤 和夫  |
| 112 | カリンのUDバナシ 1          | 松森 果林  |
| 113 | カリンのUDバナシ 2          | 松森 果林  |
| 114 | 盲ろう者と共に              | 大森 節子  |
| 115 | 昭和の終りに貴重な経験          | 大森 節子  |
| 116 | アメリカ先住民が住んだ遥かな山地を旅して | 大森 節子  |
| 117 | 盲人への深い愛情             | 大森 節子  |
| 118 | 山と川と海のある町から 1        | 大久保 紀次 |
| 119 | 山と川と海のある町から 2        | 大久保 紀次 |

|     |                  |                 |
|-----|------------------|-----------------|
| 120 | 聴とろうの狭間で         | 高寺 志郎           |
| 121 | 聴覚障害者と医療         | 松本 佳世子          |
| 122 | 必要な配慮を申し出て       | 大西 美子           |
| 123 | 新春みみより対談 海外に羽ばたく | 三ツ井 詠一<br>杉田 静山 |
| 124 | 小説 蝉 1           | 江時 久            |
| 125 | 小説 蝉 2           | 江時 久            |
| 126 | 小説 蝉 3           | 江時 久            |
| 127 | 小説 蝉 4           | 江時 久            |

|     |                              |        |
|-----|------------------------------|--------|
| 128 | 生きる ―― 残光の中で ――              | 加藤 美英子 |
| 129 | 講演 要約筆記と障害者福祉 1              | 高橋 りか  |
| 130 | 講演 要約筆記と障害者福祉 2              | 高岡 正   |
| 131 | 人工内耳体験記<br>人工内耳の施術及びその効果について | 平山 嘉重  |
| 132 | 人工内耳体験報告                     | 池内 伸自  |
| 133 | 人工内耳装用体験談                    | 佐藤 賢輔  |
| 134 | 人工内耳と私の因縁                    | 宮田 和実  |
| 135 | 疎開の頃                         | 大川 豊   |
| 136 | 夏の日                          | 小林 時子  |
| 137 | 8月15日                        | 本家 孝一  |
| 138 | 終戦直後                         | 高橋 広司  |
| 139 | 炎の中の思い出                      | 飯田 れい子 |
| 140 | 艦砲で受けた心の痛み                   | 菅野 サヨ  |
| 141 | 私の戦中体験記                      | 小林 敏男  |
| 142 | 生き永らえば.....~手話を通して出会った仲間と世界~ | 長谷川 宏子 |
| 143 | 21世紀の聴覚障害者福祉を考える             | 野澤 克哉  |
| 144 | 青春を謳歌                        | 市川 明   |
| 145 | 思い出すままに・青春とみみより結婚            | 小林 俊一  |
| 146 |                              |        |

# 差別法の撤廃

遠藤 良明

あけましておめでとうございます。

皆様方には、それぞれよいお年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

我が家では、ひさびさに二人だけの静かなお正月を迎えました。例年ですと、もう少し頭数が多く、賑やかになりますので、つれあいは張り切って料理を作るのですが、粗大ごみに近い古亭主相手ではさすがに、気持ちもなえたようで、今年は市販のほんの僅かばかりのおせちでどうぞとなりました。

ところで、去年は、私共聴覚障害者にとって、嬉しいできごとがいくつかありました。誌面の都合で一つだけ取り上げますが、それは、欠格条項の見直し法が成立し、施行されたことです。

もう皆様方もご承知と思いますが、「障害者等に係る欠格事由の適正化等を図るための医師法等の一部を改正する法律案」という、長い名前の議案が国会で審議され可決成立しました。今迄は、聴覚に障害を持つ者には免許や資格を与えないという職業分野がいくつもあって、法律によって制限されていました。これが絶対的欠格条項といわれているものですが、今回、栄養士や調理師など一部ですが、耳が悪くてもなれますというふうに改正されました。

しかし、医師とか看護婦など特定分野だけは「心身の障害により業務を適正に行うことができない者として厚労省令で定める者には、免許や資格を与えないことがある」という、いわゆる相対的欠格条項になりました。心身の障害の中には聴覚障害者も含まれているのですが、相対的欠格事由に該当した場合、免許を与えるかどうかは、障害を補う手段などの効果をみて判断する、というふうになりましたので、有無をいわず門前払いをしていた旧法よりは一步前進といえます。同時に、この改正の5年あとにもう一度見直しするということや、各教育機関に対して障害者に配慮した受験制度、就業環境の整備を推進するという、附帯決議もつけられました。

私は昨年、差別法の撤廃運動にたずさわった同障の大学生と話す機会がありましたが、学生はこの成果をよろこびつつも、正直いって余りピンときませんと申しておりました。それは多分、同障の学生にとっては、職業を選択しようにも、現状では進むべきコースレールが殆ど用意されていない、という不満があるからでしょう。

価値ある国家試験を受けようとすれば、いくつもの壁にぶつかり、本に頼る独学だけではなかなか解決できない場合があるのです。普通ですと幾度か受験をくり返すうちに自信を失い、神も仏もないという心境になって、わらをも掴む思いで指導する学校の門を叩くことになります。ねらいはいうまでもなく、講師からなまの情報をもらう、それが合格への最短距離につながると期待するからですが、聴覚障害者にとってはおいそれと利用できません。近い将来、なんらかの方法で専門レベルの情報保障が自由に受けられるようになれば、挑戦する人も徐々にふえてくるのではないのでしょうか。

情報文化センターでは昨年「新世紀における聴覚障害者情報支援のあり方検討委員会」なるものを発足させました。「IT化時代に対応した聴覚障害者の情報に関する新たな社会的支援のあり方の検討」を目的とするとありますので、周辺環境を推進するのに時宜を得たものとして大いに期待されるところです。これまで差別法撤廃運動に全力をつくされた運動団体や支援された皆様方に、心から感謝申し上げます。

次にみみより会に関するのですが、私は昨年、愛知県で開かれた全難聴福祉大会を皮切りに、いくつかの研修会や催しものに参加しました。行政とのかかわりが一層深まる中で、各分野で活躍されている団体のレベルは近年とみに高まり、より専門的で内容も細分化されてきていると実感しております。こうした流れの中にあって、規約上、親睦を目的としている団体は、どちらかといえば行政とのかかわりや、手話、要約筆記などの関係団体同士との結びつきが希薄となって孤立しやすく、どうしても、情報や意識に遅れを生じます。

「中農は作物をつくり、上農は土をつくる」と申しますが、たとえ遅れても、常に足を地につけ、土台となる土をしっかり耕す姿勢があれば伍していけるものと確信いたします。

昨年6月の総会では――

- 1 みみより誌の購読者を増やす
- 2 ホームページの開設
- 3 特定非営利活動法人(NPO)の検討

の3項目について申し上げました。NPOにつきましても、みみより誌を主軸として啓蒙、啓発事業に的を絞れば、実現の糸口がみつかるのではとの思いがございます。親睦団体なら具体的に何を目標とすべきか、ときに呻吟することがあるわけですが、NPOになることを望むのであれば、それは必然的に規約上の親睦から転換することを意味します。地味かも知れませんが、皆様方と共に更なる検討を進めて参りたいと思っています。

例会につきましても、会場確保に苦勞しつつも熱心な会員の皆様方に支えられ、役員一同の頑張りもあって順調に推移しております。今後は、他団体との交流も時折加味しながら歩んでまいりたいと思います。ここに謹んで年頭のご挨拶といたします。

えんどう よしあき(神奈川県大和市柳橋)  
みみより会会長・税理士

No.2

## 大阪駅のフラットホーム

鈴木克美

今年の夏はとても暑かった。長年つづいた水族館暮らしが定年で終わって、やっぱり、少し気落ちしたのかもしれない。健康に変わりはないのだが、体重が減った。疲れっぽくなり、やたらと、大汗をかくようになった。朝起きてても、何だか世の中がつまらない。

しかも、夏の暑さが長引いて、今年は9月になっても、さっぱり涼しくならなかった。おまけに、9月上旬には、すごい大雨が降った。東海地方では、百年に一度の豪雨だったそうである。名古屋市近郊の被害の大きさは、テレビでご承知の通り。

わたしは昔からあまりテレビを見ないが、さすがにこの日は、ブラウン管に映し出される映像を、息詰まる思いで見た。

川の堤防が目の前で切れて、住み家や車などが水中に沈んでしまうなんて、何といたましいとしか言いようがない。そのあと始末もまた、たいへんなことだろう。

自分のところが、もしあんなふうになったらどうだろう。この「富士の見える海辺の町」には、洪水を起こす川はないが、海から津波が襲来……ということはあるだろう。

そして思った。名古屋の枇杷島に、耳の聞こえない被災者はいなかったのか。いれば、どうしているだろうか。

手近なところ、名古屋在住のみみより会員に、被害はなかつたらうか。会誌にお見舞いのコラムもなかつたが……。東京で同じような災害があれば、どうだったか。みみより会が東京中心の会になってしまったような、とは思ひ過ぎしかもしれないが、淋しい。

この大雨では、東海道新幹線のダイヤが、2日間にわたって混乱する羽目になった。列車が70本も止まり、52,000人もが、列車内で夜を明かしたという。弁当や飲み物はすぐに売れ切れ、トイレットペーパーがなくなった。トイレの水も流れなくなった……。

雨量とか運行状況とかの情報は、司令室から10分おきに出されているのだが、1列車に車掌は3人しかいないので、乗客対応のために車内を駆けまわっていて、車掌室に届いた指令の受け手もいなかったと……。

以上はもちろん、新聞記事の受け売りである。ここまで(新聞を読んで)きて、ふと思ひ出したことがあった。

わたしは職業柄、一人で旅行することが多い。職業とは別に、ただの旅行好きでもあるので、JRのお得意様の一人でもある。

それで数年前、岡山方面に旅行した帰り、すごい豪雨の日に当たった。この日も一人旅だった。新幹線に乗って新大坂まできたところが、何やらあたりの様子がおかしい。

東京行きの「ひかり」に乗ってきたのに、新大阪駅で全員降ろされてしまった。ホームには乗客がいっぱいで、殺気立っている。前夜来の静岡県集中豪雨で富士川が増水し、東海道新幹線のダイヤが乱れていると知ってはいた。岡山駅の掲示を見ていたからだ。

だから、耳が聞こえなくても、列車が新大阪駅で運転停止、または折り返し運転になったので、全員降りてもらいたいという事情になったことは、すぐ、それと察せられた。

しかし、その先が、たいへんだった。

列車が次から次へとホームに到着する。わたしの立っているホームの両側と、もう1本隣のホームの両側をフルに使って、次から次へと「ひかり」や「こだま」が、右から左から着き、どっと乗客を吐き出して、ある列車は空になり、べつの列車はいっぱい乗客を乗せて、どんどん出てゆく。

さすがに新幹線だから、昔の汽車みたいに出てゆくあとに煙も残らない……。

冗談はともかく、列車を降ろされてホームに立ったわたしは、途方に暮れてしまうしかなかった。何しろ、さっぱり、状況がわからない。静岡へ帰るには、どの列車に乗り換えればいいのか、どれに乗ってもだめなのか。集団のなかの孤独。いつも頼りにしている着発の掲示板は、ずっと消えたままだ。

手近の乗客に聞いても、「さあ、わたしもわからないんで」というような、頼りない変事である。むりもない。

こんなときは、耳の聞こえる人だって、自分の帰るべきところへ無事帰るには、どうすればいいか、その一事だけに、注意を集中している。同じ静岡へ帰る人に偶然当たればいいが、この大勢の混乱のなかで、そんな幸運は、めったにない。

汗びっしょりで、ホームを駆けまわっている駅員の一人を何とかつかまえて、成り行きを聞こうとすると、こちらのいうことも聞かず、頭上のスピーカーを指して、「放送を聞いて下さい」という。けんもほろろ、すごい剣幕である。あせっている上に、疲れているのだろう。これまた、むりもない。

ホームのスピーカーが、ずっと大声で、何かをわめいているのはわかる。でも、何をいつているのかが聞き取れない。「自分は耳が聞こえないので……」という「ホームの事務室へ行って下

さい」と。

「ホームの事務室」へ行って見たが、だれもいない。みんな、一生懸命に、応急対策に走り回っているのだろう。

ここは新大阪駅だから、ホームにこう、駅員もいるのだが、在来線のローカル駅には、今では駅員の姿もない。経営合理化のためとかで仕方がないのだろう。ヨーロッパの鉄道だって、何もいわずにスルスル出ていくのだし、平時はそれでもかまわないが、思わぬ事故が起こると、われわれは本当に困る。

新大阪駅での話にもどる。これはもう、どうしようもない。度胸を決めて、そこへきた列車に、闇雲に乗り込んだ。せまい日本、何とかかなと思うしかない。

結局、名古屋まで来て、別の列車に乗り換えて、静岡に着いた。手近な列車にでたらめに乗って、結果オーライだったのだが、それが、運がよかったからなのか、どの列車に乗っても同じに帰れたのかはわからない。

わたしは今、1種2級の聴力障害者で、いつも障害者手帳を持ち歩いている。1種2級だと、同行の介護者も運賃の割引を受けられる。介護者に同行してもらおうかどうかは、自分で決めればいいのか、こんな目に会っていると、自分はやはり、介護者の必要な障害者だったんだと、改めて思わざるをえない。

ファックスも、インターネットもあるとはいっても、電話ができない。ハンディは大きい。そこをカバーして人並みの社会活動をするためには、一人ででも、走り回らなければ。

といったところで、時々刻々に変わる状況についてゆけない聴力障害者は、「非常時」にはじつに弱い。無力。集団の中の孤独。

要は、災害や事故が起こらなければいいのだが、そうとは、だれも保証してくれない。どんなに、障害支援のシステムがととのったところで、こんなときには間に合うまい。

われわれは、自分自身を強くしてゆくことを、忘れてはいけないのではないか。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

No.3

## 耳は悪いのか？

鈴木克美

数年前から、自分の耳のことを「悪い」とはいわないように、気をつけている。

水族館のことを書いた自分の本を読み直していて、文中に「耳の悪い私は」「私は子どものころから耳が悪かったので」と2箇所、「耳が悪い」と出てくるのを発見したのが、直接のきっかけである。

本を書くのに一生懸命だったときには、まるで気が付かなかったのだが、気付いてみると、す

ごく気になる。

耳が悪い？ 耳は少しも悪くはないじゃないか。そういっちゃあ、耳が可哀相じゃないか。

ところが、長いつきあいのせいで口ぐせになっているのか、油断すると、つい「耳が悪い」と、いってしまう。そこが問題だ。

先日も、手話通訳士の女性に、「先生、耳が悪いっていっちゃだめですよ」と、注意を受けた。いうまいと思っていながら、なぜ、そう口走ってしまうのだろう。

手話には「耳が悪い」という表現はない。「耳が聞こえない」と耳にふたする表現はある。でも、難聴者の場合は「聞こえない」のとは、ちょっと違う。

ろう者にとっては、どの程度に聞こえるのかは問題ではない。聞こえる（人）か、聞こえない（人）か、どちらかであればいい。

ところが、難聴者はそうではない。どの程度、どう聞こえるかが、関心の中心だ。それも、一人ひとりちがうのがまた問題だ。

「難聴（者）」を現す手話は、手のひらを顔の真ん中に立てるか、そのまま下に引く。「半分聴（者）」または「半分ろう（者）」の意味であろう。でも、難聴というのは「半分聞こえる（聞こえない）」のとも違う。

わたしは子どものころから、耳が聞こえにくかった。難聴者としてずっと、普通校で過ごしてきた、「悪い耳」とのつきあいも60年を過ぎ、思い出すことはいっぱいある。

小学校では、耳の聞こえが不十分なためにクラスメートにいじめられた記憶は、あまりないが、先生からのいじめやからかいは、結構あった。それもまあ、戦後のあんな時代だったし、我慢できないほどではなかった。

しかし、中学、高校でのいじめはすごかった。野蛮な時代だった。50年たった今も、胸をさすような思い出がいくつもある。

たとえば、ある教員はローマ字の時間に、思いつく言葉を生徒に板書させ、わたしにも何かを書かせようとした。何をいったのか、聞き取れないで、もじもじしていると、「お前は耳が悪いのか。次のだれそれ、ツンボと黒板に書いてやれ……」

さすがに、教室中がしんとしたのをおぼえている。教師だけがへらへら笑っていた。

この屈辱は生涯忘れまい、絶対復讐するんだと30代の前半ぐらいまでは、本気でそう思いつづけていた。

別のときは、学校の帰り道を2人の上級生に待ち伏せされて、さんざんになぐられた。「耳が悪いくせに生意気だ」という、ただ、それだけが理由だと……。

高校2年生のとき、思いがけなく、はじめての学年賞をもらった。わたしが特別勉強したわけではない。他の者が勉強しなくなっただけのことである。この高校では、事前に学年賞の受賞生徒名を発表せず、講堂での全校終業式で、突然、姓名を呼び上げるきまりだった。「耳の悪い」わたしは、当然、自分の名を呼ばれたのを知らなかった。

周囲のみんなが「おい、おまえだぞ」とかいうのにも、「また、おれをからかうのか」と、わたしは動かなかった。あとで親しい級友に改めて聞いて、本当だったのかと納得して、職員室へ賞状をもらいに行った。

「おまえ、いたのか。そうか、おまえは耳が悪かったんだな」……。

その後、大学入試の面接のときも、最初の就職のときも、いろんな資格をとるときも、その都度、「耳が悪くて、大丈夫か」と、たびたび、聞かれた。

はじめて書いた本を見せに行ったとき、亡父はとても喜んでくれて、こういった。

「おまえは、耳が悪くて、かえってよかったのかもしれないなあ」……。

わたしは父親が好きだった。単純でお人好しのくせに疑い深く、親分肌のくせに小心、ケチな

くせに蓄財が苦手。町に住んでいながら田舎住まいにあこがれ、好奇心が強くて移り気。短気。子どもっぽい。むきになる。すぐどなる。拳固を振り上げる……。

あれでよく、父親がつとまったものだ。

それでもわたしは、この父親が大好きだった。彼もわたしが好きだったのだろう。何度聞いても聞き取れない息子に、めんどくさがらずに話しかけ、わかるまで話してくれた。

にしても、「耳が悪くて、かえってよかった」はないだろうと、そのときは思った。あとでは、父親としての自責の気持ちが、そういわせたのかと、思えるようになった。

ま、こんなふうに、わたしの半生は「悪い耳」との2人連れ、いや耳は左右とも「悪い」のだから、3人連れできたことになる。

そこで話がもとに戻る。そうやって連れ立って生きてきた私の耳を、「悪い」といってしまっただけは、可哀相ではないか。

ただ、「耳が悪い」という言い方は、使いやすい。「耳が遠い」「耳が聞こえにくい」という言い方は、使いにくい。

遠くの話し声が聞き取れなくても、近くならよく理解できる人の場合は、「耳が遠い」でいいが、近くで大声出されると、かえって何を言われたのかわからなくなるわたしのような場合、「耳が遠い」は使いたくない。

多かれ少なかれ、聴力が残る難聴者の実情は「耳が聞こえない」とはちがう。「聞こえない」といい切ってしまうのは、かえって誤解されはしまいか。

「耳が聞こえにくい」というが、難聴の本来の意味であろうが、こなれが悪くて、いいにくい。「見えない」はあっても「見えにくい」とはいわないし、「感じない」はあっても「感じにくい」とは、あまりいわない。

「胃腸が悪い」「のどが悪い」「心臓が悪い」「腎臓が悪い」と、みんな平気で使っている。「目が悪い」「手が悪い」という場合の「悪い」は、「目つきが悪い」「手癖が悪い」のとは違う。「耳が悪い」は、本当にだめなのか。

では、手元の辞書を引いてみよう。『広辞苑』（第4版・岩波書店）にこうある。

わるい

- 1 (物の形、人の容姿などが)みっともない、見た目がよくない。
- 2 (品質や程度などが)劣っている、上等でない、いやしい。
- 3 (行為、状態などが)ほめられない、人の道に外れている、好ましくない、不都合である。
- 4 正常な状態でない、正常に働かない。
- 5 (作品のできなどが)つたない、まずい。
- 6 めでたくない、不吉である。
- 7 たちがよくない。
- 8 食べ物がいたんでいる。
- 9 よい感じを与えない、不吉である。

なるほど、なるほど。

やっぱり、「耳が悪い」は使いたくない。使うべきでもない。なのに、自分が聴覚障害者のくせに、つい、そう言ってしまうというのは穏やかでない。障害者って、疲れる。

# 他人の2倍も3倍も

鈴木 克美

何度も書いたことだが、大学を卒業してすぐ、神奈川県江ノ島水族館に飼育係として入った。江ノ島に7年いて、石川県の金沢で山の上に水族館をつくるために移り、金沢水族館にも7年いて、東海大学が水族館をつくるからと清水市に移った。35歳だった。

それからずっと、31年も清水にいて、とうとう、清水の人になってしまった。

私は子どものころから生きものが好きで、大人になったら、生きものを相手にする職業につきたいと思っていたので、前後41年もの実社会での生活を、水族館人として終始できたのは、本当に有難いことだった。

運もよかったし、人間、一心に望みつづけければ、何事も成就するものだと思いたい。

耳が不自由だと、人のできない仕事はできても、人に命ぜられてする簡単な仕事、たとえば、電話番とか、使い走りとか、だれにもできる仕事が、かえってうまくできない。

それで、高校生になって大いに悩んだ。考え過ぎもあったかもしれないが、一を聞いて十を知るのが「利口な子」と、ほめられる社会で、何度も聞き返して十を聞いて、やっと一を理解する……そんな子に、いったい何ができるのか……。それは私が実際にいわれた言葉だったが、こう、人に能力を見くびられるのが、自分はたまらなくいやだった。

それに、私は隙間の多い性格で、人と人との関係に細かく気を配ったり、世間のしきたりをきちんとわきまえて、つきあいを上手につづけてゆくのが、昔から苦手だった。

もと商家で、父がサラリーマンに変わった私の生家や、その周辺には、工芸とか手工業とか、身につく手技を教わる伝統も雰囲気もなかったし、そういう発想も浮かんでこなかった。職業指導を受けたこともなかった。

私は読書が好きだったし、勉強も嫌いではなかった。新しいことを覚えるのも大好きだった。であれば、やる人の少ない分野の専門技術を身につけて、人のしないことをするのがいいと考えるようになった。

高校3年生になったある日、進路について助言を受けようと思って、水産試験場へ訪ねて行ってみた。屈託なさそうな、風采の上がらない小父さん然とした人物が出てきて、会ってくれた。試験場の場長さんだった。

「耳が遠くても水産大学に入れてくれるでしょうか」と、オドオド聞く私を、あっさり「大丈夫ですよオ」と、でっかい声でほがらかに、元気づけて下さった。

あのころ、大学の入学案内には、受験資格の身体条件として「視力どのくらい、聴力が正常……」などと明記してある場合もあって、聴覚障害者の私は、「欠格条項」の記載に神経をとがらせていた。

とにかく、私は何とか東京水産大学へ入学できた。でも、全国から集まった同級生は、みな自分より優秀だった。もちろん、耳の聞こえない学生は私だけだった。講義が聞き取れないハンディだけが問題なのではない。自分の学力の低さにも打ちのめされていた。

2年生になって、東京教育大学(現筑波大学)の臨海実験所に一人で勉強しに行った。たまたま、所長がわざわざ研究室へ私を呼んで下さり、の将来への希望を聞き、「耳が聞こえなくても本は読める。論文は書ける。しっかりやんなさい」と励まして下さった。

口先だけの励ましなんてね、という人がいる。私はそうは思わない。進路に迷い、自信を失い

かけている若者には、力強い励ましの言葉が必要なのだ。

3つ目の水族館で、私は大学の先生を兼ねることになった。専攻は魚類生活史学、学位もとれた。大学教授になると、聴覚障害の学生を指導し、育ててみたくなった。

私の所属する海洋学部へ、海が好きとか、魚が好きとかで、プロの研究者になりたい聴障学生が入ってきたら、私のゼミに入れて面倒を見てやりたいと思った。それが、残念なことに、私の31年間、聴障学生は、ただの一人も海洋学部に入ってこなかった。

ある日、といっても、25年も前のことだが、旧知のろう学校の校長先生の紹介状を持った学生が、両親と一緒に訪ねてきた。

そのころとしては珍しく、両方の耳に補聴器をつけて、はきはきと話す、優秀そうな学生だった。別のキャンパスの工学部で電子工学を専攻して将来は研究者になりたいと……。ふむふむ。こんな学生がほしいと思った。

話しているうちに、突然「先生、耳が聞こえないと、やっぱり、人の2倍も3倍も頑張らなきゃならないんでしょうか」という言葉が、ポロリと出てきた。

私自身、「自分は障害者なんだから、人の2倍も3倍……」に近い気持で生きてきたのはたしかだったから、初めて聞く問い掛けにびっくりして、ハタと絶句してしまった。しばらくして、ようやく、「それは、君が研究者になりたいと思う前提でですか、それとも聴覚障害者であるからには……という、つまり一般論ですか」と問いかえしてみた。

そこまでは考えていなかったのだろう、今度は向こうがびっくり、絶句する番だった。

何かになりたい、何かをしたいという自分の意欲に忠実に生きようとするのなら、障害者であろうとなかろうと、「人の2倍3倍」は当然、覚悟の上でなければなるまい。

私の人生では、他人はみな聴者（健聴者）だった。聴者の中での聴覚障害は弱点で、自分自身で庇ってゆくしかない。夢中で生きてると、だんだん周囲が見えてきて、「人の2倍3倍」やっている人ばかりの集団の中にいるのに気がつく。また一生懸命やっていると、いつのまにか、もう1ランク上の「2倍3倍」集団の中にいるのに気がつく。

プロフェッショナルの集団とは、本来、そういうものなのだろう。

一方で、人並みに大学を出て、人並みに就職して、人並みの生活をできれば、それでいい人生もあるだろう。その場合にも、障害者であるがために、「人の2倍3倍」を強いられるのは、やっぱり、不公平かもしれない。

人の半分しかやらないというわけではないが、「2倍3倍」はいやだ、穏やかな人生が送りたいければ、それも人並みにOK。そういう選択肢が、障害者にもあるべきでは。

ごく最近、ある高名な人物の講演を聞く機会があった。ろうあ者として生きてきた自信のみなざる、力強い講演だった。講演者は、昭和の高度成長期の前を「ろうあ者が、他人の2倍3倍も努力しなければならぬと決め付けられていた、たいへんな、生きにくい時代だった」と総括していた。

深くうなずくところがあった一方で、私の研究室で「2倍3倍……」といった学生の顔が目に見えた。違和感もあった。私を感心させたその講演者だって、自分の人生を「2倍3倍」頑張ってきたからこそ、あれだけの存在感が身についたのではなかったか。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

# 同障異夢の旅七道連れ

鈴木 克美

表題は「同床異夢」のまちがいではない。

東海大学の教員をしてきた27年間、わたしには、ついに聴障学生を自分のゼミに迎える機会がなかった。それが、定年すぎて特任教授になった昨年初めて、同じ大学の別キャンパスの聴障学生がいるクラスで、現代文明論の講義をすることになった。

現代文明論は、東海大学のユニークな必修教養科目である。ふつうは、各学部の教員が講義を担当するのだが、どうしてか、清水のわたしに声がかかり、平塚まで通う成り行きになった。何事も経験である。

ただ、専門科目とちがって、このテの講義はやりにくい。文系、理系、工系の混成クラス、海洋学部とは肌合いの違う学生120人が、わたしの話す「海」に、どれほど関心と理解を示してくれるか、予備知識ゼロのぶっつけ本番というのは、きびしい。

だいたい、今どきの学生は、1時間以上講義を聞き続けるのが苦手である。そこを、1時間半、専門以外の講義を聞きつづけてもらうには苦心も要る。

わたしはしゃべる方がいいが、聞く方がまったく不自由なので、学生と話し合いながら進める、今ふうの対話型授業ができない。それでとにかく、わたしの講義は、伝統的な知識伝達スタイルで行くしかない。もちろん、対話ができない分、ときどき質問票を配って質問と感想を求めたり、面白い講義だったと記憶してもらえる工夫はしている。

今は学生が先生を評価する時代でもある。だから、期末に学生に出してもらおう教員評価アンケートを見れば、自分の講義が学生にどう受け取られているかは、ほぼ、わかる。講義に人気があれば、受講者も自然にふえる。

専門科目の講義なら、こういう具合に、毎年の試行錯誤を繰り返してきて、いささかの自信もできていた。にしても、初体験の現代文明論は、勝手が違いすぎて困った。そもそも、文明とは何か、文化とは何か。

現代文明論の初日の講義で、最前列に補聴器をつけた聴障の男子学生が、1人いるのにすぐ気が付いた。両側にノートテーカーの女子学生がいて、代わる代わる一生懸命、講義を聞き書きしている。今どき、板書をノートにとるのさえ苦手な学生が多い時代に、ノートいっぱいぎっしり書くなんて、感心する。

当然、自分の学生時代を思い出す。40数年も昔、ノートテーカーなんて、いなかったし、親しい友人でもなければ、他人のノートはおいそれと借りられなかった。「いいよ」と、心安く貸してくれるノートは、いっては悪いが、もの足りなくて、一方、借りたい優秀な相手ほど、貸してくれなかった。

わたしの現代文明論の聴障学生は、講壇に立つ教員の私が聴障者だとは、気が付かなかっただけでもない。いつも伏し目で、講壇のすぐ前に陣取っているのに、挨拶もするどころか、眼も合わせずじまいだった。

でも、受講態度は静かで真面目だった。たまには居眠りしていても、大方は、書かれたノートを熱心に読んでいたようだった。教壇からは、そこまで、よく見える。

2週目の授業が終わってすぐ、手話まじりで話しかけてみたが、積極的な反応もなかった。学

生たちが次々に出してくる出席カードの回収にも忙しくて、ノートテーカーの女子学生が「彼は、手話がよくわからないみたいです」とかいているうちに、当人はどんどん教室を出て行って、それっきりになった。

3週目の講義が終わる前に、出席者全員に当座レポートを書いてもらった。最初からそういう決まりだった。持ち時間は40分。

と、最初に書き上げて提出してきたのが、なんと、その聴障学生だった。答案を配ってから15分もたっていない。びっくりした。嬉しかった。「嬉しい」というのは、えこひいきしているみたいだが、ま、いいか。

テストや当座レポートを、いち早く提出してくる学生には、2種類ある。ずば抜けて優秀なのと、初めから投げている白紙提出に近いのと。彼もまさか、白紙組ではあるまい。

ところが、提出された答案を見て、二度びっくり。それから、がっかりして、腹が立った。書いてあるのは、用紙の上の方わずか数行、内容もレポートになっていない。この講義は何々の話だったとあるだけの、投げやりみたいなしろもので、これでは、採点のしようもない。せっせとボランティアしてくれた、2人のノートテーカーにも申し訳ないと、わたしならば、思うところだが。

腹の虫がおさまらないので、後日、2人の手話通訳さんに、話を聞いてもらった。

「その聴障学生は、レポートの書き方を知らないんじゃないですか。レポートとは何かも知らないんじゃないでしょうか…」

「この講義は、こんな内容のものだった。先生はこういう話をした……と書けば、もう、それがレポートというものなんだと思っていたんじゃないでしょうか……」

2人の共通の意見は、こうだった。書かれていた内容も、その通りだった。でも、「先生が『君、これじゃレポートになっていないよ、もっと書きなさい』って、追っかけて、つかまえてでも言っていただくべきじゃなかったでしょうか…」とまで、押し込んでくるのは、どうかしら。

「教養科目のレポートってのはね、学生たちが任意に書くものであって、提出された時点で成績評価の対象になるんですよ。提出してきたレポートに注文つけて差し戻したり、内容を見て、不十分だったら受け取りを拒否するってルールは、大学にはないんです。

聞こえない学生だから、レポートの書き方を知らないってことがあるにしても、先生方には、そこまでの予備知識はないし、聴障の学生にだけ、もっと書けとか、これではダメだとか、そこまで踏み込むのはどうかな。逆差別にならないかしら」

大学では、ゼミの学生に卒業論文の書き方をやかましく指導することはあっても、教養科目のレポートの書き方までは、ふつうは指導しない。これはもう、常識の問題だ。大学へ来る学生が、レポートの書き方を知らないなんて、信じられない。

話は少し飛躍するが、先進諸国の障害福祉は、アフアマティブ・アクション・プランとあって、「機会の均等より結果の平等を推進する政策」を基本にしてきたはずである。

社会的弱者の生活を援助するために、まず結果の平等をとという福祉の方向づけには、間違いはあるまい。ただ、いつまでも「結果平等」だけでは、障害者は、お仕着せの「障害者枠」の中に一括して押し込められて、枠の外へ出にくくなってしまわないか。

とくに、わが国の障害者福祉政策には、結果平等はともかく、聴覚障害者の機会均等について後押ししてくれるものは、まるでなかった。あれもだめ、これもだめと、押しえ込むばかりだった。健聴者なみの機会均等を求めようとすれば、聴障者一人一人が、それぞれの工夫で、壁のすきまをすり抜けてゆくしかなかった。いや、個人の力では越えがたい壁がいっぱいあった。

そこを何とか、すり抜けすり抜けしてきた自分としては、「耳が聞こえないもの、口が利けない

もの、眼が見えないもの」には資格をとらせないとする法令の欠格条項が、いよいよ削除され、手直しされることになったのは、じつにうれしい。それも 230 万人もの署名を集めた運動の結果だったとは、ただ、感激のほかはない。

聞けば、運動を進めるうちには、誤解もあったようだ。たとえば、請願を受けた地方議員さんには、欠格条項を見直せば、障害をもつ有資格者が大勢出現すると思ひ込んだ向きもあったとか。逆の立場から見れば、バラ色の世界がすぐ来るみたいな、そんな美味しい話があるわけではない。

欠格条項の改正運動は、まず、耳が聞こえない口が利けない障害者を、それだけの身体条件を理由に門前払いしてきた、人権無視、障害者差別の法律を正すところにあったはずだ。正義が通ったからといって、だれもがすぐ医者になり、薬剤師になり、その他の専門家になれるわけではない。

それでも、立ちふさがっていた壁がなくなれば、チャンスを生かせる能力のある障害者は、たくさんいるだろう。昨年も薬剤師になれたはずの聴覚障害者の女性が、薬事法の欠格条項のために、資格取得を阻まれた実例が新聞に出て話題になった。具体例のもつ説得力は大きい。

もっとも、今までにだって、聴覚障害者にとれる資格がなかったわけではない。わたし自身でいえば、労働省の潜水士免許も、博物館の学芸員も、聴覚障害を欠格事項にしていない。自動車運転免許は、あの頃、法律をすり抜けてとった資格だったが、そのことは、ここには書かない。

博物館学芸員資格は終身有効で、今は国家試験に合格しなくても、講座のある大学で単位をとればいい。どの大学でとろうと、全国に 5,000 もある博物館で有効である。

それなのに、自分のことは言いにくいだが、1958 年に資格をとったわたしのあと、聴覚障害者が博物館学芸員になった話も、博物館に就職した例も聞かない。博物館学芸員って、そんなに魅力のない職業なのだろうか。

たぶん、そうではあるまい。博物館の学芸員がどんなものかも、そのような資格があることも、知らない、関心がない人が多いのではないか。一般に知られていないからこそ、専門職なのであり、その資格なのだ。耳が聞こえなくても、自分にとれる資格、自分に合った資格は、きっとある。

では、これから挑戦して学芸員資格をとって、博物館に就職できるかという、これが今ではたいへんむづかしい。とりやすい資格は大勢がとるので、博物館への就職自体が狭い門になってしまったからだ。人の通わぬ前にこそ、自分なりの道が作れる。

そこでまた、現代文明論の現場の話に戻りたい。改めて、聴障の大学生の一人一人に聞きたい。何のために大学へ来ているのかと。ただ、リベラル・アーツ(一般教養)を求めてきたのか、それとも、専門技術や資格を求めてきただけなのか。

今は、学生一般に、はっきりした将来への志向がなく、学窓を出てもすぐ就職したがる、フリーターの時代だという。日本は世界の長寿社会になったのだし、「いい会社へ就職」という価値観が崩れかけている今、一生の進路を、学校を出てすぐ、バタバタと決めてしまわないのも、いいかもしれない。大学へきたからといって、皆が皆、人の 2 倍 3 倍頑張る、専門家になる必要もない。

ただ、それは健聴社会の論理だ。聴障者のわれわれは常に少数者で、少数者にはまた別の論理があることを忘れてはなるまい。

昨年、耳の聞こえないアメリカ人の女医さんが来日して話題になった。聴障でお医者さんをやるなんて、努力と気配りもたいへんだらう。アメリカにだって、聴障者の医師がざらにいるわけではなく、どこの国だろうと、耳が聞こえなくて医者をしてゆくのは、楽ではあるまい。でも、やればできる。

差別の壁が少しでも破れたのなら、さっそく、向こう側に歩み出してみよう。法令の欠格条項改

正は、ノーマライゼーションのゴールではない。スタートである。

21世紀の日本は、今までの年功序列型社会から、能力優先型の社会に変わるのだという。今までよりも自由な社会、平等な社会になるのだという。わたしは、こういう景気のいい、美味しい話を信じない。

自由と平等は必ずしも両立しまい。能力社会は競争社会の異名ではなかったか。能力優先の自由な時代は、障害者にきびしい時代ではないだろうか。自分と違うものを排除し、変わり者を爪弾きしてきた日本の社会が、今やみくもに能力主義を善としているような風潮に、危うさと、恐れと、矛盾を感じる。

しかし、人生も社会も後戻りはできない。

能力優先の社会への変化が避けられないのなら、その社会で、聴障者も多様に自由な生きられるのでなければいけない。多様な生き方ができると、認めてもらわねばならない。

人は皆、同じ夢を見て眠るわけではない。人生は「同障異夢の旅」なのだ。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

No.6

## おしゃれな補聴器

鈴木克美

昨年、ある聴覚障害の機関誌で、「補聴器は難聴者のシンボル」という主張を見た。しばらくたって、ある新聞の投書欄で、難聴児をもつお母さんの投書を読んだ。

「自分の娘は難聴で、両方の耳に補聴器をつけている。難聴といっても、恥ずかしいことではないはずだ。むしろ、補聴器を使用していると、他人にわかってもらったほうがいい。それなのになぜ、補聴器はどれも目立たない肌色なのか。なぜ、もっと目立つ赤や黄色の補聴器がないのか。もっと堂々と補聴器使用を主張したらどうか」と。

うーん……、難聴者のシンボルねえ、真っ赤な補聴器ねえ……。

わたしがはじめて補聴器を耳につけたのは高校2年の8月だった。早生れのわたしは17歳。なんと、50年も昔の話である。幼いときから難聴だったわたしにとって、補聴器の出現は大きな福音だった。

もっとも、高校生のわたしに、最初から補聴器がすんなり使いこなせたわけではなかった。補聴器をつければ、今までは通じなかった会話がなめらかになり、いらいらすることも少なくなるだろうと、家族も本人も、はじめての補聴器に大きな期待をかけた。期待が大きかっただけに、当然、失望もあった。

それでも、大学へ入ったら、補聴器は手放せなくなった。ただ、わたしの入った水産大学では、補聴器が使いにくくて困った。キャンパスは海の近くだったし、軽装で海辺へ出るときは、大きな補聴器を持て余した。汗、潮風、海水……周囲は補聴器の大敵でいっぱいだった。補聴器は高価な貴重品だった。

それで、大きな真空管の補聴器が、小型のトランジスターになったときは嬉しかった。これならワイシャツのポケットにも入るし、真空管式のよりも丈夫だった。社会人になる日に間に合ってくれたのも有り難かった。

その代わり、真空管の補聴器の、ふわりと余裕のある、おだやかできれいな音から、硬い金属的な音に変わったのには困って、馴れるまでまた、時間がかかった。

それに、その「聞こえ」が、もう一つ、物足りなかった。自分に合う別の補聴器を探して、あちこちの補聴器屋さんを歩き回った。

「補聴器にそんなに期待をかけられても困ります」と、突き放されたこともあったし、「一日中、寝るまでつけているとか、自動車を運転しながらとかいう使い方は、予想していないんですけどね」と正直にいう店もあった。「あなたの耳は、これでいいですよ。これ以上は耳がこわれてしまいますよ」と、説教っぽくいわれたこともあった。

でも、わたしはとにかく、聞かなければならなかった。聞くことに一生懸命だった。

この原稿を書きながら、ふと思いついて、引き出しに放り込んでおいた昔の補聴器を、数えてみた。9台あった。うち3つが耳掛け型で、残り6つが箱型。ほかに現役の箱型が2台。もっとも、最初に使った真空管式の大きな箱型は2台とも、ない。トランジスターの初期のも、ない。新型に買い替えるとき、下取りしてもらったのだった。

補聴器とつきあって最初の20年ほどは、わたしは主として、国産品のRを使っていたが、あるいきさつで、Nという補聴器屋さんのすすめる外国産に替えた。

Nのご主人は、いい方だった。高齢になって亡くなられたが、やさしい眼をした上品な方で、わたしのとりとめのない訴えを根気よく聞いてくれ、聴力検査で聞こえの低下したわたしに、「補聴器を使いこなして下さって有難うございます」とまで、いつてくれた。今使っているのも、この店ですすすめられた2台の箱型で、修理に修理を重ねて、もう、20年以上になる。わたしはもっぱら、箱型補聴器の愛用者だった。

そういえば、わたしは、この歳になるまでポロシャツを着たことがない。着たくても、箱型補聴器のユーザーには、ポケットのないウェアは着にくいのだ。補聴器をひもで首からぶらさげてもみたが、ぶらぶらして、いかにも使い勝手が悪い。女性は困るだろうなと思ったことを覚えている。それでも、わたしが箱型を愛用してきたには、理由があった。

昔の耳掛け型補聴器は、音の利得が小さくて、ボリュームダイヤルをいっぱいにしないと、わたしには聞こえにくかった。すると、ピーというハウリング音もれた。その音が聞こえるうちはまだよかったが、やがて、わたし自身にハウリングが聞こえなくなって、他人に迷惑をかけていることがわからなくなった。それに、耳のそばでむき出しの耳掛け型は、汗と潮風と海水になお弱かった。

引き出しの中の耳掛け型の2つは、東南アジアの学生たちと航海したときに買ったものである。熱帯での船上生活では、箱型が使いにくかったからだが、その耳掛け型は旅行から帰ってすぐ、だめになった。

藤沢にいたときも、金沢にいたときも、清水にきてからも、以前は、補聴器の調子がわるくなるとは東京にかけつけ、海水に落としては青くなってかけつけていた。それだけ、補聴器に頼っていた。補聴器屋さんの全国展開なんて、遠い先の話だと思っていた。

そのうち、聴力がもっと低下して、「聞こえ」への期待もあきらめ気味になった。一方で、東京へかけつきたくても、毎日の予定にしばられて、それどころじゃなくなった。

もっとも、言葉が聞き取りにくくなってからも、わたしは補聴器を使いつづけている。「音」が

補聴器で聞こえれば、読話に役立つし、会議や座談で、だれかが発言しているのも確かめられる。参加し続けられる。補聴器には、そういう使い方もあるのだ。

大学を定年になって、1年延長の博物館長職も解かれた。と、待っていたように愛用の補聴器の1つが、完全に音が出なくなった。カタログを調べてみると、今は、箱型に劣らない利得性能の耳掛け補聴器もあるらしい。もう、海に潜ることもないし、潮風を気にする場面もないだろう。それなら、この機会にまた、耳掛け型を試してみてもいいのでは。

それに、わたしは補聴器購入の補助金を申請したことがなかったのだから、年金生活者になったこの際、そのことも聞いてみよう……。

しかし、居住地の市役所の福祉課の窓口では、がっかりした。長いこと、あれほど無礼なあしらいを受けたこともなかった。

補助の条件を聞きたいと申し出たところ、「医者診断書と意見書をつけて申請してもらって、こちらで審査する」という。「でもどんな補聴器がいいのか、お医者さんにわからない場合もあるのでは」と、つい聞いたのが疝にさわったのか、担当者にはわかりに興奮して「すべてお医者さんが決めるんです。箱型か耳掛け型かもお医者さんが決める。申請者本人には選択の自由はないんです」と、聞きもしないことまで、高圧的にまくしたてるのには、あきれた。こんな偉ぶった対応が、今でも「障害福祉」の窓口なのか。

一方、久しぶりに訪れた補聴器会社は、気持がよかった。店員の対応も洗練されて、親切だった。店内がユーザーでいっぱいだったのにも驚いた。順番を待つあいだ、ふと見上げた眼の先に、なんと、真っ赤なのと、真っ黄色のと、原色鮮やかな耳掛け型の補聴器が置かれていた。赤い補聴器、あったんだ。

補聴器をつけはじめた頃、わたしは、補聴器が恥ずかしかった。携帯ラジオも、ウォークマンも、まだない時代で、大きくて目立つ補聴器とイヤーンを見る人々の眼には、あからさまな好奇心があったし、わたしの心にも強い劣等感があった。「耳が聞こえない者」の能力に対する人々の偏見も強かった。耳が聞こえなくては、だめだという。むりだという。やらせないという。並みの運動神経しかないわたしは、野球の仲間にも入れてもらえなかった。

補聴器が気にならなくなったのは、みみより会に加わってからである。みみよりの仲間は、ひがみっぽい、動揺しやすいわたしの心に、平穏と強さを与えてくれた。会には、わたしより強く生きている人がたくさんいた。

今でこそ、耳が聞こえなくても、補聴器をつけていても、少しも恥ずかしくはないんだと、だれもが言える時代になったが、あの頃のわたしたちは、いちいち、自分にそう言い聞かせなければならなかった。その勇気も、みみより会が分けてくれた。

今は、もちろん、補聴器を隠したいとは、思わない。でも、目立たない方がいいと、今でもわたしは思っている。当然、それには、異論もあるだろう。聴覚障害というのは、見てもわからない障害なのだから、見てわかるようにすべきだという意見にも、一理ある。

こういう問題には、いろんな意見と立場があっただけいい。ここでは、ただ「補聴器はシンボル」という、わたしにはなかった発想と勇気に感服したとだけ書いておこう。

それと、補聴器会社で見た、ベネトンカラーの真っ赤なのと、真意黄色なのと、派手な色をした耳掛け補聴器は、意外におしゃれで、とても格好よかった。

「そうだ。赤や黄の補聴器もあっていいんだ」と、思わずひとりごとが出た。

このごろ、補聴器の普及ぶりは、めざましい。日本中に全部で何台出ているのか、具体的な数字は知らないのだが、町を散歩すれば補聴器をつけた老人を見るし、わたしの知人に補聴器のユーザーも珍しくなくなった。ただ、そのうちの何人が、自分を聴覚障害者と思っているだろうか。

一方で、「眼鏡をかけているのが日本人」というのは、有名な話である。その日本で、眼鏡をかけている人を、いちいち視覚障害者だとは、だれも思うまい。わたし自身、高校時代から眼鏡をかけてきた。視力0.08、でも、自分を視覚、聴覚の重複障害者だと思ったことはなかった。なぜだろう。

眼鏡も、必要な人にはなくては困る大事な補助具なのに、だれも補聴器ほどには敬意を払わないのは、どうしてだろう。

眼鏡が、その普及のお陰で「障害補助具」と意識されずに使われるようになったのならば、補聴器もいずれ、眼鏡と同様、もっと気軽に扱われるようになるのではないか。補聴器の普及を通して、難聴も、近視、乱視、遠視などと同列の身近な障害として、日常的に受け入れられるようになるのではないか。

補聴器はまだ、安価とはいいがたい。おどろくほど高価な補聴器もある。でも、それをいうのなら、最高級の眼鏡の値段はもっと高い。高級補聴器の精巧な構造に対して、高級眼鏡は、ただのファッションウェアでしかない。その眼鏡が補聴器よりも高価で当然みたいなのは、そう思う「文化」に支えられているからだろう。その「文化」が、少し変われば、ファッション性も兼ねそなえた、「見せる高級補聴器」が競って現れていいはずだ。人目につかぬように、できるだけ小さな、目立たぬ補聴器を、そっとつけたい人、好きな色、好きなスタイルをえらんで、ファッションとしてつけたい人、両方のユーザーがいてもいい。そしていずれは、両方のニーズに応えられるようになるのではないか。

あの、おしゃれで真っ赤な補聴器は、新しい文化の波の先触れなのかもしれない。

この5月、ある難聴者の会合で、家庭の事情で遠くの県へ引っ越しするという老人が挨拶に立った。「この会のおかげで、わたしはとても元気になった。これからも、難聴者のくせにどこへも出しゃばるといわれながら、どんどん、あちこちへ出てまいるたい…」

「おいおい、今どき『難聴者のくせに、どこへも出しゃばる』はないでしょ。そりゃ、時代遅れですよ」と冷やかしながら、でも、わたしたちは今、本当に、日本文化の変わり目にいるのではないだろうか、あらためて思ったことだった。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

No.7

## 3人のM先生

鈴木克美

### ● MI先生

MI先生にはじめてお目に掛かったのは、昔も昔、大学入試の面接試験である。学科の主だっ

た先生がたしか六人、MI先生は左の端にいらして、大きな眼でわたしを見つめておられた。あとで聞くと、面接の先生方は、この年、難聴の学生が受験しているとは、わたしが現れるまで知らなかったという。

少し危うかったが、何とか入学を許可されて、1年生の講義が始まった。MI先生は教養の生物学を担当されていた。板書は多くなかったが、はっきりと、大きく口を開閉して話される講義がわかりやすかった。

上級生から代々伝承の、MI先生のあだ名が「パクチャン」。口を大きくパクパクさせて話をされるからだ！

難聴のわたしにわかる授業があった！わたしにわかる講義は、健聴者にもわかりやすいわけで、みんなの評判もよかった。「パクチャンのわかる講義」は、大学には入ったけれど、講義が聞こえなくて、深刻に悩んでいたわたしには、とてもうれしかった。

パクチャンのMI先生は、2年生の組織学の講義も担当されていた。組織標本がうまく作れないで居残った日には、最後までつきあって下さった。なぜかはわからなかったが、目をかけて下さっていると感じた。しかし、自信をなくしていたわたしは、素直にそう思えず、半信半疑だった。

MI先生のお子さんが、同じ学科の1年上級にいた。ある日突然、学生寮のわたしの部屋へ、そのMIジュニアさんがやってきて、「君、耳が悪いんだってね。ノート貸してやろうか……」と、照れながら申し出てくれた。

あの頃は、人のノートが借りにくい時代だった。「ノートを借りる」のは、講義をよく聞いていないからだとか、講義をサボっているからだとかいう、マイナスイメージがあった。耳が不自由でノートを借りようという学生なんて、わが母校には、前例もなかった。それも1科目2科目ならともかく、わたしの場合は全科目借りなければならない。だれに貸してもらえるか、いつも不安だった。

それだけに、MIジュニアさんが、どんと持ってきてくれたノートには助けられた。どのページも、達者な字でぎっしり埋まっていた。こういうノートが借りたかったのだ。1年前のノートだが、なに、構うことはない。あの頃は、同じ先生の講義ならば、数年間は同じ内容だったのだから。ありがたくて涙がこぼれそうだった。でも、なぜ？

3年生になると、MI先生は、今度は発生学を担当された。房州小湊の実験場での臨海実習もあった。実験材料は、ヒラメだった。

ある日の夕方、実験場の岸壁にもたれて、海を眺めていたわたしにMI先生が近付いてこられ、「君はどうして、耳が聞こえなくなったのか」と尋ねられた。いつものように説明すると、「わたしもね、いとこ結婚でね、長男が耳が聞こえなくてね、茨城の田舎に母親といっしょにいるんだよ」と、打ち明けられた。ご長男がほとんど聞こえなくて、小石川の難聴学級に通っていたこと、ノートを貸して下さったMIジュニアさんはご次男……などと話して下さった。

それで「パクチャン」のあだ名の由来も、優等生でもないわたしに、ご父子でよくして下さいだったことも、すべてに納得がいった。わたしも安心して打ち解けて、『みみより会』という集まりができたこと、ご長男も入会なさってはどうか……と申し上げた。

パクチャンのご長男は、やっぱり読話が上手だった。お父上とのコミュニケーションも口話で通じていたのではないか。お手紙を出してすぐ、みみより会に入り、東京例会にもたびたび、出席されていた。その後、茨城の女性会員と結婚された、はずである。

会創立者の丸山一保さんが、たびたび書いているように、みみより会の他に聴覚障害者の拠るべき集まりがなかった頃である。MI先生は、ご長男がみみより会員になったのを父親として安堵し、喜んで下さった。

何年かのち、潜水事故死したクラスメートの追悼会で、MI先生は、わたしを「隠れたる人物」と持ち上げ、「みみよりの会」を紹介して下さった。先生はわが「みみより会」を「みみよりの会」と覚えて、ついに修正して下さらなかったが、耳の聞こえないご長男の話を、半公開の場所で初めて話され、「みみよりの会のお陰で、重荷が半分下りたような気がした」といわれていた。

## ● MO先生

MO先生は、国立のH大学を定年退職されて、わたしの勤める大学へ来られ、それからお近付きになった。世界的なプランクトン学者で、先生が発明し、実用化されて、世界中で使われてきた研究器具もある。バイカル湖畔の研究所にお供したとき、同行のMA先生の名を聞いて「オー」と口をあけて驚いた、現地の研究者たちの表情が忘れられない。

学問に厳しかった反面、ひょうひょうとした面白い方で、お酒も好き、ダンスも好き。トコロ天も大好きだった。ハンサムというでもなかったのに、女性にもてた。

油絵制作が趣味で、内外国の旅行では必ずスケッチブックを携え、写真代わりにスケッチに熱中した。ときどき、ふっと消える先生を探したり、絵筆を構えて動かない先生を待ったりの繰り返しだった。作品がたまると個展を開かれ、絵はすぐ売り切れた。

MO先生は、H大学を定年になる少し前から、耳が遠くなって、不自由されていた。わたしの大学にこられた1975年ごろには、もう、耳掛け型の補聴器を使われ、しょっちゅう、手をやって音量を調節されていた。

でも、先生には、聴力障害者になった……と構えた気持はなかったようだ。ただ、不便だと。耳が聞こえにくい先生は、当然、会議が苦手だった。主宰する立場に立たされては、なおさらだ。わたしもそうだが、耳が不自由だと、人の長話をじっくり聞くのがつらい。会議もなんとか自分のペースで進めるしかない。先生も、ボロが出ないうちに会議を終わらせようと、苦心されていた。

H大で耳が不自由なのは、先生お一人だけだったのが、こちらへ来てみると、わたしがいる。たぶん、それでだろう、わたしに親しみをもたれ、何かと目をかけて下さった。

いくつか、論文も見ていただいたし、いくつかの研究プロジェクトに、わたしを加えるようにと、根回しして下さった。もっとも、ニュージーランドの留学生の指導とか、東南アジアの学生の研修航海の引率とかまでは、いささか、荷が重かった。買いかぶられ気味だった。でも、尻込みできなかった。しゃない。やって見せようじゃないの。

無理が通れば道理引込む……というのとはちょっと違うが、無理も歯を食いしばってこらえ通すうちに、無理でなくなってくることもあるものだ。わたしには、どこかの大学研究室で研修を積んだ経験がなかったから、大学人としての常識と、教養と、基礎学力に欠けるところがあった。それをMO先生の買いかぶりに食い付いていくうちに、なんとか、間に合うようになってきた。

先生はよく「勉強ばかりするな」と、学生にいい、一方で「勉強が足りないから、こんな文章しか書けないんだ。まともな論議もできないんだ」と、叱った。矛盾しているようだが、遊ぶときは遊ぼう。うんと集中して勉強しよう……。そんなMO先生も好きだった。旅行が好き、南の島が好き、もちろん、海が大の大好きな先生とは、失礼ながら、ウマが合った。わたしが学位をもらったとき、先生は2人だけの祝宴に誘って下さった。

ところが、そんなふうでありながら、MO先生とわたしの会話は、なめらかに進まなかった。先生のショボショボした話し方が、わたしにはわかりにくかったし、わたしの低い声が、先生には聞き取りにくかった。

互いに二度三度と聞き返したり、紙に書いたりして確認しながら進む会話は、はずまなかった。

先生はもともと、口数が多くなかったので、話がはずみかけても、また滞った。先生がひょいと漏らされる言葉は、ユニークなユーモアに満ちていたが、すかさず聞き取って、どっと笑える聴力が、こちらになかった。話のツボを聞き逃すことも多くて、いつも、心残りだった。難聴者同士だと、かえって会話の通じにくいときがあるものだ。

耳のよく聞こえない2人の大学教授が、たとえば手話まじりで、海洋生物学のあれこれについて、激論を戦わせているシーンは面白い、格好いいと、思ったこともあるが、もちろん、空想だけで終わってしまった。

## ● MA先生

MA先生は、日本の魚類学の父みみたいな方で、母校の専門学校時代の大先輩でもある。ご実家が豊かではなかったのに、苦学され、学歴は専門学校までだった。それから学位をとられ、国立のK大学の教授になられた。当時、どちらも、たいへん異例なことだった。

MA先生は、優秀だった上に、たいへんな頑張りとは異常なまでの集中力で有名だった。博覧強記、本を読むのが人の何倍も早く、文章を書くのも早かった。たくさんの学術論文があった上、わたしが一生涯かかって1冊も書けそうもない、価値の高い分厚な学術書も何冊か書かれた。1960年代に書かれた先生の数冊の専門書は、40年たった今も、魚類学研究者の必読書になっている。

先生は奇行と武勇伝の人でもあった。研究に熱中すると、周囲のことがわからなくなって、電話のベルが鳴っているのに気が付かなかったとか、人が声をかけても知らぬ顔だったとか。真打ちには、標本集めに魚市場へ通っていたある日、珍しい魚を見つけて、夢中になっていじりまわしていたところが、商売用の魚にしつこくさわりすぎだと腹を立てた市場の若者に、いきなり、うしろから手鉤をぶち込まれた。柔道3段の先生は、血だらけになりながら、大立ち回りを演じた……と。

もともと、わたしはMA先生に直接は師事できなかったから、それらの出来事にわたしが居合わせたわけではない。MA先生の親友だったI先生のお話の受け売りである。

MA先生に学会ではじめてご挨拶したときには、もう、武勇伝もなさそうなお歳だったが、たくましい体格、いかつい風貌、威厳と鋭さがこもる小さな眼。学者というより、武道師範のほうが似合う感じの方だった。

MA先生は61歳で亡くなられた。やせっぽちのMI先生は93歳、同じくMO先生は79歳まで生きられたのに、頑丈なMA先生が最も早く亡くなられるとは、嘘のようだった。I先生にいわせると「MAさんは研究に体力を使い尽くしたんだよ」と……。

それからしばらくして、ろうあの友達からMA先生のお嬢さんは耳が聞こえず、市川ろう学校(現筑波大学附属ろう学校)を卒業されたと聞いた。え？ そうだったの？ 途端に、MA先生の集中力の逸話の数々が、脳裏に蘇った。もしかしてひょっとすると、先生ご自身も、難聴だったのではないだろうか。

もし、そうならば、研究に集中していて、電話が鳴っても気付かずにいたのもわかる。魚市場でMA先生に「いきなり」手鉤をぶちこんだ若者にしても、声をかけても振り向かない相手に、無視されたと、怒り出したのじゃないだろうか。警察へ連行されたという一件も、先生の人相のせいではなく、職務尋問に答えず、通り過ぎたからではなかったか。

数年前の学会の帰り道、MA先生のお弟子さんのA教授と、バスでいっしょになった。そこで思い切って、「もしかして、MA先生は、お耳が遠くなかったか」と聞いてみた。

突然の質問に戸惑いながら、Aさんは「お嬢さんの耳が聞こえないことは知っていた。でも、先生ご自身はねえ……」と口ごもり、考え込んでしまった。重たい口もとは、そうであるともないとも読み取れず、押し返して聞き直すのも、ためられる雰囲気だった。

わが家には、わたしのためにインターホーン代わりに「お知らせ電灯」がつけてある。書斎にもつけて、階下の居間からの呼び出しにも使えるようにしてある。ところが、何かに熱中していると、電灯がついたのに気がつかず、たびたび「何のためにつけたの」と、家のものに叱られる。あやまって、勘弁してもらったたびに、MA先生のことを思い出す。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

No.8

## 春は友だちづくりから

鈴木克美

レポートの書き方を知らない(?)聴障学生の話を書いたところ、いくつかのご意見が届いた。

「耳が聞こえないと、やっぱり、、レポートの書き方を知らないってことも、あるみたいですよ」「それは意識の低い聴障学生ではないか」「じゃ、どうすればいいのか」…。

でも、改めて振り返ってみると、このわたしだって、大学へ入る前から、「レポートの書き方」をマスターしていたわけじゃなかった。何にも知らなかったといってもいい。

ずいぶん昔の話で恐縮だが、わたしの場合は、友達から教わった。その友達は、別の友達とか、先輩とかから教わって…。

大学では、明文化された規則よりも、長い間に自然に積み上げられてきたきまりや習慣のほうが、むしろ多い。耳が聞こえないとこうした、耳から耳へ伝わる情報の取り込みが、どうしても途切れがちになる。そこを、工夫してつないでゆかなくてはならない。

メールも、ファックスも、インターネットもある現在は、事情もだいぶ変わってきただろう。が、全体の情報量もまた、格段に多くなったはずだ。聞こえない耳をおぎなう苦心が、減ったわけではあるまい。

知っておかなければならない習慣には、早く馴染んでしまおう。「レポートの書き方」みたいなものも、早くおぼえてしまおう。手っ取り早いのは、友達に教わることだ。大学では、友達がいちばんの「宝」なのだ。

そこでちょっとだけ、思い出話をしたい。

わたしは大学に入ってすぐ、学生寮に入った。学生寮というのも恥ずかしいような、ボロっつい寮だった。今どきの若者に話しても信じてもらえそうにない、自分自身でさえ、今はウソのように思える貧乏生活だった。寮に入ったのは、経済的な理由と、一日も早く学生生活に馴染めたかったからである。

とはいっても、寮の生活はきびしかった。いなかからポッと出てきて、自分1人だけが耳が不自由で、講義は聞き取れないし、大学や寮での、いろんな決まりや習慣を飲み込むのも、おくれがちだった。毎日が緊張の連続で、夜になると疲れて、涙が出た。軽いホームシックになっていた。

でも、その寮で、まもなく、同級の親友が1人できた。名は若松豪(たけし)。鹿児島の人だった。

当時は朝鮮動乱の真っ最中で、横須賀のアメリカ海軍基地には、たくさんの軍艦が入れ代わり立ち代わり、入港してきては整備を終え、必要な物資を積み込んで、また出港して行った。横須賀軍港から遠くないわが学生寮には、基地アルバイト募集の仕入れが、ほとんど毎日のように来ていた。

水産大学のキャンパスは、アメリカ軍と自衛隊(当時は予備隊といった)に二重に接収されて、実験室にも不自由なオンボロ旧兵舎住まいだったから、学生には反米、反自衛隊意識が強かった。それでも、ベース(基地)のバイトには、学費と生活費のために、大勢が出て行った。わたしもその一人だった。

ベースのバイト料は、高かった。とくに、朝までの徹夜作業(オールナイト)が破格の高賃金だった。

若松とは、そのベースのオールナイトのバイトで親しくなった。私より頭一つ分、背が高く、太くて高い眉毛に高い鼻、とがったあご、ダチョウみたいに痩せて、どこか遠くを見ている目つきをしていた。

寮でかき集められた学生は、基地のゲート前で「お前はこっち、そいつはあっち」と、手配師に持ち場を振り分けられる。と、若松がいうのだった。「鈴木、お前はおれの後ろにくっついていろよ。何かいわれても。だまっておれのジャンパーをつかんでいろよ」。

いわれるままにして、若松について行くとそのうち、ふしぎなことに気が付いた。彼といっしょのときは、いつもクラッカー運びみたいな、わりと楽な軽い作業にまわされる。彼がいない晩は、砲弾みたいな重たくて持ちにくいものを運ばされる…。

若松はいうのだった。「お前は世間知らずだし、甘ちゃんだからな」と。「耳も聞こえないし」といいかけて止めたのもわかった。彼には、高校までの友人にはない、おおらかで、りんとした、大人(たいじん)の風格があった。腹がすわっていた。

見た目にはよそよそしくて、長話もしなかったが、「度胸」というものと、その使い道をたっぷり、教えてくれた。小心なわたしには、得がたい、心強い友達だった。

一年生の過程を終わる頃、彼はいつのまにか、いなくなった。あんなに親しくしていたのに、何もいわずに姿を消すなんてひどい…と、ふつうは思うところだが、それで全然、ふしぎでない雰囲気、彼にはあった。

なんでも、遠洋漁業の調査船にアルバイトの口を見付けて乗って行ったと聞いた。

若松がいなくなって2年生になって、学生寮を出るころ、別の同級生の友達ができた。佐藤正道といった。福岡の人で、やはり、わたしよりもずっと長身だったが、若松とは違う、ふっくらした丸顔で、眉毛が西郷さんのように野太かった。口は不釣り合いに小さかった。なぜか、急に意気投合して、横須賀の瀬戸物屋さんの同じ部屋に住んだ。若松と違って口数が多く、お節介でもあった。

佐藤はいうのだった。「鈴木、お前はな、真面目すぎる。もう少し、へらへらしていないと人にきらわれるぞ。いちばんいかんのはな、相手の顔をジューッと見ついで見る。あれが、いかんのや。相手が警戒する」。

子どもの頃から難聴だったわたしには、いつのまにか、相手の口形をじっと見つめるくせがついていた。お陰で、補聴器をはずすと何も聞こえなくなった今でも、簡単な日常会話は読話できて、あまり困らない。でも、そうして相手を見つめることで、「相手が警戒する」とは、思ってもみなかった。

彼はまた、いうのだった。「鈴木な、お前は、耳が聞こえないって、くよくよしとるけどな、耳が聞こえなければ、せずに済むことだって、いっぱいあるんや」。

ただ、こう立派なことをいうくせに、佐藤は、いわゆる、まじめな学生ではなかった。

講義に出るのが気が進まないといって、下宿でゴロゴロして、数学の専門書などを読んでいた。一方のわたしが、聞こえない講義を補うために、何人かのクラスメイトのノートを見せてもらい、休み時間に書き写したりして、何とか辻つま合わせた苦心のノートを当てにしている、帰ってきたわたしに「おい、ノート見せてくれ」というのが日課だった。

だから、「お前のノートは完璧ですごい」とゴマすられても、全然うれしくなかった。「お前みたいなやつがいるから、人がノートを貸したがるらないんだ」といや味を言っても「ま、そういうな」と、平然としていた。

しかし、ここでわたしが佐藤にノートを貸すのをしぶるとすると、それでは、わたしにノートを貸したがるらない級友を責められない理屈になる。ま、ここは、佐藤がわたしを聴覚障害者として特別扱いしないのを、嬉しいと思ったことにしておきたい。

もっとも、わたしの聞こえが不自由なのに佐藤が全然、気をつかっていなかったのかということ、そうではなかったようだ。後年、第三者をまじえて話をしているとき、ふと、佐藤が「すみません。鈴木くんは耳が聞こえないもんですから」といってくれたのに気がついた。その後、気をつけていると、たびたびそういつてくれている。

それで、「あ、また聞き違えをしたのか」と、気づいたことも少なくなかった。そんなにもたびたび、自分ではそうとは知らずに、トンチンカンな受け答えをしていたのかと、佐藤のお陰で、おそまきながら気がついた。

2年生の秋、佐藤は福岡へ帰ると言い出した。こんな（水産）大学はつまらなくなったというのである。もう1年、みっちり勉強し直して、よその大学の数学科に進んで数学者になりたいというのだった。口でいうだけでなく、本当に福岡へ帰ってしまった。

佐藤がいなくなった年の冬、旭莞爾（あさひ・かんじ）と親しくなった。旭は島根の松江の出身で、他の大学の医学部にいたのが、医者になるのはいやだといって2年生で中退し、水産大学へきた変わり種で、同級生とはいえ、わたしたちより三歳年長。眉目秀麗、見るからに聡明そうな男だった。先の2人とは違って、わたしより小柄でやせていた。

大学入試も1番で入ったという秀才が、なぜ、わたしを気に入ってくれて接近してきたのかはわからなかったが、ある晩おそく、突然、泥酔した旭が、「君と話がしたかった」と、窓から入ってきたのが最初だった。

旭は大人（おとな）だった。生き方に余裕があった。本をたくさん読んでいて、ものごとをよくわきまえていた。年長をひけらかさず、わたしの話もまじめに聞いてくれた。ただ、こちらの言い分に無条件に賛成する場合は少なく、「それは、こうじゃないの」とにこにこしながらいう注釈や反論は、常に理路整然、納得するしかなかった。

彼はいうのだった。「なんだったってね。自分が正しいと思っても、相手がそう思わなきゃ意味がないだろ。相手に正しいと思わせることができなきゃ、それはもしかすると、正しくはなかったのかもしれないんだよ」。

ゆっくり、歯切れよく話す旭と時間をすごしていると、自分の耳が不自由なのを忘れ、大学生

とはこんな知的な会話をするのかと、眼からウロコが落ちる気がした。うれしかった。旭の話を吸収していくことで、精神的に幼稚な自分の知恵の袋が、だんだん、大きくふくらんでいくように思えた。

3人の親友のうちで、旭とつきあった時間が、いちばん短かった。なにしろ、彼は翌年の夏の臨海実習で、目の前の海に潜ったきり、生きては帰ってこなかった。日本最初の潜水実習事故で死んでしまったのだから。

佐藤は、福岡へ帰って1年たって、また、大学へ戻ってきた。「数学はきりがいいからやめた」というわけで、結局、一年おくれて卒業し、真珠会社に就職した。船に乗ってどこかへ行ってしまった若松は、わたしが卒業するまでには、大学へ戻ってこなかった。

卒業して4年たったある日、久しぶりに訪れた母校の構内を歩いていると、向こうから「よお」と、馴れ馴れしく片手を上げて、小走りに近付いてくる背の高い学生がいた。それがなんと、若松だった。

「お前、まだいるのか。何年生になったんだ」「4年生」「卒業できるのか」「うん、今年はまだ、卒業しないとな」

若松は、就学期限ぎりぎりの8年生で卒業して、ペルーへ行き、ペルーのカキ貝とエビの養殖の「父」みたいになった。帰国のたびに電話をくれたのだが、わたしが電話に出られないので、だんだん、疎遠になった。

われわれのクラスでただ1人、1年遅れで卒業した佐藤との交友は、長くつづいた。筆まめな男で、忙しいのに、いつも長文の手紙をくれた。だから、つづいたのだろう。

その佐藤も亡くなってしまったが、つきあいが長かった分、話も長くなるので、彼とのその後については、ここには書かない。

自分と同じく、耳の聞こえに悩む聴障の友達を知ったのは、わたしの場合、もう少しあと、みみより会に加わって以来のことだったから、それまでのわたしの周辺は、すべて、健聴者だった。友達も健聴者だった。でも、それもまた、よかったのかもしれない。

健聴者には、耳の聞こえない辛さはわからないが、気が合えば、人生の悩みを打ち明け合い、助け合う友達になれる。聞こえの障害にこだわらない心の友、障害を越えた親友、それも求めさえすればきっとできる。

わたしの人生のスタートは、あの3人との交友から始まったようにさえ思える。でなければ、50年も前のことを、こうも鮮明に、いつまでもおぼえてはいまい。

今は友達づくりのむつかしい時代らしい。ならばなおさら、親友には価値がある。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

No.9

## 手話のもう一つの周辺

鈴木克美

最近はちょっと見なくなりましたが、サラリーマン風の男性が、親指と小指を伸ばして、指文字の「へ」の形をさせた握りこぶしを耳の近くへ持って行って、電話をかける手話のサインをしている新聞広告がある。

あれはたしかに「電話」「電話をかける」の手話にちがいない。「電話をかける」という一般のゼスチャーは、受話器をにぎった形のこぶしを耳に近付けるものだから、あの手話を新聞広告で見つけたときは、びっくりしたし、うれしかった。

くらべてみれば、一般の「電話」のゼスチャーよりも、この手話の「電話」のサインの方が、それらしくてわかりやすい。絵にもなっている。手話がだんだん、特殊な存在でなくなり、こんなふうに、ふつうに使われるようになるのは喜ばしい。そのうち、こちらの方が「電話」を意味する一般のゼスチャーになる……かもしれないなんて、愉快的なことだ。

ふた昔も前、アルゼンチンに行ったとき、ブエノスアイレスの博物館の人が、たびたび甲を上にした左掌を、右手の人差し指で押し上げるゼスチャーをするのに気がついた。

それは何の意味かと聞いてみた。手話かと思ったら、そうではなく、一般に使われている「ちょっと待って下さい」というサインだと教えてくれた。さすがは、情感たっぷりのアルゼンチン・タンゴの本場である。

わが日本には、ラテンの国々とちがって、手振り身振りを日常的に使う伝統がない。でも、これからもっと手話が一般に浸透してゆけば、あの「電話」みたいに、さりげなく使われる場面も、きっと、ふえてゆくだろう。

そして最近、携帯電話が大流行だ。ある新聞報道によれば、東洋大学の今年の新入生 6,500 人の携帯電話普及率が、なんと 95% だった、と。1998 年の普及率が 55% だったそうだから、たった 3 年間で 40 ポイントものアップだ。一方、メールの利用がふえたために、通話時間の平均は 53 分から 21 分に、6 割も減った…。

電話を表す手話が昔からあっても、電話が使えない聴障者は、電話には縁なき衆生だった。そこが「ケータイ」ならば、聴障者にもメールが使える。ここでようやく、「電話」が聴障者にも身近になった、ともいえる。

すると、もしかして、次には、人差し指を立てたこぶしを耳の近くにもってくる「ケータイ」の手話が広まる…ってことはないか。

とにかく、「電話」の手話を新聞広告に見て、「手話がここまで…」と感動した、それだけでもいいだろう。ここまで手話普及に奮闘してきた人たちに、深い敬意を表したい。

話は変わるが、1969 年秋に、わたしは金沢水族館から東海大学のつくる新水族館にきて、大学の先生を兼ねることになり、身近にわかにならなくなった。それも、半端な忙しさではなかった。

まず、研究。研究者としてはおそい出発だったから、その分をとりかえさなければならぬ。講義、ゼミの学生の指導…、わたしの学力は、人にものを教えるには、とても足りなかったから、勉強もしなくては。大学という大組織にも溶け込まなくては。もちろん、本業の水族館をないがしろにはできない。新しい水族館には、あちこち、思わぬ行き違いや失敗が、ポコポコ出てくるものだ。

会議、来客、電話連絡、外国語、学会、チームづくり、付き合い…。全部が苦手で、一つ一つが難物だった。もっとも、つらいとか苦しいとかは、思わなかった。一つ一つが工夫のしどころで、手ごたえと希望があった。

今は昔の思い出話だが、とにかく、会議と電話と書類作成のやたらに多い職場だった。

書類作成はまあいい。会議もさいわい、前回の報告と議題のコピーが渡されるので、大体の方向はわかる。わからなかったことはあとで聞いた。もっとも、資料が何も出てこない会議は、あとで聞こうにも、何を聞けばいいかもわからなくて、お手上げだった。

会議はただ出席するほかに、立場上、会議指揮とか、司会とかの義務もある。自分のペースで進めて、役目を果たせているのか、心配がついてまわった。わたしが専門職だったから、助けてもらえた面もあった。事務職だったら、もっと、たいへんだっただろう。

電話の苦勞は、ファクシミリができてからかなり減った。それでも最初のころは、ファックスを書いてくれたがらない人の方が多かった。今はもう、そんなことはない。インターネットの電子メールも、電話の代わりに大いに役立ってくれる。

英語が上達しないのも、悩みの種だった。大学の先生ならば、英語ぐらい、自在にできなくてはいけない。残聴力があつたときに買ったリングフォンのレコードも、話し方が早くなると、どうしても聞き取れず、あきらめた。読む方はともかく、聞こえないと書く方も上達しない。そのことを痛感した。

3年に一度、文部省から教員の学力と業績について、個人調査のアンケートがくる。たとえば英語の学力欄には、読めるか、書けるか、話せるか、会議で発表できるか…と。これは聴力障害者を対象にした調査ではないので、耳が聞こえない自分には答えづらい項目が、英語のほかにもたくさんあつた。

学会での研究発表も、質問が聞き取れず、討論に参加できないわたしは、口述発表を共同研究者にまかせて、論文の執筆を引き受けた。書く方がむつかしいと思っても、この役割分担に、不満な相手もいたようだ。

毎日、ウソみたいに忙しかった。朝、起きられなくて、朝食抜きで出勤する。昼食どきも来客があつて、午後の会議がすぐ始まると昼食も抜き。会議が長引いて、学生の研究指導が遅れて、9時ごろ帰宅。おそい夕食をとり、調べものをして1時過ぎに就寝…。

人間って丈夫なものだ。クルマだったら、ガソリンがなくなった途端にエンストするのに、あれをしのいで、まだ生きている。

「大学の先生なんて、耳が聞こえなくてはやっぱり、無理なんでは…」。

無理なことは、よくわかっている。でも、無理と承知で組みつくのでなければ、聴障者にもできる職業は広がってゆかない。聴障者が大学の先生になる…むつかしくても、できないわけではなかった。大学の先生になれたら、次は、学会で活動して、研究者として足跡を残したい。それも、できないことではなかった。わたしたちは、つまり、一人一人がパイオニアなのだと思う。

そうこうしているうちに、心強い、ありがたい援軍が現れた。要約筆記である。

いろんな場面で要約筆記者(ノートテーカー)についてもらえることになって、それまで、本意ながら断ってきた政府の専門委員も引き受けた。国際シンポジウムの基調講演も断らずに済んだ。やんごとない方から質問を受ける集会にも、心配せず出席できた。

わたしの場合、手話通訳だと、始終一心に見ていないといけない。手話能力が不十分なせいでもあろうけど、あんなに一生懸命見ていたのに、会議が終わると、なんだか、中身がぼやけてしまう。手話通訳してもらった会議の内容を文書にまとめるのもむつかしい。

その点、要約筆記のノートテークならば、書いてくれるのを読みながら、自分もメモがとれる。発言者の表情を見たり、資料を読む余裕もある。質問もできる。全部書いてもらう必要はない。「要約」でいいのだ。専門用語の聞き取りがむつかしければ、「デンドロ…？」と書いてくれれば「デンドロネプチャでしょう」という具合に、こちらで補正できる。それでもう、十分だ。

顔見知りのメンバーが集まる学会の役員会や、政府の専門委員会の場合、わたしが聞こえないことを知っている委員には、わたしの出席に疑問をもつ向きもあつたようだ。耳が聞こえなくて、会議の内容がわかるのかと。

そこは、要約筆記にただ書いてもらうだけでなく、的確な質問をしたり、他の委員の質問にき

っちり答えて、安心してもらおう。

そして、わたしを知らない委員も、要約筆記者がついているのを見れば、ああ、彼は耳が聞こえないのかとわかるだろう。速記者についてもらっているのかと聞いた人もいた。

要するに、そこで求められているのは、耳が聞こえる聞こえないではなく、会議の役に立っているかどうかなのだ。だから、的確なサポートができるアシスタントがいさえすれば、耳の聞こえない委員がいてもいい。耳が聞こえなくても、大事な会議の委員をする能力はあるんだと。つまり、難聴者と要約筆記者、両方のPRにもなっているのでは。

要約筆記者にも、もちろん、手話通訳者にも、聴覚障害者の日常生活サポートだけでなく、こんな場面をもっと作って、もっと役立って、いや、活躍していただきたいと思う。

手話通訳、要約筆記、ファックス、電子メール…。わたしの場合、その恩恵が与えられたのが、それぞれに少し遅かった。それはまあ、生まれたのが早過ぎたせいで、しかたがないが、これからの人たちには、情報保障を活用して、社会の第一線で活躍してほしい。わたしとは違う分野にも進出してほしい。

手話の話に戻ろう。あるとき、ある会場で未知の人から、専門のことで質問された。

わたしはふつうの会話だと、かなりすらすらわかるときもある。ところが、いきなりの質問には弱い。何度聞き返しても、さっぱり意味が通らなかつたりすると、専門家として「そんなことも知らないのか」と誤解されるのがくやしくて、あせる。そのときも、とうとう、質問の意味がわからなくて、ポケットからペンと紙を出そうとしていた。

見兼ねたのだろう。居合わせた手話通訳さんが、一生懸命、通訳してくれた。ところがそれでもわからなかった。流暢な手話が、読み取りきれなかったのだ。

わたしに手話通訳してくれた方は、「手話のわからない聴覚障害者」に、びっくりしたという。あとで、わたしにこういった。

「わたしは、手話のわからない難聴者がいるってことを、よく知らなかったんです。手話通訳は技術なのだから、できるだけ早くリアルタイムに、できるだけ正確にお伝えするのを目標にしてきたのですけど」と。

なるほど、健聴者にとって「手話は技術」かもしれない。その「言葉の壁」を突き抜けて、手話をマスターしてきた意欲と努力には敬服する。手話通訳研修会での「日本手話と日本語手話が混同されている」といった相互批判や、高度な議論が交わされるのを見聞きすると、なおさら、感服してしまう。

ただ、手話通訳は、英語やドイツ語の通訳とはちがう。技術の向上もさりながら、手話通訳の心は、あくまで、障害者福祉だったはずだ。それだけは、忘れてほしくない。

障害者福祉の心は「やさしさ」と「理解」だったはずだ。そういえば、ごく例外的な話であろうが、一事が万事、「難聴者が耳が聞こえなくて悩むなんて、ろうあ者に笑われます」とか「70デシベルだろうが80デシベルだろうが、聞こえないのは同じでは」などという声が、聴覚障害者の理解者であってほしい手話通訳者から出てきては、悲しい。

耳の聞こえぬ悩みは、失聴という直接の苦しみだけではない。疎外感、差別、格差、不自由さ、孤独。求めているのは、心の交流、心のリハビリ…。それは、40年以上昔のみみより会での、中心的な話題でもあった。

多くの難聴者にとって、手話は母語ではない。健聴者と同じく、習って覚える「技術」なのだから、手話を流暢に使いこなせる難聴者が少ないのは当然だ。習わなくてはできない、そして、使う機会も少ない難聴者の手話が、手話を母語とするろうあ者よりも、専心努力して技術をマスタ

一した手話通訳者よりも、たどたどしくて拙劣で当たり前だと、割り切ってしまうえば、気もらくになる。

だからといって、難聴者は手話を知らなくてもいいという意見には、賛成できない。

話す言葉に不自由なくとも、聞こえが多少でも不自由なら、手話は覚えるべきである。社会のきずなを忘れぬために、同障者との連帯のために、心にゆとりを取り戻すために、人の心のやさしさを思い出すために…。

見方を変えてみるのもいい。聴覚障害者にとって、言葉を耳で聞く代わりに目で見ると、口の代わりに手で語るといふ、こんなに合理的で、いいものを、自分で使いこなせるようにならなくては、損ではないか。

手話の周辺は複雑だ。でも、なるべく単純に考えよう。とにかく、聴覚障害者同士で会話ができず、心が通い合わないなんて、やっぱり、へんだ。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

No.10

## 70デシベルと80デシベルの違い

鈴木克美

年が改まって、21世紀。今年は早々から、わたしたちに馴染み深い新聞記事がいくつかあった。手元にある朝日新聞の切り抜きで振り返ってみよう。

1月4日、朝日社会福祉賞を、全国手話通訳問題研究会(全通研)運営委員長の伊東雋祐(しゅんすけ)さんが受賞。

伊東さんは、ろう学校教の先生だった若いころ、手話時代の到来に先駆けていち早く手話をマスターし、手話の普及と手話通訳者の育成に大きな功績のあった方である。全国を駆け回る、エネルギーな活動ぶりは有名で、伊東さんが中心になって編集した『日本語・手話辞典』(日本ろうあ連盟)は、今や手話を学ぶ人たちの必読書になっている。

伊東さんとは、1993年、日本ろうあ連盟の機関誌『季刊みみ』62号の「特集大学教育とろうあ者」で、聴障関係の大学教員の座談会に同席したことがある。出席者五人のうち、わたし一人が聴覚障害者で、要約筆記者(ノートテーカー)についてもらった。

その席上、ある先生が「大学の先生にも手話をおぼえてもらって」と発言したのに対して、伊東さんがすぐ、「大学の先生が講義を手話でやるのはむづかしい。手話と教科と、二つの体系は全然違うのだから…」と、反論されたのには、びっくりし、感心した。

伊東さんは「大学で手話の講義などと軽々に、迎合的にいつてくれるな」といいたかったのだろう。「手話で講義を組み立てるか、手話通訳者を育てて…」とも、いわれた。

新聞記事には「伊東さんがいなければ日本の手話はここまで発展することはなかった。文字通りこの世界の第一人者」という、有識者の談話もついていた。氏の率いる全通研は1974年に287人

の会員でスタートし、現在の会員数は、なんと 9,300 人！

1月15日の「天声人語」には、小野宏さんの紹介記事があった。小野さんは1960年代、大手商社の営業マンとして、ドイツを中心とするヨーロッパで、日本の工業製品輸出の最先端で活躍していた方である。

海外赴任して15年、油の乗り切った50代に入って、突然、耳が聞こえなくなった。電話のとれない営業マンは、第一線では通用しない。失意の小野さんは55歳で退職して、家にこもるしかなかった。

しかし、その2年後、小野さんはボランティアの要約筆記者の力を借りて社会に復帰し、任意団体だった全難聴(現全日本難聴者・中途失聴者団体連合)に入会して、全難聴が社団法人になるのに大きな力添えを果たした。

当時、全難聴の顧問だったわたしは、小野さんにも度々お会いしたが、耳が聞こえなくなった心労から立直られたばかりだったせい、外国で活躍していたとは思えぬ、目立たぬ、もの静かな印象の方だった。

全難聴事務局長としての小野さん、あるいは、企業戦士としての活躍から失聴への過程をつづった手記『東欧ビジネス戦記・ある商社マンの記録』(PHP研究所)の著者としての小野さんをご存じの方も多いただろう。

「天声人語」の記事は、その小野さんが、1年仕事を休んでヨーロッパを再訪し、旧知の人たちに会ってきた。かつての友人がみな小野さんを覚えていて、歓迎してくれたという、早くいえば、それだけの記事である。

でも、人生の途中で耳が聞こえなくなるのが、どんなにつらい、たいへんなことか。そして、そこから再起できる人間のつよさを、小野さんの姿から考えてみようという、天声人語子の姿勢を、素直に受け止めたい。

2月10日、読者のページ「声」欄には、東京都北区の主婦、佐渡知子さんの「難聴の我が子 文字放送ぜひ」という投書がのった。

娘さんが高度の難聴で、テレビ出演者の声は「音」として耳に入るだけ。娘が番組の内容を、いちいち「ナンテイッタノ」と聞いてくるのにできるだけ答えているが、なかなか間に合わない。文字放送のマークのついた番組をもっとふやしてほしいと…。

2月11日、同じ「声」欄にみみより会員の木下幸雄さんの投書「37年ぶりの音 夢がかなった」がのった。

人工内耳のおかげで、まったく聞こえなかった耳に、奇跡のように聞こえがもどって、感激した。手術が終わって「音入れ」したときは、雑音ばかりで期待を裏切られかけたのが、1週間後の調整で突然、病院の階数案内が聞き取れた…。

全然聞こえなかった音が、にわかに聞こえるようになった感激的な体験を、400 詰め原稿用紙1枚ほどの短文にまとめるのはむづかしい。よく書けたものだと感服する。

木下さんが人工内耳の手術に成功した体験記は、わが『みみより』にも「人工内耳への挑戦」と題して、昨年12月号から3回連載されているので、会員の方は読んで下さっているだろう。ここでも、よく目配りされた文章が、個人の体験記を超えて読む人の共感を誘い、大きな感動を与えてくれる。

読ませる迫力のこもった手記だった。

あたたかくて、やさしい、説得力に満ちた迫力。みみより会を創始した丸山一保さんが『みみ

より』先月号に書いているように、わたしたちのこの会は「優しさから始まり」、優しさが希望を生んできた。その初心を、しみじみ思い出させてくれる。

木下さんの手記の第2回が掲載された『みみより』1月号と同じ日に、全難聴の機関誌『福祉「真」時代』1月号が届いた。そこにも、橋本英憲さんの人工内耳埋め込み手術体験記「世界は生きている音で充ちている」が掲載されていた。

橋本さんは、『みみより』の編集を担当されたこともある方だ。こちらは、むしろいっそう冷静に、音を取り戻した経過から踏み込んで、聴力障害者の心のあり方の変化まで、気持を押さえながら淡々と語っている。

橋本さんの文章もまた、個人の体験記を超えて、読む人の心を引きつけ、大勢の読者の共感を得たことであろう。もちろん、わたしの心をも深く納得させるものだった。

「耳の手術」というだけなら、このわたしにも、たっぷり経験がある。

わたしの亡父母は、息子の耳に、もしかしたら、聞こえが戻るかもしれないという希望を持ち続けていた。わたしにも、その気持があって、幼いころから高校生になるまで、いろんな「聴力回復手術」を受けてきた。結果的に手術は一つも成功せず、頭の鉢が割れそうな、はげしい苦痛の記憶だけを残した。わたしが痛がるのを見る両親もつらかっただろう。後年、亡母は「手術のたびに聞こえが悪くなったような気がする」ともいっていた。

少年時代のわたしは、耳の「治療」のために、日常的に耳鼻科の病院へ通院していた。病院の印象はよくなかった。耳を病んでいるからこそ、耳鼻科に通っているのに、その病院で会話が聞き取れないからと、医師や看護婦に笑われた苦い遠い思い出が、今でも心の奥にわだかまっている。

でも、今はその認識を改めたいと思う。近年の医学や医療技術の進歩と、聴力障害に対する社会の認識の変化、わたしの生まれてきたのが早すぎたのだろう。木下さんと橋本さんの文章を読んで、ふと、そこまで考えた。

聞こえていた耳が、突然聞こえなくなった話は、わたしたちの周辺にはたくさんある。でも、聞こえなかった耳が、突然聞こえるようになったという話は、最近まで、めったになかった。少なくとも一般的ではなかった。

もちろん、ずっと以前にも、聴力回復の手術の恩恵を受けられた人はいた。だが、それはむしろ、まれな幸運であって、同障の人たち一般に、共通の希望を抱かせるところまでは行かなかった。どこか他人事だった。

そこが、今はちがってきたように思う。木下さんと橋本さんの「読ませる」手記は、聴力の回復というテーマが、わたしたち聴力障害者の間での、新しい重要な話題になり得ることを掘り起こしてくれたように思える。

もちろん、今はまだ、人工内耳が完璧に音を取り戻してくれるわけではない。ろう者が難聴者になるだけかもしれない。木下さんも最後に書いているように、どう手術に成功したところで、「2級の障害者であることは紛れもない事実なのである」。

それに、手術の結果には、ずいぶん個人差もあるようだ。輝かしい、幸せな成功例のかげに、ほとんど不成功に終わった、失敗としかいえないような例があるのも、残念ながら事実である。わたしたちは頭を垂れて、その人たちのことを、深く思いたい。

人工内耳の手術は、まだ発展途上であるとも聞く。現在は発展過程でのリスクを覚悟せねばならぬ時期なのだろうか。将来だって、限界はきっと、あるだろう。

でも、今はエレベーターの階数案内も聞き取れなくなったわたしにも、いろんな音が聞こえた記憶は、耳の底に新しい。40数年も前のことなのに、大学へ入って真空管式の補聴器をつけて、

化学実験室の陶器に落ちる水音がカラカラコロコロと、はじめてきれいに聞こえたうれしさが忘れられない。弁当箱のように大きな補聴器が、あの頃のわたしたちには、まさに、突然現れた救世主だった。

話し声を十分聞き取れなくても、虫の鳴く声、小鳥のさえずり、孫のひくバイオリンの音が聞こえたら、どんなにうれしいことだろう。補聴器なしでは、海岸に寄せる波音も聞こえなくなったわたしは、そう思う。何よりも、忘れていた「希望」の芽が、また伸び出てきたように思えるのがうれしい。

橋本さんの手記には、わたしにとって見逃せない記述もあった。引用しよう。

「かつて、わずかな聞こえの違いにこだわる難聴者のことを『目くそ鼻くそを笑うようなもの』とある手話通訳者にいわれたことがある。確かに健聴者から見れば 70 デシベルだろうが、80 デシベルだろうが、聞こえにくいことには変わらない。わずかな聞こえの差にこだわるのは滑稽だということになるのだろう。しかし、人工内耳の手術を受け、リハビリを受けつつ、少しでも聞き取りを良くしようと励むうちに、なぜ難聴者が少しの聞こえの違いにこだわるのか実感として分かるようになってきた…」

聴覚障害を取り巻く事情は複雑だ。聴障者同士でさえ、「聞こえ」についての相互理解が行き届いているとは、いいにくい。聞こえを回復した橋本さんが、その相違を実感したという話は、示唆に富んでいる。ただ「ある手話通訳者」のという言葉は、それがこの通りだったなら、あまりにも理解不足である。

わたしだって、毎日「聞こえ」がちがう。たとえば、音を聞くのが快い日と、ひどく苦痛な日がある。耳鳴りに紛れて集中力が落ちて、会話がまるで通じず、考えがまとまらない日がある。日々の「聞こえの落差」に苦しんでいるのが、「わずかな聞こえの差にこだわるのは滑稽」「70 デシベルだろうが 80 デシベルだろうが」と、切って捨てられてしまっは、やりきれない。

手話通訳者もふくめて、せめて、聴覚障害者の情報保障にたずさわる人々には、聴覚障害のさまざまな在り方に、もう少し幅広く、「優しさと理解」の眼差しを向けていただきたい。わたしたち自身もまた、理解を求める努力をつづけて行かねばなるまい。

2月20日、「全盲ろうの福島智さんが東大助教授に」という報道があった。福島さんは、話すことに不自由はないが、耳が聞こえず、眼が見えず、指点字通訳者を兼ねる夫人の援助を受けて、金沢大学助教授から東大先端科学技術研究センターのバリアフリー部門の助教授に抜擢された。これはすごい。

面接審査に当たった教官の談話に、「本当にコミュニケーションがとれるのか」と心配したのが、「とても円滑に対話できるのに衝撃を覚えた」と。人間のもつ可能性とは、なんと大きなものだろう。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

## 鈴木克美

人にものを教えるのがしんどい職業だと気がついたのは、水族館屋さんが大学教師を兼ねるようになって、数年たってからだった。

それまでは、無我夢中だった。今の大学教師は、人に教えながら自分も向上していかなければ、もたない。競争もはげしい。能力のあるもの、要領のいいものと、そうでないものとの差も大きい。「そんなことも知らないのは、アタマがわるいからだろう」と、面と向かって、平然と喋る社会である。

「水族館屋が大学の先生になった」というわたしの経歴も、耳の聞こえない大学教授というのも、今では「だからこそ価値があるんだ」と平気でいえるようになったが、はじめのうちは、まわりの眼がきびしかった。

もっとも、こういう話は、実力社会のように思われているアメリカでも同じらしい。わたしの数少ない外国人の友人、カリフォルニア州立大のJ・S・ホーさんは、名でわかるように中国系（というより台湾系）アメリカ人で、国際的に知られた魚類寄生虫の専門家だ。いい論文もたくさん書いている。でも、長いあいだ助教授だった。

かってわが家に来てくれたとき、「そんなにたくさん論文を書いていて、どうして、まだ、助教授なのか」と、冗談口をたたいたところ、「人種差別ですよ」と、きっぱり、言い切ったのには、ちょっとびっくりした。

今年の3月、ロサンゼルスへ行って、ホーさんにまた会えた。彼は教授になっていた。ホーさんのお宅である話を思い出して、「人種差別で…とかいっていたけど、プロフェッサーになったじゃないの」とまた冗談をいったら、「うんと論文を書いたからね。人の何倍も…」ときた。

とまあ、差別とかはあっても、大学というところは、努力して研究成果をあげれば、その価値は認めてくれる。学界はもっと努力とかに敏感で、人の2倍3倍やったことが、いずれは、自分の業績になって帰ってくる。

ところが、研究業績とはちがって、教育の方には、業績評価を表す尺度がない。国立大学では、自分の講座に受講学生が一人もいなくても、だれも咎めないとか、かえって喜ぶ先生もいるらしいが、私学ではそうはいかない。わたしの大学では、アメリカ流に、期末になると学生が先生の評価表をする。とにかく、受講学生が少ないのはさびしい。どうやって、講義に魅力をもたせるか、どうしたら大勢の学生に聞いてもらえるか。身を入れて講義を聞いてもらうには、工夫がいる。

ものを教えるには、ただ、知識を伝えるだけでは駄目だ。せめて、講義を面白がってもらい、進んで耳を傾けてもらえなくては。そして、卒業して何年かたって、「鈴木先生の魚類学って、好きでした」…とか言ってくれれば、もうそれで満足。とてもうれしい。

大事なのは、開講の日だ。たとえば海洋学の講義は、こんな話から始める。

「この教室の窓から海が見えます。駿河湾です。でも、皆さんが見ているのは、海そのものではないんですね。

皆さんが見ているのは海の表面、海面なんです。海面ってなにか。大気圏と水圏をへだてる膜面です。私たちは海面を眺めて海を見ていると思っています。でも、それは錯覚です。海面をいくら眺めても、海のことにはわかりません。海の中がどうなっているか、海の底がどうなっているのか、海にどんな生きものが住んでいるのか、海面を見るだけではわからないんですね。

『島が海に浮かんでいる』といいます。しかし、島は海に浮かんでいるんじゃないんですね。海底から山が立ち上がって、そのてっぺんが海面から大気の世界に突き出ている…海底からそそり

立つ山のとっぺんが島なんです。これからは、海面を眺めて、海の世界を考えるような習慣をつけて下さい…」

こんな講義が、学生にとって面白いかどうかは、じつは、よくわからない。ただ、少なくとも、わたしのつとめる海洋学部の学生たちは、わりと熱心に聞いてくれている。

と、講義をしながら、ときどき、この中に聴覚障害の学生がいたら、どう話したらいいかとか考える。わたしはやっぱり、聴覚障害の学生を担当して、講義と研究指導をしたかった。できれば、適当なテーマを与えて、研究者を育ててみたいと思ってきた。

聴覚障害の学生といっても、いろいろだ。補聴器をつければ会話できる難聴学生もいれば、もっぱら手で話そうあの学生もいる。聴覚障害の学生を分け隔てはしまい。こちらも聴覚障害者なのだから、お互い不便なところもあるだろう。そこは補い合わなければなるまいし…。ただ、コミュニケーションの違いは大きい。

難聴学生には、こういう話し方では、意味がつかみにくいだろうし、ろうあの学生だったら、なお、簡明率直に話さないといけないだろう。わたしには、講義を手話で通す力がないが、手話だったら、先の話はこんなふうにもなるのだろうか。

「外、海、見える。海、ある。名前、駿河湾。知ってる？ でも、本当の海、ちがう。意味、わかる？ 見える海、海の表面。空気と水の境目。膜。膜見るだけ。海の中、わからない。なぜならば、海の中、見えない…」

いや、これはしんどい。手話通訳者に頼まなければ。でも、通訳者は、どう通訳するのだろうか。で、意味はきちんと通じただろうか。通じたかどうかを、どうやって確かめればいいたろうか。

黒板を使ってする板書まじりの講義は、難聴者にはよくても、ろうあ者にとっても本当にいいのかどうか…。なにしろ、板書しながらの講演は、かえって通訳しにくいという手話通訳者もいることだし…。

今の大学では、人をひきつける講義をしないと、一時間半はもたない。わたしは教科書もノートも持たずに行って、学生の顔を見ながら、適当にアレンジしながら話をする。そんなこと当然だと思っただけだが、そうではないらしい。で、「手ぶら講義」がトレンドマークになっている。ならば、「手話まじりの講義」をトレンドマークにできたら、それも面白そうだ。健聴学生にも受けるかも。

もっとも、不器用なわたしには、パーフォーマーとまでは無理だな。それに、手話の講義じゃノートがとれないだろうから、聴覚障害の学生には、テキストも予めつくって行かなければならないだろうな。面倒だな。それでもって、先生の手話はテキストと違うなんて、学生にいわれたらギャフンだな。

研究と教育と水族館で手いっぱいだといいながら、そうまでして、なぜ聴覚障害の学生にこだわるのかな。耳の聞こえない学生に来てほしいのか。うーん。

耳が聴こえなくても「学」はできる、研究者として立つこともできる、その証をもっとしっかり立てたいってことかな。ま、率直に言えば、聴覚障害をもつ生物系の学生がどんどん増えて、ついには、当たり前になってほしい。耳の聴こえない研究者が、二人三人、あるいはもっと、次々に現れてほしい。及ばずながらその手助けをしたい。それは、同胞愛みたいなものなのかもしれない…。

もちろん、こう、口で言ったって始まらない。実践しなければ意味がない。それはよくわかっている。でも、わたしはついに、実践の機会に恵まれなかった。たぶん、もう、ないだろう。残

念である。海や魚が好きでこの道にたどりついたわたしとしては、その楽しさと魅力、この道をたどるノウハウ、それを同障の若者に語り継ぎたかった。

と、こう思ってきたところ、先ごろ、眼を洗われるような1冊の本が届いた。『聴覚障害と英語教育』。著者中西喜久治。上下巻に別れているので、正確には「2冊の本」である。上巻398ページ、下巻311ページ、合計709ページもの大作である。中身もなかなかのもの、いや、これはすごい。

中西さんは奈良県天理市出身で、小学校1年生のときに聴力を失った。ろう学校中学部から定時高校商業科を経て、同志社大学英文科を卒業、英語教師の免許を持ちながら、京都府立ろう学校に洋裁科の教師として就職、その後英語教師として34年間勤務…と、この履歴を見ただけでも、知らない人はびっくりしてしまうだろう。当然、その人生は、ずいぶんけわしい道のりであったらう。

『聴覚障害と英語教育』は、ろう学校での著者自身の英語教育の実践報告から始まる。

ろう学校の英語教育…、本の帯にも書かれているように、「むりだ、むだだ、むづかしい」とふつうは思うところだろう。著者自身も、「ろう学校の生徒に英語を教えるのは本当にえらいことだと思う」と書いている。

もっとも、えらいことではあるが、できないことではないんだ。英語はろう学校を卒業して、すぐの役に立たないように見えても、社会人として立つのに必要な教科なんだと、著者は主張する。ただし、その受け皿が社会に用意されていなければならない…と。

それもだが、耳の聴こえない中西さんが英語教師になり、論文を書き、シンポジウムで発表し、外国で交流しと、たくさんの実践記録を残しててきたこと自体が、もっと「えらいこと」だったのではないか。

中西さんの英語教師としての技倆と学識はろう教育界では有名な話らしい。その上、中西さんは、24年間も（財）全日本ろうあ連盟の理事で、しかも、そのうちの22年間は、同連盟の機関紙『日本聴覚障害者新聞』の編集長をつとめて、オピニオンリーダーとして、日本の聴覚障害運動を引っ張る重責をになってきた。

「英語教師の中西としてより、ろうあ連盟の中西…」と、自分でも書き、さらに不利な条件下にある同障者への温かな視線も忘れていない。その自負もまた、この本を真っすぐに貫いている。

人生に波乱とか苦労とかが多ければ多いほど、当然、書くこともいっぱいあるはず、それをよく、こうまとめたものだ。本に再録された克明な資料にも、大きな価値がある。

もっとも、気になる箇所もあるにはある。第一、長い。正直いって読み疲れる。それから、どのような読者を想定したのか知らないが、英文がところどころ、何ページも、長いところは20何ページもつづくのは、読みづらい。上巻だけで、卒業論文、授業プラン、講演、報告など併せて英文が54ページもある。内容は立派なものなので、飛ばして読んではもったいない。

デモンストレーションの意味もあったのかもしれないが、読めなければ飛ばしてくれというのは、本を買ってくれる一般読者に失礼であろう。英文がどうしても必要ならば、読者の便利を考えて、面倒でも、一々、和文の要約をつけてほしかった。折り込みにしてもよかった。逆に、英語の筆談記録の大部分は日本語の対訳だけでよかったのではないか。

かといって、それがこの本の価値を損なうものではない。英語教育の実践報告から始まって、ろうあ運動、国際交流へと話が展開してゆくのも、著者の人生の軌跡の必然だったのだろう。読みづらさを超えて、夢中になって読み進ませる魅力、迫力、中身の濃さ、著者の主張の一貫性。読んで、著者の識見と洞察力に、深くうなづく箇所が少なくない。

最後に一言、わたしは英語が好きなのに、さっぱり上達せずにこの年になった。1936年生まれの中西さんの2歳年長である。努力はしてきたつもりだが、今でも、英語が得意とはいえない。耳が聴こえないとだめなのかと、あきらめ気味であった。能力の違いもあろうが、本書を読んで、恥ずかしかった。

先ごろ、ある場所で短い話をさせてもらったが、そのわたしの話を聞いて、「知っていれば、鈴木先生のところへ入りたかった」といつてくれた聴覚障害の学生がいた。うれしかったが、わたしもまた、「知っていれば」中西先生に英語を教わりたかった。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

No.12

## 書けなかった本

鈴木克美

数年前、『博物館学講座』という、全15巻のお固い書物で、「障害者と博物館」の執筆を頼まれて、二つ返事で引き受けた。

博物館は最近、障害者に優しくなった。1980年の「国際障害年」と、その後の「国際障害者の10年」がきっかけになって、わが国の博物館行政の姿勢は随分変わった。

今、駐車場や公衆トイレで見掛ける、車椅子に乗った障害者の記号、あれもその国際障害者年に制定された国際シンボルマークで、新しい博物館には、たいてい、入り口にこのマークがついている。それはその博物館の出入口、通路、トイレ、エレベーター、ランプ（スロープ）など、すべてが身体障害者の利用に配慮した国際標準化機構（ISO）の基準をクリアしているという意味である。

1994年には、わが国ではじめて、身体障害者に対応した公共建築物のあり方が法律で決まった。通称「ハートビル法」である。

また、昨今の博物館は、視覚障害者への対応工夫にとくに熱心だ。眼で見る「観察」の代わりに、手で触れてみせる「触察」という新語まで生まれて、博物館学芸員の「触察」研究会も、たびたび開かれている。

それでたとえば、従来の博物館が視覚障害者のためと称して、動物の剥製標本をさわれるように置いて済ませてきたような、安易な姿勢が、厳しく批判されるようになった。

「盲学校生徒に動物の剥製をさわらせると指の止まるところは腹側の縫い目だったり、鼻のめくれている部分だったり」「毛皮に詰めものをした剥製は、眼で見てわかる人のためのもの」「晴眼者ならば動物の様子を見ながら近付き、だんだん手を差し伸べてこわごわ触るところ、いきなり未知の生きものに触れる視覚障害者の大きな恐怖感」「詰めものの剥製より骨格標本がいい」などと、晴眼者の気付かぬ指摘も出てくるようになった。

東京渋谷の松涛公園近くの「視覚障害者のための手で見るギャラリー・TOM」という美術館へも取材に行った。以前、手話狂言が公演された国立能楽堂が近い。あたたかな雰囲気、小じ

んまりした彫刻美術館だった。

一方で、聴覚障害者に対しては、博物館サイドのこうした研究も、具体的な対応も、援助もほとんどないことが、改めてわかった。何をしたらいいのかわからないというのが一つ。それにもまして、障害者側からの利用要求がまったくないと。ある程度予想していたこととはいえ、ショックだった。

たしかに聴覚障害者の場合、対応は簡単なようで複雑だ。情報保証の手段も、手話、口話、要約筆記(ノートテーク)、補聴器使用などと多様だが、それ以前に、聴覚障害に対する博物館サイドの理解不足がある。

聴覚障害者は、耳が聞こえなくても、眼で見るのに不自由はないし、行動にも困らないのだろう。とすれば、「観察の場」である博物館で、なぜ、障害者としての対応が必要なのかという声もあった。言語習得以前に聴覚を失ったろうあ者に、博物館の解説を読むのが困難という事情も、ほとんど知らない。

それでいながら、手話のできるボランティアや学芸員のいる博物館もふえている。でも、その「手話のできる人」の多くは、ただ、手話ができるだけのようだった。一方で、知識技倆のしっかりした学芸員でも、ろうあ者にわかる手話を駆使して、博物館の案内解説をするのはむづかしい。

説明する手話は熱心に見てくれても、肝心の展示物は見ずに素通りするとか、質問がないので、自分の手話がわかってもらえなかったのか、がっかりしたという話も聞いた。

東京のある大きな水族館では(水族館も、美術館も、博物館の一種なんです)、聴力障害者のためにと、手話通訳入りと、字幕解説付きの解説ビデオを作った。それを、ろう学校の高等部生徒、成人ろうあ者、健聴のろう学校教師に、試験的に見てもらった。

すると、成人ろうあ者は手話付きビデオを好み、ろう高校生は字幕付きを希望した。健聴のろう学校教員が字幕の字と表現をもっと平易にと求めたのに、ろう高校生はその必要なしと答えた。動く魚と手話の両方を一度に見られないので、手話付きの場合は静止画がいいとか、字幕の字数ももっと短く、いや長く…と、いろんな意見が出て、水族館サイドは、どうしたらいいか迷って困ったと…。

ここでもし、難聴者からの意見も聞いたなら、赤外線ループを張ってほしいとか、オーディオガイドを用意してほしいとか、ノートテーカーがついてほしいとか、また、別の要求が出てきたことだろう。

しかし、こうした聴覚障害者の複雑な情報保証のニーズを、博物館の内側だけで対応できると考える姿勢にも問題がある。それも理解不足のゆえだろう。博物館を取り囲むネットワークへの働き掛けも、まだ足りない。

とにかく、これでは、わたしの書きたかった「聴覚障害者と博物館」が書けない。困った。参考資料も実践記録もないのなら、座談会を開いて、障害者側からの要望をまとめてはどうかと、二三、相談してみたが、「博物館？ピンとこない」と、話に乗ってもらえなかった。「博物館の聴覚障害者対応なんて悲しい」という手紙をくれた、ろうあ女性もいた。悲しい？うーん。

聴覚障害者の博物館への親近感、は、欧米でも低いようだ。ロンドンの大英博物館では、20年ほど前から、くりかえし聴力障害者向けのサービスイベントを開いてきたが、学校団体以外の利用者数は伸びなかった。手話通訳者付きのギャラリートークのシリーズを用意したときも、参加者はがっかりするほど少なかったと…。大英博物館の女性の教育部長アン・ビビアンは「聴覚障害者は長年のあいだに、そういうサービスを期待しないようにならされている。だから、障害者には、常に積極的な働き掛けが必要」と…。

わたしは、聴覚障害者にとっての博物館職員論も書いてみたかった。博物館には、一般事務職員とか、電気関係の技術者などのほかに、専門職員としての学芸員が必要である。聴覚障害者は

博物館員になれるのかどうか。

結論だけいうと、一般職にせよ、専門職にせよ、聴覚障害者が職員になるための具体的な障壁は、博物館には一つもない。専門職の学芸員にだって、なりたければ、なれる。学芸員は終身資格だし、障害者であるがゆえの欠格制限もない。逆にいえば、「博物館職員としての障害者論」も成り立たない。

realityに、肢体障害者の学芸員は、わたしの知人にはいないが、きっと、あちこちにいるだろう。視覚障害の学芸員は、一人もいないのではないか。聴覚障害の学芸員は、わたしより若い難聴の男性が、京都の動物園（動物園も博物館なのだ！）に一人いたが、先年、若くして亡くなってしまった。

じつは、日本の博物館では、博物館学芸員が専門職員でありながら、専門職としての成果を評価される以前に、一人であれもこれもと、何でもやらなければならない、実態はほとんど「雑芸員」だという実情がある。聴覚障害者は、専門家にはなれても、一人で八面六臂の活動を求められる雑芸員の仕事をこなすのは、一般にむづかしいだろう。

「障害者と博物館」の調査では、いろんな副産物、余談も拾うことができた。

たとえば、「博物館のバリアフリー計画」という研究論文には、「障害者」が「しょうがい者」と平仮名で書かかれていた。「障害の『害』という字には『公害』に代表されるように、悪いイメージがつきまとう」ので、使いたくないが、「『障害者』にとって代わる明快な言葉が見当たらない」ので「しょうがい者」と書くことで、せめて「差し障りがある」「害がある」という意味を持つ漢字の使用だけでも避けようとしたのだという。研究者ご本人は障害者ではない。

また別の話だが、数年前、動物名に差別語を使うのをよそうというシンポジウムが開かれた。仕掛け人は徳島の博物館学芸員で、こちらもご本人は障害者ではない。以前、博物館に、動物名に差別語が使われているのはけしからんという投書があつて、それが、シンポジウム企画の動機になったという。

魚ならば、メクラウナギとかイザリウオとかいう名がいけないというわけだ。（聴力障害に関連する動物名はめったにないが）シンポジウムは、けっこう賑やかだった。

メクラウナギの「メクラ」や、イザリウオの「イザリ」が、本当に差別語なのか。メナシウナギとか、アルキウオとかに変えれば、ことは済むのか。「メナシなになに」「アルキなになに」などという日本語があるか…。

イザリウオは、背びれの一部が釣り竿に変わった、奇妙な魚である。胸びれで太目の体を引きずって海底を歩き、釣り竿を振り回して、誘われて近付く小魚を食べる。その名の「イザリ」は、歩き方とは関係なく、「漁り(いさり)」が訛ったのだという説もある。

かと思えば、小柄の研究者が発言していわく、「自分は子どもの頃から小さかくて、チビ、チビといわれてきたが、チビっこ天国などという言葉も使われている。チビなになには差別語なのかどうか」と…。

「害」という字の印象がわるいからといって、障害者を「しょうがい者」と書いたところで、障害者の立場が変わるわけでもなし、メクラウナギをメナシウナギに変えたところで、視覚障害者の基本的人権が守られるわけでもあるまいに、近頃、こんなふうな、障害者自身をそっちのけにした、上滑りな評論を見る。これも、「障害者への社会の理解が進んだ」とか、「ノーマライゼーションが進んだ」と喜ぶべき筋のものなのだろうか。

わたしの住んでいる静岡県には、身体障害者手帳を持っている聴覚障害者が8,812人いる。そして、厚生労働省の統計でいう全人口の5パーセントが聴覚障害者だとすると、6,000,000人の聴覚障害者がいる！手帳を所持する視覚障害者は8,944人、同じく肢体障害者は62,150人だから、耳の聞こえない人の数は、眼の見えない人とほぼ同数、ということになる。

一方で、全国の博物館の利用者は、1年間に130,000,000人。水族館のそれだけでも、40,000,000人。もし、それぞれの5パーセントが聴力障害者とする、博物館に6,500,000人、水族館だけで2,000,000人！手帳所持者をさらにその5パーセントとする、博物館に320,000人、水族館に100,000人！

ウソ！そんなに行っているもんか…と思いたくなる数字だが、全国の博物館はざっと5,000、水族館は100。1館当たり年間64人と1,000人と数えてみれば、決して出鱈目な数字ではない。それなのに、どうして、何の声も聞こえてこないのだろうか。

よくいわれるように、聴力障害者は、外見からはわからない。博物館がどう利用されているかもわからない。だからこそ、利用者として声を出してほしい。わがままでもいいから、言ってほしい。それがまた、博物館の進歩につながる。

東京の水族館の例から見て、利用のための要望が全然ないとは思えない。博物館はむつかしいと、尻込みする向きもあるのかもしれない。でも、少なくとも、公立の博物館は、公共サービスのための機関だ。行政は、内部からの声には抵抗するが、外部からの声には応ずる。1通の投書が魚類学会のシンポジウムを開くところまで引っ張ったように、博物館も、利用者の声を無視してはやってゆけない時代になっている。

世の中の進歩はめざましい。これから先、障害者への理解や情報保証は、今よりもっと行き届くようになるだろう。でも、そのときどきの社会の中で、聴覚障害者が、情報社会の進歩を懸命に追い掛ける情報弱者であることに変わりあるまい。

今は生涯学習時代というわけで、博物館も見直さなければと、心ある博物館人は一生懸命である。耳が聞こえなくても眼で見てわかる博物館に、もう少し関心をもとう。博物館を敬遠しないで、「もっとやさしく」「たのしく」「面白く」と、遠慮なく声を出そう。

かくて、『博物館学講座』の方は、何とかまとまったが、そのあと、同じ表題の単行本を出そうという話は、芯にしたかった聴覚障害者関係の話につかみどころがなくて、最初の意気込みが萎え、それっきりになった。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授

No.13

## 本を読むこと

### ◆聾教育の脱構築

### ◆耳科学—難聴に挑む

江時 久

昨年8月に、金澤貴之編著「聾教育の脱構築」(明石書店刊/3,200円)が、発刊された。

インターネットの聴覚障害問題の情報を検索しているうちに、偶然そのことを知り、翌日、書店に注文した。10月のことだった。売り切れだということで再販待ちになった。

出版社が発行した新刊本は、取次店を通して全国の書店の棚に3週間ほどおいてもらえる。内容はどうであれ、著者のネームバリューや広告宣伝の徹底がないかぎり、本はなかなか売れないものだから、普通は、すぐに版元の出版社に返品されてしまうのである。

この初版売り切れというのは、不思議でさえあった。

わたしは、ろう教育の専門家でもないし学者でもないが、この本の執筆者の中に、上野益雄先生や、木村晴美さんの名前もあったので、ぜひ、読みたかった。上野先生は、かつて「みみより」の創刊号からの目次を一冊の本にまとめて大空社から発行してくださった学者である。その貴重な一冊は、わたしから岡本編集長に渡してある。

11月に本屋から連絡があり増刷が入荷したということだった。すこし待たされたが、これは予想外のことで、うれしかった。

ろう教育の堅い本が売れているのである。

なぜ、売れているのだろうか？

一読して、画期的な出版だとわかった。おそらく、同じような思いのある人たちにとっては、待望の一冊となるものに違いない。

示唆に富んだ記述がたくさんある。

自動車の警笛が聞こえないとか、楽器の音が割れて聞こえるとか、聞こえない現象は人によってさまざまだけれども、要は聴覚障害の基本的な問題は、「人の言葉」が聞こえないことに尽きるということだ。

そこで、耳を補う方法として、筆談、空書、手話、口話、補聴器など、いろいろな方法があるけれども、生まれたときから聞こえなかったり、あるいは、3歳ごろまでのうちに聞こえなくなってしまった人たちにとっては、まず言葉の獲得が問題となる。

その作業は、言葉を自然に覚えることができた難聴者や、後天ろう者の困難とは全然別次元の苛酷な作業なのだ。

それが、ろう教育である。

20世紀の後半から、日本のろう教育は義務教育になり、ろうの子供たちがろう学校へ集まるようになった。日本のろう学校は、口話法で発声と読話を子供たちに教えようとしたが、集まったろうの子供たちは、手話を使って仲間同士のコミュニケーションをした。手話を知らないろう学校の教師たちは、生徒の手話使用を禁止し、手話を使った子供たちを罰したが、それはハンセン病患者に対する国の隔離政策のまがいと同じで、ろうの子供たちの成長を阻む大変なミスだったのかもしれない。

「聾教育の脱構築」は、手話を排除してきた従来のろう教育の在り方に疑問を持つろう教育者や、父兄や、ろう者自身が集まって書いた本である。ろう学校の先生や父兄たちが手話を覚えないうかぎり、前進はないのではないか。この本には、出るべくして出た意見が、たくさんつまっている。

この本が売れたということは、口話法を基本とするろう教育に疑問を持つ教育者や父兄やろう者自身が大勢いることの証明でもあろう。ろう教育への疑問は、手話普及とコミュニケーション成果の裏返しでもある。

全難聴の高岡正さんや、「いくおーる」の岩渕紀雄さんの話の中に、「日本の難聴者は6,000,000人いる」という断言がときどき登場するが、それが事実なら、「ろう」や「難聴」に関する書物は、もっと売れてもいいはずなのである。

昨年7月に、中公新書「耳科学—難聴に挑む」（鈴木淳一・小林武夫著／760円）が発行された。長年、耳鼻咽喉科の医療に携わってきた2人の医師の労作である。小林さんは、この本の中にわたしの「ベートーヴェンの耳」の紹介も入れてくれた。みんなに読んでもらいたいと思ったので、みみより会のみなさんにも配ったが、難聴の原因、診断、治療、予防を優しく書いたものである。

読書は、聴覚障害者にとっては欠かせない情報収集の手段である。耳が聞こえない人や、耳が

遠い人は、人一倍活字媒体には敏感にならなければ、この厳しい時代に健聴者に伍して生きていくための情報からとり残されてしまう。聴覚障害者が本を読まなくなったら、それは、自らを救う道を閉ざしたのも同じであろう。

しかし、世の中の若い人が活字離れをいわれているように、耳に障害を持った者も、最近熱心に読書する人はすくない。

わたしは、本を読んで馬齢を重ねた。本があるから不満はない。でも、すこし、説教調になったのは、やっぱり、じいさんになったということなのであろうか。昨年、70歳になった。

えとき ひさし 本名・丸山一保(千葉県習志野市袖ヶ浦)  
みみより会参与・作家

No.14

## 怒りと優しさのために 1 35年間の合唱

丸山一保

いまから35年前に、ぼくたちの「みみより会」が発足しました。

ひとくちに、35年間といっても、それはそのときに生まれた子供が、いいオジサン、オバサンになってしまうような長い年月ですから、若い人には、とてもその長さが実感できないことでしょう。

ぼくにも、その長さが、よくわかりません。わかっているのは、35年前、48kgの痩せっぽちだったぼくが、いまは70kgの58歳となっていることだけです。

### ● 魅力的な会長の才筆

35年前、やっぱり痩せっぽちだった鈴木克美会長は、どっちかといえば、いまもスッキリしています。

数年前、東京都中途失聴・難聴者協会が誕生するというときのことでした。みみより会運営の中核だった田中さんや長谷川さんという人たちが、それぞれの信念に基づいて、そちらの会へいくというので、さすがのみみより会の中が多少動揺しているように思えました。

前会長の岡田さんが高齢を理由に勇退の意志を表明されていたから、みみより会は、新しいシンボルを決める必要がありました。

会長就任を要請された鈴木さんは、状況としては、火中の栗を拾うような具合でしたが、敢然として会長の役を引き受ける決心をしてくれたのです。

それ以来、鈴木会長の人間としての存在が、高橋広司理事長を助け、みみより会をまとめるための大きな力となってくれたことは、いうまでもありません。

そして、鈴木会長の「富士の見える海辺の町から」は、「みみより」の新しい魅力を創造する原動力となったのです。

## ● 衝撃的だった初任給の話

さて、鈴木克美会長が、その「富士の見える海辺の町から」を、一時、お休みされることになりました。

引き続いて、ぼくに書けということです。

ご承知のように鈴木会長は、不自由な耳を克服して東京大学で農学博士の学位をとられ東海大学教授となられた、みみより会が誇る素晴らしい指導者です。

相当に聞こえない難聴の鈴木さんが、どうやって下積みの時代を克服し、現在の地位を得られたのか、その不屈の意志力と工夫について、鈴木さんは、この「富士の見える海辺の町から」で、ぼくらに語ってくれました。

昨年の「みみより」11月号には、鈴木さんが初めて就職したときの衝撃的な告白が書かれています。大学を卒業したばかりの鈴木青年は、最初の就職先で、

「耳がわるいだから、人より安い給料でやってもらう」

といわれ、通常の大学卒業生にくらべて1割程度安い給料しか支給してもらえなかったということです。

ぼくと、鈴木さんは、35年来の交友なのですが、この話は初耳でした。

おそらく、最初に採用してくれた会社への配慮などもあって、鈴木さんは、この話を簡単には外へ話さなかったのだらうと思います。ぼくらが卒業するころは、日本全体が貧しく五体満足な青年たちでさえ、仕事がなく困っていた時代でした。鈴木さんは、どんなに悔しかったろうかと思います。

しかし、それを発奮のバネにして、今日の社会的な地位を築いた鈴木さんの人生は、だからこそ魅力的なのです。

## ● 35年間の合唱

そんな鈴木会長に代わって、ぼくが、その穴を埋めるというのは、なかなか大役ですが、いろいろ考えた末、お引き受けることにいたしました。

35年、すごく長い年月ですが、体型は醜く(?)変化しても、気持ちとしては、そんなに変わっていません。

昭和33年の「みみより」10月号の巻頭に、ぼくは、こんな言葉を書いています。

何が美しいとって、人間の合唱ほど美しいものはないという人がある。みみより会が始まったころ、多くの耳の聞こえない人々にも、一緒にこの運動を続けてほしいと願ったことがあった。ある一人の健聴学生は、「残念ながら、僕は音楽が好きなので、耳の不自由な人たちと一緒にできません」と断ってきた。

だが、考えてみれば、みみより会の運動は一つの合唱のようなものではないか。不協和音も、一斉に合唱となってほとぼしるとき、ある一つの崇高な調和の美しさに到達するように、聞こえる人、聞こえない人、生まれつきの人、途中からの人、一見ばらばらに思えるみみより会が、深い人間愛をこめて唱う歌が、この雑誌にはこもっているのだ。

年若い人も、年老いた人も、勝ち気な人も、内気な人も、一人ひとりをとってみれば、とても仲間にはなれそうもない人々でも、みんなそれぞれの立場立場で声をあげるとき、あげた声がこの「みみより」を、世界の心を揺さぶるような一大合唱に育ててくれるにちがいない。僕らは、それを信じてこの声を育てていこう。お互いの生を愛する不屈な情熱をこめて。

## ● 耳硬化症について

ぼくの難聴ですが、これは、耳硬化症です。最近になってようやく判ってきた病気で、中耳の骨の故障が原因です。

特色としては、近くからの会話は、聞こえます。電話もかけられるし、補聴器が有効です。ところが、ちょっと離れたところからの音はまったく聞こえないといっているくらい感度が鈍いのです。

たとえば、ヴァイオリンの弦を調律することは、ちゃんとできるのです。しかし、屋根を叩く雨の音は、それが嵐であっても、ぼくの耳には全然聞こえません。

## ● ベートーヴェンも耳硬化症

1987年の4月、ウィーンの学者2人が、ベートーヴェンの耳は耳硬化症だったと診断しました。ベートーヴェンの耳も、ぼくの耳と同じような骨の病気だったのです。

その外電を新聞で見ながら、あたかも完全な失聴者のように見られていたベートーヴェンですが、実際には、死ぬときまで自分で弾くピアノの音は聞こえていたのだと、思いました。あれだけの作曲をした人ですから、ピアノの音ぐらい聞こえたと考えた方が自然です。

そうすると、世界中のベートーヴェンの伝記は、書き直す必要がある箇所が多いのではないかと、すぐに感じました。

ぼくの子供のころは、どこの病院へいっても、ぼくの難聴の原因を説明できる医者がいませんでした。前橋市の医大で、ぼくの耳は内耳性難聴であると診断されましたが、それは、18世紀のベートーヴェンが受けた診断と比較しても、少しも進歩のない診断でした。

いまになってみると、耳が遠いといっても、いろいろな人がいることがわかります。

何年か前まで、ベートーヴェンのように単純に「ろう」と説明されていた人の中にも、多くの難聴者が含まれており、そのうちのある人は、実際には、耳硬化症ではなかったのかと思えることも、たくさん例があるのです。

## ● 失聴俳人鬼城のこと

昭和33年の「みみより」12月号に、川本宇之介先生という都立大塚ろう学校の校長を経験された方で、当時のろう教育の長老として有名だった人が、「失聴俳人鬼城とその俳句界の地位」という15～16枚の原稿を書いてくださっています。

川本先生のごことは、別に書きますが、これによると、鬼城は、19歳のときに耳の病気となり、30歳のころには、右耳がほとんど聞こえなくなり、左耳も、かすかに聴力が残っている程度となってしまったそうです。

その具合は、ある年の花見のときに、料亭で句会を催したが、隣室で酒客が大騒ぎをしていたのに、その騒ぎが少しも聞こえなかったほどであると書かれていますが、隣の部屋の騒ぎが聞こえないのは、ぼくのような耳硬化症なら、あり得ることです。

鬼城は、59歳のときまで代筆業をやっていました。いまの司法書士のような仕事です。俳句の創作は、70歳になっても続いたということです。

ということは、なんとか人と会話し、言葉をしゃべることはできたわけで、もしかすると現代の補聴器があれば、鬼城は、十分にその恩恵を受けることができた耳だったかもしれないと思われます。

同じ昭和33年の「みみより」9月号に「永遠の言葉に生く」という題で、飯田博子さんという人が、その前年に亡くなった西川はま子先生の追悼文を書いておられます。

この西川さんについても、「ろう」とは思えない事実が感じられるのです。

## ● 電話を使っていた西川さん

原稿によると、西川はま子さんは、ろうとして生まれ、父親の西川吉之助さん(後に滋賀県立ろう学校校長となる)から口話法を教わり、その後、ろう教育に口話教育を普及振興させるために、大変功績のあった人という紹介になっています。

彼女は、普通の小学校、女学校を経て、家政科の先生になった後、大阪ろう学校の先生もやっていたようです。

「第1回ろう口話賞」を受賞した、この西川さんについて、その年の「みみより」10月号に、同じ学校にいた杉田春男さんが、

「はま子さんは、電話をかけるろう者でした。しょっちゅう電話を使っておられました」と、報告されております。

西川さんは、ろうに生まれたということになっていますが、電話をかけていたということは、かなり聴力が残っており、それも伝音系の難聴だったのではないか、少なくとも、「ろう」ではなかったと考えられます。

発声も立派だったと飯田さんは書かれています、伝音系の難聴なら、立派な話し方ができたのは、当たり前なことだと思えます。

聞こえるけれども、聞こえない、そういう難聴という世界があることは難聴者が世の中に向かって説明しないかぎり、なかなか人々の理解を得ることが難しいといわなければなりません。

ただ、難聴者も、やっぱり「聞こえない」と、訴えざるを得ないために、世の中の方で、聞こえないといえ「ろう」であると誤解してしまう危険が多分にあるのです。

## ● 素晴らしい現代化科学の進歩

HNKが、人工内耳の特集放送を行い、ぼくらをあっといわせたのは、これも1987年の1月のことでした。

単純に内耳性難聴といわれた分野にも科学は冷徹な目でメスを入れるようになりました。障害が神経や脳の部位に関するものでなく、コルチ器官に関するものであることが判明できれば、感音難聴といわれている難聴の中にも、人工内耳によって聞こえるようになるものがあり、今やその手術が実用段階にまでなってきたことを、NHKの放送が教えてくれたのです。

コルチ器官の仕組みは、スタジオのセットを使って、わかり易く説明していくNHKの番組を見ながら、ぼくは、改めて、すごい時代に生まれていることを感じました。誰もが、科学の未来の進歩に対して、率直にこわいほどの期待を感じたのに違いありません。

人工内耳に関しては、虎の門病院の熊川先生が、昭和62年3月のみみより会例会で話してくださいましたし、その話の内容を編集部がまとめて、「みみより」335号に掲載してくれていますから、ごらんになった人も多いと思います。

とにかく、ひとくちに聴覚障害といっても、さまざまなものがあり、それが、ぼくの子供のころは、よくわからなかったのですが、時代の進歩によって、よくわかるようになってきたことは確かです。

そして、ぼくらの「みみより」は、そういう世の中の動きに遅れないように、いろいろな聴覚障害の事実を世に訴えて、実に、35年の歴史を数えているのです。

これは実に素晴らしいことであり、それは、みみより会員のみならず、日本の聴力障害者の勲章のような気がします。そうではありませんか、岡本編集長殿。

怒りと優しさのために 2

# たかが「みみより」されど「みみより」

丸山一保

「みみより」の1冊、1冊は薄いのですが、1年ぐらいの単位で振り返ってみると、そこには、社会に対する、いろいろな聴覚障害者の側からの怒りや叫びが記録されていて、非常に貴重な証言となっていることに気がつきます。

昨年「みみより」で、あっと思ったのは、先号で紹介した鈴木克美会長の告白です。

鈴木さんが大学を卒業して最初に勤めた職場で、

「君は耳がわるいのだから、給料は他の者より安いぞ」

と上司から言われた話で、これは衝撃的でした。(平成元年11月号)

同じ、鈴木さんが、中学校でローマ字の学習の時間に、「ローマ字でツンボと書いてみろ」と言われた話。(平成2年新年号)もひどい話です。

いつも生徒を殴るような乱暴な先生だけではなく、比較的優しいはずの先生であっても、言葉の上で、無意識に子供を傷つけるような無神経な先生は大勢いるものです。世の中の人々は聴覚障害者の存在に関しては、驚くほど知らないものなのですね。

昨年の「みみより」5月号に、三鷹市の小林敏男さんが、「軍靴に踏みつぶされて」という立派な一文を寄せておられますが、これも、よくぞ書いて下さったと思いながら、読ませていただきました。

小林さんは、1922年前後の生まれのようですが、耳の方は、幼いころから病院通いをしていたといえますから、中耳の病気だったのでしょうか。昭和14年、18歳のときに、ある日、起きてみると音がぼんやりして、頭がくらくらしたということです。以来、耳が不自由になりました。

翌年、数え年20歳の兵役検査で、小林さんは、大勢の若者たちと一緒に検査を受けに行くことになりましたが、耳が遠いというそれだけの理由で、下士官から兵役拒否ではないかと疑われ、往復ビンタで殴り倒されたということです。

一人でも兵隊が欲しい軍人の側からすれば、言葉のしゃべれる小林さんの耳が聞こえないというのは、ウソに違いないと思ったのでしょうか。小林さんが殴られただけでなく、お母さんやお兄さんも呼ばれ、医者も呼び出しを受けて調べられたのです。

その経験は、小林さんにすれば、どんなに悔しいことだったかと思います。

聴覚障害が、外から見ただけではわからないという点に、世の中の人々の無理解の原因があるのでしょうか。

「耳が遠くても恥ずかしむべきものではないと思っていたが、ある日写生に夢中になって、不用意に放り出していた補聴器を見つけられ『なあんだ、君は、つんぼかあ、ではだめだなあ』と大声で笑われた。

胸がずきんと痛んだが、大勢の人前でなにげなく笑い、その場はなごやかに通したけど、以来、

『では、だめだなあ』という言葉が頭を離れない。いったい、何が『だめ』なのだろうか」(惟村允恵) 昭和 33 年 9 月号

「仲間たちは、私をののしるときには、いつも『ツンボー』と、どなった。それは、『耳の遠い男』という意味ではなくて、『ツンボであるが故に一人前に劣る男』という意味であった。耳が遠いことから、何かをまちがえるのは当然である。耳が遠いためにまちがえるのは当たり前のことであって、一人前に劣るとはいえない。にもかかわらず、一人前に劣ると思う彼等の頭は、一人前に劣るのである。」(内藤辰男) 昭和 33 年 11 月号

古い「みみより」を手にするると、このような怒りや叫びを、たちまち発見することができます。「みみより通信」第 7 号(昭和 31 年)に女性座談会というのが載っていて、伊藤由吏代(現・矢島秀子)さん、上原百合子さん、清水京子さん、中山れい子(現・飯田れい子)さん、山田康子さん、西潟雅子(現・高寺雅子)さん、中屋恭子(現・大原恭子)さんなどの懐かしい名前が並んでいます。

戦後の女性が、学問や職業の分野で男性に並んで進出しようとする、はしりの時代でした。耳が不自由であれば生きることさえ大変な時代でしたから、それだけに若い女性のみなさんの日常は苦しかったと思います。

それを読むと、普通の人と話をしたとき、どうせ聞こえないのだからと、除け者にされる場合について、そのことが寂しく悔しいという思いがいろいろ話に出ています。

「洋裁の学校へいっているのですが、講義が聞こえないので、もう一度いって下さいというと、笑っていて、いってくれないことがある」

「友達と話をしているとき、『何の話』と質問すると、『なんでもないのよ』といわれてしまう」

「家の中にいるときも、兄弟と母が話していることが聞こえないので、聞こうとすると『あなたには関係のない話よ』といわれる」

そんな悔しさが、こもごも語られていました。家族さえも理解できない難聴者の寂しさについては、深刻な問題です。

出席者の中で上原さんと中屋さんは、健聴の人でしたが、最初から「みみより」は耳の聞こえる人たちにも知ってもらおうという姿勢で編集されてきましたから、そういう身近な話題は、難聴者の苦しみを理解してもらおうために貴重な告白だったのに違いありません。

タイトルに、「怒りと優しさについて」と書いたのは、それが 35 年の「みみより」の総合評価のような気もするからです。

みみより会の運動は、会員のみなさんの怒りの叫びから出発したようなものですが、しかし、その悔しさだけでなく、その悔しさをバネにして、お互いに励まし、助け合うというヒューマニズムを産んできたところに「みみより」の素晴らしさがあるのだと思います。

社会的不利益の一方で、耳に病気がなかったら、絶対に味わうことのできなかつた人間の優しさ、思い遣りを、ぼくらは、この会のおかげで与えられてきたと思います。

その優しさの経験も、35 年間の「みみより」の中に、いっぱい詰まっています。

あなたも、手近にある「みみより」を、どうぞ、もう一度読み直してみてくださいませんか。

## 怒りと優しさのために 3 オジサンたちのお茶会

丸山一保

届いたばかりの「みみより」2・3月合併号をみると、24ページに、茶道部の男子部員(といってもみんなオジサンですが)の真剣な表情の写真が並んでいます。全員、和服に袴を着ていて、とても立派です。正月例会の茶会で、日ごろの訓練の成果を披露してくれたときの写真でした。

### ● 外見ではわからない耳の問題

参加した岡本編集長が書いておられたように、柄杓を持つ手が緊張して震えたり、立つときに袴を踏んでしまったり、ユーモラスな失敗もありましたが、緋毛氈の上で、世塵の汚れをすすぐ伝統の所作を見ていると、本当に平和な日本を感じたものでした。とりわけ、みんな障害による屈辱の経験を持ち、そのことを、すべて許し合っている間柄だからこそ、こんなパフォーマンスの中にも、なごやかさが感じられました。

ところが、男たちの姿勢を正して座っている渋い姿は、なかなかいいものです。あの袴は、どうやって工面したのでしょうか。余計な心配までしてしまいましたが、しみじみ、これだから、聴覚に障害があることは、外からはわからないことなのだと思います。

みみより会が始まったころ、「みみより」に寄稿された人の中に、当時60歳を越えられた柴田さんという初老の会員がいて、耳が聞こえないことを示す「杖」を持つべきだ。という意見を述べられたことがありました。

これは、世間の方から見れば、その方がわかりやすいことには違いありませんが、なにしろ、そのころ20歳前後だったぼくからすれば、それは、ジイさんの寝言といった感じで問題にしなかった記憶があります。

### ● それは怒りから始まった

大学へ入ったぼくは、通常2年間で終了する教養学部で4年間在籍しましたが、アルバイトをして生活費のすべてを稼がなければならなかったという、当時の家庭の事情もさることながら、いってみれば、大学の講義が聞こえないというショックから、なかなか立ち直ることができなかったからでした。

結局、ぼくを励ましてくれたものは、世の中には、ぼくなどより、もっと不利な障害者が大勢いるという事実でした。

大学2年生のときに、ぼくは、当時NHKで報道された下鴨神社のすぐ近くの加藤という医院で、頸動脈にビタミンなどの注射をする療法を受けたことがあります。

加藤医師は、中耳の骨の病気であるぼくを診察して、2ヵ月で治ると断言してくれました。注射前と注射後に2回の聴力検査を行い、明らかにぼくの聴力が注射によって回復していることを、オーディオグラムを描いてぼくに示してくれたのです。ぼくは、魔法にかかったようにびっくりして、すっかり加藤医師を信じてしまったのですが、耳硬化症のぼくの耳が、栄養剤の注射を

ただで瞬時的に聞こえがよくなることなど、絶対にあるはずがなく、加藤医師のやり方は、いまならば詐欺を立証することもできたでしょう。

しかし、徒労だったその病院の生活の間に、その病院に入院していた何人かの幼い耳の聞こえない子供たちを知ったことが、ぼくの気持ちを転換させるきっかけとなりました。

加藤医院には、生まれつき聴覚に問題のある言葉を知らない子供たちが入院していて、いずれも無駄な注射を毎日受けていましたが、その子供たちと生活を共にすることで、ぼくは、自分の生まれへの怒りから、同じような運命、それも、もっとひどい難聴を背負った子供たちへの労りを知るようになったと思います。

それまでは、言葉を知らずに生まれ育った重症の聴覚障害の子供の存在を、全然知らなかったぼくは、もっと耳の聞こえない者の存在をお互いに知らせ合ったり、励まし合ったりする、そういうことをしなければ駄目だと思ったのです。

## ● みみよりは聴覚障害者の杖

おかげさまで、現代には聴覚障害を示す「杖」は、いろいろあります。

補聴器がそうですし、手帳の普及もそうだと思います。補聴器を使っている人を見れば、耳が少し不便なのだとわかります。手話を使っている人を見れば、耳が聞こえないのかと推察することができます。

「みみより」の雑誌も、その「杖」の一つのようなものとして認められる日も近いのではないのでしょうか。

みみより会は、昭和30年の1月に発会式を朝日新聞の会議室を借りて行いました。

やがて、60ページあまりの「みみより」創刊号を、同年の6月に発行することができました。ぼく自身が、鈴木克美会長たちと一緒に「みみより」の編集を夢中になってやったのは、昭和35年まででしたが、聴覚障害に関するいろいろな事実を、一つひとつ自らも勉強しながら、同時に世間の人たちにも知ってもらいたいと思って、編集の仕事に没頭したものです。とにかく、世の中に聴覚障害という問題があることを、叫ばなければならない、その場所が、「みみより」だと信じたのでした。

みみより会は、次々に新しいリーダーが現れて、その生命を絶やすことなく今日にいたりました。団順一さん、高寺志郎さん、高橋広司さん、鈴木克美さん。

そして、編集の岡本昇蔵さん、事務局の矢島夫妻。いろいろな人たちが、仕事を分担して「みみより」の生命を支えていてくれます。

結局、「みみより」自身が、結果的に、むかし柴田さんが提案していた「杖」の役目を担ってきたのだと、ぼくは思うのです。

ささやかでも、耳に関する情報を人に伝えようとする、他への労りと思いやり、その優しさが「みみより」を、われわれの「杖」とさせているのです。お茶会のなごやかな写真を見ながら、みみよりオジサンたちの皺に、いよいよ光栄あれと祈ったものでした。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1990年「みみより」誌 No. 367 掲載

# 手話の周辺 1

## かとう こうじ

- 1 ろうの女性はチャーミングである。動的でいきいきとした表情が、彼女たちの魅力のランクをぐっとひき上げている。おしゃれや化粧なんかに憂き身をやつすことよりも、表情をみがくことの効果がよくわかる。
- 2 手話は乏しい語彙でもって音声語なみの内容をまかなわなければならない。そのために豊かな表情の助けが必要である。ろう者の表情は健聴者のそれのような単なる会話のデコレーションではない。
- 3 ろう者の表情には模様がある。その模様の変化がすなわち手話の文法にもなる。
- 4 手話はその限られた言葉で聞き手の想像力を誘発し、軽やかな手の動きが想像に動きを与え、豊かな表情が想像に豊かな肉づけをしてくれる。
- 5 障害者が同情を喜ばないのは、「自分が貴方みたいでなくてよかった」という同情者の心の中に潜むネガチブな部分を、敏感に感じとれることがあるからである。
- 6 うわべだけの同情で語られる言葉。耳に優しく柔らかいが、心の傷のかさぶたをかきむしる。同情は、往往にして優しさの仮面をかぶった侮辱になることだってある。
- 7 浅い同情はすぐに涙を流して見せる。だが、他人の苦悩はたまたま眼前に展開されたエピソードの一片にすぎない。同情しても根のない切花だから直ぐに枯れる。
- 8 人は、最初に出会った人の印象で、そのタイプのイメージを決めてしまう。もし人が最初に接触したろう者が中途失聴者であった場合、その人の「ろう者」という観念には中途失聴者の姿が固定されてしまう。その目で本物のろう者を見ると、ろう者の中でも知的なレベルの低い人たちだと感じてしまうことがある。
- 9 口にこそ出さないけれど、ろう者は健聴者や中途失聴者よりも、ずっと人生の哲学を知っている。
- 10 ろう者が「人間から聴覚を引いた後に何が残るか」を考える時と、健聴者が同じ問いを受けた時とでは、脳裏に浮かんでくるものの質、量、深みが全く違う。その時、ろう者は哲学者になる。
- 11 古池やかわずとびこむ水の音。「音を知らないろう者にこうした音の心象の世界が理解できると思いますか」この質問にウンと視線を宙にはわせてしまうのが健聴者。「よく説明すれば理解できるのでは…」と自信なげに答えるのが中途失聴者。「理解できる」が正解である。理解にいたる思考のプロセスが一般人とは異なるけれど、ろう者の持つ感性の鋭さには想像以上のものがある。
- 12 「ろう者は考える時でも手話で考えているのかしら」思わず「イエス」と答えそうになるが、ちゃんと日本語をベースにしたイメージ、即ち日本語で考えている。手話はそのイメージを表現するのに、いちばん手がとどきやすいところにあるだけ。
- 13 ろう者の場合、語彙が貧しいように思われるのは、言葉の在庫そのものより、むしろ実地に使えなくてあたら死蔵させている言葉も多いということである。漢字の読み方に自信がないことも、その一因になっているのではないかと思われる。
- 14 目と耳から漢字の字形と読みを同時進行的に覚えていける健聴者とは違って、ろう者は漢字の字形は字形だけを単独に覚えていき、ヨミはさらに別の努力をして覚えるという二重手間を払わなければならない。その努力をしないと、正確に漢字が書けて、意味も理解していながら読みを知らない。あるいは間違った読みを覚えてしまうということになる。

- 15 ルビつきの本を沢山読ませて、自然に読み方を憶えさせることも、ろう者には大切なことである。戦前は成人向けの本にもルビがふってあったのが沢山あったように思う。案外、最近の青少年の読み書き能力の低下は、ルビつきの本が姿を消したことと関係があるのかも知れない。
- 16 人は環境の変化に順応できるが、いかに順応したところで心の深層にあるものまでが変わることはない。中途失聴者にとっての今の自分は永遠に「正常マイナス聴力」であるが、ろう者からみれば中途失聴者は「健聴体験のあるろう」であり、限りなく健聴者に近い存在でしかない。ろうでも自分たちとは異質の障害者だと峻別しがちである。
- 17 聴力について「明瞭な喪失感」を持つのが中途失聴者。元来「あいまいな欠乏感」であったのを、周囲から「明瞭な欠乏感」にと知恵をつけられていくのがろう者である。
- 18 手話も口話もその良否・限界というものは、使う人によって左右される。有能な使い手ならば、音声語会話と比べて何の遜色もないコミュニケーションが可能であるが、凡庸な使い手では、それなりの機能しか果たせないのが手話であり口話である。使う人の能力をぬきにして双方の優劣、難易を論ずることは無意味なことである。
- 19 ろう者にとって幸いであったのは、手話と口話の長所と短所が重複しなかったことである。それでお互いに補完しあえる手段として両者とも生き残れるのである。
- 20 ろう者と健聴・中途失聴者は生得言語と学習言語が正反対になっている。この当たり前なことに気がつかない人が、両者の溝を知らず知らずに深めている。
- 21 ろう者の語彙の貧しさが云々されているが、健聴者の世界こそ言葉が多すぎるのである。なんでもかんでも言葉を使ってまかなおうとするから、ときとして「ことば足らず」「説明不足」という現象を招くことになる。
- 22 10語ですむところを20語使うのが健聴者。10語を伝えるのに10語使うのが中途失聴者。10語の内容を5語でカバーするのがろう者。
- 23 話し手が伝えたいことを、そのまま過不足なく伝えられるのが手話であるが、それに比べて話し手が伝えたいと思っているよりも少なくしか伝わらないのが音声言語である。そのために言葉数を多くしたり、語彙を増やさざるを得ないのである。
- 24 ろう者の手話はろう者自身が純粋培養した言語である。日本語対应手話と比較しては、ろう手話を非論理的と見る人がいるが、むしろ論理の枠を超えた言語と見るべきである。
- 25 ろう手話で必要とされるのは、全身的なサインを総合して捉えるセンスの有無である。言語面でのろう者の後進性を指摘する人がいるが、逆にいえば「健聴者は一々口からの言葉で表現してやらないと理解できないほどニブイ」という見方だってできる。
- 26 手話の語彙が少ないというのは、イメージを伝達するバリエーションをそんなに沢山必要としなかったからである。新しい手話が作られているのは、カンのにぶい健聴者や中途失聴者がそれを必要としているからである。
- 27 手話はレトリックの宝庫である。「大学」を「角帽」で、「悲しい」を「涙を流す」しぐさで表現するのもレトリックである。手話の場合のレトリックは言葉を飾るという本来の役目よりは、言葉の貧しさの解消のため役立っている。
- 28 手話は大づかみなくらいの表現でちょうどいい。表現が微細にわたればわたるほど話のコクが無くなってきて手話の長所を損ねてしまう。
- 29 日本語対应手話は、元々その原型はろう手話から借用したものである。中途失聴者のニーズに合わせて形を変えられていく手話。良いとか悪いとかの問題ではない。悲しいだけである。美しい花園に巨大なブルドーザーが入ってきて周囲の様子を一変させたら誰だって悲しくなる。
- 30 手話は単なるコミュニケーションの媒体ではない。ろう者の幼時からの魂が仕舞われられている大切な容器でもある。もう今となっては仕方がないが、無闇に手を加えないのが、ろう者に

対する礼儀であった。ろう者の中失、難聴者団体ばなれに文句をつける資格は誰にもない。

31 その一方でろう者にとって手話が変わったということは、これまで縁遠く思っていた日本語の表現力が手のとどくものになってきたということにもなる。しかし、古い手話は大切にしたい。一つの伝統文化を失わしめないためにも。

32 手話の技というものは、ある言葉を即座に適切なモーションに翻訳する能力のように一般の人は考える。しかし、それぞれの手話にしみこんでいる〔ろう者の体臭〕を鋭く嗅ぎとったり表したりする感性も欠かせない。健聴者や中途失聴者の手話がいかに流暢なようであっても、ろう者からみて板につかない感じがするのはそれが全く欠けているからである。

33 折り鶴はくしゃくしゃに丸めてしまっても、その原型が正方形であることはわかる。手話も同じで、たとえ形が崩れていても元の手話が何であったかは判るし、意味も通じる。音声語はちょっと発音が不明瞭だと言っていることが判らなくなる。音声語に比べて手話は理解への許容度がきわめて広い。

34 慣れたパターンでの会話なら、類推という分析的な努力を払わなくても、意味の方から仲間を連れてきてくれる。一を聞けばイモズル式に十も百もわかる。しかし、いつも言語ではなくムードのやりとりみたいな会話に始終していると、いざ言葉らしい言葉に接したときに思考が働かなくなる。

35 手話に不慣れな人が読みとりに手こずるのは、もともと空間把握で理解しなければならないところまで、音声語のように語順を追って読み取ろうとするからである。

36 手話を憶えるということは法律の条文を憶えるのとは違う。記憶力よりもろう者への愛情が優先する。ただの好奇心で使われる手話には卑しさがただよう。

37 たたみかけるような忙しい手話には言葉以外の連想を働かせる余白がない。抑揚の激しい手話はそれに目を奪われてしまって後で話の内容が思い出せない。

38 美しい手話とは、手振りの美しさではない。文章の句読点のように動きが一瞬止まったとき、話の全体が見えてくると同時に余情が立ちのぼってくるような手話である。

39 一語ごとに区切るような手の動きは、ときとしてかなり見苦しい。折り目がキチンとしているのも度がすぎると押しつけがましく見え、マイナスになる。

40 顔は表情豊かなのに、手の動きが無表情というアンバランスも気になる。感情が手にも出てこそ本物の手話である。

41 教わった型通りに手を動かす手話は、ただの手信号。手よりも先に心を動かすべきである。

42 ろう者は言葉の高密度利用に価値を置く発想は持っていない。手話では言葉のディテールをすべて言い尽くす必要はない。相手の感性を信頼することも大切。言葉をやたらに補足することは、時として失礼になることもある。

43 子どもの話すことに大人が感動することがある。喋りの巧拙よりも共感がコミュニケーションの価値を決める。

44 共通体験の多いろう者どうしは共感しやすい。言わなくても差し支えない部分が多いので、そこから文法に風化が起きる。論理性のなさが親密度のバロメーターになる。

45 感じる型の人とは似たもの同士で意気投合しやすい。お互いの考えがコピーしたみたいに似通ってしまい、これで仲良くなった状態を真の相互理解と言えるのであろうか。

46 ツーカーのムードを愉しむだけが会話ではない。ツーカーの快さから生まれた友情は雰囲気だけの友情でしかない。

47 言語による思考の習慣が確立されてないと人はどうなるのであろうか。言葉の代りにイメージを転がすだけになる。(考える葦)が(感じるオジギ草)になってしまっただけでは人間として生まれてきた甲斐がない。

- 48 クルマが少なかった時代には高速道路もパーキングビルも必要なかった。健聴社会へのアタックを意識しなかった時代には、ろう者も「文法弱者」となって言葉の迷路の中をさまよい歩くことはしなくてもよかった。
- 49 ろう者は相手の手話以外の何気ない表情までしっかりと注目している。どんな小さな仕草でも、ろう者はある感情を伴うサインと受け取り、その一つ一つきわめて主観的な解釈を加えている。
- 50 他人がやるから自分もやるという手話ブームのさなかではあるが、私個人として一番気持が安らぐのは筆談である。

加藤 光二(東京都町田市玉川学園)・理事  
1996年「みみより」誌 No. 425 掲載

No.18

## 手話の周辺 2

かとう こうじ

- 51 筆談を見直したい。会話の流れを中断して高揚したムードをこわす、リアルタイムな会話が楽しめないという一部の言い分は、時間を会話にフル活用しなければ損だという強迫観念という現代病か、それとも単に面倒臭いだけなのか。
- 52 筆談は間歇性の強いコミュニケーションである。それをじれったいと嫌う人がいるが、一方で手話の絶え間なさに嫌気を感じる人もいる。
- 53 私のように頭の回転が早くない者には、筆談のゆっくりしたテンポが思考のスピードと丁度合っているので楽である。
- 54 頭の回転が早く、その遠心力によって吐き出される言葉と、石臼のようにゆっくりとした回転からこぼれ出る言葉。どちらが後々まで心に残るのであろうか。
- 55 ろう者の幼時からの痛ましい努力の集大成が口話法である。それを毛嫌いするろう者が少ないのは何故だろうか。あまり役立ってないという思い込みか、反口話急進派の扇動に乗ってしまったのか、迎合的な有識者の発言に惑わされたのか、近年の口話バッシングをみると、いささか行き過ぎもあるようだ。
- 56 口話側にも反省すべき点が多々ある。発声訓練をはじめ、あれほどの訓練を施すのであれば、最終的には健聴社会の会話慣習や、様々な会話パターンに即応できる力を身につけさせるという保障がなくてはならない。さんざん苦しめたあげくに、卒業した後は各自の努力で…という態度では教育の責任を全うしたことにならない。
- 57 口話では類推による言葉の確認をする過程が間に挟まっているため、どうしても反応が半拍遅れる。スピーディを好む現代人の感覚にマッチしないのも敬遠の一因か。
- 58 口話コミュニケーションが成立するためには、沢山の関門をくぐらなければならない。相手の口形が読み取れるかどうか。相手との語彙のギャップを克服できるかどうか。そして身体障害への過剰な意識が類推の勘を狂わせていないかどうか。
- 59 障害は個性か否か。個性だと主張する人達の気持の底には、不具の暗さと辛さがつきまといがちな「障害」という単語に対して、「個性」という単語に清新なイメージを感じたということが

あるのかも知れない。こうした蘇生を求める気持を考えれば、むげに否定するのも心ない仕打ちである。

60 どちらだって良いように思えるが、障害も個性であるという見方ができない人には「障害を光らせる」という発想が生れてこない。それで一步遅れの感がする。

61 かのヘレンケラーのように「障害を光らせる」境地にまでは達しなくても「障害を誇る」障害者存在は決してめずらしくはない。障害を誇る心理は障害者なら誰でも心の隅に生じる可能性がある。

62 優秀なろう者とは健聴者との距離を克服した人を指して言うことが多いが、ろう者の優秀さは、ろう者らしさのなかから見つけ出してほしい。マスコミなどで障害者ばなれした業績を称賛するような風潮を、障害者は決して快くは思っていない。

63 ろう者はろう者として完成された人格であって、健聴者の規格外品ではない。

64 障害を持つことは、常人にはうかがい知ることのできない人間性の深淵を見るために第三の（目）を神から与えられたということである。

65 理解とは判断を同化させることではなく、違いを知った上で共感することである。

66 経験から生れた感情が共感、想像から生れるのは同情である。

67 盲人が雑踏の中をあるいている姿に周囲の人々は気遣いの視線を向ける。ろう者が街なかでコミュニケーションに苦闘する姿に人々は奇異の視線を向ける。目に見える器官的な欠陥がもたらす不便というものは理解されやすいが、これに付随して起こる苦悩は理解されにくい。

68 闇の時代を体験してきた中高年のろう者と、福祉で手厚く保護されている今の時代に育った若いろう者とは、同じろう者といっても心情的には別の障害者になっている。難聴者も補聴器の普及を境に、そのどちら側で成長したかによって人格面で大きな違いが生じている。

69 難聴者もつらい。感音系ともなると可聴域のひずみによって声は雑音に、雑音はより耳障りな音に変質して聴神経を襲う。これら不快音が遮断されないだけに、ろう者より辛いことが多い。健聴とろうの中間に位置するというような生易しい立場ではない。

70 障害者の苦悩とは、小説やドラマの中でのように鮮烈なかたちで単発的に襲ってくるものではない。歯痛のように常に痛みを伴うものでもない。ついて離れない影のように時々それを思い出し、鬱陶しさを感じさせるものである。

71 その闘いに途中引退はない。生涯の相手である。

72 障害者が望むものは、より以上のプラスを求める欲望ではない。マイナスを埋めていく願望である。人並みに生きたいだけである。欲望と願望は同列に処理すべきではない。

73 難聴者は己れの僅かな残聴を襲う音には極めて敏感である。暗やみで懐中電灯の光を突如向けられたのと同じショックを受ける。健聴者なら白昼に懐中電灯の光を向けられた程度のものであっても。

74 ろう者の世界は扇形である。扇形の世界とは、懐中電灯が照らした正面の世界である。ろう者にとって扇形の外側、すなわち光のとどかない闇の部分は不安をもたらす空間である。

75 不安の空間が広がるにつれて、人の判断力は自分の視野内から動こうとしなくなる。自分の感覚から遮蔽されたところに視点が置かれた発想はすべて忌避の対象でしかなく自説にあくまで固執するようになってくる。数年前の『ろう文化宣言』も、このケースに当てはまる。

76 「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」と宣言で定義している。これをストレートに解釈すれば、日本語対应手話に頼っているろう者（ろう学校出身者以外のろう者や中途失聴者）はろう者の範疇に入らないということになる。

77 「聞こえない」ことがろう者の第1前提である。第2、第3の条件が第1よりも優越されて定義されることはない。

- 78 宣言の矛盾をつくことは容易い。だが宣言を出した人達の気持も判ってやらなければならない。これまでろう者の声なき声、つぶやき声に対して、あまりにも鈍感にすぎた世間の方にこそ問題がある。
- 79 つぶやいてみても判ってもらえないなら、いっそ悲鳴でもあげて注意を引こうということになる。かの宣言も出るべくして出た悲鳴のようなものではなからうか。
- 80 苦痛をこらえる時にどんな叫び方をしようがそれはその人の勝手である。他人が悲鳴のあげ方を指南するわけにはいかない。宣言の内容をとやかく言うよりは、思いやりの気持を先行させるべきである。
- 81 ろう者はもっと自信を持つべきである。宣言による庇護を必要とするほど、ろう文化が脆弱なものとは思えない。
- 82 日本語対応手話を進歩した手話と見ることに抵抗を感じる気持もわかる。正しく言うなら、これは進歩ではなく変形である。勘のにぶい人向きに改造された手話だと思えばいいのである。
- 83 抑圧を受けてきたという。つぶさに話を聞いてみると、故意の差別や悪意による冷遇という正統派(?)の抑圧はむしろ少数派のように思える。①自分達の感情に気配りしてくれなかった。②親身に扱ってもらえなかった。③自尊心を逆なでされた。④被害妄想。⑤行き過ぎた自制心のプレッシャーなど、普通の意味で抑圧とは言えないものまで含まれている。
- 84 風は動かないものに吹きつける風だけではない。こちらが動いたことによって生じる向かい風もある。我々が感じる抑圧には、この向かい風のようにこちらの動き方が原因している場合が少なくない。
- 85 ろう者はいつも抑圧の海底に沈められているという考え方は間違っている。波打ち際で寄せては返す波に身を濡らされてはいるが、四六時中、海底で水圧に耐えているわけではない。
- 86 幸福というものは、不幸の波打ち際にいる人が一番よく見える。それになかなか近づけないことも、考えようによっては抑圧の一つになるのかも。
- 87 似非ヒューマニズムが横行している。「福祉」という漢字を「ほどこし」と読む。
- 88 障害者は平等であることを望んでいる。勤勉な人は「機会」の平等を望み、怠け者は「結果」の平等を望む。
- 89 人権思想が浸透し、福祉管理がきちんとなされればなされるほど、ストレスは形を変えて個人の内に沈殿してくる。
- 90 善意の欺瞞性に腹をたてた経験を持つろう者は多い。と同時に、たとえ的外れな善意であっても、その尊さ自体には変わらないと、素直に感謝できる者が少ないこともまた事実である。
- 91 「聞きとれなかったら何度でも聞きかえしたらよい」この言葉には全く親切味が感じられない。何度も言い直しを求めるのは、普通の神経の持主にはプレッシャーが強すぎ、類推のカンをすくませてしまって、ますます判りにくくなるだけである。
- 92 耳もとで大声を出す人がいる。大声を出す時に、人は顔面筋肉が緊張して怒ったような表情になる。聞く方は叱責か罵倒されているかのような感じを持つ。生涯この不快感にだけには絶対に慣れることはない。止めてほしい行為である。
- 93 何でも聞こえる耳がほしいのではない。必要なことを聞き落とさない耳が欲しいだけである。
- 94 日本人ならば面積を説明する場合、何平米というよりは「何畳間」と言われたほうがピンとくる。ろう者にとって手話は正にこの「何畳間」に相当するものである。正しい文法を押しつけるのもよしあしである。
- 95 手話の世界から見ると文法は思考の型枠であり「てにをは」は思考の釘である。あれば形を作るのには楽かも知れないが、自由な創作のさまたげにもなる。
- 96 手話において[素直な表現]と、[露骨]との境界線を見きわめることはむずかしい。しばしば

越境して相手を不快にさせる。

97 日常の举止言動において抑制を「粹」、大仰な表現を「野暮」とみる感覚は日本人に特有なものときく。だからといって、ろう者の表情が大ゲサだと嫌うのは偏見である。彼らにとって「大ゲサ」とは「音量」の大きさではなく「音階」の広さなのである。

98 聴くことが意のままに出来てこそ人間の精神は自由となる。だが、自由はともすれば無自覚となり、無自覚は浪費を招く。

99 「聞こえる」という素晴らしい富を持ちながら、その値打に気がつかないで、粗末に扱う健聴者が多すぎる。

100 手話ドラマが増えてきた。無邪気に感動してる分にはそれでも良いし、テレビが手話の普及に果たした功績は大きい。だが喜んでばかりはいられない面もある。

加藤 光二(東京都町田市玉川学園)・理事

1996年～2002年に6回に分けて「みみより」誌に掲載されたものを、3回にまとめました。なお、初出掲載原稿が著者により加筆・修正されております。

## No.19

# 手話の周辺 3

かとう こうじ

101 必ず手話の場面が出る。そうしたバカの一つ覚えからそろそろ脱却をはかってほしい。手話が世間に広く認知されるのは良いけれど、同時にお手軽なろう者観が定着してしまうことが恐ろしい。

102 相も変わらず名画『名もなく貧しく美しく』の二番煎じが続いている。手話の美しさを強調し、周囲に励まされながら数々の苦境を乗り越えるという、ワンパターンな発想から逃れられないでいる。不勉強な脚本家が多い。

103 障害自身が持つドラマ性にオンブするのは陳腐な手法である。発想を逆にして、聞えることがいかに素晴らしいことかを視聴者に判らせるドラマもあってよいと思う。影の濃さで光の強さを分からせるようにである。

104 ありふれたことでも、障害のフィルターを透して見ると違って見える。この新鮮さもドラマで紹介すべきである。障害がもたらす不自由か不利といった面にのみスポットを当てて、なくもがなの偏見を植えつけるようなことは困る。

105 「相手の気持を読む」には分析の冷たさを感じる。「相手の気持を汲む」には同調の優しさを感じる。似て非なる両者であるが、知らぬうちに前者の姿勢をとっている自分に気づいてハッとすることが時々ある。

106 障害は個性である——この言葉に対して今だに異をとる人がある。不自由なことが個性であるならば、老人や赤ちゃんの状態も個性ということになって変である。特性と個性とを混同しているのではないかという。

107 理屈ではその通りである。しかし世間一般の人が「障害」と「欠陥」を同一視しがちなのに

対し、その欠陥をあえて否定も隠蔽もしないで、逆に好ましい人柄を生んでいることを積極的に肯定してもらおうとする発想は、これまでに無かったものである。この言葉によって、人生を前向きに考えるようになり、気持ちが明るくなったという障害者が現実には何人もいることを考えていただきたい。

108 茶器、中でも名品といわれる茶碗の条件は見た目が端正で欠陥のない形よりも、茶碗にただよう気品と持味が重視されるという。同じように人も障害を持ち、痛みを知りつした者にしかない心の深さが、障害者の持味として認められる世の中になることを期待したいものである。

109 幼い頃、私はイジメを受けながらも逆に加害者を観察して面白がっていた。まだ弁別力がなかったのが幸いして、どんなイジメも雨や風の自然現象と同じように、あたり前なことだと思っていた。お陰で口惜しいとか悲しいとかいう感情はなかった。

110 理不尽に扱われていることが、自分にはわからない。不満や諦めよりも無感覚が先行してしまう。本当はこれが一番悲しいことなのかも知れない。

111 幼いときに障害を持った人は、その人の成長にしたがって障害が〔状態〕から〔意識〕へ、そして〔表現〕へと、その姿を変えていく。

112 私の場合はその変化がゆるやかに来たが、中途失聴者の場合はこの3つがほぼ同時に来る。その前段階として〔喪失〕のショックがあり、障害の〔受容〕という関所を経なければならない。それを味わうことがなかっただけ、私は幸せであったと思う。

113 中途失聴者は失聴から何十年経とうと健聴者時代の魂を引きずっている。つまり思考の底にもう一つの底があるようなもの。ろう者や私のように一つの底しかない者とは、様々な局面で歩幅の違いを感じさせられることがある。

114 息の長い手話人気が続いている。それ自体は喜ぶべきことであるが、ここにいたってちょっと心配な面も出てきた。車の両輪の様に機能すべき手話と口話だが、片方だけがブームになると、必ずその反動がもう一方に現われてくる。

115 こうした現象の発端はろう者からよりも、健聴者の、それも有識者と呼ばれる人達の中から出てくる。偏った取材にもとづく彼らの発言によって「口話法はよくない。これからは手話でなければならない」といったことが新しい常識となりつつある。

116 もちろん口話法教育にも責なしとは言わない。と言っても過去の教育における錯誤の問題と、ろう者にとっての口話の有用性の問題を混同してはならない。

117 万一このような偏見が常識としてまかり通るような事態になれば、今も真面目に口話法の研究に取り組んでいる人達や、口話法に頼っている人たちをつらい立場に追いやることになる。そればかりではない、手話に頼るろう者自身にも大きな損失を招くことにつながることに気付いてほしい。有識者の言に洗脳されてバブルで大きな損失を被った人達の二の舞にならないように、自分の視座をしっかりと持つことである。

118 ろう者が今日、様々なメディアから知識を吸収することができるのも、口話法教育による日本語言語力の下地があったからこそ可能になったわけである。好き嫌いの問題は別として、口話法の恩恵にまで目をつぶってはならない。

119 いままで口話法を学んだきたろう者にとって、社会に出ることは疎外感の現場にでることであった。今の口話法教育では在学中に抱く幻影と、卒業後に感じる幻滅との落差を縮めることには殆ど対処できないでいる。

120 健聴者のコミュニケーションには、ろう社会のそれとは異なる慣習があり、教室ではでは習得できないものが多い。〔類推しやすいタイミングでの応答〕を健聴者がいつもしてくれるとは限らないし〔学習したルール通りの口形や話し方〕などは、むしろしてもらえないことの方が多い。

121 とりつくしまもない言葉が周囲を飛び交っている。呆然としてますます手話の世界に

閉じこもってしまいたくなるのも当然である。

122 難問は難問。それだからこそ放逐よりも克服の道を考えるべきである。たとえ小さくても口話法という穴を開けたおかげで、壁の向こう側の日本語という景色をみることができたのである。

123 共感こそ教育の出発点であるという観点にたつて、そろそろ口話法でも、ろう教師の育成、採用を考えてみるべきではないだろうか。

125 授業中に難しい局面にさしかかっても、自分自身が生徒として通過の苦しみを体験している教師であれば、状況に応じてそれなりの対処がとりやすい。ろう者にはろう者にしか判らない感覚の働きがあり、その感覚に従ってカリキュラムでも省略できるものは自信を持ってどんどん省略して先へ進むことができる。健聴の教師はその見極めがつけられないために、マニュアルに従って逐一教えこもうとする。その鬱陶しさが、ろう者を手話に走らせてしまう。

126 発音口形がしっかり固まったなら、「発声」訓練はセミの脱け殻のように捨てる方が良い。いつまでも助走コースばかりを走らせるのは考えものである。

127 手話に発声を伴わせるのは、ろう者にとってかなりの心理的な負担になる。相手にもよることだが、私自身は手話の時には声をださない主義である。

128 今や時期おくれの観がある手話口話の論争であるが、水面下では今なお論争が続いている。その2～3を紹介してみよう。

129 「日本語の裏付けのない手話は、ろう文化の侍女でしかない。ひ弱な言葉の手持ちで大きな思考を支えることは難しい」との口話側の発言に対して、手話側は「60色入りのクレヨンの持主の方が、6色しか持たない人よりも上手な絵が描けるとは限らない。思考のレベルを左右するのは語彙の数ではなく機能のさせ方にある」と反駁する。

130 再び口話側から「手話だけによる思考の拡大は、馴れた次元の範囲内という但し書がつく。次元の違う世界への思考ともなれば手話の力は半減する」との切り返しがあり、さらに「手話は言語として音声語にくらべ遜色がないという主張は、対話における伝達効力のみ偏った結論である」「言葉の選択肢の少ない世界に馴らされると、思考力も単純な選択肢のものにしか対応できなくなる」と、追い打ちが続く。

131 議論百出である。しかし、こっちとあっちとは違うんだと区別する姿勢からは共感の場が生まれてこない。異なるものが複数あるからこそ良いのである。内で異質なものがせめぎあう中から多面的、相対的にももの考える習慣が身についてくる。どちらが良い悪いではなくて、ろう者には手話と口話の両方があることを喜ぶべきである。

132 人間は論争をする生物である。手話・口話論争に続いて、いま俎上にあがっているのは、ろう手話と国語対応手話の対立である。この決着は、既にアメリカのギャロデット大学で結論が出ていると思込んでいる人もいるが、その判断はちと早計である。

133 表音言語の英語とは異なり、表意言語の日本語は手話との相性がかなり良い。漢字の[へん]と[つくり]は、手話の右手左手の関係に相通じるものがあるし、一つの単語に複数の意味を兼用させる点などでも似通っている。世界で最も手話化には都合の良い条件を備えていると見て間違いはない。手話との親和性に乏しい英語圏での、両手話間の軋轢をそのまま我が国に当てはめて考えること自体がおかしいのである。

134 大脳生理学の見地から言っても、英語圏での二つの手話の争いは、左脳主導派と右脳主導派の対立であるが、日本の手話の場合はどちらも左脳プラス右脳の同形同士であり、そのパーセンテージがちょっと違うだけである。英語圏の両手話は異心円で、日本語の両手話は同心円と考えればいい。

135 あちらはスプーンとフォークの主導権争いで、こちらは箸。対立する理由がない。極端に言えば、2本の箸のうちの1本が輪島塗りの高級品で、もう1本が割り箸の片割れであっても、箸

の機能を果たせることには何ら変わりはない。

136 「2つの手話は水と油、混ぜても決して溶け合うことはない」とは、さる識者の言葉。人間の脳はそんなに融通のきかないものではない。日本語における漢字と平仮名の見事な融合ぶりを見ればわかる。今ではカタカナの外来語まで仲間入りしている。混ざることによって、より多彩な表現の世界が広がっている。

137 先の識者は、日本語対応手話は、まだるっこくて退屈だと発言している。だが、ろう者がこうした異種の手話に接することは、のちのち健聴者の対話慣習を身につける上での有効なステップとなるし、自分の口話力を側面から補強することにもつながる。最終的にはろう者自身のプラスになって還ってくるものである。チャンスだと思うか負担だと感じるかは、ろう者の向上心に待つかない。

138 自分たちと異質のシステムをバイキンみたいに見ないことである。それでないとろう者はろう団体という特別区の中でしか安住の地を見いだせなくなる。人間としてこうした特別区の外に出たがらない心境に追い込まれていることの方が、聞こえないことよりも不幸なことである。

139 盲人の眼球や視神経を経由せずに、レンズが写し取った像をパルスにかえて大脳皮質の視野に直接送りこんで像を結ばせる研究が、初歩的な成功を収めたことをニュースで知った。

140 聴覚の分野でも内耳や聴神経を経由しないで音を聞くことが可能になれば、人工内耳とは比較にならない大朗報になる。しかし先天性ろう者や幼時失聴者にとっては、全く未経験の感覚世界に入るのであるから、メンタル面での問題が生じてくる。

141 入力した音声を瞬時に文字化し、モニター面に表示するシステムの方は、音声識別の精度の課題さえ解決できれば、すぐにでも実用化できる段階にきているときく。

142 かつては夢物語であったものが現実のものになりつつある。手話と口話、ろう手話と国語対応手話の論争があったことなど、後の世では笑い話になってしまうに違いない。「ろう者はろう者で完成してていればいい」という意識から、そろそろ脱却することを考えなくてはならないのかもしれない。

143 このようになってみると、みみより会が50年近くもの間、一貫して聴力の条件差よりも異質な人間性の触れ合いを大切にし、健聴者にもろう者にも門戸を開いていたことが、これからは大きな意味を持ちはじめてくるに違いない。

144 若手評論家の言葉「個性という言葉に何となく〔長所〕というニュアンスが感じられる……障害はそのことによって〔聖化〕され、聖化されることによって、ある特権意識の城のなかに囲いこまれる。ときにはそれはエゴイズムのの隠れ蓑となり〔社会的弱者〕を演技することのうまみを彼らに教えるだけのものとなる…」

145 「障害は個性」主義に冷や水をかけるような発言である。正論ではあるが納得のいかないものが残った。何か大事なものが欠けている。それが気になった。

146 身軽でいる人が、重荷にあえぐ人々を見て「疲れたふりして休みたがる」と批判してみたところでなんになろう。それと同じである。さらに障害者が「個性」という表現で障害をプラスイメージに変えていくまでに辿った、心の軌跡なぞ眼中にない感じである。

147 障害者と苦楽を分け合った経験もないくせに、自らの才知にたのんで書きあげた。ただそれだけのものではない。

148 障害者が健聴者に伍して生きていくためには、ある種の〔ツッパリ〕も〔ずるさ〕も必要である。時には障害を〔紋所〕にして健聴者をひるませることも方便の一つである。かの評論家が批判するところの〔演技〕で自己防衛でもしなければ、とことん見くびられてしまうのが、障害者なのである。

149 健聴者と障害者は往往にして〔障害者としての当然の権利主張〕と〔甘えからの要求〕の境

界線がズレてくる。

150 人間として対等であることは、思いやりを一方通行にしないことである。一步近づくことを相手に要求するのであれば、自分からも一步近づいていく。一步ずつ近づくということは、お互いが居心地のよい自分の巣から一步離れる勇気を持つことである。

151 先に述べた口話法教育への提言について、手話派からは「なんで今更、口話法なんて」口話派からは「現実的ではない」との批判がよせられて来た。

152 先ず前者。一部の有識者による心ない口話法バッシングへの義憤が動機なので、当然口話法擁護の立場で述べざるを得なかった。そのために反手話的な印象を与えたかも知れないが、勿論私にはそんな偏向的な考えはない。ただ、口話法教育がおかした過誤への批判を、口話法そのものの価値の否定につなげるような軽はずみな言説には同調したくなっただけである。

153 本稿 118 番の発言をめぐって FAX による意見の応酬が 1 ヶ月半も続いた。いま反省してみると [口話法教育があったからこそ手話等で得たコミュニケーション力に日本語力の上乗せができた] というのを [言語力は口話教育に全て依存している] というふうに解釈されたのが原因であったように思う。先方の先入観と私の文章の拙さがもたらした食い違いの一幕である。

154 その反論は、先天性ろう者への言葉の壁という観点からなされてきた。たしかに音に無縁であれば言葉の獲得も容易でないことは常識である。しかし現実には多くの先天性ろう者がその常識を破っている。仮に手話による言葉の獲得というワンステップが先にあったとしても、一度は口話教育の関門をくぐらなければこうした現象は起きなかった筈である。

155 少なくとも口話教育は、所期の効果にこそ疑問が残るものの、先天性ろう者を後天性ろう者と遜色ないレベルに引きあげることには成功している。

156 「口話教育にもろう教師を」は、ろう教師にその地位を明け渡せという意味ではない。もちろん健聴教師のアイデンティティーをおびやかすつもりも全くない。

157 ろう経験のない健聴者がろう児の指導を行うことは、飛行機の操縦でいえば計器飛行だけで離着陸するようなものである。そこで有視界飛行の経験が豊富なろう教師の助力があれば、より安心なのではないか。というのが発想のきっかけである。

158 さらに、口話法不人気の原因を作ってきた教育システムの見直し。手話の下風に甘んじている現況打開のためのヒントが、口話法教育を受けた経験者(ろう者)の参入によって得られるのではないかという期待もある。

159 口話教育も変わってきたといわれるが、どのように変わってきたかが問題である。時勢に押されて多少は変えてみても、旧来の線を崩さないような変わり方では意味がない。

160 [健聴者に近づくことを価値基準にし、健聴者との会話を目的とする口話法] という従来の路線から [手話を助ける口話、手話に助けられる口話] への切り替えが絶対に必要である。それを可能にしてくれるのがろう教師の参加である。

161 古いカリキュラムに縛られた指導は、鎖ののびる範囲にしか思考が働かない人を育てるだけである。

162 障害者に対する偏見が薄れつつある今日、日本語力のない [ろう者] より日本語力のある [聾啞者]の方が、社会進出に有利であることは確かである。

163 「言葉が変わろうとしているのは、文化が面白い時期」といわれる。口話がスタイルを変えるのも、今以上に [ろう文化] が幅広く面白いものになるためには必要なのかもしれない。その改革の波はいずれ手話にも及んでくる。

164 情報不足に悩んだ昔のことを思えば、居ながらにして多くの情報が手に入る今は恵まれている。と思われているが果たしてそうであろうか。大量の情報が流れこんでくることは、量にまぎれて本当に大切な情報を見落としてしまうリスクも高くなる。

165 情報過多という大河、いろいろ問題もあるが、少なくとも手話禁止の根拠になっていた「手話の使用は正しい日本語習得の妨げになる」という巨岩を、その水勢で流し去ってしまったことは間違いない。

166 我々も昔ほどの情報弱者ではなくなってきた。様々な出版物、PC ホームページなどよりどりみどりの情報で溢れているからである。しかし即時的、単発的な情報には相変わらずの情報弱者のままである。

167 聞こえないためにあきらめのよいことが幸いしてか、ろう者には1の情報を2にも3にも活かして楽しむすべを知っている人が多い。情報の骨までしゃぶる主義である。

168 初期の頃に覚えた手話に「仕方がない」と「しかし」がある。「聞こえないのだから仕方がない」と肩から斜め下に切るあの仕草が昔は多かったが、今は「聞こえないけれども、しかし」と手の表裏を返す人が多くなった…これは作り話であるが、最近のろう者の自立心の高まりを見るとこんな話も現実味をおびてきそうな気がする。

加藤 光二(東京都町田市玉川学園)・理事

1996年～2002年に6回に分けて「みみより」誌に掲載されたものを、3回にまとめました。なお、初出掲載原稿が著者により加筆・修正されております。

## No.20

### 怒りと優しさのために 4

# 手話放送と大空社の本

丸山一保

NHKの3チャンネルで手話の講座が始まっています。それを見ているうちに、つくづく大変な時代になったなあと思いました。

#### ● ありがとう NHK

NHKのアナウンサーといえば、話し言葉のエリートですが、その人たちが、手話教室の生徒となって、手話をしているわけです。簡単な手話を理解する人が、何百万人も増えるのではないかと、これまで手話普及に努力された人たちのご苦勞を思いました。

ひょっとすると、手話は、聴覚障害から離れて、手旗信号やモールス信号のような国際語として育っていく可能性さえ感じます。

それにしても、隔世の感とは、こういうことをいうのでしょうか。

昔、若かったころ、高寺志郎さん、大森節子さん、団順一さんなどと一緒に、NHKが内幸町にあったころの話で、ぼくらはラジオ放送のために、聴覚障害者の職業の問題について、アナウンサーの質問に答える形で吹き込みを行うことになったのです。

打ち合わせは、普通の会話で行われ、ぼくは、補聴器のおかげで聞こえたのですが、中途失聴の団さんと高寺さんは、お互いに対応するのが難しくて、きっと要領をえなかったのに違いありません。

確認をする暇もなく、録音はすぐに始まりました。台本もなく、リハーサルというようなものもありませんでした。耳の不自由な人の話題などというものは、当時は、ほんの片隅の放送だっ

たのです。

ぼくらは、勝手に自分のことをしゃべって録音を終わりました。

## ● 名もなく貧しく美しく

手話が、最も衝撃的に世間の人々にアピールしたのは、松山善三さんの「名もなく貧しく美しく」という映画によってでした。

1987年にアメリカ映画「愛は静けさの中に」というのが評判になり、主演女優は、実際に耳の聞こえないマリー・マトリンさんでした。「名もなく貧しく美しく」の高峰秀子さんの演技ほど感動はなかったと、ぼくは、思いました。

「名もなく貧しく美しく」は、ろう学校の同窓会で知り合った男(小林桂樹)と女(高峰秀子)が、貧しい戦後の世の中で結婚し、子供を作り、お互いが支え合って生きていく物語りですが、求愛するときの手話のシーンは映画制作関係者の中でも評判になった名場面で、たしかに圧巻でした。高峰さんの表情を見ていると涙が止まらなくて困った。

この映画が作られたとき、ぼくは、松山善三さんの取材に同行して、逗子の戸辺さんの家まで一緒にいったことがあります。

この映画が成功したのは、松山さんが、実際にろうの人の家を訪ねて、一つ一つ話を聞き納得してから嘘のない物語を作りあげたことにあると思いますが、ろう学校の通学の途上で石を投げられた体験を語りながら「なぜ、わたしが石を投げつけられなければならなかったのか」

そういつて、戸辺さんの奥さんが、子供のときの悔しさを思い出して肩を震わせ泣きました。松山さんはそういう話を、じっと聞いておられ、ろうの人の実際の体験を誠実に組み立ててストーリーを作られたのでした。

松山善三さんは、みみより会の故阿部参与や東京天文台の田中幸明さんのお宅などにも取材に行かれたはずです。関連記事が1959年の「みみより会」10月号に出ています。

## ● みんなの努力が実りを得た

NHKは、1960年代になるとテレビろう学校の番組を開始し、松沢先生らが出演して口話の講座を放送しておりましたが、手話の採用については、なかなか慎重な態度をとっておりました。

1957年の「みみより」の221号には「手話は、学校教育でも正式に教えていないし、地方によって方言もあるので、今のところやるつもりはありません」というNHKの姿勢が報告されています。

そんなことを考えると、1990年のNHKテレビが、聴覚障害者のために放送時間を拡大し、手話の普及に乗り出したということは、本当にびっくりするような時代の変化です。

字幕放送や手話放送について、テレビ局の情報を「みみより会」に熱心に報告していたのは、長谷川洋さんでしたが、そのほか、いま「聴覚障害者の時間」で大活躍中の大槻芳子さんや、岩淵紀雄さんらが、「みみより」の理事として頑張られていた時代のあったことを思い出します。

昨年、詩人の大久保紀次さんも、「聴覚障害者の時間」に出演されましたが、彼の膝の上にあった台本を画面で確認して、ほっとしたものでした。こんなにも、聴覚障害者が大事に扱われる時代になったのだなという感慨でした。

## ● 「みみより」索引の出版

「みみより」に関心を寄せる巷の方々の中で、大空社という出版社が、いま創刊号以来の目次をまとめて出版しようとしています。

商売になるのだろうか心配しながら見守っておりますが、先日一度でも「みみより」に寄稿された人、2,000名ほどの名前を目次から拾って並べた索引ゲラが、大空社から届きました。なんと

多くの人が、「みみより」に集まったことかと改めて感嘆しました。

「みみより」に残っている人も、通過していった人の名前も見られますが、率直に言って、すごいなと思いました。

時代の変化の中で、そのときどきの人たちが、「みみより」を愛し、この雑誌に思いのたけを書いたのです。目次を並べただけの資料からも、「みみより」は、人間というもののエネルギーを発散し、表現した大勢の人たちの青春の足跡であることがわかります。

大空社の本は、まもなく出版される予定とのことですが、みなさんもぜひ、ご自分でたしかめてみて下さい。あなたの名前も、思い出も、そこにあるのです。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1990年「みみより」誌 No. 368 掲載

No.21

怒りと優しさのために 5

## みみより目次総覧

丸山一保

前号で紹介した大空社の出版物というのが6月11日付で発行されました。

これは、筑波大学教授の津曲裕次先生が監修された「障害者教育福祉リハビリテーション目次総覧」という非常に貴重な出版企画です。

### ● 目次だけで一冊の本

今度発行されたのは、その第I期刊行6冊で、視覚障害関係2冊と聴覚障害関係4冊となっています。

聴覚障害に関するものについては、「聾・難聴関係」という表示でまとめられていますが、その中の1冊全部が、「みみより」に充てられているのです。

その他の3冊の「聾・難聴関係」の中には全日本ろうあ連盟「季刊ろうあ運動」、海外聴覚障害教育研究会「海聴研通信」、聴覚言語障害研究会「聴覚言語障害」、日本言語障害児教育研究会「言語障害研究」、ろう教育科学会「ろう教育科学」、聾教育研究会「聴覚障害」、そのほか明治、大正時代のいまは廃刊されてしまった聾教育関係の資料の類いなどが収録されています。

この出版物は、そうした過去の障害者関係の雑誌発行物の目次だけを複写して収録したもので、たとえば、「みみより」については、昭和30年5月に発行された創刊号から始まって、平成元年12月号までの、実に363号までの目次が、すべてそのまま収録されてるわけですが、こうして1冊にまとめてみると、みんなが、交替で続けてきた「みみより」の雑誌の実力と重要性を、改めて感じさせられます。

目次には、原稿の表題と書いた人の名前が掲載されています。ですから、35年分の目次を1冊にしてみると、それを眺めるだけで、みみより会の歴史が、一目瞭然といった感じでわかるので

す。

## ● すごいぞ、みみよりの目次

大空社は、国会図書館や、筑波大学付属ろう学校の資料などから、「みみより」の目次を複写して編集したようですが、初期のころのものについては、みみより会の事務局に貸してほしいと申し込んできました。

事務局の矢島秀子さんから連絡を受けて、ぼくが、大空社と対応し、主旨に賛同して、手持ちの古い「みみより」を貸してさしあげ、理事会にも報告しました。

ただ、この「目次総覧」は、図書館とか、大学の研究室とかの狭い販路を対象として制作された本で、一般の人が本屋さんで入手するものではなく、値段も6冊セットで、75,000円という、びっくりするくらいの高い本になっています。

みみより会の全員が、書店でこの本を手にとりて見ることはできないのは残念ですが、しかし、自画自賛ということではなく、世の中の方で「みみより」に注目して、こんな立派な本をまとめてくれたという事実は、大いに自信を持っていいことだと思います。

## ● みみよりの本を出そう

それにしてもこの35年間に、「みみより」に原稿を書いた人は、数千名に及んでいます。

大空社のような外部の出版社が、研究者を対象として作る本ではなく、みみより会自身が、世の中の人に呼びかける「みみより」の記録を、みんなで力を合わせて作る時期がきたようにも思います。

なんと多くの方が、この長い年月の間に、「みみより」を友としたことでしょう。大空社がまとめてくれた今度の本の索引を見るとそのことがよくわかるのです。

赤間悟さん、岩淵紀雄さん、遠藤勇一さん、岡田秀穂さん、大槻芳子さん、川崎輝美男さん、杉田春男さん、須藤多恵子さん、高寺志郎さん、武井利文さん、武石豊一さん、田中順さん、千葉登美雄さん、寺瀬順一さん、野沢克哉さん、長谷川洋さん、花田克彦さん、藤田孝子さん、前田精さん、森芳江さん、若林泰志さん。(アイウエオ順)

もちろん、いまでも変わらず寄稿されている人たちも大勢います。

浅倉守さん、井上博子さん、市川明さん、大竹実さん、大川豊さん、大畠美代子さん、大森節子さん、大久保紀次さん、岡本昇蔵さん、尾崎真佐子さん、木下幸雄さん、小林敏男さん、小林俊一さん、清水志津さん、鈴木克美さん、千坂文子さん、関口みどりさん、高橋広司さん、団順一さん、佐藤和夫さん、中谷久子さん、中西久子さん、仲吉史子さん、永田哲雄さん、成井伸子さん、仁平喜久江さん、根本政夫さん、細野和夫さん、三浦裕さん、宮崎敏子さん、味蓼雅美さん、村松孝徳さん、森谷秀幸さん、山西和子さん、山本富子さん、吉田由起子さん、矢島幸雄さん。

それは、反骨の歴史です。とても大勢で、書ききれません。そしてそれは、許し合いの歴史でもあったはずです。

「みみより」の本をまとめることによって、ぼくらは、大勢のエネルギーが、この会を支えてくれたことを再評価することになるでしょう。

## ● 自立する尊さ

35年間、それはすばらしい歴史です。

こんな集まりが他にあるのでしょうか。リーダーが交替しながら、民主的に運営されており、たとえば行政、教育、宗教、商業宣伝などのいかなる他の力によって左右されるものではなく、あ

くまでも会員たちが自分たちで考え続けてきた。35年間のヒューマニズム。これによって役員のだれもが支出こそすれ金銭的な利得を得るということではありません。

ですから、いつまでも貧乏で、ピーピーしていますが、雰囲気は明るくてなごやか。

ずっと印刷を引き受けてくださっている創巳堂さんのご好意。広告主のみなさんのご理解。そして編集部のみなさんの努力。最後に、全員の若さに感謝します。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1990年「みみより」誌 No. 369 掲載

No.22

怒りと優しさのために 6

## 懐かしい弁当箱型補聴器

丸山一保

最初に補聴器を使ったのは、40年前、ぼくが、18歳のときのことで。

弁当箱ぐらいの大きさの機械で、蓋を開けると、ほぼ半分のスペースに大きな乾電池が入っていました。残りの半分のスペースの、そのまた半分を占めるように、今の物でいえば、100円ライターぐらいの大きさの真空管が入っていたのを覚えています。

### ● それでも、とてもうれしかった

昭和23、4年の頃から、新聞に小林理研の補聴器の広告が出るようになりました。小さな広告でしたが、丸ビルの中に営業所があるというので、大変、わかりやすかった。

一体、補聴器というのは、どんなものなのか。そのころの人は、だれもまだ補聴器を見たことがありませんでした。難聴少年のぼくは、広告を見るだけでも、わくわくしたものです。大学の入試を受けに上京したとき、憧れの丸ビルを訪れました。小林理研というのは、今のリオンのことです。

係りの人が、マイクのそばで、

「ああ、聞こえますか、聞こえますか」

と熱心にセールスするので、静かな広い場所で、その補聴器が、どのくらい有効であるか、判断が付きませんでした。

弁当箱型が5,000円。

電池と機械をセパレートにしたものが、7,000円くらいしたのではなかったかと思います。

学生寮に入って、3,000円で1ヵ月の生活ができた時代でしたから、かなり、高い品物でした。

思いがけず、横浜に住んでいた伯母がぼくの耳に同情してくれて、入学祝いにその弁当箱型の補聴器をプレゼントしてくれました。

それを手にしたときの、嬉しいような、悲しいような、むしろ茫然とした気持ちを、いまでも覚えています。

### ● カバンに入れて持ち運び

ぼくの耳硬化症という難聴は、中耳の骨に異常のある病気です。聴神経や脳の方には、異常がありません。ですから、基本的には、補聴器が大変有効です。

小林理研の、その弁当箱型の補聴器は、静かなところでそれを使うと、たしかに、何でも聞こえるような気がしました。

しかし、何分にもカバンの中に入れて持ち運びする、きわめて体裁のわるいものだっただけに、大学の教室まで持って行って、講義を聴くことには、ためらいがありました。

ぼくのような、聞こえるくせに聞こえないという中途半端な難聴者と、まったく音を聴くことができない人とは、当然、障害に対する気持ちに差があると思います。

ぼくだって、まったく音が聴こえなかったり、あるいは、もっと重度の難聴であったとしたら、自分の障害を隠そうとはしなかったでしょうが、なまじ聞こえるものですから、人の話が聞こえない場合には、自分の耳の障害を自覚するよりは、相手の声の低さを非難するような気持ちになったものです。

「この鈍感め」

と、いつもぼくは、低い声で話をする人を軽蔑していました。

「おれが、難聴であることは、俺の態度を見ればわかりそうなものじゃないか。どうして、そんな低い声で話をするのか。もっと大きくはっきりと声を出せばいいのに」

実際には、相手が、とくべつ低い声で話しているわけでもなくて、ぼくの耳が普通でないから聞こえないのですが、そのことが、ぼくには、なかなか理解できなかったものです。

ぼくは、難聴であることを、むしろ人に隠していました。ちょっと聞こえないことがあっても、聞こえたような振りをして、とぼけたものです。

だから、ぼくが、どの程度の難聴であるのかということは、仲間たちには、外から見ただけではわからなかったのですが、そのことに、ぼくは、気がつかないのです。

ところが、大学へ入ったことで、ぼくの耳には、抜きさしならないくらいの社会的不利益があることが、はっきりしてしまいました。

周囲のものが、熱心にノートを取っている教授の講義が、ぼくの耳には聞き取れないのです。屈辱の経験が、どうしようもない劣等感の中にぼくをたたき落としてしまいました。

## ● せっかくの補聴器もだめ

補聴器こそ、ぼくにとって必要不可欠なものだったのですが、この弁当箱ほどもある補聴器を使えば、クラスの男女から、異様な目で見られてしまうことは必然的なことです。

若かったぼくには、気取りもありました。

弁当箱型の補聴器を使用するという事は、本当に勇気の要ることでした。

まだ、みみより会を始める以前のことで、世の中に、こんなにも大勢の聴覚障害者がいて、みんな苦しみながら、がんばっているという事実を、ぼくは、まったく知りませんでした。

最初にその弁当箱型の補聴器を使い始めた教室の風景をいまでも覚えています。駒場の第9教室。D教授の社会学。周囲のものの視線を痛いほど感じながら、補聴器を机の上に置き、コードを引っ張り出して、イヤピースを耳に入れました。

ワーンという感じがして、音が押し寄せてきました。

どんなことが起こったのでしょうか。

ぼくの耳には、教授の講義と一緒に、聞こえなくてもいい、世の中のすべての音が、一斉に入ってきてしまったのです。

たとえば、廊下を歩く者の靴音。咳ばらい、ノートをめくる紙の音。

こんな、なんでもないはずの音が、ぼくの耳には、まるで万雷の轟きのように入ってきてしま

って、肝心のD教授の声を消してしまいました。必要な音だけを選別して聴くという人間の耳の神秘的な能力が、机の上に置いたその大きな補聴器には、まるで備わってなかったのです。

あれから、40年。電池代だけで、いくら費ったことでしょう

懐かしい弁当箱型補聴器で聴いた講義を思えば、現代の補聴器の精巧さは、奇蹟のようにさえ感じられます。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1990年「みみより」誌 No. 370 掲載

No.23

怒りと優しさのために 7

## 耳硬化症

丸山一保

たとえば近視、乱視、色盲、弱視、それに失明など、目の不自由な人の障害の区別については、だれにもわかるほどの常識となっています。

それに対して、耳の不自由な人の障害の区別については、あまり知られておりません。

それは、一般の人がわからないだけでなく、実は、聴覚障害を持つ者同士がお互いにわからないことでもあるのです。

それどころか、自分で自分の耳の障害について、明確にわかっていないという人も、案外、多いのではないのでしょうか。

### ● 静かなところでは聞こえない

ぼくは、子供のときから難聴でした。

しかし、子供同士で話をしているときには、ほとんど不便がありませんでした。

ご承知のように、遊んでいる子供たちは、力いっぱい怒鳴ったり、わめいたりしております。ぼくの耳は、そういう子供たちの大声の世界の中では、十分に通用する耳なのでした。当然心得て生活しているように思えますが、けっしてそんなことはありません。だれだって、自分の耳が難聴であることを承知して生まれてくる子供はいないのです。

小学校へ入ると、教室でシンとした静かな瞬間を知るようになりました。

騒いでいる子供たちを、先生がたしなめて、ようやく静かになった教室の中で、おもむろに先生の話が始まります。

不思議なことに、シンとした空間の中では、ぼくの耳は、とても不便な耳でした。

低学年の頃は、これは、何かの間違いなのだと、思っていました。ぼくの耳が、他のものたちの耳と違う欠陥を持っている耳だということは、夢にも考えられなかったのです。授業が聞こえないのは、先生が低い声で話すのがいけないのだと信じていました。

はじめて医者に行ったのは、小学4年生のときのことです。

ぼくの両親、兄弟、親戚のどこを見回しても、聴覚障害のある者は、おりませんでしたから、父も母も、ぼくの耳が難聴であることを、たまたまの現象として、最初は簡単に考えていました。

医者は、扁桃腺が肥大して耳管を圧迫しているためだと診断しました。すぐに、扁桃腺を摘出することになりましたが、ぼくの難聴は、それだけでは治りませんでした。

## ● 心臓の音ってきこえるの

中学生になると、授業中に先生に質問されて、答えられないことが多くなりました。

答えがわからないのではなくて、質問が聞きとれないわけです。

それも、先生の声が、歯がゆいところで届かないという感じでした。

ずいぶん恥ずかしい思いをしましたがけれども、それでも、自愛というものによって、なにかの間違いだと信じていました。

先生の中には、元気よく大きな声で話をしてくれる人もいます。そういう先生の授業は教室では、なんでもありません。ところが、そんな先生の話でも、校庭のような広い場所で聞くと、一転して聴きづらくなってしまふのでした。

声が空中を飛んで生きます。

瞬間に理解できないときには、前後の聞こえた単語を組み合わせて、絶えず後追いの類推ゲームをやっているような具合でした。

決定的に、自分の耳に欠陥があることを知ったのは、生物の時間に、二人ずつペアになって、お互いの胸に耳を当てて心臓の鼓動を聞きっこしたときのことです。

お断りしておきますが、戦争中だったぼくらの少年時代の中学校は、すべて男子ばかりでした。

ぼくは、ペアになったNの裸の胸に耳を当ててNの心臓の鼓動を聞こうとしました。

どこを探してもNの心臓の音は、ぼくの耳には聞こえませんでした。

交替して、Nが、ぼくの胸に耳を当て、ぼくの心臓の音を聞く番になりました。

「あっ、すげえ」

とNが、すぐにいいました。

「聞こえる」

「聞こえるさあ、こんなにはっきり聞こえるじゃないか」

ぼくは、もう一度、交替して、Nの胸の上に耳を押し付けました。

「聞こえる」

「ああ、聞こえる」

ぼくは、思わずウソをいいました。

ウソをつきながら、ぼくの耳が、ほかの人の耳と違った欠陥のある耳であることを、その瞬間に、はっきりと認識したのでした。

## ● 中途失聴ではなかった楽聖

もちろん、全然音の聞こえない世界にいる人たちから見れば、心臓の音が聞き取れない悩みなどというのは、贅沢きわまりない愚痴であって、そんなのは障害のうちに入らないという非難を、甘んじて受けなければならぬでしょう。

ぼくの相棒だったN少年は、現在、ある大学の教授をしています。先日、久しぶりに会って一緒にビールを飲みました。

「ベートーヴェンの難聴とぼくの耳は同じ病気だったらしい。この間、新聞に出ていた」

と、ぼくは、いいました。

「ということは、ベートーヴェンも、全然、聞こえなかったわけじゃないんだね」

「そうだ。けれども、あのころは補聴器なんか、なかったからね」

幼いときからの親友だったにも、ぼくの耳硬化症という病気の実体を、本当にわかってもらう

ことはできないでしょう。

難聴というのは、とても、中途半端です。

障害者とも言い切れない不安定な状態は、普通の人に混じって学び、そして仕事をしていくだけに、複雑な孤独感を伴います。

ぼくの体験から考えれば、ベートーヴェンは成人してからの中途失聴ではなくて、幼年期からの難聴を自分で気がつかなかった人のようにも思えます。その少年期の孤独こそが、魂を揺さぶる彼の音楽の源泉のです。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1990年「みみより」誌 No. 371 掲載

No.24

## 早熟とオクテ

かとう こうじ

夜、テレビ見るのと寝るのと、どちらかを選べと言われたら、躊躇なく寝る方を選ぶ私であるが、それでも時たま、わが目を疑う画面に時を忘れてテレビの前にくぎづけになることがある。昨年の秋にはそれが立て続けに二つあった。一つは同時多発テロのニュース。もう一つは偶然にまわしたチャンネルでみたあるトーク番組である。

トーク番組自体は別にめずらしいものではないが、その場の異様としかいいようがない雰囲気は私の興味をひいたのである。

対陣していたのは、まだ年端もいかない子どもたちと、当代一流の喋り手として知られている大人が数人。普通だったら勝負にならない組合せであるが、よく見ていると舌戦で押され気味なのは、なんと大人の方なのであった。

最後まで反論し続けていた女性のゲストもいつしか口を閉じてしまって、困惑した表情の大人たちを前にして、勝ち誇っているかのようにニコニコしている子どもたち。生憎と文字放送ではなかったので、くわしい内容まで知ることは出来なかったが、まさに開いた口がふさがらないという感じであった。

機関銃のようにくりだされる言葉の数もさることながら、大人からのどんな反論にも、すかさず切り返してみせるその余裕は、もういっばしの論客そのものであった。そこに居ならぶのは、マセた子どもの集団というよりは、全員でひとつのモンスターといった感じで、見るからにおぞましく薄気味の悪い存在でしかなかった。

こうした口達者な子どもが、近年増えてきつつあるが、現象としてはあまり喜んでいいことではない。

テレビ時代が一億総白痴化時代といわれたのは、もう何十年も前のことになってしまったが、今や〈総早熟化時代〉に変わりつつあるように思える。

幼い子どもたちの目や耳に、何のオブラートもなく、むき出しのままに飛び込んでくる情報の質と量はいまや尋常な状態ではない。聞くことによる知識の吸収は、読むことのそれとくらべて極めて僅かな努力ですむ。いや、その努力すらも必要ではない。何かしながらの〈ながら族〉に

象徴されるように、脳の中に自然にしみ込んでくる。様々なメディアが押しつける安直な知識を、それも未消化のまま吸収して水ぶくれ状態になった頭脳の持主になる。こうした子ども達が成長していったあかつきには、目先の才覚はきいても時勢への抵抗力が弱く、その手に長けた者にかかれば、いとも簡単に洗脳される〈頭の回転の早いバカ〉になるのがオチであろう。

とは言っても、耳学問はできる方が、できない者より有利であることは否定できない。耳学問ができるか否かの差が、弁舌の能力だけではなく、社会的スキル(处世能力)全般への差にとつながっていく。情報の量が増加するにしたがって、ハンディキャップもその質量を増やしてくる。新顔のメディアができれば、ハンディキャップもこれまでになかったのが出てくる。健聴者と難聴者との格差を縮めるために様々な情報保障が行なわれている一方で、こうした正反対の動きも盛んになってくる。イタチゴッコの現実には前途暗澹にならざるを得ないのである。

ふりかえって私自身の幼時をみると、先の子どもたちとは見事なくらいに対極をなしている。遊び友達がいない。本は買ってもらえない。もちろんテレビはなく、ラジオは聞えない。来客があれば部屋から追い出され顔を見せることを禁じられる。四方八方を「ナイ」と「ダメ」のバリアで囲まれ、今の教育ママが見たら絶句しかねないほど、知的発達には最悪の環境であった。ひとり殻に閉じこもっての毎日は、自閉症児とどこがどう違うのかという感じであった。

ひとり遊びに飽いたら父の書斎に忍びこび、書棚の本を引っ張りだして眺めるのが唯一の楽しみであった。中でも全四巻の分厚い百科事典が特に気に入っていた。とは言ってもまだ幼い私に字が読めるはずがなく、あくまで皮表紙の感触を楽しんだり、挿し絵や写真版を眺めているだけのこと。飢え切っていた幼い知識欲を満たすにはいささか貧弱な対象ではあったが、そこは順応の力で、それなりに満足はしていた。

このように喋ることと無縁な毎日をずっと送ってきたツケは、発声器官の成長おくれとなってあらわれ、六十数年を経た今でもその後遺症に悩まされている。

喋るために声を出そうとすると、声帯から舌先までが硬直した感じになり、呼吸が苦しくなってくる。他人のノドを借りて喋っているような違和感を感じる息苦しさの中から、使うべき言葉をあみだし、その言葉を声に変える段階で神経をつかう。その声が言葉として相手の人に伝わっているのかどうか、その反応を確かめながら一語ずつ吐き出していく。〈喋る〉という普通の人には造作なくできる行為が、私にとっては、体操選手が難度の高いウルトラ何とかの演技に挑むような相当の努力がいる行為となる。

そのために声を出すのが苦痛になり、口数が減る。口数が減れば友人達とお喋りでも百パーセント聞き役にまわる。話の花を咲かせたといっても、相手一人が咲かせている花を眺めさせられているだけである。「君と喋れて楽しかった」と言われても、そう思っているのは先様だけのこと。正直言って会話の主導権を相手に握られっぱなしというのは、あまり愉快なことではない。そうかといって、「お前も何か喋れよ」とパトンを渡されても喋ることができない。このじれったさは本人にとっては悲劇である。「悲劇ではなく喜劇だ」と笑った友人がいたが、話上手な彼にとって、こんな悩みなぞ想像のラチ外のことで滑稽にしか見えなかったのかもしれない。

昨年、一念発起して自分を改造することにした。喋れる自分にである。これは私のようなタイプの難聴者には少なくない例であるが、こなれた文章がどうしても書けないのである。口語体よりも文語体の日本語を先におぼえてしまった者の宿命かもしれないが、こうした私に友人が「喋ることに馴れてくれば、自然にこなれた文も書けるようになるよ」と助言してくれたのが直接のきっかけである。

〈喋る〉能力と〈書く〉能力の関係を考えるまでもなく、若い頃の私の書き下手は相当にひどかった。まだ会誌「みみより」が創刊される前の文集に原稿を出したことがあるが、集まった原稿のうちで、私の原稿だけが、あまりにも稚拙すぎるということで没になったことがある。この一事だけでも、当時の私のレベルがいかに低かったかを推し知ることができよう。

もし自分にも人並みに喋る力がついたら、〈鬼に金棒〉ならぬ〈猿に鉛筆〉ぐらいの文章が書けるかもしれないという欲が出てきたことで自ら特訓を課すことになった。

そこまでは良かったのである。だが成果の方はいまいちの感じで終わってしまった。息が第一関門のノドを通過して声になるまでに、発声の難易をめぐって言葉の断片が頭の中を右往左往する。あげくの果てがロレツの回らない発言となって相手の失笑を買ってしまう。

見かねた人から「手話でやれば…」と言われるが、手話を使ってみたところで声帯と舌の硬直が、手指と顔面筋の硬直に移動するだけの話で結果は同じことである。もともと記憶力は弱いけれど、それでも若い頃は〈三つ覚えて二つ忘れる〉ペースで、それなりに手持ちも増やしていた。今では、ド忘れがひどくて、手話によるコミュニケーションには苦勞することが多くなってきている。

このような私にとって人なみの対話能力を発揮できる唯一の手段は筆談である。以前、拙稿「手話の周辺」で、私のように頭の回転が早くないものには、筆談のゆっくりとしたテンポが思考のスピードに丁度合っていて楽であると、書いたとおりの理由である。

ことほどさように喋ることが苦手な私に何の因果か、新年早々あるボランティア団体が主催する催しで講義をする役目が回ってきた。まさか自分にだけはお鉢がまわってくることがないと思っていた、その〈まさか〉が来たのである。その日がくるまでの数十日というものは、講義の時になっての悪い予感が頭をもたげてくるのを必死に抑えこむことで眠れない夜が幾晩も続いた。

しかし、案ずるよりは生むが易しで、講義そのものは、あまりのあっけなさに拍子抜けする位であった。かなり長文の原稿ではあったが、それが丸で暗記したがのごとく口から流れでたのには、自分自身が一番驚いたのである。ふだんは思い出せない歌詞でも、歌っているうちに自然に言葉が引き出されてくる、丁度あの感じである。

かなりシドロモドロに近い口調ではあったが、ともかく原稿棒読みの醜態だけは見せずに済んだことにホッとした。と同時に一つの大きな発見をしたことに気がついた。

今までは、発声器官の未成長によるものと思込んでいたけれども、なんのことはない〈喋ること〉の経験不足が心理的なブレーキとなって舌の動きをこわばらしていただけた話であった。ふつうの会話の時の〈考えながら喋り、喋りながら考える〉という同時進行的なことが、経験の乏しい私にはできなかつたのである。しかし、原稿を整えたいうでの講演では〈考える〉と〈喋る〉とが分離されているために、むしろ話す行為としては楽であったというのが新しい発見である。

たった一度の講演をしたという経験によって、永年抱き続けていた誤解が氷解されたのは、私にとっては大変な収穫であった。文字通り眼前に光明がさしこんできたような気がしたのである。

この年齢になっても、自分に未知の能力があることを発見する喜びは、早熟な人になくオクテの人だけに与えられた特権であるし、こうした喜びが後々まで続く点で、オクテの人生の方が楽しみも張合いも多いのではないかと思っている。

## 怒りと優しさのために 8 インテグレーション

丸山一保

ろう学校の先生のお話を聞いていると、ときどきインテグレーションという言葉が出てきます。ろう学校で教育を受けた生徒が、途中から普通校へ転校して勉強するようになるケースを、インテグレーションと呼んでいるようです。

最近インテグレーションのおかげで、ろう学校の生徒数が減り、それに対するろう学校側の新しい役割の必要について、今年の「みみより」4月号で三重ろう学校の八木治先生が問題提起をしておられます。

### ● 末森さんの衝撃

インテグレーションというのは、統合という意味です。

黒人白人の人種の統合のことを、レーシャル・インテグレーションといますが、アメリカにおける黒人白人の教育統合を考えればろう教育におけるインテグレーションという言葉が、なにを狙いとして使われるようになったのか、よくわかるような気がします。

筑波大学付属ろう学校小学部1年生のときに、普通の小学校へインテグレートした末森明夫さんは、1962年生まれで、ご本人の話では、おそらくストマイ注射が原因で、感音性の重度難聴になられた青年ですが、そのまま耳の聞こえる子供たちと一緒に中学、高校を卒業され、東大工学部へ進まれました。

これだけでも、ビックリするような快挙ですが、工学部から、さらに大学院を終了され、1988年に通産省の工業技術院の微生物工業技術研究所に上級職の公務員として就職されております。

末森さんには、2度ばかりお会いしましたが、落ち着いたハンサムな青年で、外見から見ただけでは、耳がまったく聞こえない人だとはわかりません。

そのすばらしい経歴を見れば、一体、どうやって聞こえない障害を克服して、普通の学生たちに混じって勉強したのか、怠け者のぼくなどは、ただ、ただ、頭がさがる思いです。

### ● 豊かな社会の成果

前号でも書きましたが、耳硬化症のぼくの場合は、補聴器がなくても、先生の声が、まったく聞こえないということではありませんでした。仲間たちとの大声でのコミュニケーションは、十分にできたのです。

ただ、難聴ですから日常生活に不便があり、職業選択が自由という具合ではありませんでした。戦後の就職難の時代でしたし、現代のような身体障害者雇用促進法などは、なかったのです。

大学へ入ったのは、さしあたって道を探そうというような具合でした。

その結果、大学で得たことといえば、在学中にみみより会を始めて、大勢の聴覚障害者の人たちを知り、「みみより」の発行を始めたことに尽きるような気がします。

自分のことなど、どうでもいいやと、ぼくは、心から思いました。それが、結局、僕自身の救いにもなったのです。

末森さんと比較すれば、1931年生まれでぼくは、彼の父親に相当する年齢であり、時代がすっ

かり違っております。

環境保護行政に自分の研究を生かしたいと今後の目的を語る（1987年11月27日サンケイ新聞）末森さんの記事を拝見しながら、豊かで平和な現在の日本の社会が、若い障害者の闊達な開花を可能にしているのだと、しみじみ感じました。

## ● 下駄屋のケンちゃんのこと

1957年に発行された「みみより」の第4号に、日本ろう話学校の当時の教頭であられた望月敏彦先生が、下駄屋のケンちゃんの話を書かれています。

そのケンちゃんの話、1987年の「みみより」8月号に30年ぶりに、また書いてくださいました。

2つの文章によって、ケンちゃん存在が、かなり鮮明に伝わってまいります。

先生の故郷は、北海道の留萌ですが、先生の家近所の下駄屋に「おしのケンちゃん」と呼ばれる子供がいたのです。昔は、耳の聞こえない子供は、下駄屋などに預けられて、一種の職業教育を子供のときから授けられる宿命だったと、先生は述懐しておられます。

ケンちゃんは、下駄屋に預けられて、もくもくと木を削り、いつも一生懸命に下駄を作っていました。

近所のガキ大将たちは、そのケンちゃんをバカにして、からかいました。

貧しさのために、遠い町まで行ってろう学校へ入ることもできなかったケンちゃんは、結局、近所の小学校へ通ったということですが、運動神経は抜群で、けっして無知な子供ではなかった。今の時代であれば、どんな活躍をしたかと、望月先生は、同郷のろう児に優しい思い遣りを述べておられます。

30年前の原稿の方には、当時、アメリカのろう教育を視察されて帰ってきた、大嶋功校長先生の話も紹介されておりますが、アメリカでは、ろう学校に高等部がなく、中等部を修了した者は普通学校で耳の聞こえる生徒と一緒に勉強しているという大嶋功先生の報告を聞いて、皆さん驚かれたという話があり、現代の日本におけるインテグレーションを考えると、実に興味のあるエピソードといわなければなりません。

1957年当時の貧しかった日本では、下駄屋のケンちゃんのような子供を、放置せずに、まず、ろう学校に入学するように指導していくことが精一杯の大事業であり、インテグレーションを当然とする教育などは、理解できなかったのに違いないのです。

## ● 障害者に対する無理解

望月先生の新しい方の原稿には、先生が学ばれた北海中学総代・野呂栄太郎さんのことが書いてありますが、北海中学一の秀才だった野呂栄太郎さんは、足が悪かったために、第一高等学校の入学試験に合格しながら、結局、身体障害の理由をもって入学を許可されなかったそうです。1920年前後のことと思われまます。

第一高等学校というのは、今の東京大学教養学部のことですから、野呂さんが入学を許されなかった学校に、耳の不自由な末森明夫さんが、当然のように入学し、大学院まで卒業している現代の常識からすれば、野呂さんの話は、奇妙にさえ感じられます。

インテグレーションの成否は、単に教育の場だけの問題ではなく、障害者に対する社会の理解の度合いによるところが大きいと思われまますが、眩しいような末森明夫さんのお話を聞くと、それが末森さんの個性的な努力や才能の成果なのだということを、もちろん理解しながら、一方で、ようやく差別的悲劇のない社会になりつつあることを信じたくになります。

## ● 多士済々の若い人たち

しかし、よく考えてみると、インテグレーションは、みみより会が始まった1950年のころからあったのです。

みみより会の初期の委員で、厚生省で活躍されている外山和郎さんは、30年も以前に明治学院大学を卒業されていますし、現在、ろう劇団を主宰されている筑波大学付属ろう学校の伊藤政雄先生は、早稲田大学を卒業しておられます。そして、その流れは現代になると、枚挙にいとまがないほど、たくさんの事例となって現れているのです。

末森さんと同じように筑波大学付属ろう学校中学部から千葉県立薬園台高校へインテグレートした田門浩さんも、びっくりするほどの秀才です。

彼は、1967年の生まれで、先天性のろうであるということですが、来年は東京大学の法学部を卒業されるはずです。司法試験にチャレンジしているようですが、一方では、関東聴懇の運動などを熱心にやっておられる明るくて元気な青年です。

司法試験といえば、「みみより」362号に掲載されている1949年生まれの山田裕明さんは、幼児期のハシカによる重度難聴の方ですが、普通の学校教育を受けて明治大学法学部を卒業され、すでに司法試験に合格して日本で3人目の聴覚障害者の弁護士さんとなっております。

山田先生のお話を聞くと、中学のときも高校のときも、ろう学校へ行くことを考えたのだそうです。しかし、筑波大学の小畑先生に進言などもあって、普通の学校へ進んだということです。

鹿島建設情報システム部にお勤めの並川正さんは、筑波大学付属ろう学校からインテグレートされ、九州大学の工学部を卒業されて工学博士の学位も取得されております。現在は、コンピューターに関する仕事をされているようです。

障害者保護の対策が、次第に整備されつつある日本では、ようやく、ろうの青年が普通の大学を卒業したり、学位をとったり、国家試験に合格したり、大企業に就職したりするという事実が、珍しくもない事例となりつつあるのです。もちろん、アメリカにおける、あの画期的な障害者法の施行という事実を参照すれば、福祉行政には、まだまだ問題が山積みしていることは確かですが。

## ● 勉強を訴えた清水さん

ところで、みみより会が始まったのは、京都ろう学校高等部生徒の清水昭雄さんが、勉強したいという希望を、1954年の8月の朝日新聞に投稿したのが、きっかけでした。

清水昭雄さんも、豊かで自由な現代に生まれていたら、おそらくは、その向上心から考えて普通の学校へインテグレートしたのではないかと考えられます。

清水さんは、当時のろう学校の高等部では英語の授業がないことに反発して、普通の高校生のように英語の勉強をして、やがて大学へ進学したいと、その望みを新聞に投書して世の中に訴えたのです。

熱心な清水さんに対しては、当時のろう学校でも一部の先生が個人的に英語を教えたりして、なるべく希望に副うように努力されていたようですが、経済的に貧しかった清水さんの前途は、簡単なものではありませんでした。清水さんの投書に対して、全国から、難聴で東京女子大学の学生だった高橋慶子さん、立命館大学の難聴学生中村和夫さん、健聴の東京教育大学学生中屋(現・大原)恭子さんなど、40~50名の人たちが激励の手紙を送りましたが、ぼくも、その中の一人です。

## ● 雑誌を出そうよ

ぼくは、難聴のために将来を決めかねていました。一流会社の入社試験では、当然のように面

接ではねられ、大学に6年も在籍していました。

そんなときに、清水さんの投稿記事を読んだものですから、他人事ではありません。アルバイトの収入を手にする、すぐに京都まで出掛けていき、清水さんや、中村和夫さんと会ったものです。

「雑誌を出そうよ」

と、ぼくがかねがね考えていたことを、2人に向かって筆談しました。

「清水君のところへ手紙を寄せた人たちを誘って、ろうの若者たちを励ますための雑誌を出そうじゃないか」

「えっ、雑誌を。それよりも、最初はみんなで集まった方がいいんじゃない」

「もちろん、集会もやろう。しかし、耳が不自由なんだからね。字を書いて読むより仕方がないんだ。実をいうと、ぼくも耳の不自由な仲間のことは、なにも知らないんだよ。コミュニケーションに欠陥があるんだから、お互いに原稿を書いて、まず読みっこするところからスタートしなければならない」

そんな3人の会話から、みみより会の構想は、若かったぼくらの胸の中に大きく広がっていったのでした。

## ● 昔を思えば優しくなる

あれから35年。

今年は、聴覚・視覚障害者を対象とした筑波技術短期大学がスタートしたのです。耳の不自由な人にとっては、初めての国立短期大学になります。

手話通訳士という国家資格もスタートしました。テレビの手話講座が、すごい人気です。高校生を対象とした手話コンテストも開かれました。そして、アメリカでは、障害者法の施行。

これは、想像もつかなかった時代になりました。

おしのケンちゃんのことを思えば、夢のような話です。もう、勉強を訴える清水さんのような投稿もないでしょう。

考えてみると、耳の聞こえる人と、聞こえない人と、一緒になって始めたみみより会は、結果的に、これも大きな社会的インテグレーションだったのではないかと、そんな感じがしてなりません。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1990年「みみより」誌 No. 372 掲載

No.26

怒りと優しさのために 9

会を創る

丸山一保

みみより会が、最初から順調に出発したのは、ぼくらがみんな若かったからですが、その中でも、京都市ろう学校生徒の清水昭雄君の、がむしゃらな「叫び」が、大きな原動力となったと思っ

ています。

## ● すごかった清水君の情熱

くどいようですが、ぼくの耳は難聴ですから、聞こえる人と聞こえない人の中間の存在です。生まれつきの難聴のぼくは、子供のときから、いろいろと悔しい思いや、辛いことを経験させられました。普通に会話することができる難聴でしたから、ろう学校にお世話になることなく、高校を卒業し大学へ進んだのです。

しかし、難聴の耳は、ぼくの生活をいつも特定しておりました。

清水君が、朝日新聞に投書して、ろう学校でも職業教育ばかりでなく、普通の高校生と同じように一般教科を勉強したいと訴えたことは、身につまされる思いがいたしました。投書した勇気を、偉いなあと感じたのです。

前号に書きましたが、ろう学校から、普通学校へのインテグレーションが盛んになった現代においては、清水君のような悩みは、現実的に解決がつくことでしょう。

しかし、戦後まだ復興途上だった1954年の時節としては、清水君の朝日新聞に対する投書は、障害者が自ら世間に投げかけた叫びとして、実に画期的なものだったのです。

みみより会の誕生についても、この清水君のがむしゃらさが、大きなきっかけとなりました。

## ● まず行動すること

ぼくは、決して弱虫ではありませんでしたが、恥ずかしがり屋で、難聴であることを隠そうとすることがありました。

ぼくの耳が完全でないのは、決してぼくの責任ではないのですが、哀れなことに、ぼくは、耳が不自由なのは、人間としての自分が至らないからだ自分を責める罪の意識すら持っていました。聞こえない自分が恥ずかしくて、世の中に対して申し訳ないときえ感じていたものです。だから、見知らぬ人となんでもない交際をすることが、どうしても気楽にはできない性格でした。

ところが、清水君を見ていると、ぼくとは正反対で、自分の耳が聞こえないことを、どんどん見知らぬ人に、売り込んでしまうような、実に大胆なところがあって新鮮でした。

ぼくと清水君は、会を創ることについて、何度か文通を続けておりましたが、1954年の暮れになると、清水君は、当時ぼくが住んでいた三鷹市の学生寮に突然現れました。彼は、文通だけでは我慢ができなくなって、文通をしていた東京の仲間たちに直接会うために、京都からやってきたのです。

三鷹の駅に着いた清水君は、駅員の人にぼくの寮まで電話してもらい、迎えを頼んできました。ぼくが不在だったものですから、法学部のTが駅までいってくれましたが、清水君は、このTと、すぐ仲良くなって一緒に銭湯へいったりしています。

見知らぬ人たちに、そんなふうに、ごく自然に協力をお願いできるというのは、現代のように障害者の情報が普及した平和な現代ならともかく、貧しかった当時の風潮の中では異例といってもよかったと思います。

清水君は、小学校の低学年のときの失聴で、言葉はしゃべれる、ろう者でした。しかし、まったく聞こえなかった彼が、ためらいもなく、どんどん耳の聴こえる人たちに語りかけ仲間になってしまう行動力は、厚い殻を打ち破るような力がありました。

Tのほかにも、同じ法学部のKとも、清水君は、親しくなりました。TやKは、興味深そうな様子で、清水君にいろいろ筆談で質問をしていましたが、彼は、自分が試されているかもしれないということについて、すこしも頓着しませんでした。

蛇足ですが、真面目だったTは、その後国家公務員の上級職をとって厚生省に入りました。ぼ

くや、ぼくを通じて清水君らを知ったことが、そのころ進路を決めようとしていた若いTに厚生省を選択させたような感じもいたします。Kは、農林省の役人になり、いまは兵庫県選出の代議士となっています。

## ● 川本先生、こんにちは

清水君は、結局、3日ほどぼくのところに泊まって京都へ戻りましたが、その間に、いろいろと、ぼくを引き回してくれました。

ぼくが難聴の大学生で、清水君はろうの高校生だったのです。本来なら、ぼくの方が清水君を引き回さなければならなかったところでしたが、結局は、清水君が、ぼくをあちこち引き回したような恰好でした。煽られてしまいました。

今でも、記憶にはっきりと残っているのは、川本宇之介先生のお宅を訪問したことと、朝日新聞へ行って、ぼくらの会のことを説明した時のことです。

川本先生というのは、既に相当のご高齢の様子でしたが、元国立聾唖学校（現在の筑波大学付属ろう学校）の校長をされ、当時ろう教育の長老的な立場に立っておられた方でした。

清水君は、まるで年来の知己を訪問するように、ぼくを川本先生の家まで引っ張って行きました。ですから、ぼくは、当然、清水君と川本先生とは熟知の間柄なんだろうと考えてしまったものですが、いま思うと、京都の清水君が、その前から川本先生を知っていたはずがなく、おそらく彼もまったくの初対面だった可能性もあります。

しかし、川本先生にお会いしたことは、結果的には、大変なプラスになりました。

## ● 難聴問題をやってほしい

「ろう教育が、戦後やり残している問題は、難聴児の問題なんです」

川本先生は、べつに嫌な顔をせずに、熱心に、ぼくらを歓迎してくださいました。

「戦前は、小石川の小日向台町小学校ですすね、難聴学級というのを開設したことがあったんです。しかし、残念ながら戦争のために中断のままになっていて、戦後は、まだ復活しておりません。ですからね、難聴者や中途失聴者の問題は、まだまだ、これからの段階なのです。あなた方が、新しく作ろうとする会についてはすすね、ろう児の問題ではなく、世の中に大勢いる難聴者や、中途失聴者をなるべく多く集めて、そちらの問題を考えていくようにしてください」

「ろう教育のことは、ろう学校に任せて」

と、川本先生は、ぼくの方を向いて念を押されました。

川本先生のしゃべる言葉は、ぼそぼそしていて、ぼくの耳には、よく聞こえませんでした。

今でも、そのときのことを考えると残念に思いますが、しかし、あのときの年老いた川本先生の真剣な声の響きは、まだよく覚えております。

アメリカにおける、スピーチクリニックの話、口話法のために手話を禁止しなければならないという話、ろう者同士の結婚による遺伝の話、日本ろう教育の歴史など、川本先生は、情熱をこめて話をしてくださいましたが、いまになって思い出すのは、

「耳の聞こえない人たちの集まりは、いろいろありますが、いずれも長続きしないんです。耳が聞こえないわけですから、いったん仲間割れをすると、修復するのに時間がかかる。あなた方の会は、ぜひ、その点に留意して、なかよくやってください」

と、いわれたことです。

川本先生も、まさか、ぼくらの会が35年も続くなどということは、そのとき、考えもしなかったことでしょう。

2時間近くお邪魔してしまいました。

最後には、耳の聞こえない清水君抜きで話が進む長い時間が気になって仕方ありませんでした。あのときの困惑を考えれば、現代の手話の興隆は、必要が産んだ当然の結果と思わないわけにはいきません。

## ● 朝日新聞での初会合

川本先生にお会いした次の日、清水君の文通仲間の教育大の中屋恭子さんや、中央大学の渡辺規男君らと会って、一緒に、朝日新聞の本社を訪問することになりました。

朝日新聞では、堀さんという社会部の記者が、熱心に話を聞いてくれましたが、朝日新聞にとっても、清水君の投稿がきっかけとなって、若い人の団体が生まれることとなり、そのことを清水君自身が仲間と一緒に報告にきたというのは、心温まる美談でした。

「会を創る目的は何ですか」

と、堀記者が質問しました。

ちょっと、ぼくは、いいよどみました。

聴覚障害に、どんな問題があるのか、ぼくにも、すべてがわかっていたわけではありません。ただみんなで会を創ることによって、相互の情報を交換し、問題の所在を認識して、解決を図るためのスタートラインにつくことができると信じたのです。

そのころイギリスのヒラリーという登山家が、初めてエベレストの登頂に成功して、

「なぜ山に登るのか」

という質問に対して、

「山がそこにあるからだ」

と答えた有名な話がありました。

ぼくらにしても、そんな気持ちでした。

1955年の1月30日に発会式をやることを決めて、朝日新聞の会議室の借用を申し出ました。耳の聞こえない清水君と一緒にできなかったら、ぼくらもそんな申し出をする勇気が出なかったかもしれません。

堀記者は、会議室の利用を手配してくれたばかりか、ぼくの話のを要領よくまとめて、1954年12月29日の都内版のトップに掲載してくれました。

その記事のおかげで、次の日から、ぼくの学生寮に大勢の人から手紙が殺到し、それに返事を出しているうちに、一人ぼっちだった魂のすみずみまで、大勢の仲間たちを知る喜びを味わうことになったのです。

最初のプリントを出そうとしていたぼくにとって、寄せられた手紙は、かけがえのない激励となりました。世の中に、こんなにも多くの聴覚障害を持つ人がおり、そのことに手をさしのべようとしている人たちがいたのかと思いました。

## ● 情熱が仕事を創る

1955年の1月20日に、最初のプリント「足踏み」ができあがりしました。

そして30日に、ぼくらは予定どおり、朝日新聞の会議室を借りて発会式を行いました。

今度は汽車賃を送って京都から清水君を呼び、記念写真を撮影しました。そのときに参加した者は、岡田秀穂、武井利文、貞山準一、中屋恭子、大楚間不二子、板橋正邦、清水昭雄、丸山一保、そのほか耳の聞こえる学生のみなさん、正確にいうと、ろう学校生徒が2人、中途失聴者が2人、難聴者が1人、健聴の大学生女子4名、男子1名、健聴の高校生女子3名、社会人2名の合計15人でした。

岡田秀穂さんは、その後、早稲田大学の講師から教授になりましたが、若い学生ばかりだっ

たぼくらの会の会長を30年近くもの長い間つとめてくださいました。

中屋さんは、結婚されて大原さんとなられ、ずっと高校で教鞭をとっておられます。教育大学付属ろう学校の生徒だった板橋さんは、現在は、全日本ろうあ連盟で活躍されています。中途失聴の武井さんは敬虔なクリスチャンとして信仰の道を歩まれ、清水君は、京都でご健在とのことです。

貞山さんと大楚間さんは、すでに亡くなられました。

中途失聴者の貞山さんは、熱心なクリスチャンで、ぼくを「ろう者の教会」に案内してくれましたが、そこで大勢の仲間を得ました。

日本ろう話学校のことについては、後に詳しく書かせていただきますが、発会式の前後の時期に桜上水の校舎を訪れ、大嶋功校長先生や望月敏彦教頭先生にお会いしました。

まだ日本におられたクレマ先生とも親しくお話しをすることができました。

実をいうと、川本先生を始め、初めて会う人たちの親切な話が、ぼくの耳には全部完全に聞こえたわけではありません。本来は、見知らぬ人を訪れて話を聞くというようなことは、苦手中の苦手というべきでした。

しかし、ろうの清水君が、平気で、どんどん話しかけていくのですから、難聴のぼくが尻込みすることはできなかったのです。

やがて、鈴木克美、団順一、高寺志郎のみなさんとの巡り会いがありました。

遠いむかしの話ですが、まるで昨日のことのようでもあります。

元気だったあの時代の若い男女の無心なエネルギーの思い出は、消そうと思っても消えるものではありません。

すべては、現状を打破しようとした、だった一人のろう学校生徒の、情熱に満ちた新聞投書から始まったのでした。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1990年「みみより」誌 No. 373 掲載

No.27

怒りと優しさのために 10

## 日本ろう話学校のことなど

丸山一保

新年おめでとうございます。

昨年も「みみより」誌上には、いくつかの貴重な原稿が掲載されました。7月号の木下幸雄さんの「文字放送をたのしむ」には、はっとさせられました。

### ● 文字放送をたのしむ

文字放送がドラマの字幕を放送していることは、知っていましたが、耳の聞こえない人が字幕つきで連続ドラマを楽しむ生活が、どんなに刺激的であるか、木下さんの文章を拝見するまでは、気が回りませんでした。

みみより会の高橋広司理事長は、毎月の例会後の懇親会から、最近「テレビを見る」といって、いつも7時には帰宅してしまうのですが、木下さんの文章によって、「ああそうだったのか」と合点ができました。そのことに気がつかなかった難聴の自分を、高橋さんに対して申し訳なく思ったものです。

みみより会例会で会ったり「みみより」誌上で読んだりして、ぼくらは、お互いにいろいろな仲間の、いろいろな耳と、その生活について知っているつもりですが、なかなかすべてを理解するということではできません。

みみより会の中でもそうなのですから、社会の人が、聴覚障害者の不便さについて、わかっているようでわかっていないのは珍しいことではありません。木下さんの原稿のような、さりげない近況報告の積み重ねは、耳の不便な人の生活について、貴重なヒントを与えるものだと思います。

## ● 地道なキャンペーンを

最近テレビで外国人の話を同時通訳で放送していますが、科学の進歩は、将来の文字放送で同時字幕が視聴できるかもしれません。つい、そんなことを考えてしまいます。

そういう発想が生まれるだけでも、現代社会の可能性は素晴らしいものがありますが、世の中が、もっと聴覚障害者について理解するようになれば、さらに便利な発明も出てくることでしょう。

手話放送や文字放送に見るように、聴覚障害についての常識が普及することは、より大きな恩恵を受けることにつながります。しかし、そのことに、ぼくらとして協力できることがあるとすれば、それは、政府やNHKの方針を待つだけではなく、やっぱり基本としては、耳の不自由な者自身が、その社会的不利益について世の中を相手にして叫び続けていかなければならないことだと思うのです。

みんなが、世の中に向かって叫ぶということが、世の中を動かしていくのです。

その意味では、初期のみみより会が、障害を持つ者だけの狭い集まりではなくて、むしろ耳の聞こえる学生たちも含めたオープンな集まりであり、大勢の耳の聞こえる支援者たちに囲まれてスタートしたことは、他の聴覚障害者団体と違った大きな特色だったと思っています。

いまから30年以上も前の、1958年の「みみより」新年号に、ぼくは次のように書きました。

「世の中には、耳の遠い人々がいます。少し聞こえる人。生まれつきの人や、途中からの人。

耳が叫ぶといたらおかしいけれど、言葉のない聴覚障害者の耳の叫びが、この『みみより』なのです。

耳の聞こえる人、耳の遠い人とが、力を合わせて、この会を育てています。

今日聞こえなくなった人、今日聞こえぬ赤ちゃんを産まれた方々のためにも、この『みみより』が、一つの希望となることを願って、私たちは、この会を進めているのです」

障害者といえば、それだけでも忌み嫌う人ばかりだった当時、被虐者というような感じで、「言葉のない聴覚障害者」と表現していましたが、いささか感傷的であった若い時代を思い出します。

## ● 日本ろう話学校のこと

1955年の1月に朝日新聞の会議室でスタートしたみみより会は、まず、ろう学校めぐりから始めました。会員になった人たちは、ろう学校を知らない人が多かったのです。

2月には、第2回目の会合を、世田谷区桜上水の日本ろう話学校で行い、それから市川にあつ

た国立教育大学付属ろう学校や、都立大塚ろう学校、同じく品川ろう学校などの教室を借りて、次々に例会を行いました。

最終的には、ずっと日本ろう話学校で例会を開くことになりました。現在、三田の障害者福祉会館に集まるように、当時のみみより会は、桜上水に集まったものです。

ご承知の方も多いと思いますが、日本ろう話学校は、昨年亡くなられたエドウィン・O・ライシャワー博士(元駐日大使)の両親、A・K・ライシャワー博士夫妻とロイス・F・クレーマー女史が、1920年に創立した日本で唯一の私立ろう学校です。A・K・ライシャワー夫妻の末娘フェリシアさんが、生まれたばかりのときの肺炎が原因でろうになってしまったことから、夫妻は、日本にアメリカ式の口話法のろう学校を作り、日本のろう児にも言葉を教えることを使命としてのです。

アメリカ人によって創設されたこのろう学校は、日本のろう教育の発展に先進的な役割を果たして参りました。とくにみみより会がスタートした1955年のころ、日本の社会は、まだまだ戦後の復興の途上にありましたが、ろうの生徒だけでなく、中途失聴した社会人や大学生を相手に読話の講習を行ったりして、社会的な活動にも乗り出していた日本ろう話学校の存在は、耳の聞こえない人や、その子供を持つ親たちにとって、かけがえのない拠り所となっていたのです。

ぼくが、岡田秀穂さんと一緒に同校を最初に訪問し、大嶋功校長先生と、望月敏彦教頭先生にお会いして「足踏み」をお届けしたのは、1955年の1月20日過ぎのことだったと思います。

大嶋校長先生は、にこやかにぼくらを迎え入れ、聴覚に障害を持つ者の中から自発的に生まれたみみより会の運動が、ろう教育の側から見ても、どれほど期待されたものであるかを熱心に語り、そのころアメリカで発行されていた「サイレント・ワーカー」という雑誌を見せてくださったりして、僕らの会が集会のために場所が必要なら日曜日に教室を貸してくださることを、快く約束してくださったのでした。

現在、80歳を越えて引き続き現職にあられる大嶋先生は、そのころ40代の若さで、日本における口話教育の完成に大きな情熱を傾けておられました。

中途失聴の団順一さんや、武井利文さん、藤川浩一さん、高寺志郎さんらは、当時、読話の講習を受けるためにこの学校に通っており、その縁で、すぐみみより会に参加されるようになったのです。

望月敏彦先生、松沢豪先生、十時晃先生、畑昭夫先生、それに館野善次郎さん、寺瀬順一さん、園田悦子さん、岡沢民子さん、西潟雅子さん(現在の高寺志郎夫人)、池尾寿一さん、設楽進さんなどは、同校に関係のあった方々で、当初のみみより会の盛り上げに力を貸してくださいました。

## ● ジャン、ジャン

創立者の一人、ロイス・F・クレーマー先生は、まだ、日本おられて、聴覚障害者に対する優しさを、そのまま具現されたような方でした。

クレーマー先生は、若くしてキリスト教の宣教師として日本に派遣されてから、戦争中もアメリカへ戻らず、生涯独身で、ミス・クレーマーと呼ばれ慕われておりましたが、もうかなりのお年のようにお見受けしました。

ぼくが、ミス・クレーマーにお目にかかったのは、日本ろう話学校ではなくて、目白の「ろう者の教会」の拝礼においてでしたが、毎週日曜日の午後、耳の不自由な人たちが目白教会の中の幼稚園舎に集まる中で、クレーマー先生は、聖書の一節を英文で黒板に書き、みんなに朗読させて、お祈りをしておられました。

ぼくは、夢の中にまで、クレーマー先生の「ジャン、ジャン」と、叫ぶ発音を耳にしました。

ジャンというのはヨハネの英語訓みです。

信念に基づいて、ろう者と一緒の時間を過ごしておられたクレーマー先生を見ていると、アメリカ人の偉さというようなものを感じたものです。それは、金儲けに狂奔する現代の日本人の遙か遠くにある姿でした。クレーマー先生一人の一生を考えただけで、21世紀に向けて、日本人が問われているものが、はっきりしてくると、ぼくは、思います。

ぼくらの会は、特定政治や、特定宗教に偏らずということの基本としておりましたが、しかし、日本ろう話学校のすべてが示している障害者に対する優しさや、ミス・クレーマーの存在が、ぼくらに無言の励ましと教示を与えてくれたことは、疑いもないことだったと思っています。

## ● みみより創刊号

「足踏み」、「みみより」、「胎動」、「パンフレット第4号」と、ぼくらは、1955年の1月から4月までの間に、順に謄写版刷りの4冊の小冊子を発行しました。

編集は、ぼくが担当しましたが、「4号」だけは、難聴だった会員の関根真明さんに交替しました。これらの小冊子を出していた過程で、表題に使った「みみより」が評判がよく、例会において正式に会の名称を「みみより会」とすることになりました。

ぼくらの「みみより」は1955年の5月に前坂典彦さんの謄写印刷で60ページの創刊号を発行することができました。謄写版というのは、いまの若い人は知らないでしょうが、そのころ全盛の印刷手段でした。

一字、一字、手で書いていくのです。

和歌山ろう学校出身の前坂さんは、名人といわれる孔版の芸術家でした。すばらしい技術と根気で、「みみより」創刊号を完成してくださいました。

発行は、「日本ろう話学校内みみより会」とさせていただき、巻頭文を大嶋先生にお願いしました。

## ● 鈴木克美さんと会う

「足踏み」ができたころ、ぼくは、道でバツタリと群馬県の高校時代に机を並べていた速川貫一さんという友人に出会い、何気なく、みみより会のことを彼に話しました。彼は、東京水産大学の学生でした。

「誰か、耳の遠い学生はいないか」

ぼくは、そのころ多分、会う人ごとに、そんなことばかりいっていたのでした。

「一人いるよ」

と速川さんが答えました。

「それじゃ、連絡するようにいってくれよ」

と、ぼくは、「足踏み」を手渡ししながら頼みました。あまり当てにしておりませんでした。現在アメリカに渡って大学教授となっている律儀な速川さんの連絡のおかげで現会長の鈴木克美さんから、ある日、突然手紙を受けとることになったのです。

やがて、ぼくらは、例会で会って挨拶しました。鈴木さんは、たちまち、お魚の話で例会の出席者全員を魅了してしまいました。

現在東海大学の教授であり、付属水族館の副館長である鈴木さんは、いろいろな本を著して、素晴らしい活躍をされておられますが、彼の現在があるのは、その努力、工夫もさることながら、やっぱり彼が、だれにも左右されず、好きな道を自分で選んで突き進んだことにあるというように、ぼくは、思います。鈴木さんは、本当に、そのころから魚に夢中だったのです。

鈴木さんの耳は、感音系の難聴で、ぼくの難聴とも違った障害でした。情熱家の鈴木さんは、魚だけでなく、みみより会にも夢中になってしまいました。

みみより会に夢中になった人は、それだけ厳しい孤独を背負っていた人たちなのです。こういう人たちを、「みみより病患者」と呼ぶことにしましたが、ぼくらは、みんな「みみより病患者」でした。

鈴木さんは、繊細な神経の持ち主で、たとえば、カレーライスの味や、作り方にも一家言あります。もちろん魚のことには、うるさい。ぼくは、アバウトで、サンマとアジの区別さえ分からない。鈴木さんは、病気になるとすれば胃病。ぼくは、食べ過ぎで心臓をやられると、みんなが話していました。まったく性格も体質も違う二人でしたが、難聴ということで許し合いました。

ぼくには、難聴の鈴木さんの孤独が、よくわかりました。人一倍がんばったはずの鈴木少年の負けん気は、そのまま、少年時代のぼくの孤独だったのです。彼も、ぼくを見たのだと思います。

なにしろ、若かった。

鈴木さん、前坂さん、関根さん、それぞれ不自由な耳を持ちながら元気いっぱい、明るい陽光のように、汗ばんだ表情を輝かせていたその昔を、さまざま思い出します。

### ■ 筆者からのお断り ■

この文章は1991年の「みみより」に発表したものです。みみより会を始めた1955年ごろの日本ろう話学校に関する尊敬は、この文章に書いた通りでした。口話法に対しては、とくに疑念を持ちませんでした。それはろう教育者がそうであったように、聴覚に障害を持った者もそうだったのです。現在では、筆者は、日本ろう話学校に対しては厳しい意見をもっております。それは1990年に発行された同校の卒業生である寺瀬淳一さんの著書「空澄む山」と、2000年に発行された故大嶋功校長の遺稿集「可能性は空の極みまで」により、日本ろう話学校が、つい最近まで手話を蔑視する思想によって生徒たちの手話使用を厳しく排斥していたことや、学校として父兄や教育界にその思想を強烈にPRしていたことが明確に理解されたからです。2001年になっても、同校のホームページでは、手話を使わないことを誇らしい同校の特色としてPRしております。このことは、筆者の信条に反しますので、残念ながら初期に抱いた同校に対する尊敬の念は、いまではまったく違っていることを誤解のないようにお断りする次第です。

なお、筆者の意見は、「みみより」475号(2001年)の21世紀雑感「可能性は空の極みまで」および、日本手話研究所「手話コミュニケーション研究40」の「日本聾話学校と聴覚主導のろう教育」(2001年)に筆者(筆名・江時 久)が書いたものをご参照願えれば幸いです。

丸 山 一 保 (2002年10月)

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1991年「みみより」誌 No.374 掲載

No.28

花・人群れの中に

大久保 紀次

どこかで見た娘だ……

霜の朝

私鉄T駅、上りホームのミニ・ショップ

吐く息白く寒々と肩をすくめた  
電車待ちの通勤客の群れの中からかいま見る  
そこだけが春のようなひと所  
新聞、週刊誌、タバコにガムにドリンク剤  
ところ狭しと並べられた雑貨に囲まれて  
キビキビ客あしらいに余念のない  
紺の制服の若い売り子  
梅の蕾のような  
ちょっとすました可憐な顔

確かにどこかで会った娘だ  
思いだせないから横目で見ている  
記憶の糸をたぐっている間に  
轟音をあげて入ってくる電車……  
人群れが去って行って  
とり残されてひとりホームに佇むぼくを  
妙な男と違ってか  
ふと向けられたつぶらな瞳  
「あらッ…」と彼女も考える顔

そうだ、あの娘だ2年前  
町の手話サークルに招かれて講演の後  
会場の隅で手をあげた女子高生  
「9つの時間こえなくなって40年も  
音のない世界にいたなんて中国残留孤児のよう、  
なのにどうしてそんなに日本語がお上手なのですか？」  
質問の突飛さもさることながら  
このぼくがそんな齢のオジンであることを  
衆人に認識させられた思い  
苦笑しながら壇上に絶句させた、あの娘

引いては満ちる潮のように  
ホームにまた人は群れて  
狭いショップの中でこま鼠のように動く彼女  
「はい、マイルドセブン！」  
「はい、お釣！」  
そんな口調で客に対応しながら  
時々チラッとこちらを覗う、ちょっと頬染めてはにかんだ目ざし  
どうやら向こうも思いだしたようだが……

通訳者が立合っの質問だったから  
たぶん彼女はあの頃はまだ初級？  
あれからどうなったのか知らないが  
正月に年始まわりできたろう協の世話役の話では  
「うわべだけの“手話ブーム”にのせられたのかなァ  
定着率がいまひとつ……  
講座を無事に終了しても  
それからどこへいってしまうのか  
何をしているかわからないのが大半……」という  
たぶんあの娘もその一人？

ぼくははじめて正面から向き合っ  
「やあ、しばらくだね」  
微笑しながら手話で会釈してやった  
そこにまた電車がきて、腕時計の針にせつつかれた  
満員の電車に押しこめられながら  
ふりかえると  
ああ、紅梅が咲いたような彼女の笑顔——  
鸚鵡返しにぎこちなく「シバラクですネ！」  
投げてよこした手話の花！

<手話通訳者になりたい>  
<福祉関係の仕事に活かしたい>  
そんなけなげな若い初心も  
絶えまなく入ってきて出てゆく電車  
絶えまなく乗降する人群れのような時流の中  
生きることの現実に押し流されて  
散りぢりになってしまっても  
人の世のどこかで  
あんなふうには咲いている  
ほころぶ一輪の梅のように……  
あいさつ程度の手話ひとつでも  
ほのぼの伝わる心の暖み

速度をあげはじめた電車の窓外  
ホームの外れで雀が2、3羽パッと飛立つ  
朝日に染まる霜の上そこにも小さな  
花のような足跡を擦して……

## 夕 日

岸野 千鶴子

急に思い立って上越新幹線にとび乗り、高崎の龍広寺に俳人村上鬼城の墓をたずねたのは、初冬の日ざしの翳り始めた午後のことである。高崎駅の観光案内所には訪れる人の多いらしく、地図が示されている。駅から歩いて10分とのこと、思っていたより近い。

小さな山門をくぐると、右手には輝くばかりに黄葉した萩が1株ごとに括られ、山茶花が淡い紅色を重ねるように、今を盛と花開いていた。丁度、庭師が4、5人松の手入れの最中で、香をたきこめたような香りが慶大に漂っている。ことに本堂の前のさるすべりの大樹が、紅葉して幹までほのぼのと赤みを帯びて美しくしばらく足を止めてみとれていた。

左手の鐘楼のすぐ脇に桜の花が1本、その下に白く塗られた角柱が建っていて、「史跡村上鬼城の墓」と書かれてある。その先は墓地になっているが、矢印も何もない。落葉を焚いていた男の方に「聞こえないので」と案内を乞うと、こころよく先に立って案内してくださった。

鬼城の墓は、歴代の僧の眠るすぐ隣り、玉垣に囲まれた屋根付きの立派なお墓で、やや斜め後ろに見える1本の杉の木に、真っ赤な夕日が染まって西方浄土の趣を呈していた。

遠山にはたと日落つる枯野かな

鬼城の愛した高崎の風土をそこに見る。

鬼城は初め、軍人を志しながら耳を病み、聾者となったことで断念。代書人として生計をたてながら、2男8女の子福者となった。当時の生活は、聾者である故の貧しい、厳しい生活の日々。にもかかわらず、「ノタレ死ニをすることがあっても娘達の教育をする」と女学校へ通わせたという。武士の家に生まれ、士族としての誇りと、障害に負けぬ強い意志が、全生涯をつらぬいたのであろう。墓前に額づきながらしみじみと偲んだ。

この高崎市に「村上鬼城顕彰会」が発足、2年程前に招かれて俳句大会に参加したことがある。その時、初めて鬼城の遺品、遺墨にまみえる機会に恵まれた。

今でも眼に焼きついて離れないのは、縞柄の着物の切端で作られた補聴器袋であった。現在の補聴器の4倍くらいの大きなもので、補聴器は鬼城と共に黄泉のみちずれとなったという。

色褪せた補聴器袋には、鬼城のたましいが宿っているようで、みつめている中に涙があふれて困った。この時ほど俳人鬼城を身近に感じたことはない。

俳諧のえにしに濃くなる初冠雪 千鶴子

鬼城の「きこえ」は耳疾の後も、少しずつ低下していったように思われる句が、ここにある。

小鳥このごろ音もさせずに来て居りぬ

「小鳥」(秋)の句。小鳥の声が或る日聞こえていない事に気付く。聴力の衰えをさらにはっきり意識したときの驚きが、「ことりこのごろ」と言う表現によって、さりげなく、自問自答のような、また呟くごとく詠まれている。胸の内にこめられた悲しみ、切なさ、孤独感がひしひしと伝わってくる。

ひたすらに小鳥をみつめていたのであろう鬼城の後姿が、オーバーラップして見えてくる。そこでもう少し音に関する句を2、3あげてみる。

暑き日や簾あむ音ばさりばさり

ざぶざぶと素麺さます小桶かな

「暑き日」「素麺」共に(夏)の句。作者鬼城に、この音は聞こえていないと思う。

1句目「ばさりばさり」は、暑い日中休む間もなく簾をあむ人に追い討ちをかけるような暑さとしてひびいてくる。当時は冬の農家の副業であった簾あみであるから、なおさら憐憫の情の濃いものと思う。

2句目は厨での所見ともとれる。「ざぶざぶ」という音によって、素麺をさますきびきびとしたすばやい手さばきが見えてきて清涼感が伝わってくる。一瞬の動作を、音の効果によって表す。鬼城は健聴者以上のものを、確かな眼でとらえている。

残雪やごうごうと吹く松の風

「残雪」は(春)の句。この句について、先師大野林火の鑑賞文から引用させて頂く。

≪「ごうごう」は風の擬音として決して新しいものではないが、それが気の利いた言葉よりも、松風の本質に迫っているのは、作者の気魄が乗っているからである。この松は千古の風雪に耐えた老松であろう。地上の残雪と呼応して、早春のきびしさを示し、鬼城の心耳の聞きとめた松風の荘厳である≫

鬼城が晩年門人に言った言葉「音の奥に潜んでいる音を聴いてくるのが詩人なんだ」。

夕日の輝きの中から鬼城の声の真実を聴くような感動を覚えながら踵を返した。

都 鳥 岸野 千鶴子

都鳥岸をひとつに湖と川

埋火やこの年吉とうらなうて

湯豆腐の湯葉華やぐも京泊り

暖房の瑠璃くもらせて御陵守

凍る沼鵜いそいそ歩かせて

寒禽の声に鈴振る補聴器よ

お山焼その夜しんしんと雪が降る

日脚伸ぶ 岸野不三夫

橋渡る鴨来る方を恵方とし

鐘撞くや寒九の水に口漱ぎ

藪入の門前町に駄菓子買ふ

山茶花一片苞にとどめて寒牡丹

東塔西塔見返り仰ぎ日脚伸ぶ

雪降り古墳一基を野に据えて

遠望の沼のかがやきゆきたんぼぼ

きしの ちづこ(東京都豊島区池袋)  
みみより会会員・俳人(蘭・方円同人)  
故・不三夫氏のご主人  
1991年「みみより」誌 No. 374 掲載

No.30

## 多様化時代の波しぶき

鈴木克美

2月上旬、そんなに風の冷たい日ではなかった。用事があって、家内を連れて東京へ出て、地下鉄新宿線の馬喰横山町の上りエスカレーターに立っていた。と、うしろから肩をたたく人がいる。振り返ると、りっぱな恰幅の紳士がにこにこしながら立っていて、おだやかな顔つきと大きな知的な眼には、見覚えがあるのだが、はて、だれだったっけ…。

でも、有り難いことにすぐ思い出せた。わたしのつとめる大学を卒業して、すぐ海洋調査会社につとめたI君。若いときはほっそりしていたが、それももう50歳、技術も経営手腕も認められているのだろう、技術部長を兼ねながら常務取締役になされて、毎日忙しいと、今年の年賀状には書いてあった。

びっくりして2人を見比べている家内に、「彼はね、ほら、昔、瀬戸内海に水島精油所から重油

が流れ出して、大騒ぎになったことがあっただろう、あのとき院生でね。調査をいっしょにやったんだよ」「先生は船で沖へ出て海にもぐり、わたしは砂浜を歩くばかりでしてね、羨ましかったんですよ」と、こもごも説明しながら歩く。会社が近いからと、わたしたちを目的の場所まで連れて行ってくれたI君と、握手して別れた。

「Iさんはね、最近、左の耳が聞こえなくなったんですって」「え、そんなこと、いっていたの。それは知らなかった」

「片方の耳が聞こえないとかって人は、多いのね」「そうだよ。統計では、全人口の5パーセントが聴覚障害者だとかで、その割合からいうと、耳が多少でも聞こえない人は、日本中に6,000,000人いるんだって」…

わたしはもう、とっくに定年になって、魚の研究はできなくなった。もう、しないと決めた。せいぜい、書き残した論文を仕上げるだけにして、あとは悠々自適、のつもりだった。それが、ひよんなことから、水族館の歴史調べを始めて、だんだん面白くなって、はまってしまった。なにしろ、だれもまだ、やっていないというのが、泣き所だ。

水族館の本はたくさんある。でも、大部分は水族見物案内のようなもので、水族館の歴史や役割に取り組んだ本はほとんどない。

ちょうど120年前の明治15年、文明開化の時代に、西欧渡来の日本最初の水族館ができた。それ以来、日本全国に明治時代だけで16、第二次大戦前に46、戦後の10年間だけで100を越す水族館がつくられた。全部で何館あったかは、まだはっきりしない。現在開館中のがざっと100しかもなお、次々に巨大水族館ができてゆく。今や、数も規模もアメリカをぐんと追い越して、日本は世界一の水族館国である。どうして、日本人はそんなにも水族館が好きなのか。

日本がまわりを海に囲まれた島国で、日本人が海洋民族だから…という人がいる。それはちがうと、わたしは思う。日本は海の国ではない。山の国だ。定着を好み、土地への執着の強い日本人は、漂泊を好む海洋民族ではない。農耕民族だ。海や魚に関心のある人は多くない。海は見えているものであって、わざわざ見るものではない。なのに、なぜ、日本人が世界一の水族館好きで、日本の水族館は世界一なのか。

図書館をまわり、古本屋で調べ、手紙とファックスとインターネットを使って、歴史の空白を埋めてゆく。「先駆的な仕事」と学会でほめられた魚の研究にも張り合いがあったが、こういう仕事もわたしに向いている。

と、ついつい、仕事の話をする、と、「聴覚障害者ではじめてですね」と、いって下さる方がいる。気持は有難いが、じつは、あまりうれしくない。他に同障の人がいなければ、中身がどうしても「聴覚障害者として初めての仕事」にはちがいない。正直なところ、「障害者としてはじめて博士になった」とほめられるよりも、「魚の雌雄同体の研究で、はじめて博士になった」といってもらえるほうが何倍もうれしい。

自分にできることをして生きたい、障害者の枠からはみ出たい、自分の限界を越えたいと、あせってきた結果に「障害者としては」と枕をふられると、鼻白む。うまくいえないが、何か割り引かれているような気がする。

障害者はもともと、「人並み」「普通」の基準から外れて生きなければならないのだから、独創的に生きるほうがいいと思う。今、これからは、社会が複雑になってきただけ、多様な生き方が許される時代になるだろう。そこにもここにも、「障害者として初」が、いっぱい出てきて、なるべく早く、そんなこと、だれもいわない社会になってほしい。

障害者はまじめすぎる。障害者の生き方といえば、今までは、職業論ばかりだった。そこからも、一皮むけていいのではないか。

たとえば、東南アジアのある国の地方都市に、日本から移住して、一人で暮らしている聴覚障害者がいる。その話をすると、たいていの人が「へえ！」と、まずおどろいて、それから「どうして?」「どんな仕事をしている?」「どうやって食べている?」と、聞かれる。他人がどうやって生きていたって、別にいいじゃない。でももし、あなただったらどうする。

まあ、たとえば、日本でもらう平均的な年金、それだけでふつうに生活してゆくのは、この国では、ちょっと苦しい。でも、物価の安い国なら、それだけの収入があれば、らくらく食べていけるだろう。また、たとえば、パラリンピックで優勝した日本女性が、カナダ人の同障の男性と結婚して、あちらに住んでいる。縁があったからには違いないが、きっかけさえあれば、そういう選択肢もあると心強い。どちらも、あとはご本人の人生観の問題。今は、ほんとうに、個性化、多様化の時代への過渡期なのだと思う。

今年の2月10日、東京で「難聴者の聞こえと生活の実態シンポジウム」には、ずいぶん大勢の参加者があった。なかなか、いいシンポジウムだった。わがみみより会参与の丸山一保さんも、パネリストとして「難聴者の耳の聞こえは多様であるのに、その実態が理解されていない」という趣旨の話題提供をされた。ストーンと胸に落ちる、いいお話だった。

丸山さんもいっていたように、難聴者・中途失聴者の団体の主催で、こういうシンポジウムが開かれたのは、画期的なことだったかもしれない。やっぱり、今は多様化の時代になったんだと思った。会場でひとこと意見をいおうと思ってマイクをもらったが、いざ、立ってみると気おくれして、別のことをしゃべってしまった。わたしの言いたかったことを、ちょっとだけ、書いてみたい。

まず、難聴者の聞こえ方がさまざまで、聴力が何デシベルと、それだけで表現するのは無理だとする意見に賛成。次に、難聴者や中途失聴者の団体が、会員一人一人の「聞こえの多様性」を打ち出したことに敬服。会員の多様性を認めながら会をまとめてゆくのはむつかしいだろうに、あえて、多様化時代に挑戦する姿勢に感服。

一方、そのシンポジウムで「デシベルダウン」という言葉も聞いた。「デシベルダウンの運動(!)」とは不思議な言葉で、知らない人には誤解されはしないかと、少し心配だが、要するに、身体障害手帳の交付される現在の聴力損失の基準が70デシベルなのを下げ、40~70デシベル程度の聴力損失の中度・軽度の難聴者も、福祉行政の対象に該当するように要求しようというような、それもいいことだろう。しかし、これには、多少の違和感があった。

一昨年、わたしの家内が、左の耳が聞こえにくいと言いだした。急に聞こえなくなったのではなく、もう少し前から、へんだ、へんだと思っていたと。家内は健聴で、それまで自分の聞こえを心配したことはなかった。年とったからだろう。頭が重い。耳鳴りがひどい。めまいがする。声や音のくる方角がわからない。騒がしい場所で話が聞き取れない。人が左側にくると会話が途切れる。注意が散漫になる。ゆううつだ…。

どれも難聴者には日常のことで、わたしも通ってきた道だから、悩みはよくわかる。

彼女は、難聴者の亭主といっしょに暮らして、40年になる。つれあいの耳が聞こえない、だんだん聞こえなくなってゆくというプレッシャーを、そばにいていっしょに受け止めるのはたいへんだっただろう。「障害者の妻ってなんだ」とかいう新聞記事を、先ごろ見たが、他人ごとではあるまい。そういう内心の相克もあっただろう。

家内はもともと、「障害者の妻」としてではなく、ごくふつうの男女として、わたしとの共同生活を始めたつもりだったという。わたしもそのつもりだったのだが、やはり、そんなきれいごとでは済まなかった。こちら側にも健聴の妻に生活を頼る気持があり、難聴の進行につれて、その

負担がだんだん重くなった。夫婦の一方の耳が聞こえないという生活の不便と不安は、聞こえるもう一人にも重くのしかかる。

それでも、難聴というのが、そんなにも、耳の聞こえ以外の体と心の負担になっていたとは、わからなかったと。自分が難聴になってみて、ようやく、わかったことだったと。

難聴を自覚した家内が不安がるので、地元の難聴者団体で知り合った耳鼻科のお医者さんを紹介して、診断を受けに行かせた。初対面が感じのいい人だったし、難聴者団体の賛助会員になって下さっている先生なら、診断もだが、いい助言もして下さるだろうと。

ところが、案に相違してぶんむくれて帰ってきた。「聴骨が変形しているので、治療してもよくならないだろう」と、それはまあ、しかたがないが「旦那さんの難聴がうつったんでしょうと、笑いながらいわれた」と。

難聴がうつるわけではないから、冗談にきまっているが、耳が聞こえなくなっしょんぼりしている初診の患者にいう医師の言葉にしては無神経だ。難聴者だって、自分の病状を冗談にされて、いっしょにケラケラ笑える、図太い神経の持ち主ばかりではない。お医者さんにも「初心の難聴者」の心細さを思いやる気持がほしい。

ということで、最後に最初の話へもどる。

家内が耳の不自由さを訴えるようになってから、周囲に耳の聞こえに悩んでいる人が意外に多いことに気が付いたという。親しくしている近所の奥さんがそうだし、高校時代から親しくしているグループの一人も、左耳が聞こえなくて不便がっているという。先の近所の奥さんは、最近、もう一方の耳も聞こえにくくなって。心細がっていると…。

かといって、その皆さんが、自分を聴覚障害者だと思いう意識はうすいようだ。最初に書いたI君もそうだし、以前書いた、プランクトン学のMO先生もそうだった。聴覚障害者団体や障害者福祉に関心をもつ人も少なく、むしろ、そのような話題を避ける傾向もある。片耳が聞こえない、あるいは軽い難聴なら、眼鏡をかけている人が視覚障害者を自覚していないのと同じ気持かもしれない。

聴覚障害者が6,000,000人という数字のなかには、こういう人たちがたくさんふくまれているはずだ。そのような軽度の難聴者が難聴者団体に加われば、大きな会員増につながり、社会的発言力が増すかもしれない。集団の多様性が高まるだろう。

もっとも、軽度中度の難聴者が、積極的に障害者手帳の交付を求めようか。障害者団体に加わってくるだろうか。会に加わって何を求めるのだろうか。会は彼らに、どのようなメニューを用意できるだろうか。先日のシンポジウムでも、ある軽難聴の女性会員が会の中での孤立感や被差別感を訴えていた。

障害者団体ならば、重度の障害者に足並みを揃えるのが当然、ないしは常識と思ってきた気持に冷水をかけられたようだった。

軽度中度の難聴者には、難聴者、中途失聴者の心のリハビリを引き受けてもらえないだろうか。難聴の相談員、ピア・カウンセラーが全国的にもっとほしい。制度の確立も、ぜひ、希望したい。そしてそのうち、聴覚障害者の耳鼻科のお医者さん、ピア・ドクターも現れてくれるだろう。首を長くして待とう。

多様化時代の波しぶき。避けずに前に出て受け止めて。たくましく取り込んでほしい。

## 雨のち曇り時々晴れ

鈴木克美

大学を定年退職して、さて、なにが楽になったかといって、会議に出なくてもよくなったのが、いちばんうれしい。

大学の教員には、出勤退勤の時間拘束がない。何時に来ようと帰ろうと、自由である。来ても来なくてもいい。もちろん、まったくの自由ではない。決められた講義と、教授会ほかの会議と、学生の研究指導が義務…と、これだけいうと、なんだか気楽な稼業のようだが、少なくとも理系の私立大学の勤務は、結構ハードだった。

なにしろ、学生の数が多い。講義もゼミもたくさん持たされる。それに、会議がまた多くて、学部と博物館と研究所と、合わせて毎月の定例会議が8つから10。臨時の委員会がこれに加わる。週6コマの講義のほかに、毎週2回から3回の会議は多すぎる。学外の委員会や館長会議などは、また、別である。

会議の中身もいろいろだが、ともかく、耳が聞こえさえすればなんでもない会議が、難聴者のわたしにはつらかった。中身がわからないこと自体もだし、わからない会議で、平均2時間もの無為の時間を過ごさなくてはならないのが耐え難かった。

ある日の教授会に、たまたま、わたしと同じような無為な時間を過ごしている人物が2人出席していた。イギリス人とアメリカ人の新任の助教授で、新任教員として紹介を受けるためだった。通訳はついていなかった。2人とも、まったく理解できない日本語で進められる会議を、ひたすら、耐えている様子が気の毒だった。

ふと、思った。いうなれば、会議の席の自分は、外国人のようなものではないかと。

どうしても会議に出てもらいたい重要人物とか、組織のトップとかなら、手話通訳だろうが要約筆記者だろうが、希望すれば、どんどん、つけてくれるだろう。でも、ふつうはそこまでゆかない。外国人先生が通訳なしでほっておかれたのだから、組織内ではその程度の待遇だからだ。それが組織の論理だ。

というような話を、みみより会でしたところが、「手話通訳とか、要約筆記とか、つけてもらえないのか」と、聞く人がいた。

「ついていない」と答えると、「じゃ、なんのために出ているのか」と…。うーん、なんのために出ているのかと聞かれてもねえ。

会議は組織人にとって、あるときは義務、別のときは権利、会議に出るのがステータス(地位)の証明にもなっている。耳が聞こえないから会議に出ても意味がないというのは理屈だが、そう突っ張っても、何かの配慮をしてくれるどころか、「会議に出なくていい立場」に落とされる可能性のほうが大きい。

では、と、実際に会議出席を免除されるのも痛しかゆし。情報弱者の聴覚障害者は、ますます、孤立してしまいうだろう。

もっとも、中身のわからない会議も、まるきり無為ではない。会議はふつう、たくさん出された資料もとに進むのから、資料を丹念に読んで、これは重要と思ったところを、あとでだれかに

くわしく聞けばいい。資料は出席者だけに配られるから、欠席すると、それも手に入らなくなる。資料に記載のない緊急動議や記載の変更、これは困る。たまに偉い方が出席されて、方針とか抱負とかを原稿なしで演説されるのも、じつは困る。

自分がトップの会議なら、まだ、自分のペースで進められる。発言がわからなければ聞き返すし、隣に尋ねながら、あるいは要点をメモしてもらいながら進めればいい。それでも聞き漏らすことがあって、「そのことはもう、会議で決まりました」といわれて、腹が立ち、「会議に拘束されない」と言い放ったこともある。でも、そんな我が侘をしょっちゅうやると、スタッフが会議を信用しなくなる心配があって、今度はこちらが困る。

この4月半ば、清水にわたしを呼んで下さった、もと学部長、博物館長のI先生が札幌で亡くなられた。85歳だった。

1969年の秋、わたしは金沢の水族館から清水へ移ってきた。大学が海洋科学博物館をつくることになって、どうせつくるのなら、世界のどこにもない、雄大で独創的なものをつくろう…というわけで、水族館部門の責任者を仰せつかった。35歳だった。

わたしの採用は、大学で大きな権限を持っていたI先生との、たった一度の面接で決まった。I先生は、こちらの勝手な希望をじっくり聞いて、「そうです。人間、夢がなきゃだめなんです。いっしょにやってゆきましょう」と、手短かにいわれて、握手して、面接はただ、それだけで終わった。

I先生は面白い方だった。旅行大好きで、旅先での奇行珍談と武勇伝は数限りなく、お鼻の下が長くて、ややス〇〇〇だった。麻雀も大好きで、でも下手くそだった。斗酒なお辞せず。お世話になった面々が年に一度集まると、「先生が清水の裏町で消費したアルコールは数千バーレルに達し…」と、冗談大学の感謝状が読み上げられるのが恒例だった。

ともかく、大学へきて、まず驚いたのは、会議がやたらに多いこと、会議に出す文書のすごく多いことだった。夜おそくまで文書を書いた。まだ、ワープロもない時代だった。

文書はともかく、不慣れで苦手なたくさんの方の会議に出て、困っているわたしに、I先生はしばしば、助け船を出して下さった。

ふつう、会議ではなにか質問があって、すぐ明確に答えられなければ、その質問は別の人にまわされてしまう。そんなとき、I先生は「鈴木君が聞き取れなかったようだから」と、質問者を抑えて、わたしの隣席の誰かにメモを出すようにいって下さった。「それは鈴木君に」と、わざわざ、回して発言させて下さるときもあった。そのお陰で、隣席の人が気軽にメモを見せてくれるようになった。周囲が自然に一目置いてくれるようにもなった。たくさんの方の会議をしのいでこれたのも、I先生のお蔭だった。

遅い出発で研究を始めたのだからと、学会などの研究発表は共同研究者にまかせて、もっぱら印刷論文の原稿を書く役割に徹しようとした。自分なりの工夫のつもりだった。

と、そんな戦略は、考え過ぎだと、I先生はおっしゃる。「研究者が口頭発表をしなくては損だよ。書いたものの発表はどうしてもあとになる。質問が聞き取れなければ、耳が遠くて聞き取れないといえればいい。もう一度言って下さいといえればいい。なんとかなるもんだ」

「なんとかなるもんだ」は、I先生の口癖の一つだった。

もっとも、聞こえなくて質問に答えられないのを、知らなくて答えられないと誤解されるのがいやだ、何度聞き返しても聞き取れないのもいやだ…と、ウジウジ考えてしまう難聴者としては、なかなか、そんなふうには単純明快には割り切れない。どうしても独り相撲をとって、引下がろうとしてしまう。そこがむつかしい。越えるには勇気がある壁、だからこそ、越える意味があるのだが…。

「日本文化は恥の文化だから、みんな、恥をかくの怖がって、縮こまっている。恥をかいたっていい。恥をかかなきゃだめだ」…聞こえなくて恥をかくのは、たまらなくいやだが、それも、バネにできればいい。

「恥をかかなきゃだめ」も、I先生の口癖の一つだった。

I先生には、ずいぶん、いろんなことをやらせられた。解体前のソ連へも、アルゼンチンやブラジルへも行かされ、おまけに発表までさせられた。東南アジアの学生たちの指導まで押し付けられた。

昭和天皇が博物館へおいでになると決まったとき、皆の前では「鈴木君、君は耳が遠いからね、陛下のご案内は無理だろう。でも、気にしないでね」と、周囲に聞こえよがしにいておいて、実際には、当日のご案内の役目を、わたしにほとんどまかせてしまった。

「無理が通れば道理引っ込む」というが、無理も無理にやっているうちに、無理ではなくなる事もあると、I先生のお陰で悟った。

I先生が定年退職して郷里の北海道へ帰られてから、水産庁委員の話があった。皇太子(現天皇)がはじめて、執筆者の一人になった魚類図鑑の出版記念会へ出席の話もきた。

しかし、そういう名誉な席への出席も、あまり、気が進まない…と、愚痴っぽい話を、Oさんにしたのがきっかけになって、はじめて、個人的にノートテーカーを紹介してもらえることになった。要約筆記が普及する少し前で、個人のためにノートテークをしてもらおうとは、なぜか、思いもしなかった。

しかし、お願いしてみると、これがとてもよかった。ありがたかった。また一つ、新しい可能性が開けたようにさえ思えた。

健聴者との座談会にも、いくつか出させてもらったし、元NHKアナウンサーの鈴木健二さんとの対談にもついてもらった。代わりに同時通訳のヘッドフォンをつけてもらい、国際会議に同席もしてもらった。

手話が十分できない自分には、手話通訳よりもノートテークのほうが、はるかに便利である。手話通訳だと、通訳者をずっと見つづけなければならないが、要約筆記ならば、書いてくれるのを読みながら、自分でメモもとれる。「資料をごらん下さい」といわれて、ページを教えてもらい、上に置かれた資料をめくって読む余裕も持てる。資料と合わせて読めれば、これでもう十分だ。

「眼からウロコ」の体験もあった。ある学会の評議員会で、だれかの発言を受けて、議長と副議長が話し合っていた。他の委員はみな黙って静かにしていた。ノートテークの手も止まったままだ。たまりかねて催促した。「何を話し合っているのですか」「何も聞こえないんですよ。何か、私語みたいですね」

えっ!? 会議で他のだれもが聞き取れない私語を、議長と副議長が交わす場面もあるとは…恥ずかしながら、知らなかった。だれもが知っていそうな、当然のことを知らない、聴覚障害者とは、そういうものなんだ。

政府委員会とか専門家集団とかの会議の席にノートテーカーが付き添う場面は、今はまだ、めったにないはずだから、初体験の委員さんたちは、最初はげげんに思うようだ。しかし、耳の不自由な委員がいて、耳代わりの筆記者がついている事情は、わかりやすい。

で、意識して、区切り区切りでどんどん質問し、発言する。耳が不自由でも、会議の成り行きを把握でき、有益な意見も出てくるとわかれば、会議で大事にもらえる。

こういうのもきっと、聴覚障害者と要約筆記者と双方の宣伝に役立つだろう。逆にいえば、こうもしないと、見ただけでは分からない難聴者の存在は知られずに終わってしまう。それでは、聴覚障害者の「社会進出」への一里塚にもならない。

出られなかった会議に出られるようになって、出るべき会議にも聞くことに緊張せずに出られ

るようになった。会議に自分の役立つ場面もあると確認できた。これでようやく、「何のために会議に出ているのか」と聞かれても、「自分が必要とされているからです」と、いえるようになった。

もっと早く、その恩恵を受けていれば、もっと活動できたかもしれない。余計な苦勞をしてきたのかもしれない。でも、徒勞だったとは思わない。無為の時間であっても、たくさんの方の会議に出ているお陰で、会議の進め方もわかったし、出なければ知らなかったことも体験できた。ただ、大学の組織内での会議をノートテイクしてもらうところまでは行かなかった。それが、心残りである。

要約筆記を、聴覚障害者が一般に利用できるようになったのは、もちろん、ノーマライゼーション運動の多年の成果の一つである。その成果を、こうして「福祉からはみ出た」とも思える場面でも利用できるようになったとは、いい時代になった。そして、わたし個人としては、会議に出る自信をつけさせて下さった I 先生、ノートテーカーの起用を強くすすめてくれた O さんのお蔭を思う。

人はやっぱり、存在と力を認められたときに伸びる。人生には、その「きっかけ」がたくさんある。出会いもきっとある。これからの人たちには、昔よりふえたはずのきっかけと可能性をとらえて、伸びて行ってほしい。

でなければ、ほら、いうでしょう。「ほとけ作ってたましい入れず」と。

すずき かつみ (静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授  
2002 年「みみより誌」 No. 489 号掲載

No.32

## 新たな展開に向けて 1

遠藤 良明

先日、たまっていた書類を整理していましたら『学校の勉強と知能指数の上昇との関係について』という記事が目にとまりました。

海の向こうの話ですが、学校で 1 年余分に勉強すれば 2、3 点ぐらいの知能指数をふやすことができるというものです。

米国には、日本のように塾はないので、夏休みは完全に休めるのですが、そのような場合、生徒はサマースチューデントし称して、大学や研究所で 3 ヶ月の夏休みを働いて過ごす制度があるそうです。すると、これをやった生徒とやらなかった生徒との間に、知能指数が一点ぐらいの差がでてきたそうです。

今までの常識では、頭の良し悪しは生まれつきで、脳細胞は母親のお腹でふえても、生まれたあとはふえないというものでした。それどころか 20 歳をすぎれば、毎日 10 万個の脳細胞が死滅するといわれてきました。

しかし、最近の研究では、この考えが間違いであることが分ってきたそうです。米国の学者が、最新の方法で脳細胞の分裂、増殖を調べたところ、70 歳を越えてもなお脳細胞はふえることが分ったということです。

勉強によって、脳に正しい刺激を与えると変化し、脳細胞の一つひとつが突起を伸ばして他の

神経細胞とのつながり(シナプス)をふやす、つまり情報の連結、情報量がふえるらしいのです。

私たちの脳は成人してからでも、よい刺激を与えてやれば、働きがよくなるというわけです。具体的には、講義を聞く、本を読む、外国語を習う、人と討論する、ものを書いてみる、会の役員を引き受け活動を体験する。このようなことは年齢に関係なく、みんな私たちの頭の働きをよくするのに役立つ、とあります。

たとえば、本を読んだりすることは、読むことによって、脳を活性化させることがポイントで、内容を覚えることはさして重要ではないといっています。

ところが、私たちの間では、内容が難しく覚えられないことにこだわって、どうせ分らないのだから読んでも無駄とあきらめ、たいていは、つい手軽で頭を使わない漫画本とか、テレビのお笑い番組の方へいってしまうとあります。身に覚えありですが、今までにも経験的に、頭を使っていれば歳を取ってもボケないといわれてきたことが、これで立証されたようです。

さて、1月号の年頭の挨拶で書き足りなかったことを2、3つけ加えます。今年は役員選挙があります。会の存続と活性化のためには、新陳代謝が欠かせないということに異論の余地はないと思われませんが…、役員の交替ひとつとってみても、会全体の運営に支障をきたさないことが前提になります。

人には、それぞれ固有のバイオリズムがありますので、そのときに応じて、動ける人に動いていただくほかありません。

課題は山積みしておりますが、一つひとつ丁寧に取り組んでまいりますので、会員の皆様方の一層のご支援をお願いいたします。

当会では、この1月に念願のホームページを開設いたしました。くわしいことは別稿で説明があると思いますが、パソコン操作のできる方の、積極的なご利用をお待ちしております。過大な期待は禁物ですが、ホームページの開設により、不特定多数の方々からのアクセスを期待しております。

今後、多少なりとも、会員やみみより誌の拡大ねとりわけ若い人材の獲得につなげることができればと、淡い恋心を抱いております。当会は、健聴者も会員になっていただけますので、このほうの比重をもっと高めてまいりたいと思っております。

次に財政にかかわる問題ですが、会の財政基盤をしっかりとしたものにするには、基本金という形で3,000,000円ていどのお金を貯めておく必要があります。

当会はあと数年で、創立50周年を迎えますが、その後のことも含めて、会員の皆様方のご意見をお伺いしたいと思います。

たとえば、1人1万円の寄付運動をいまから数年かけて展開したらどうか、という案もあります。

法人格を持った団体の年会費は、地域により差がありますが、現在、首都圏では1年につき12,000円から18,000円といわれております。このような状況を踏まえながら、拠出についてご検討いただければと思っております。

念のため申し添えますが、このお金はあくまでも、会の継続を前提とする基本金として備えようとするものであり、50周年記念に使うためのものではありません。

50周年の後をどうするか、当会の方向が固まりましたら、これ等の案を実行に移したいと考えております。

会員皆様方のご理解とご協力を切にお願いする次第です。

えんどう よしあき(神奈川県大和市柳橋)

みみより会会長・税理士

2002年「みみより」誌 No. 485 掲載

No.33

## 新たな展開に向けて 2

遠藤 良明

2月もなかばになって、私のところに一通の年賀状が届きました。差出人はKさんといい、ニューヨークのマンハッタンからです。Kさんの娘さんが、大学病院の研究生になり、4歳と2歳になる2人のお守役として、昨年からマンハッタンで暮していること、テロでは怖い目にあったことなどが、書き記されていました。

Kさんは絵がお上手で、この賀状にも昨年9月に制作されたという、バッテリーパークからのツインビルと橋の絵(油彩4号)が載っていました。

Kさんとは、今から20年ほどまえ、聴覚障害者のボランティアとして活躍されていたときに、数回お会いしただけなのですが、なにかの縁で、それ以降ずっと賀状だけのやりとりが続いていたのです。

今年は、珍しく頂いていなかったもので、どうしたのかなと、ちょっと気にかかっていたところでした。

私の娘も、マンハッタンの会社に勤めており、テロで冷汗をかきながら、昨年の12月に男子を出産したのですが、その際の入院先が大学病院と聞いていたので、もしかしたら、同じ病院ではないかと書き送ったのでした。

賀状は虚礼という人もいますが、私にとってはとても大切なもののように思えます。

聴覚障害者のメカ弱者にとっては、紙の通信手段だけが、人とのかすかな繋ぎとなっているからです。私が頂く賀状はほんの僅かにすぎませんが、もう何年もお会いせず、お顔も思い出せない方々からのものが、けっこうあります。

そうした意味では、賀状のやりとりの中に、儂さといえますか、もろい部分がたしかにあり、それが虚礼にあたるのかも知れません。

Kさんに対してもそうであったように、ひと昔まえまでは、美形の方とみれば臆面もなく賀状を差出してしまったものですが、さすがに最近は、自粛とまではいかないまでも控え目しております。

賀状の後始末は各人各様で、うかがい知ることはできませんが、私のところは、12月の年末調整から3月の確定申告まで、一連の仕事が続くため、住所録の整理も兼ねどうしても4月以降になります。

今年は、とうとう同じ人から3枚もきた、2枚きたのは5件あったなどと、くわしく枚数まで観察する人もいたりして、愉快になります。時期はずれに読み返すことは、人間模様を改めて浮かび上がらせ、しばしの感慨にふけることができ、心が安らぎます。

この辺で、例によって会のことについて、簡単に申し上げます。

みみより誌の、発行月と原稿の締切日とは凡そ1ヶ月から2ヶ月のズレがあります。その間に役員会と例会をはさんでおります関係で、報告の内容が重複したり、前後になったりすることがあると思いますが、あらかじめお含みおき願います。

1月の新年例会では、50余名を超える参加者があり、ミニスピーチをまじえ盛況のうちにお開きとなりました。皆様に厚くお礼申し上げます。そのときの私の挨拶の内容は、本誌2月・3月合併号に載っているとおりですが、もうひとつ、最も大事なことを皆様方をお願いしました。

それは会員を増やすことです。

私としては、少なくともあと50名ほどの会員を増やしたいと考えております。

そのための対策として、今までみみより誌を贈呈していた方々にも、事情が許されれば購読会員になっていただくよう、お願いして参りました。有難いことに何人かの方々から切替えのお申し出をいただくことができました。ここに改めてお礼申し上げます。

またホームページの開設にともない、このほうからも、逐次入会をお誘いしていく予定です。これ等と平行して、会員の皆様一人ひとりが口コミで、お友達に入会のお誘いをして頂けたらと思います。

一人が一人ずつ会員を獲得できれば、やがては大きな効果となってあらわれます。少なくとも、常にそのような意識を持ってみみより誌の購読をおすすめしてくださるよう、お願いいたします。

私個人としては、一人勧誘するごとにせめて図書券ぐらいは、差し上げるようなシステムがあってもよいのではないかと考えております。

次に内部の組織についてですが、

現在、理事の役割分担の明確化と役員会の議事運営の効率化について、役員会で鋭意話し合いを進めているところです。

最近は、重要な案件が増えているところから、今後は事業計画や方針の実行に審議の重点を移して参ります。

それと、財政を補填するために、障害者団体の活動資金を支援する公益法人等に、補助金の申請手続きを積極的に進めて参ります。

これは事務局長にお願いしてあります。

法人格を有していないため、多くの制約があり、条件も厳しくなっていますが、努力して参ります。

最後になってしまいましたが、当会には常にあたたかいまなざしで、浄財を寄付してくださる方が大勢いらっしゃいます。今回も大口の寄付金を戴きました。これ等の方々にはただただ感謝あるのみです。

どうも有難うございました。

えんどう よしあき(神奈川県大和市柳橋)

みみより会会長・税理士

2002年「みみより」誌 No. 486 掲載

怒りと優しさのために 11

## 素晴らしき仲間たち

丸山一保

みみより会が始まったころと現在とでは、時代が大きく変わってしまいました。

ぼくらの学生時代は、戦後の占領が終わって、朝鮮戦争が始まったという時代でした。食料がなく、お金もありませんでした。健康であっても生きていくのが苦しい時代でしたから、耳に障害があるということは、限りなく不安なことでした。

### ● 短足を超えたみみより会

電車に乗ると、アメリカの兵隊さんたちが長い足を組んで座っています。どうして、あんなに足が長いんだろうと、空きっ腹のぼくは複雑な気持ちで眺めていました。

アメリカ人のいないところで、足を組んで真似をしてみました。やせていたから足を組むことはどうにかできましたが、短い足では、アメリカ人のようにスマートには組めませんでした。足を組むというよりは、片足であぐらをかくような姿勢になってしまいます。

時代の変化に驚くのは、最近、日本人の若者の足が、だいぶ長くなってきたことです。足の長さ、経済成長とは比例するのでしょうか。かつてのアメリカ人のように、電車の中で恰好よく足を組んでいる若者が多くなりました。

短足時代に始まったみみより会でしたが、おかげさまで、とても素晴らしいメンバーに恵まれました。みみより会だけは、たとえば参与の団順一さん、会長の鈴木克美さんのように、足を組んでもサマになる青年たちが、結構大勢集まったのです。

### ● 輝くようなメンバーだった

初期の「みみより通信」や「みみより」には、必ず会合に集まった人の名前や、会に連絡した人の名前が全員掲載されていました。ですから古い資料を開いて見ると、当時活躍していた人の名が、すぐにわかります。

1955年に始まったみみより会は、毎月1回の例会を開催しましたが、前に紹介しました川本宇之助先生は、頻繁に出席して下さいました。日本ろう話学校の望月敏彦先生もときどき参加して激励して下さいました。また同校の松沢豪先生は、1956年のころから例会で読話の講習をやってくださるようになりました。その講義録を団順一さんらが協力して、「みみより」に連載しました。

伊藤由吏代、清水京子、佐藤しげ子、西潟雅子、山田庸子、島田節子、中山れい子、立花郁子、須藤多恵子、鈴木光子、新堀昭子、中屋恭子、高橋慶子、大埜間不二子、小浜裕子、手老千枝子、宇佐美幸江、清水静子、上原百合子、田端千尋、三浦聖子、宮子邦子、大堀咲子、佐藤禎子、松原千鶴子、国分安代、斎藤禎子、鈴木元美、田代妙子、園田悦子、佐久間初代、牛丸美代子、小森喜久代、鈴木久子、小島澄子、山下きみ子、鎌田久子、松本けい子、竹村繁子、竹村悦子、大里百合、山本恵子、釜菴とし子、斎藤公代、斎藤雅子。

手もとの「みみより通信」1号から10号あたりまで見ると、たくさんの女性会員の参加が見られます。みんな若かったし、なにしろ輝くような美しさでした。

### ● 一つの女性運動でもあった

当時、30歳ぐらいで、ぼくらより多少姉さん格だった須藤多恵子さんは、新堀昭子さんのご紹介によると、身長5尺3寸2分、体重16貫200匁という立派な体格の奥様でした。性格明朗、陽気でしかも聡明、20代の後半に腹膜炎を患いストマイ注射によって難聴になられた須藤さんでしたが、みみより会に参加されると、たちまち多芸多能な趣味を活かして手芸グループを創設し、女性たちの力で、すごいことですが、銀座や渋谷で「みみよりバザー」を実現してくださいました。

サンケイ短歌賞受賞者の清水静子さんは、当時30代の後半の年齢で、30を過ぎたころ結核性脳膜炎にかかり、やはりストマイによって全ろうとなられた2児の母です。

カマキリさんのニックネームを持つ清水さんは、お住まいの関係で関西で活躍されましたが、女性たちを集めて支部活動をされたり、また「みみより」誌上に短歌を寄せられたりして、若い会員の精神的な支柱となってくださいました。清水さんも、品のいい長身の奥様でした。

考えてみると、みみより会は、今日盛んな女性運動のさきがけでもありました。頼りがいのある先輩の存在は、若いお嬢さん方の相談相手として、男どもの見えないところで、どれほど会を支えてくれたことでしょうか。

## ● 一騎当千のつわものたち

男子の方も負けてはいません。

清水昭雄、中村和夫、清水慶喜、池尾寿一、藤川浩一、加藤光二、滝上忠男、外山和郎、関根真明、鈴木修平、鈴木克美、木口利行、杉田春男、越村英一、大川豊、永田哲雄、武井利文、岡田秀穂、吉田宥之、三浦裕、堀部庄太郎、宮田秀男、団順一、赤間悟、中村章、川上泰次郎、高寺志郎、光岡仁、前坂典彦。

とてもしっかりした個性が集まりました。

知っている人、知らない人もいるでしょうが、よくごらんください。こうしてみると、最初のころから、みみより会は、ろうの人、中途失聴の人、難聴の人、聞こえる人、ごちゃごちゃだったことがわかります。そこに、みみより会の特色があったのです。

最近の「みみより」には、集会の報告があっても、集まった人の名前の紹介がありません。どうしてなのかと、岡本編集長や、矢島事務局長に質問しましたが、「名前を出してほしくない」という会員の声が多いのだということで、残念でたまりませんが。

## ● 動く指標だった団さん

さて、足の長い団順一さんは、いまも、むかしも素敵だという女性の声があります。

団順一さんの中途失聴の経過については、「みみより」337号(1987年5月号)に詳しく掲載されていますが、やはりストマイによる失聴です。

1950年当時、東京歯科医大の学生だった団さんは、細菌実験から感染して結核性髄膜炎になり、大量のストマイ注射を受けることとなりました。こうして改めて整理してみると、須藤さんも、清水静子さんも、団さんも、ストマイツンボが社会的な問題になる前の被害者だったことに愕然とします。

横浜の歯医者さんの息子だった団さんは、絶望的な失聴の苦悩を越えて、いつも明るい笑みを絶やしませんでした。団さんが耳が聞こえないということを知るだけで、どんなに励まされた人がいたことでしょうか。「なるほど、あの感じのいい青年も耳が聞こえないのか、われわれの仲間なのか」

団さんは、自分の障害を丁寧に分析して、むしろユーモラスに「みみより」に発表してくださいました。

## ● こぶと聴覚 etc.

たとえば、音が聞こえなくなってしまうてからの団さんが頭をぶっつけると、「ゴツン、痛いっ」という具合ではなくて、そのゴツンという空気伝導の音が聞こえずに、妙な「グワーン」という音がする。それは骨伝導の音しか感知されなくなってしまうからだと団さんは分析します。そして瞬間的には、どこをぶっつけたのかわからない。そのうちにジワッと痛くなって、ああ頭をぶっつけたのだとわかるという話。

この話は、かつて耳がきこえていた団さんだからこそ、珍しい話として紹介できたことだったと思います。それから、聴覚が欠けているということは、眠くなった場合にとめる事ができなくなるという話。極端に言えば歩いていても眠ってしまうような感覚だそうです。（「みみより通信」第9号）

こんな自己観察を淡々と紹介してくれた団さんは、いつも浜っ子らしく、人をそらさぬサービス精神に富んでいました。

有名な団さんの手品を見た人は驚くのですが、彼は、また実に巧みに煙草やトランプのカードを使って、エンターティナーとしての才能を発揮してくれました。団さんの人徳がみみより会を華やかにしてくれました。

## ● ラマさんは、お祭りおとこ

団さんよりも、もっと大きな体をしていた偉丈夫が高寺志郎さんでした。

団さんが、横浜のシティボーイといった感じだったのに対して、高寺さんは青森の商家に生まれた、おっとり型の坊ちゃんです。

「みみより通信」13号に、鈴木克美さんが、高寺さんの紹介を書いています。いま読んでも違和感のない立派な人物評だと思いますが、それによると、スポーツ万能だった高寺さんは、八甲田山へスキーに出掛け一杯機嫌で滑ったのが間違いのもとで、誤って転倒した後の耳には、「耳鳴りと幻聴音楽」しか残らなかったということです。

慌てず騒がずという高寺青年でしたが、心中は、どんなに悩んだことでしょう。

日本ろう話学校で読話を熱心に勉強していた高寺さんは、「みみより通信」25号の中山れい子さんの文章によれば、みんなから読話が遅いとジレッタがられたらしいのです。しかし、「もう一度、もう一度」と、一心に口形を見るひたむきな高寺さんの態度に、ジレッタさも感じなくなったと、中山さんは書いています。

とにかく、彼もまた、すごく明るい、めげない人柄でした。鈴木さんが魚に打ち込んだように、高寺さんには、写真という好きな道がありました。日本大学芸術学部写真科に在学していた彼は、耳が聞こえなくなった後も進むべき道に迷いはなかったのです。

みみより会に参加した高寺さんは、たちまち、カメラを通じて若い人たちをひきつけました。「みみより通信」21号(1957年6月)に、高寺、団、杉田春男(後述)の3人が、三重の新光会の静永賢道さんを訪問し名古屋で同会の総会に出席、大阪でみみより会関西の集まりに出て、その後京都の福村健先生(後述)の御宅に泊まり、滋賀の杉田さんの家を回って浜松の鈴木元美さん(鈴木会長の妹さん)のお世話になって帰京した珍道中の報告が、高寺さんによって書かれています。この傑作なレポートからも窺えるように、高寺さんが参加してからのみみより会はとても行動的になりました。

合宿や、ハイキングや、スキーツアーや、屈託のない若い人の集まりが、会の中に定着したのです。みんなは、高寺さんのことを大陸的だといいましたが、彼は自らをドライ・ラマと称しました。団さんのことをダンちゃん、鈴木さんは、SZ。独身だった3人が並ぶと、長身なのでと

でも立派。まさに初姿三人男といったような感じでした。

### ● 筆談、読話、そして手話

もともと、高橋広司理事長や、岡本昇蔵編集長、それから矢島幸雄事務局長ら、あまり背の高くない現在のメンバーの名誉のために申し上げますが、ぼくを始め当時からチビで活躍した人も、大勢いたのです。

「みみより」の創刊号は60ページもありましたが、毎月、そんな雑誌を出していくことはできません。そこで、「みみより通信」という薄いプリントを毎月発行することにしましたが、ぼくだけでなく、みんなで交替に編集責任者になることにしました。

鈴木克美さん、外山和郎さん、加藤光二さん、中屋恭子さん、武井利文さんらが、順に担当し、結局、加藤さんの家を編集部と定めて、1年半ほど加藤さんが熱心に担当してくれました。

加藤さんは、都立高校から東京写真短大へ進学した難聴の青年でした。本質的には愉快な人なのですが、はしゃいだりするとき、はにかむようなごく真面目な人柄でした。

これに対しても大塚ろう学校出身で明治学院大学へインテグレートした外山和郎さんは、おどけたりして人を笑わせる陽気な人でした。学齢期以前の失聴でしたから、言葉をしゃべる人としゃべれない人との苦しみの差について、深い問題意識を持っておられたようです。しかし、ご自分の苦しみを、すこしも外に表すことはありませんでした。

みんな揃うと、ガマとか、ゴリラとか、カップとか、勝手なニックネームをつけて、わあわあ、座を盛り上げます。とてもにぎやかで障害を持つことを忘れてしまいます。

手話は、すこしずつ外山さんが教えてくれました。手話と読話と筆談。

ぼくは、少年のころから本当に自分でも恥ずかしくなるくらいの自惚れ屋でしたが、みみより会によって、個人の才能の無力と集団の知恵の素晴らしさを学びました。

あのころの経験だけでも、みみより会から得たものは大きかったと思います。ぼくだけでなく、おそらく、あのころのみんなが、そう感じて、みみより会を愛し、かすかな幸せに感動したのではないのでしょうか。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)

みみより会参与・出版社総務部長(当時)

1991年「みみより」誌 No. 375 掲載

No.35

## 竹に音を聴く

—— 杉田静山の人生 ——

杉田 静山・江時 久

◆江時 こんにちは。杉田さんの工房を拝見するのは、ずっと夢でした。

◆杉田 わたしも、いつかは、江時さんにも見ていただこうと思っておりました。

◆江時 すごい作品ですね。杉田さんの人生がここに展示してある。日展入選3回、日本伝統工芸展入選18回、その他、数々の展覧会で入選され受賞されている工芸家・杉田静山の竹工芸の世界が、全部、この工房に詰まっていますね。一昨年の三越の日本伝統工芸展で奨励賞を受賞された「うずしお」も、また拝見して新しい感動を覚えました。日展入選の「潮騒」も迫力がありますね。「入船」もすばらしい。こうした作品は、売らないんですか。

◆杉田 ええ、売りません。私は、ありがたいことに、ろう学校の教師をしていましたから、好きな作品を手放さなくても、なんとか生活することができました。その点は、本当に恵まれていたと思っています。でもたくさんの作品を手元におくと、保管が大問題になります。それで展示室を作りました。

◆江時 こうなると愛着もあるでしょうね。いわば杉田さんの人生そのものだから。ここに集めてあるものが、後の人への大変な励ましになりますね。

◆杉田 でも、作品には必ず不満もあるんです。作家としては、終わりがありません。

## ■ 花開く杉田さんの人生

◆江時 杉田さんは昭和7年の生まれですね。同時代もいいところ。最初にお会いしたのは伊東の合宿のときでしたね。40年前になる。私などが、サラリーマンをしている間に杉田さんはコツコツとご自分の世界を築いてきたのです。耳が聞こえないんだから、作品で競争する世界の中では、いやなことつらいことも、情けないこともあったでしょうね。悔しさをバネにして一人ががんばってこられた。30代の後半から花開かれた感じですね。日展の入選が37歳。それから、いろいろな展覧会で入選されていますね。一昨年は、日本伝統工芸展で奨励賞を受賞されたし、昨年はまた、全日本ろうあ連盟の厚生文化賞もお受けになった。どんどん高名になられますね。本当におめでとうございます。

◆杉田 ありがとうございます。工芸展受賞もうれしかったですが、全日本ろうあ連盟の賞もうれしいことでした。あれは古い「みみより」に赤ちゃんの夜泣き電灯や保険問題、タイプ電話などの寄稿をしたり、ろうあ会館設立などの聴覚障害者問題に取り組んだことが認められたようです。

◆江時 奥様とは、新光会でお知り合いになったとか。

◆杉田 そうです。家内も耳が聞こえません。昭和37年に娘が生まれたときに、夜、ふと目がさめると、涙でシーツを濡らして泣き疲れている姿を見て、やるせない思いがしたものでした。ところが当時でもアメリカのろうあ者の雑誌を見ると、ベビーシグナルの広告が写真入で掲載されていたんですね。あんな便利なものが日本にもできないものかと考えました。家電メーカーや、音響器具メーカーに問い合わせたり、新聞に投書したりしたら、たくさんの方から反響があって、中には試作品を作ってくれた方もありました。

◆江時 あ、そんなことがあったのか。

◆杉田 そう、それから、ある家電メーカーの第1号機ができあがりしました。現在では、コンパクトになって、厚生省の障害者生活補助具にも指定され、福祉事務所から貸与されるようになりました。

◆江時 大変な恩人だったわけですね。杉田さんは。知らなかったな(笑)。

## ■ 戦災と失聴の少年時代

◆江時 昭和32年に「みみより」にお書きになった杉田さんの「職業雑感」という一文は、すば

らしいですね。大阪で生まれて、中学1年のときに聞こえなくなっただけですね。

◆杉田 12歳でした。学校から帰って急に熱が出て、翌朝目が覚めたときには、もう耳が完全に聞こえませんでした。急性脳膜炎です。

◆江時 下手すれば命も危なかったですね。すぐ空襲でお宅が焼けてしまってそれで滋賀県に移られた。失聴と戦災で、大変な少年時代だったわけだ。よく耐えましたね。

◆杉田 滋賀県は両親の里です。その日ぐらしでね。学校どころではありませんでした。

◆江時 戦中、戦後の社会のことは、いまの人には、わかりませんね。

◆杉田 近くに竹やぶがありました。何もすることがなかったので、竹細工をはじめて台所のザルや竹の農具や漁具などを、真似して作り方を覚えたんです。ろう学校のことも、たまたま大阪の戦後の闇市で昭和10年の「聾啞年鑑」を見つけて、それで「ろう」という世界や、ろう学校を知ったんですよ。

◆江時 昭和10年に、そんな年鑑があったんですか。だれが作ったのかな。あの時代の少年は、みんな自分で生きる道を探さなければならぬ。ろう教育も義務教育じゃあなかった。

◆杉田 どの家庭の親たちだって、生きることで精一杯でしたからね。そこで、滋賀県のろう学校へ入学したわけです。でも、ろう学校の学習内容には満足できませんでしたね。

◆江時 ろう学校は、中学部だけで、それから独学で大検(大学入学資格試験)にチャレンジしたんですね。がんばりましたね。

## ■ 近江兄弟社学園で働く

◆杉田 ろう学校の次は、普通高校へ行きたかったんですが、どこでも「聞こえなければ、教えようがない」ということで、相手にしてくれませんでした。今日では障害を理由に受験を断る学校は、まずないと思います。たまたま、すぐれた口話者で知られた西川はま子さんに相談したところ、それがきっかけで近江兄弟社学園に生徒ではなくタイピストとして働くことになりました。園長の一柳満喜子さんは、学園の創立者であり、障害者に理解が深く、西川さんの生涯の師でした。すばらしい人格者で、私は6年働き、折に触れて、園長から英語や人間の生き方を個人的に指導していただきました。いまも、その教えはわたしの心の支えとなっています。独学といえど勇ましいですが、苦勞して、なんとか大学に合格しました。その後、武蔵野美術短大のデザイン科と美術科を通信教育で卒業しました。

◆江時 いまの時代なら、杉田さんのような頭のいい方は、たとえ耳が聞こえなくても、どんどん普通の高校を経て大学を卒業して、大企業に就職してしまう。だから、絶対に「うずしお」は生まれなかったでしょうね(笑)。

## ■ 竹工芸でろう学校の先生に

◆江時 一時お預けの状態だった竹細工の方を再び24歳のときから再開するんですね。

◆杉田 わたしは、単純に事務職で生活することを望んだのです。でも、聞こえないわけですから、事務職ではうまくいかないのです。ちょうどそのころ、以前作った作品が、ある展覧会で高い賞をとり、それで、竹工芸に再挑戦しました。

◆江時 近江兄弟社学園の勤務から帰宅した後、板の間に何時間も座って毎日竹と取り組まれたんですね。

◆杉田 ええ、本当に夢中になって没頭しました。産業工芸から美術工芸まで分野を広げました。この実績が認められて、ろう学校の竹工技師になったんです。

◆江時 杉田さんの努力はすごかったでしょうね。杉田さんが書いたり、人が杉田さんのことを書かれたりしたものを読んで、そう思いました。耳が聞こえないわけだから、竹を選ぶにしても

籠を編むにしても、筆談で交渉したり、教えてもらったりしなければならない。まさに自立への死闘でしたね。結局、一人で技術を習得したということでしょうか。

◆杉田 いや、死闘というような悲壮感はありませんでしたよ(笑)。やらなければ、生きていけないということはあったと思いますけれど、やっぱり作っていると楽しいんです。籠を通していろいろな話ができる。それは幸せだと思いました。けっして、一本道ではなかったけれども、結局、籠作りに考えが戻ってしまう。手本になる他人の作品があったときには助言してくれる人もあったので、まったく一人で、というわけではなかったのです。遠くの展覧会にも見に行きましたし、図録の作品は眺めつづけて学びとりました。

◆江時 花かごを作りながら、いろいろな話ができる。その没頭した時間が、杉田さんの人生を作ってきたわけですね。

## ■ 失聴と花かごが調和した

◆江時 結局、50年前、耳が聞こえなくなったのと、籠作りをはじめたときが、杉田さんの人生ではいっしょなんだ。これは、切り離せない。つまり、耳が聞こえたままだったら籠作りはなかったのだし、また籠作りがなかったら、今日の杉田さんは、なかった。

◆杉田 その通りですね。

◆江時 杉田さんの作品は、当然、竹を選ぶことから、仕事が始まるのでしょうか。

◆杉田 そうです。竹は、いろいろあるんですよ。私は、真(ま)竹を使います。節間が長く、節ぶくれの低い素直に伸びた竹が良材です。

◆江時 そういう微妙な違いが、素人と玄人の世界では違うんでしょうね。滋賀県は、竹細工の盛んな土地なのですか。

◆杉田 むかしは、竹細工で有名な集落が県内各地にもありました。京都へ行きますとね、茶華道などの需要があり、竹工芸家も職人さんもおられます。

◆江時 竹を割ることだけ考えてみても、大変だ。

◆杉田 細く等分に割るためには、刃物の使い方など絶えず加減します。

◆江時 トゲなんか、ささりませんか

◆杉田 刃物で手指を傷つけることは、まずありませんが、とげは、よくささりますね。痛くありませんが、不愉快(笑)。

## ★杉田さんが実際にやって見せてくれた★

◆江時 え、そんなにまで細く割るの。

◆杉田 だから、最近では眼鏡が必要でね(笑)。割る前に竹の表皮を削り、次いで研磨紙の粒度を変えて磨きあげます。傷が残っていると籠の編組は、そこで折れてしまう。

◆江時 むかし、小学校でヒゴを使って模型飛行機を作ったことを思い出すなあ。ぼくは、不器用だから、すぐに折れてしまう(笑)。

◆杉田 幅をそろえたり、面(角)をとったり、裏を削って厚みをやわらかくしたり、そういう道具があるんですよ。

◆江時 細かい作業だから、ずいぶん時間がかかりますね。

◆杉田 展覧会の作品は、数カ月かかることもあります。新しい作品には、迷いや、やり直しがありますからね。同じ形や構想でも技法は違うから、1点きりのものがほとんどですね。

◆江時 黙々と制作に打ち込む杉田さんの姿が目には浮かぶようです。制作場は、神聖な道場のようなものではないでしょうか。

◆杉田 制作が山場にかかると、何よりも集中力が大切なんです。小作品は、遊び心地で楽しいですけどね、展覧会の出品作品は、長期間、根をつめるので仕上がったときには「おかげさま

で」という気持ちになります。

◆江時 できあがった花かごを前にして頭をさげる。その気持ちは、よくわかりますよ。

◆杉田 作品との対話は、聴力は関係ありません。展覧会で、他人の作品と並べ比べてみると、お互いの長所も、その作品の主張もわかります。大勢のお客様も、結局、作品との対話を楽しんでおられるわけで、お客様が私の作品と対話してくれている姿を見るとそれだけで疲れもとれる気持ちです。

## ■ 好きなことがある幸せ

◆江時 ぼくは、よくわかりませんが、こうして杉田さんの作品を拝見すると、人柄が、そのまま出ていると思いました。耳が遠いと、だれでもつい、激情がある。わたしなんか、つねに後悔しています。乱暴さを表に出さない杉田さんの人柄には、本当にいつも敬服していますが、その信念や内に秘めた情熱が、この造形や色合いに気品をもたらしている。無理な気取りがなく温かい。

◆杉田 皆さんからご感想をいただくことは、とてもうれしいですね。鈴木克美さんは「うずしお」の前で、いつか瀬戸内海に潜って体験した強い潮の流れを思い出したと手紙をくれました。そんな感想を伺っていると、私の気持ちも、また高ぶる思いでした。

◆江時 ご苦労があったと思いますが、杉田さんの人生は、竹や籠との出会いで、すばらしく開花されたのですね。本当に、杉田さんは、籠作りが好きなんだ。好きなことがあるというのは幸せですね。

◆杉田 自信なんてありませんが、これからもがんばれば、まだいいものができると思っています。そう思うと幸せな仕事でしたし、お世話になった多くの方々に感謝のほかありません。

◆江時 鈴木克美さんも、むかしから魚のことばかりだった。高寺志郎さんは、写真のことばかりでした。三ツ井詠一さんも、陶器が好きで、大家になられた。いま、みみよりの編集をやっている大久保紀次さんも、たくさん詩を書いています。好きなことがある人はいい、編集の岡本さんは、なんと30年以上無償で編集をやってくれている。これも好きだからです。印刷をやったり洋服を作ったり、職業として技術を生かしている人もいますけれども、みんな、その仕事が好きであれば、楽しみながら、すこしでもいいものを作ることができますね。

◆杉田 今年の夏に滋賀県立美術館の広いギャラリーで作品展をやりました。それに併せて図録も出版しました。高寺さんには終始指導を受けて、作品撮影は自分でやりました。伊東合宿以来、いつもわたしの理解者です。みみより会は九谷焼の三ツ井詠一さんの紹介で入会しました。三ツ井さんとは、同じ工芸仲間です。三ツ井さんが、日展に初入選すると翌年、わたしも初入選しました。彼の助言を参考に、その立派な作品展示室を真似て、わたしも小さな展示室を作りました。昨年、アメリカで個展をやられた三ツ井さんは、ずっと、わたしの手本でした。あの人、この人、みみより会40年の交友は、懐かしい人たちばかりです。

## ■ 補聴は、補聴器だけではない

◆江時 杉田さんの工房へくると、他の聴障の芸術家の活躍がわかる資料がありますね。光風会の大原省三先生、二紀会の西村功さん、日展彫刻家の後藤白童さん、東陶会の館野善次郎さん、木彫りの滝口政満さん。でも、皆さん、けっして平坦ではなかったのですね。好きだから、がんばったのだと思いますが。

◆杉田 その通りだと思います。社会で障害者理解や手話の普及も広がり、次第に暮らしよくなりました。多くの人たちのおかげです。みみより会でも、岡本さんが編集長で苦労しているし、矢島さんや、多くの裏方さんが、がんばってくれました。そういう人への感謝を大切にしてい

と思いますね。それと、こんな話も聞いてほしいのです。わたしの20代の初めのころでした。静永賢道さんという難聴の寺院住職が、「新光」誌に「ろう者の倫理学」とか、「環境補聴論」ということを力説しておられました。

◆江時 ほお。

◆杉田 「補聴」といえば、補聴器のことだけを考えがちだが、補聴器はもちろん、口話も、手話も、筆談も、周囲の理解があつてこそ成り立つと、静永さんはいわれた。そればかりではない。家庭や、職場や、近隣の環境に恵まれ、自らも学業や技術、教養を身につけることが、広い意味で「補聴」の役割をするのだと説かれた。

◆江時 説得力のある話ですね。

◆杉田 わたしは、その通りだと思っています。聴障者も努力して技術や学問を修め、いい家庭をつくり、職場でも地域でも、いい人間関係を維持できるようにしなければならない。よい環境こそ、広義の補聴手段だという説は補聴器のまったく使えないわたしには、本当に、耳寄りな話でした。また「聴障者が人生に苦勞するのは、どう生きていけばいいのかという手本が見当たらないからだ。適当な道しるべがあれば、もっと気楽に暮らしていけるのではないか」、それを、「ろう者の倫理学」と名付けて、みんないっしょに考えていこうと提案されたのです。40年前、苦勞の多い時代でした。

## ■ みんなの人生が道しるべ

◆江時 みみより会で、最初雑誌の発行を考えたときも、同じような精神でした。教育や就職や医療や結婚や育児の問題などを、みんな考えていこうという気持ちでした。

「みみより」という雑誌を道しるべにしたいと思ったんです。杉田さんの花かごとの50年が、そのまま後からくる人の「道しるべ」となりますね。

◆杉田 静永さんの考えは、わたしにとっては道しるべでしたね。いまは、これからの人たちに、われわれが「道しるべ」となるようにしなければならない。

◆江時 長い間に、聴覚障害者の中から、立派な人が、どんどん現れましたね。先日、筑波大付属ろう学校出身の田門浩さんが司法試験に合格しました。これで弁護士は松本晶行さん、山田裕明さんに次いで3人目ですか。

◆杉田 伊藤政雄さんは、「ろう文化学」という言葉を使っておられますが、聴障者の生きてきた歴史や、生きていく知恵の集大成、そういうものが生まれてくるとすばらしい。

◆江時 杉田さんのような挑戦精神をもった人が、どんどん出てきてほしいと思いますね。杉田さんの存在自体が、今の若い人たちへの大きな励ましと道しるべになる。幸せとはなにかということを、忘れないようにしないとイケませんね。今日来てよかったと思ったのは、杉田さんの奥様の昭子さんにお会いできたことです。本当に明るい屈託のないお人柄で、近所の主婦のみなさんと生協の集まりをやりながら、手話を教え、みんな手話ができるようにしてしまっただけですね。だから、井戸端会議を手話でやっている。大槻芳子さんなんか、そうですね。積極的に健聴のみなさんを仲間に引っ張り込んでいますね。この肝っ玉奥様に、杉田さんも、支えられているんだなと思いました(笑)。女性の「道しるべ」。ほんとうにお幸せを感じます。ところで、杉田さんのご健康は。

◆杉田 わたしは、胃袋を切ってしまったんですよ。ですから、若いときのように馬力はつきません。食事も一度には食べられない。

◆江時 そうでしたね。お互いに健康には十分気をつけてね。杉田さんの作品は、われわれの時代が生み出した宝物です。これからも、ますますご健闘をお祈りします。

◆杉田 どうも、ありがとうございます。江時さんも、がんばって、たくさん本を書いてくださ

いね。期待しています。

◆江時 あ、これは、やられたな(笑)。それでは、1996年のお互いの健闘を祈って乾杯しましょう。

[滋賀県野洲郡中主(チュウズ)町の杉田静山(ジョウザン)邸にて] 1995年12月

### ■ 杉田静山さんのプロフィール

本名 杉田春男  
1932年 大阪市に生まれる  
1945年 滋賀県に移る  
竹細工を始める  
1957年 県立聾学校教員となる  
1962年 武蔵野美術短大デザイン科  
次いで美術科卒業  
1969年 日展に初入選、以後連続3回入選  
1973年 日本伝統工芸展に初入選、以後20回入選  
1992年 伝統工芸木竹展で東京都教育委員会賞を受賞  
1994年 日本伝統工芸展で奨励賞を受賞  
1996年 日本伝統工芸展で文部大臣賞を受賞  
(文化庁作品買上、東京国立博物館収蔵)  
1997年 滋賀県指定無形文化財保持者認定  
滋賀県文化賞を受賞  
1998年 県立草津文化芸術会館開館10周年記念事業として  
「暮らしの中の美 竹芸 杉田静山展」を開催  
1999年 滋賀県立近代美術館作品20点収蔵  
その他、「杉田静山竹芸作品集」、「紙とペンで歩んだ道」等の出版

■ 杉田静山さんのホームページ : <http://www.biwa.ne.jp/~jozan/>

すぎた じょうざん(滋賀県野洲郡中主町)  
竹工芸作家

えとき ひさし(千葉県習志野市袖ヶ浦)  
みみより誌初代編集長・みみより会参与・作家  
1996年「みみより」誌 No.424掲載

(なお、杉田静山さんのホームページからプロフィールを借用いたしました)

No.36

## 可能性は空の極みまで

江時 久

とうとう21世紀の坂をのぼった。

人類は、これから22世紀めざして旅をつづける。なに、そんなに長いことはない。

20世紀だって、ずいぶんむかしからのことのように思われるけれども、ぼくのおやじが浅間山のふもとで生まれたときからはじまったのだ。いま生まれた赤ちゃんが結婚して子供を生み、その子供がぼくの年齢になれば、22世紀が見えてくる。

そのときまで、人間が大丈夫か。もちろん、ぼくは死んじゃうよ。

一人の人間がのぼっていくのは、せいぜい、60の坂、70の坂といった程度で、その間に、すこしずつ地球や人間について発見する。天動説の時代から、人は星を見て生きてきた。星はいくら見てもあきない。

でも、人類が星を星と思うようになるまでに、何万年の論争があったことだろうか。22世紀が近づくころまでに、人は星をどんなふうに見ているのだろうか。

一人一人の発見は、ごくわずかなのに、ニュートンは、引力を発見した。最初に地動説を唱えた人たちもすごいけれども、引力は目に見えないものだから、引力を発見したニュートンは、とんでもないほどすごい。

聴覚障害は、20世紀後半になって、ようやく論じられるようになった。聴覚障害も引力みたいに外からは見えない。

聴覚を失う事実が、聞こえる人の想像力を越えるから、正確に理解されない。

おそいスタートだったけれども、これからは、星のように論じられてほしい。

## ● みみよりは優しさの始まり

習志野市からは、まだ星が見える。

横浜はどうだろう。20世紀最後のみみより会の忘年会が、横浜で開かれた。

1955年に23歳のときにはじめたみみより会が、まさか21世紀の坂をのぼるとは思ってもいなかった。

なにをおいても出席した。

最後は、遠藤良明会長が一本でしめた。

役員みなさん、ご苦労さま。

みんな偉い。聞こえないのに、がんばって生きた。20世紀後半におけるみみより会の誕生と継続は、耳の障害を持った人の能力と心のやさしさを証明してくれたと思う。多いときは2,000名に近くなったこともあったけれども、いまでも残る何百名かの会員が、会費を出し合い、ろう、中失、難聴、健聴を問わず、聴覚障害の問題を考えるために雑誌を発行して、役員はその都度交替でやってきた。

この忘年会で、木下幸雄さんが明るい表情で、人工内耳手術後の良好な経過を語っていたのは、なによりも、うれしい話だった。

奥さんの修子さんの話では、電話が大丈夫なだけでなく、音楽もやりはじめたのだという。彼は、失聴前はNHK合唱団にも所属していて、ギター演奏にも練達していた。

すごい時代になったなと思う。21世紀には、人工内耳の技術は、もっと進歩することだろう。

しかし、人工内耳の手術を受けても、木下さんと違って、はっきりした結果のでない人もいるかもしれない。

だから、世の中には大勢の聴覚障害者がいるという基本的な常識を、正確に広めることは、ますます重要なことだ。

みみより会の誕生は、まさに、この願いからはじまったのである。

聴覚障害者が叫ばなければ、聴覚障害のことは、聞こえる人にはわからない。

でも、むかしからろうの人は叫ばなかった。いや、叫べなかった。あるいは、叫んでも、わかってもらえなかった。

最近、ろうの俊才たちが輩出して、聴覚障害について語りはじめたのは、手話が、聴覚障害者の言葉となったからだと思う。

手話は、20世紀後半、それも1970年代から急速に広まった。

ぼくの意見では、やっぱり、戦争でアメリカに負けたことが、日本の社会制度を一気にアメリカナイズし、そのことが、手話の普及にまでつながったと思う。

明治以来の日本の教育は、エリート育成の教育だったから、ぼくのような講義が聞こえない難聴者は、戦前は少数精鋭の高等教育などは受けられなかった。1948年からの学校教育法によって学制が改革され、大学の数がうんと増え、厳密な身体検査などはなくなって、ぼくも機会を得たのである。

ろう学校も、この学校教育法によって、はじめて義務教育となった。

基本的に、ばらばらだったろうの子供たちがろう学校へ集められたからこそ、教育方式が口話法であっても、手話が育ったと思う。

やがて、手話通訳が誕生し、ろうの人と一般社会の人たちとのコミュニケーションがスムーズになり、ろうの人も情報を享受して爆発する時代になった。

この学制改革は、おそらく敗戦という外圧を経なければ、保守的な日本人だけでは、とても実現できなかったことだろう。

最近、憲法や教育基本法を見直せという意見があるようだが、教育基本法第一条の教育の目的のところに、「(教育は)自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成」と書いてあるのは、むかしから反対だった。

体が不自由で歩けない子供に、ちゃんと歩く方法を教えるというような教育はしてほしくない。「自主的精神に充ちた国民の育成」だけで、十分であろう。

## ● 大嶋功先生と悲劇の遺稿集

忘年会の席で、編集長の岡本昇蔵さんから、日本ろう話学校の元校長大嶋功先生の遺稿集「可能性は空の極みまで」を渡された。

帰宅後、一読して感慨無量であった。

この世は、理想と情熱の交錯である。

この世や、自分を善くしようとする精神は人のエネルギーを支える。

昭和6年から64年間、88歳まで一貫して同校に奉職され、校長になられてからだけでも44年の長期にわたって、ろう教育の先頭に立たれた大嶋先生の信念は、口話法によって、ろうの子供たちを「唾にならないようにする。それがこの学校の仕事であります」(1970年)だった。

しかし、筑波大付属ろう学校で学んだ田門浩さんは、発声が十分でなくても、手話通訳の秘書を雇って弁護士をやっている。

大嶋先生の長い教育生活は、結果的に迷い道だったのではないだろうか。

そう感じたことが、感慨無量であった。

ぼくと岡田秀穂さんが、最初に日本ろう話学校を訪れたのは、1955年1月のことで、作ったばかりのパンフレット「足踏み」を携え、大嶋功校長先生と望月敏彦教頭先生に会って、ぼくたちの会の主旨を説明し、今後のご指導をお願いした。

ろう教育は、個人的な栄達とは無縁の仕事である。キリスト教の熱心な信仰者である2人の先生が、ろう教育に身を投じていることに深い感銘を受けた。

当時、すでにろう学校は、口話法全盛の時代であり、中でも大嶋先生の早期聴能訓練は熱心な主張となって注目されていた。

遺稿集の中の「口話か手話か」という論文の最後は、つぎのような言葉でしめくくられている。

「結論というものは、自ずから到達してはじめて力となり得る。全国のろう学校の廊下に燻っている論争を燃えあがらしめよ。もしそれが正しく燃えあがらしめるならば、20世紀後半のこの論争は、私の結論に到達することを確信するのである」(1956年)

大嶋先生が、ろうの子供でも普通に話し、口を読むと信じた理想は、やさしさのようで、あまりにも強い断言である。

## ● 認知された手話の力

この遺稿集は、大嶋先生のその断言が、腰くだけになったことを告白している。

「口話法による成果が十分に現れないことが、それによって教育が十分に進まないこと が、手話論者の失地回復の機会となっている」(1978年)

「(口話法の) 成果のあまりにも貧しさが、今日の手話ブームの原因の一つであると思わざるを得ない」(1985年)

一方、ろう者自身が、手話を使って日本の法律の中にある差別について異議を唱え、改善を迫る現代の事実は驚異である。

岩手県の樋下光夫さんと京都のろうの弁護士松本晶行さんの先覚者2人による自動車運転免許裁判からはじまり、最近の野沢克哉さんを中心とするすばらしい運動のように、法律改正を求める20世紀の輝かしい人権運動は、すべて手話の普及によって可能になった。もちろん、条件によって、口話法が有用な範囲はあるであろう。しかし、手話を忌避する頑なな大嶋先生の姿勢は、聴覚障害者の現実と結びつかない。

「(手話は)ある程度のコミュニケーションには役立ちますが、一般社会には通用しません」(1970年)

「手話をタブー視する気風が聾学校の中に、ことに父兄の間に、いまなお強い事実に対して、長く教育に携わっていた者の一人として大きな責めを感じる。聾学校に対する聴覚障害者の深い、しかし当然な不信があることを悲しく思う」(1985年)

この遺稿集を読めば、手話をタブー視したのは、父兄ではなく、大嶋先生の信念である。

読み終わって深い感慨に襲われたのは、口話法を生涯かけて推進した大嶋先生の遺稿集が、いみじくも口話法の敗北を物語る証拠になっていることを感じたからだ。

言葉をしゃべれない子供は社会に受け入れられないと信じた口話法は、もしかしたら体が不自由で歩けない子供に、ちゃんと歩く方法を教えるというような教育だったのではないだろうか。

むかし、日本ろう話学校を最初に見学させてもらった46年前に、中等部の明るい女子生徒たちは、下校の道で鮮やかに手まねのコミュニケーションをたのしんでいた。

みみより会では、発足の当初から外山和郎さんが、喫茶店で手話を教えてくれた。

「こんど、日ろうでやってみよう」

「冗談じゃない」

と、外山さんは、手話を使った子供たちが、どんなふうに先生から叱られるか、顔をくしゃくしゃにして教えてくれた。

口話法も手話も、視覚によって聴覚を補う方法だと思う。神様が与えてくれた知恵といってもいいかもしれない。ろう学校の生徒たちにとっては、手話がいいとか、わるいとかの問題ではないだろう。

ニュートンならずとも簡明にわかる事実を、どうして、キリスト者の大嶋先生をはじめ、多くのろう教育者がやさしく理解することを拒否したのだろう。

この遺稿集の中には、日本ろう話学校を卒業した人々のことを、回想したり、褒めたり、励ましたりする愛情の記述が乏しい。それも、寂しいことだった。

## ● さあ、手話を習いましょう

ぼくは、いま、むかしの仲間と地元の公民館で手話サークルをやっている。

難聴の三浦裕さんは、会社を定年退職するまで手話は使わなかった。ところが最近手話が上手になった。健聴者の大原(旧姓中屋)恭子さんは、みみより会の第1回目の会合が朝日新聞社の会議室で行われたときに教育大学の学生だった。親戚の中に、耳の聞こえない方がいたのだという話を、手話サークルをやるようになってから、40年ぶりに教えてもらった。

ぼくが、1954年に、京都ろう学校の生徒、清水昭雄さんの新聞投書を読んで、清水さんに手紙を出したように、大原さんも清水さんに手紙を出した。

そういう人が何人かいて、それが母体になって、みみより会が誕生したのである。

基本は、やさしさなのだ。

手話をやりながら、ぼくらの学生時代に手話が使えたら、清水さんとも、もっと十分に会話できたのにと残念に思う。

ささやかな手話サークルでも、22世紀までつづくかもしれない。

もちろん、ぼくは、死んじゃうよ。

でも、それでもつづくとしたら、それは、これからのIT技術や医療の進歩を考慮に入れても、手話には心があるからだと思う。

えとき ひさし(千葉県習志野市袖ヶ浦)  
みみより誌初代編集長・みみより会参与・作家  
2001年「みみより」誌No.475掲載

No.37

大久保 紀次

母が遺していった私の浴衣  
白地にかすれた井桁の柄  
田舎に帰った夜  
湯上りの脱衣籠に  
そっと兄嫁が置いてくれる  
私はそれを着て盆の三日を過ごす

腕を通せばサラサラと糊のきいたその肌触りのなつかしさ  
林をわたる涼風のような  
樟脳の匂いのさわやかさ  
都会では着る余裕とてないから  
ずっと実家にあずけている私の浴衣

花桶を手に  
寺へつづく坂道を登る朝  
夏物の背広にワンピース  
みな今様の身なりの行き交う人がふりかえる  
ひとり浴衣姿の私は  
むしろ外人にでも見えるのか

昔はみんな盆の夜は浴衣を着て  
迎え火を囲み線香花火に興じたものだ  
あの子供らはどこへいったのだろう  
母もまた老いた指先で針を運びながら  
あの子はどうしているだろうと  
遠い異郷の私を思っただろう

夕ぐれの墓地に佇めば  
浴衣姿の私は精霊のようにしろじろと浮き  
母を身じかに感じる  
ふりそそぐヒグラシの幻聴に母の声を重ねる  
そのひとときの愛に満たされて  
私はふたたび旅立つ空をあおぐ

おおくぼ のりつぐ(岩手県上閉伊郡大槌町在住)  
みみより会理事/詩人・千葉県八千代市在住(当時)  
1995年「みみより」誌 No. 419 掲載

No.38

## 一人だけのナツメロ

かとう こうじ

あなたもわたしも 晴れ晴れと  
聞こえぬハンディ なんのその  
明るく過ごそうよ 青春の  
丘に岸边に まなびやに  
つどいて睦ぶ 若人の  
心は結ぶ あたたかに  
みみより育てよう いつまでも

ほぼ40年前の作である。一応「みみより賛歌」ということで作詞はしたものの、気に入らなくて自分で没にした歌である。しかし今になってみると、その後の私の喜怒哀楽にこの歌は少なからずかかわってきていたような感じを受ける。

当時、私は耳が聞こえないということで、非常にひがみっぽかった。職場の同僚と毎日のように軋轢を起こして、仲間はずれにされてきたが、もしこの歌がなかったらそんな状態に我慢できずに職場を転々としていて、今とはだいぶ違う人生を歩んでいただろうと思う。落ち込みがちな私を救ってくれたのは、いつもこの歌であった。正しくは歌の背景で「みみより会」の存在が私を救ってくれたと言ったほうが良いかもしれないが……。

また、実用面でも大いに役立ってくれた歌であった。10年近く前まで暗室作業が私の主な仕事であったが、はじめフィルムの現像はバットを使っていた。むきだしのフィルムを扱うのであるから部屋は完全な暗闇でなければならず、夜光時計の微かな光でも嫌ったので、時計を計るのは全てカンに頼っていた。そのような時に、1番から3番までの歌詞のどの行辺りまで歌えば何分経過したか、時には何秒経過したかまで、かなり正確に把握することができた。おそらく私の生涯では一番歌った数の多い歌であろうと思う。

その後、フィルム現像も時計を見ながらできるタンク方式に変わってゆき、私自身も結婚し所帯を構えてから、みみより会とも何となく疎遠になってきたこともあって、この歌とも縁が遠くなり、歌詞もいつしか忘れてしまったまま今日に至ったのである。

30数年ぶりに、この歌を思い出したのは息子の結婚式の席上で聞いた、あるスピーチのなかの言葉「青春・育てる・歴史」からの連想がきっかけであった。

かすかな記憶の糸をたどり、なんと歌詞を思い出して、主が居なくなってガランとしている子供部屋の中で、何年ぶりかで静かに歌ってみた。そのうち、自分が新婚時代に実家に遊びにいき、帰り時間になると、当時死の床にあった父が「今度はいつ来る？」と淋しがっていた情景と、いまの自分の心境が重なって、つい涙ぐんでしまったが、この歌がメランコリーなBGMになるとは思ってもみなかったことである。

この齢になると、青春・若人云々といった歌詞には違和感を感じるし、気恥ずかしくて歌うのにも勇気がいる。しかし誰も知るものがない歌、自分だけのナツメロを持っていることは、たとえ歌自体が下手くそな歌であっても気分の良いものである。

(昭和30年・みみより会創立の年に)

- 一 音なき世界に 光をば  
かかげゆくゆく はらからと  
ともに築こう 楽園を  
丘に岸边に まなびやに  
つどいて睦ぶ 若人の  
顔は晴れやか かげもない  
みみより育てよう いつまでも
- 二 あなたもわたしも 晴れ晴れと  
聞こえぬハンディ なんのその  
明るく過ごそうよ 青春の  
丘に岸边に まなびやに  
つどいて睦ぶ 若人の  
心は結ぶ あたたかに  
みみより育てよう いつまでも
- 三 目標しっかり 見さだめて

進むわれらの すこやかさ  
見聞ひろめよ ひたすらに  
丘に岸边に まなびやに  
つどいて睦ぶ 若人の  
理想は高く より広く  
みみより育てよう いつまでも

(平成7年・40周年を記念して)

一 雲なく晴れた 空よりも  
雲の切れめに のぞく空  
小さな青さが 目にしみる  
たとえわが耳 きこえずも  
心に映ゆる 青きよし  
みみより ありがとう いつまでも

二 高さに誇る 花よりも  
低く地表(オモテ)に 咲く小花  
大地のぬくみ 肌に知る  
たとえわが耳 きこえずも  
こころにぬくむ 花かおり  
みみより ありがとう いつまでも

三 しのつきしぶく 雨よりも  
静かにぬらす 露小雨  
表土(ツチ)を流さず 土中(ツチ)にしむ  
たとえわが耳 きこえずも  
こころにしむる 雨やさし  
みみより ありがとう いつまでも

加藤 光二(東京都町田市玉川学園)  
みみより会会員・理事  
「みみより」誌 1995年 No. 414・416 掲載

No.39

ラクダのコブにまたがって

## 鈴木克美

「鈴木さん、お別れの会をしたいんですけどね、ご都合はいつがいいですか」「え、もういいよ。何度もしてもらったし」「でも、こんどは最後のお別れ会ですから」。

「最後の送別会」なんて、やってほしくはなかったけど、そんなら願いがある。

「ぼくはね、今はもう、そういうときのあいさつが聞き取れないんでね、前例のないことかもしれないけど、ノートテーカーに来てもらえるようにしてくれませんか。せっかく来てスピーチしてくれるのに、主賓のぼくがその話を聞き取れなくては、失礼でしょう」。

要約筆記が必要なのは、主賓のわたし一人だけだから、OHPはいらない。ノートに書いてもらえばいい。

と、いうわけで「わたしの最後の送別会」は、「わがキャンパスで初めての要約筆記つき送別会」になった。要約筆記者を紹介する司会者のそばに立って、沖縄から北海道からも来てくれた皆さんの顔を、壇上からそっと見渡したところ、要約筆記がいて当然と見ていそうな顔もあったし、多少びっくりした顔もあったが、意外そうな顔はなかった。皆さん、わかってくれていたようだった。

大学の会議では、ついに一度も要約筆記とかについてもらう機会をつかめなかった。その心残りが、最後の最後に少しは埋め合わせできたように思えて、気が休まった。これでようやく、終わったと思った。

難聴者はふつう、話すのには困らない。同じ職場に長くいるうちに、もし、聴力が落ちてても、話しぶりはたぶん、そう変わらないだろう。聞き取りが落ちてても、それをおぎなうツボもわかって、自分も周囲も「聞こえの変化」に適応してゆける。ただ、もともと、難聴は外見ではわからない障害なのだから、聞こえの変化はなお、わかりにくいだろう。

自分の聞こえの低下を自覚した立場でわかってほしいのは、どう聞こえなくなったかという事実よりも、聞こえの低下を「職業への障害」に直結してほしくない気持である。そして、認めてほしいのは、そう心掛けてきたつもりの努力…ではなく、実績である。

「このごろ、鈴木さんは聞こえが悪くなったな」「いや、あんまり変わらないと思うけどな」と、聞こえ方の受け取り方もまちまちだし、一方、まあまあ、波風立てずに過ごしてゆこうという気持も、正直言って、ある。

「聴覚障害者は、自らの障害を認めなければならない。周囲に自分の障害をきちんと説明してから、職業人として立つべきだ」という意見がある。正論だ。だが、人生は評論ではない。下手に出て、リストラされては元も子もない。競争社会の障害者は、そのリスクをいつも考えていなければならない。

何かあれば進んで前へ出て、「聴覚障害」が「職業の障害」ではないことを、積み重ねていって周囲に納得してもらおう。必要なのは、言葉より行動だ。わかってくれば、困ったときの味方になってくれるだろう。

前にちょっと書いたことだが、十数年前、職場の自分のデスクから、電話を外してもらったことがある。それまで、補聴器を通してつないできた電話が、ついに聞き取れなくなった。聞き間違いが多くなり、通話の途中で話がわからなくなって助けを求めたり、周囲にかける迷惑が大きくなっていった。さんざん悩んだ末、電話はあきらめようと決心した。

組織人として、電話が使えないのは、大きなマイナスイメージだ。だから「自分の電話は、もう取り次がなく結構です。内線電話も外してください」と、きっぱり申し出るのには、かなり

勇気が要った。一方で、こう、申し出られた総務係も扱いに困っていた。

「理由はどうします」「耳が聞こえなくなったので、とさえいいじゃない」「そもいかないんですよ」「…」

「電話が使えなくなったから、いらぬ」と威張って(?)いうのは簡単でも、上部組織への説明はそう簡単ではない。しかも、その説明は、わたし自身がするのではない。申し出を受けた総務担当者の役目なのだ。

「内線電話の記載がない管理職があるものか」「文書にはできない組織秘密をどう伝えるのか」…それは、そうだろう。

たとえば、毎年の身体検査で心臓に欠陥が見つかったとする。まもなく「幹部登用は避けるように」と、マル秘の指示が入る。それが組織の論理である。

でも、現実には電話が使えないのだから仕方がない。電話が使えなければ鈴木は使えないのか…という、開き直りの気持もあった。

結局、日ごろわたしに好意的だった総務担当者は、「電話返上」が不利な査定につながらないように、聴力ダウンが能力ダウンに直結しない特例と受け取ってもらえるように、気を配って取り次いでくれたらしい。

お陰で、以後は定年まで、毎年更新される組織表の内線電話番号簿は、ずっと、鈴木克美の欄だけが空白のまま通った。

電話返上の一件は、いわゆる一つのピンチだった。でも、自分にとって、いつかは越えなければならぬ峠の一つだった。

水族館につとめていると、「自分の好きなことができているですね」と、いわれることがあった。その口裏に「のんきなお仕事でいいですね」というニュアンスがふくまれているときもあった。

昔はさておき、現今の水族館は忙しくて、とても「気楽な稼業」ではなくなったが、好きだからつとまる職業には違いない。その水族館の中でも、水族の飼育係は「好きなことをして」と、庶務や営業の人たちにねたまれて、いじめられることがあるらしい。

「お前ら、好きなことをしているんだと、いやみをいわれるんです」と、水族館に就職したばかりの卒業生から、泣き言をいわれて「好きでやってる者がいるからこそ、水族館が成り立っているんだと言いつ返し」などと、激励したこともあった。

水族館が好きな人はたくさんいる。当然、その理由は人によって待ちまちだ。「魚が好きだから」「海の中に来たようだから」「イルカショーが」「ジンベイザメが」「ただ、ぼんやりしていたくて」…。もっとも、内田春菊さんみたいに「水族館は興奮する。ぜったいのデートコース」と踏み込まれると、相槌を打っていいものかどうか、迷う。

水族館は今、テーマパークのように見られがちだが、ここには、水族館でしか飼えない魚がたくさんいる。たくさんの魚を健康に飼って海水を透明清澄にしておくには、特殊な管理技術がいる。

日本の魚 3,600 種のうちで、食用魚はせいぜい 600 種。水産の試験研究所は、食べられる魚しか相手にしないので、魚の世界の全体像は見えてきにくいだが、その点、食用になるのもならないのも合わせて数百種の魚を飼っている水族館は、研究材料の宝庫だ。水族館での研究は、今、トレンドイである。

たかが水族館、されど水族館。水族館の技術者は、一般の知らない世界も覗ける。専門家として一応の敬意もはらってもらえる。電話返上の一件だって、水族館の技術者だったから、通った向きもあったのだろう。

そういえば、昭和天皇、現在の天皇、秋篠宮と、わが皇室も水族館がことのほかお好きである。とくに昭和天皇は、全国各地の水族館を訪問され、水族館で質問するのをたのしみしていらした。陛下が亡くなられて組まれたテレビ番組のなかに『学者天皇陛下をしのぶ』という追悼企画があって、水族館屋のわたしが、陛下の思い出を語ることになった。

光栄な話だった。思い出すままに、水族館でご案内したこと、ご希望のヒドロゾアの標本を吹上のご研究所へ持参したこと、お手書きの膨大な研究ノートを見せていただいたこと、お書きになった研究論文は…と、話せることはたくさんあった。一生懸命、話した。

録画も無事に済み、1989年1月8日の放映も終わって、テレビ局からビデオが送られてきて、はたと困った。画面に写って熱心にしゃべっているのは、確かにこのわたしだが、しゃべっている内容が皆目わからない。何を話したのか忘れてしまったし、もともと台本も原稿もなしのアドリブ語りである。

出演してしゃべった当人が、自分の話を聞き取れないなんて、すごく奇妙なことだが、それが聴覚障害者の現実の姿である。

じつは、こういうビデオが手元にまだ、いくつもある。もっとあったのだが、ほとんど捨ててしまっていた。それでも、この「…陛下をしのぶ」ビデオだけは、自分が何を話したのか、おぼえておきたかった。

それが最近、ある人のご好意で、ビデオに字幕をつけてもらえることになった。ありがたい、良い時代になったものだ。

そういえば、5年ほど前に書いた『金魚と日本人』という小さな本が受けて、ラジオの深夜放送で、金魚の話をしてくれとやってきたこともある。え、そりゃ、だめだ。

「わたしは耳が聞こえないので、ラジオ出演は無理です」「いや、これはただ自由に、思うようにしゃべっていただければいい番組ですから」「でも、聞いて直しもできません」「それは、こちらでやります」…

と、またまた口説き落とされて、録音をなんとか済ませた。放送も無事に終わっただけだが、話した当人は、当然、放送を聞いていない。「聞きました」といつてくれる人もいたが、聞いていないものを、あいまいに笑って、ごまかすしかなかった。

後日、テープが送られてきた。これもそのままにしておいたところ、みみより会の懇親会で、Kさんから「ラジオの金魚の話の話を聞きました」と声を掛けられて、びっくりした。Kさんは大学生のときに失聴して、ほとんど完全に聞こえなくなっていたのが、人工内耳の手術を受けて、聴力回復に成功した一人だったからである。

「Kさん、ラジオも聞き取れるようになったの」「うん、よくわかるんだ」「…」

こちらは、ラジオを聞くのはとうにあきらめていた。高校生ごろ、ラジオに抱きつくように耳を当てて、高校野球の放送を聞いた記憶はある。そこにKさんの言葉が、天啓のように聞こえた。そうか、人工内耳。今はそうして、音を失った耳にも、ラジオ放送がよみがえる時代になっていたのだった。

この夏、中国の敦煌へ行き、砂漠でラクダに乗ってみた。面白かった。ラクダの背は馬の背より高く、風が涼しくて、遠くがよく見えた。砂漠で生きるラクダの脚が長いのは、そういうわけだったのだと実感できた。乗り心地もよかった。

砂漠の中の遺跡の陽関からまだ西へ、古代のシルクロードを思わせる、まっすぐな一本道が延びて、砂煙の底に消えていた。来年3月には、西安からこの道を通ってイスタンブールまで、55日かけて6か国をバスで行くツアーもあると聞いた。いつかはきつと、行ってみたいと思った。

初めてにしては楽々と、ラクダのコブにまたがって、砂丘を眺めながら進み、Kさんが聞いて自分はまだ聞いていない、深夜のラジオ放送の金魚のテープを思い出していた。

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授  
2002年「みみより誌」 No. 491号掲載

No.40

## 愛する学び舎よ 悔いなきわが天職よ

前田 精・江時 久

ストマイの薬害で10歳のときに失聴した前田精(まえだ・ただし)さんは、筑波大学附属聾学校の歯科技工科の先生です。

今年の3月で、31年間勤めた学校の定年を迎えました。いままでに330人の耳の聞こえない卒業生を送り出し、その教え子の60%がいま歯科技工士として活躍しているのだといいます。中には、自分で歯科技工所を経営している人も、30人ぐらいいるそうです。

歯科技工という職業にろう者の活躍の場を広げた前田さんは、意義のある仕事をやり終えた満足感で晴れやか表情でした。

急に温かくなった早い春の到来で、花々が賑やかな彩りに溢れる市川の国府台まで前田さんを訪ねました。

### ■ 幼いときの戦争の記憶

◆江時 前田さんは、定年後は郷里の鹿児島へ戻られるということですね。

◆前田 ええ、中学生までは鹿児島だったんです。といっても、私は昭和16年に北朝鮮で生まれました。父は、朝鮮総督府の警察官として、義州で勤務していたんです。私の生まれた年に真珠湾攻撃があり、アメリカとの戦争がはじまりました。戦争が終わったとき、私は4歳でした。日本が植民地として朝鮮を支配していたのですから、戦争に負けたとたんに日本人は報復される立場になりました。終戦のときは、長い逃避行がはじまりました。父はどこかへ連れていかれ、大勢の人が死にました。平壤の近くから仁川まで、みんな歩いたのです。4歳ですから、しまいには疲れて動けなくなる。「お母さん足が痛いよう」と、泣いたそうです。母は身の回り品とわずかな食糧をつめたリュックを背負い、そのリュックの上に生まれて間もない弟をのせ、私の手を引いていました。

(前田さんは、戦後の引き揚げの苦労話を、分厚い記録としてまとめあげている)

◆江時 幼いのに、たいへんな試練を受けたんですね。

◆前田 靴は底が薄くなって、小指のところに丸い穴があいていました。でも、あのときのことを思い出して、それからの苦労にも耐えられたのかもしれない。骨と皮だけの子供になって日本へ戻ってきまして、死んだと思っていた父の方が先に戻っていて抱きしめてくれました。世

界中で、いまも国と国との戦いが繰り返されていますが、戦争の悲惨さは立場の弱い者にしわよせがくることです。人間とは、歴史とは、一体なんなのだろうかと思いますね。

## ■ 萩原浅五郎先生との出会い

◆前田 耳はストマイのために10歳のときから聞こえなくなりました。完全に聞こえなくなったのは、中学生のときです。

◆江時 引き揚げるだけでも苛酷な体験をされたのに、小学4年生のときから耳が聞こえなくなって、神様も無情でしたね。中学までは鹿児島普通の学校へ通ったのですか。

◆前田 ええ、高校へ進学するときに、東京教育大学附属ろう学校の萩原浅五郎校長が、ラジオで、ろう教育の話が放送されて、両親がそれを聴いていました。それで学校へ手紙を出して、試験を受けて附属ろう学校の高等部へ入れていただくことになったんです。寄宿舎に入りましたが、むかしは高等部でも手話は禁止でした。筆談できる人も少ない。とても困りました。すごい経験でした。

◆江時 あのころから、教育大附属ろう学校は、全国から優秀な生徒が集まった学校といわれていましたね。それでも、手話禁止では、コミュニケーションできない。

◆前田 もちろん、言葉がわかれば、筆談でもなんでも、あとの勉強は努力次第です。しかし、筆談ができない生徒が現実で大勢いたんです。たしかに優秀な生徒も大勢いました。美術専攻科の大原省三先生のところからは、毎年、日展や光風会展に入選する生徒がつづいて話題になりました。

◆江時 みみより会も、1955年の5月ごろ、ここで例会をやったことがあったんですよ。板橋正邦さんが高等部の生徒で手続きをしてくれたんです。大原省三先生にも、そのときにはじめてお会いしました。木造の古い校舎でしたが、すっかり立派になって、すばらしい学園になりましたね。前田さんと歯科技工の関係は、どうしてはじまったんですか？

◆前田 それも萩原先生から話があったんです。ろう学校を卒業して、卒業後の進路を決めるときに、そのころ大阪の堺ろう学校で歯科技工科ができた(全国で7番目です)。だから、その助手としていって見ないか、といわれたんです。そのときは、附属校へ戻ることになるとは、想像もしていませんでした。

◆江時 ははあ、じゃあやっぱり、前田さんは見込まれたんだ。責任重大でしたね。

◆前田 責任重大でした。大阪へ行って一生懸命に勉強しました。8年間大阪にいました。初期のみみより会で活躍した西尾公彦さんも教育大を出て堺ろう学校の先生をしていました。私たちは、いい仲間です。みみより会に入ったのは、附属の高等部1年生のときで、大森節子さんにいろいろ指導していただきました。

(1960年代、大阪にもみみより会関西支部があり、前田さんは支部長に推された)

## ■ 天職となった歯科技工の仕事

◆前田 1970年に教育大附属ろう学校で歯科技工科を設置する準備がはじまりました。1971年に高等部専攻科に歯科技工科が設置されて、同時に歯科技工士養成所として認可を受けました。附属校は、歯科技工士養成施設として全国で28番目でした。それから31年間、ずっと、この学校で生徒を教えてきました。

◆江時 前田さんたちが、歯科技工科の基礎を作られたわけなんですね。思い入れが深いのも当然だ。

◆前田 入れ歯なんかと思う人もいるでしょうが、入れ歯のおかげで健康が保てます。寿命も伸びる。ご存じないかも知れませんが、入れ歯というのは、ほとんど手作業なんです。作った人に

よって出来栄えが違ふ。全国的なコンクールもあるんですよ。うちの卒業生も、いままでに、何人か入賞しています。

◆江時 へえ、それは知りませんでした。歯科医が型をとって作るわけだから、型があれば、同じものがいくらでも作れると思っていました。

◆前田 そうではありません。この技術は手作業なのです。美術の仕事と同じです。上手な人と下手な人が出る。この仕事が好きになった人が上手になりますね。腕前があがれば、一生食べていくことはできます。その代わり、忙しいですよ(笑い)。社会的にも重要な仕事です。学生たちには、仕事には二つあると教えています。一つは「賃仕事」、もう一つは使命感のある仕事、つまり「天職」。生涯を貫く仕事が「賃仕事」ではさびしいじゃないか。どんな苦勞をしても「天職」となるように、がんばれと教えています。

◆江時 いい先生だなあ。前田さんに巡り合った生徒たちは、ほんとうに幸せだったと思いますね。でも、卒業生は、聞こえる人たちの仕事場に就職して、専門的な話をするのに、コミュニケーションに困りませんか？

◆前田 積極的な人は、自分で周囲の人に手話を教えてしまいます。だから、大丈夫ですよ。

◆江時 なるほど。

(歯科技工の実習をしている教室を案内してもらった。生徒は、みんな一生懸命に手元を見つめて熱心だ。別な教室では、歯医者さんから手話通訳つきで、歯の解剖学の講義を受けていた)

◆江時 みんな、ここでは手話でやっているんですね。

◆前田 そうです。私は途中から手話を習ったので、そんなに手話がうまくはありませんが。この学校では、いまは高等部では手話を使っています。小中学部までは口話法でやります。

◆江時 むかしは、各地のろう学校の木工や洋裁の職業教育でも、手話を禁止していたんでしょうね。

◆前田 ええ、そうです。でも、手話が禁止されていたといっても、みんな手話を使っていました。萩原校長先生も手話は名人でした。

◆江時 あ、そうだったんですか。

◆前田 押し付けたら、子供はダメですね。生徒が使命感をもって自主的にとびこんでいけるような、そういう職業教育の環境整備が必要なんですよ。

◆江時 むかしは、お前はこれしかできないから、これをやれみたいな。いまは、同じ障害を持った前田さんから、希望のある仕事を、手話でわかりやすく教えてもらえる。これは、生徒たちの励みにもなるし、いい環境ですね。

◆前田 毎年、高校を卒業した人が10人ぐらい歯科技工科へ入ってきます。3年で卒業です。いまは、大学へ進む生徒が多くなりました。必ずしも職業教育を望まない。しかし、大学へいけばいいわけではありません。耳が聞こえないんだから、手に職を持つということは、絶対に有利なんです。ところが、職業科には学校としては設備に金がかかるんですね。予算がありませんから、古い器具を丁寧に使っていますが、歯科技工の仕事は、毎日、たくさんの石膏のゴミが出るんです。それを、よく掃除しなければなりません。31年間、毎日掃除してきました。毎日、毎日。

(前田さんが、毎日、毎日掃除してきた筑波大学附属ろう学校の歯科技工科は、いまでは独立した4階のビルのほとんどを使った立派な学び舎である。歯科技工科の常勤の先生は12人いて、そのうち5人が聞こえない)

◆前田 来年度から土曜日が休みになります。後輩の先生たちが、いま大問題に直面しています。

## ■ 人に感謝できることの幸せ

◆江時 奥様は大阪の方ですか？

◆前田 同じ鹿児島県北部の大口市出身です。私はその隣の菱刈町ですが、話があってお見合いしました。だから、こんど鹿児島へ戻るのに、なんの問題もありません。

◆江時 とてもいい奥様だと聞いています。会話は、手話ですか？それとも空書？

◆前田 いや、話してもらえば大体わかります。

(中学まで普通校に通った前田さんは、発声には問題がなく、読書好きで、しっかりした知識の持ち主である)

◆前田 定年を迎えて、女房が「ご苦労さま」といってくれました。私も「カーちゃん、ありがとう」と、心から、そんな気持ちです。

◆江時 お子さんは、一橋を出て留学されたと、うかがっています。

◆前田 弟の方ですね。ロンドン大学の留学を終わって、2年前まで警視庁に勤めていましたが、いまは司法試験を受けるために勉強しています。兄の方はデザイナーで、会社に就職しています。わたしの細いスネは、ずっとかじられっぱなしで太くなる暇がありませんでした。(笑い)

(2人のお子さんの話をするとき、前田さんは、ほんとうに幸せそうでした)

◆江時 ところで、前田さんは、去年、病気になられたんですね。もう、すっかりいいんですか。

◆前田 ええ、おかげさまで、いま命びろいをしたような気持ちなんです。八月に胆嚢にガンがあるといわれまして、すぐに手術をしました。発見が早く他に転移していなかったもので、2カ月半で退院できました。現在は体力も戻って、体調もよく元気で勤めています。3月15日が卒業式です。3月いっぱい、私の勤務は終わります。

◆江時 鹿児島へ引っ越されると聞いたので、あわててやってきたのです。

◆前田 ありがとうございます。大阪から東京へ戻ってから15年ほど、みみより会の理事となり、文化部長や、編集の手伝いをしました。力不足ながら、私が私なりに輝いた時代だったと、いまそんなふうにかえることができるのは、高寺志郎さんをはじめ、みなさんの強力な後押しがあったおかげと感謝している次第です。忘れ得ぬ年月をすごしました。いろいろな人が交替でつづけてきたみみより会は、ほんとうにすばらしい会だと思います。いろいろと紆余曲折もありましたが、私も感謝する気持ちで学校を離れ、東京を離れることができ、心から幸せだと思います。鹿児島には土地がありますから、家を作りました。妻も私も鹿児島出身だし、知り合いも大勢いますから、いまは、鹿児島に戻るのがいいことだと思います。

◆江時 鹿児島ではなにをしますか。

◆前田 なにも考えていませんが、また歯科技工をやるかもしれません。

◆江時 そうでしょう。それがまさに、天職なんですね。(笑い)

前田さんは、つねに控え目で目立たない人です。しかし、この人の人生には、あの4歳のときの引き揚げの苦勞が、しっかりした励ましとなって、まっすぐに生きる信念を支えてきたように思えます。

聞こえない耳を背負って、なんと堂々たる人生でしょう。

堺ろう学校から数えて39年、前田さんの教師としての生活は桜の花の咲く学園の中で静かに終わりました。学校では、たくさんの方から溢れるような花束をいただいたということです。3月23日に企画されたみみより有志の送別会には、むかしの仲間、いまの仲間が参加して、前田さんの第二の人生を祝福し激励しました。

みみより会は、障害を持った一人一人の歴史を包含してつづいています。満開の感動をもらった前田さんとの対談でした。

まえだ ただし(鹿児島県大口市里)  
前筑波大学附属聾学校高等部専攻科歯科技工科教諭  
えとき ひさし(本名・丸山一保 千葉県習志野市袖ヶ浦)  
みみより誌初代編集長・みみより会参与・作家  
2002年「みみより」誌 No. 488 掲載

No.41

## 怒りと優しさのために 12 ベートーヴェンの耳

丸山一保

1月27日。日曜日でした。

テレビの放送欄を見ていましたら、ゴールデンタイムの8時に、日本テレビで、「知ってるつもり？」という番組があって、その日の特集はベートーヴェンです。

### ● 違う、違う、みなさん

「世界史上最大の音楽家ベートーヴェン。貧しい宮廷楽士の家に生まれた彼は、聴力を失うという致命的なハンディキャップを背負っていた。しかも、後世に残る名曲の数々はその中で生み出されたものだった。なぜ多くの名曲を創造することができたのか、彼の人生を通して考える」

そんな刺激的な番組紹介が載っていたものですから、とうとう全部見てしまいました。

見ている途中で、「違う、違う」と、ぼくの心の中で吠えるような叫びが起きました。

「そうではないのですよ、みなさん」

「知ってるつもり？」という娯楽番組の中でベートーヴェンについて語った人たちは、司会者もゲストも、難聴について基本的な認識違いをしているように思えました。

聴覚障害というものに関係がなく、身の回りに聴覚障害者がいない人たちにとっては、耳が聞こえないということといえば、それはつまり「音が完全に聞こえない」だと思ってしまうのは、止むを得ないことかもしれませんが、ぼくのような難聴者から見ると、それほど残念なことはいのです。

たとえば、目の障害の場合も、目が見えない人の状態というのは、目をつぶってしまえば、だれでも、すぐに経験してみることができます。しかし、近視の実情を想像するということは、意外に難しいことなのではないでしょうか。

それと同じように、難聴というものの多様性と、その実態については、なかなかわかってもらいにくいものがあると思うのです。

### ● 聞こえなくても作曲できるのか

司会者は関口宏、ゲストは加山雄三、芳村真理、森口博子その他というようなメンバーで、その番組は構成されていました。

まず司会者が、ベートーヴェンの一生を解説しました。

「不思議なことに、ベートーヴェンの作った名曲は、ほとんどが、耳が聞こえなくなった30歳以後に作られています。一体、耳が聞こえなくなったベートーヴェンが、どうやって作曲することができたのでしょうか」

司会者の質問は、そこから始まりました。

「彼のように子供のころから音楽の訓練を受けてしまうとですね、基礎ができてしまっているから、スコアを見ただけで、どういう音かがわかるのですよ。楽譜を見ると、それだけで演奏を感じることができるのですね」

と、加山雄三が、ベートーヴェンの天才を強調して意見をいいました。

自らも作曲する加山雄三の言葉ですから、みんな感心した表情で聴いていました。

「しかし、彼は、自分の作った音楽を音で確認することはできなかったのね」

芳村真理が、ベートーヴェンの悔しさを思い遣って深い吐息をつきました。

後で調べてみると、この番組は、視聴率がビデオリサーチの調べで17.5%もあり、他の番組を圧倒していました。

自分の作った音楽を確認することができなかったというベートーヴェンの悲劇は、そんなことは実際にはなかったはずなのですが、お茶の間の視聴者に、改めて深い同情を呼んだのに違いありません。

## ● 静かだから作曲できる

「耳が聞こえなくなったベートーヴェンは、30歳ごろから、どんどん名曲を作ります。どうして、耳が聞こえなくなってから、かえってそんなふうに、いい作曲ができるようになったのでしょうか」

と、司会者が次の問題を提起しました。

「耳が聞こえなくなった結果、一切の雑音がなくなり、静かになったベートーヴェンの耳の中に、美しい音楽が、なににも妨げられずに鳴り始めたからです」

司会者がそういうと、ゲストたちは、ますますベートーヴェンに同情しました。

ぼくは、思わず苦笑してしまいました。

ぼくの経験でいえば、ベートーヴェンの耳には、絶えず耳鳴りがあったはずですが。これは、耳に障害のある者なら、だれだって、そう思うはずですが。ぼくの場合、耳鳴りは、脈拍と連動した鈍いリズムです。

確かに受験勉強のときには、難聴ならば家族の物音がちっとも苦にならないという利点があります。しかし、ベートーヴェンの耳から一切の雑音がなくなって、静かになったから作曲できたということは、まったくナンセンスなことです。

30歳を過ぎてから、ベートーヴェンが、素晴らしい音楽を次々に作ったのは、難聴の苦しみを越えて音楽の創造に打ち込んだ彼の魂が成熟をもたらしたものであり、そのことは、何よりも彼の耳が聞こえていたからです。

教会の鐘の音や、小鳥のさえずりが聞こえなかったというベートーヴェンのエピソードは、本当だったと思います。

しかし、離れたところからの音が聞こえなくとも、彼の耳には、自分で弾くピアノの音は、キチンと聞こえていたのです。

## ● 楽器の音は聞こえていた

ぼくの耳は、手術のおかげでかなり聞こえるようになったのですが、いまでも補聴器を外してしまうと、大雨がトタン屋根を叩く音が聞こえません。万雷の響きと表現すべきものであっても、距離が離れていると、それがまったく聞こえないのです。

しかし、ぼくは自分で弾くピアノの音を間違えることはありませんし、ヴァイオリンの弦が和音で共鳴するのも、ちゃんとわかるのです。耳の障害の中には、そんな性質の難聴が存在するの

です。

みみより会の初期のメンバーの中に、端乃瑤子さんという東京芸術大学のピアノ科の学生がおりました。彼女は、ショパンでも、ドビュッシーでもどんどん演奏してしまうのですが、日常生活では難聴者でした。

大学に合格したときの身体検査で、ぼくは医師から軽い言語障害があることを指摘されました。目の前が、真っ暗になるくらいの衝撃でしたが、おそらくベートーヴェンも、妙な発音をしていたのに違いありません。

それでも、かれの耳には、自分で弾くピアノの音は聞こえたのです。それは、なによりも、ぼく自身が生きた証拠として、そのことを証明できることなのです。

## ● 感音系と伝音系

芥川賞作家の五味康裕さんは、難聴で有名でしたが、自宅に防音扉付きの音楽室を作ってクラシック音楽を大きな音で聴いていたそうです。伝音系の難聴者にとっては、音楽は、自分の近くに音があれば、けっして聞こえないものではないのです。

天才少年演奏家として、デビューしたベートーヴェンが、中耳に病気のある伝音系の難聴者だったということは、同じ病気のために孤独な少年時代を送ったぼくには、だれよりもよくわかるのです。

このことは、耳が聞こえないということが、「音が完全に聞こえない」ことだと思ってしまう人には、理解できないことだろうと思います。

耳の障害の中には、大きく別けて2つの障害があります。

1つは、内耳から大脳にかけて音を感知する部分に障害がある場合、これを感音系の聴覚障害といいます。この障害の場合には音楽を正確に感知するのは、たしかに問題があるかも知れません。

しかし、内耳に異常がなく、中耳の骨に異常があつて、それが原因で難聴になっている伝音系の難聴の人の場合には、音楽は別に問題なく理解できるのです。

そういう人には、現代では補聴器が大変有効ですから、ベートーヴェンもきっと、今の時代に生まれていたら、補聴器の恩恵を最大限に享受できたのに違いありません。

## ● なぜ楽聖は独身だったのか

ベートーヴェンは、生涯にたくさんの恋をしますが、その恋は一つとして成就しませんでした。彼は、生涯独身でした。

それはなぜなのか。番組は、次第に重要な疑問を提起していきます。

「ベートーヴェンは口下手だったのではないか」、「音楽一途すぎたのではないか」、あるいは「恋人と身分が違いすぎていたからではないか」と、ゲストたちからいろいろな意見が出ましたが、司会者は、最後に彼が醜男だったことを紹介しました。

「ベートーヴェンも浮かばれないなあ」

と、ぼくは、がっかりしてしまいました。

少年期のベートーヴェンをモデルにして書いたという『ジャン・クリストフ』の作者ロマン・ロランは、名著『ベートーヴェンの生涯』の中で、「ベートーヴェンは、清教徒的な精神の持ち主だった」として、成就しなかったベートーヴェンの恋について説明しておりますが、果たして、そうだったのでしょうか。

いくら醜男だったからとはいえ、あるいは、清潔な信仰心の持ち主だったからとはいえ、美しい数々の旋律を生み出したベートーヴェンが、若い女性の心を掴むことができなかったというの

は、現代の歌手や、演奏者が、若い人の中で時代の寵児となっていく事実を考えると、まことに不思議といわなければなりません。

しかし、このことは、ぼくにとっては不思議でもなんでもないことでした。

ベートーヴェンの耳が、実は、少年時代からの難聴だったと考えれば、そこにはまったく謎がないのです。

## ● 難聴少年の恋

それは、多くの難聴の青年男女が経験したことでした。難聴であれば、好きな人の前では、手も足も出ないのです。

難聴者の孤独は、ろうの人たちの苦しさとも違った深い悩みがあります。青年期に、ぼくは、人と向き合ってしまう瞬間を恐れながら生きていました。

これを読んで下さる方たちの中にも、同じような思いをされた方が、大勢おられることでしょう。好きな異性から話しかけられて、答えることができない恥ずかしさを想像するだけで、絶望のために怖いほど寡黙にならざるを得なかった経験。

たしかに清教徒のようなものでした。自分の耳にかすかな障害があるということを、絶対に気づかれないように隠し続けるというのが難聴少年の宿命だったのです。

若いころのベートーヴェンが、なかなか難聴について認めなかった気持ちは、ぼくには痛いほどわかります。

もともと、少年というのは、みんな好奇心に富み、エネルギッシュで明るいものなのです。難聴は、そういう少年たちを寡黙にしてしまいます。それぞれ一人ぼっちで、難聴という障害と戦わなければなりません。学校という試練の場で、それが、ろう学校とか難聴学級ならば話は別ですが、あらゆる辱めにあって心が屈折します。そのことは、大勢の難聴者が経験している道なのです。

結局、ベートーヴェンが、自分の難聴を親しい人に話すようになったのは、実に30歳に近くなってからのことでした。それまで、彼の心は、難聴との葛藤のために地獄の苦しみを味わったに違いありません。

「不幸な人たちは、このわたしが悩み、苦しみ、それを乗り越えて生きたことを知って慰められるがいい」

やがて、運命への怒りを乗り越えたベートーヴェンは、この世の悩める人たちのために、神のような深い愛をもって素晴らしい音楽を築いていくのです。だから、彼の作った音楽は、美しさの中に魂の闘いと、人への愛、生への励ましを感じさせるものばかりです。

「知っているつもり？」という番組には、残念ながら、ベートーヴェンについて、あまり科学的でないところがありました。

しかし、たしかに難聴だったからこそ、ベートーヴェンは孤独の中から偉大な音楽を産んだのです。

視聴率17.5%という事実は、いまなおそんなベートーヴェンの存在を、大勢の人たちが尊敬し、親しみを持っていることの証明でもありました。テレビが、ベートーヴェンの耳に焦点を当てたことを嬉しく思いながら、同時にみみより会の仲間たちのことを考えてしまいました。

鈴木会長を始め、団さん、高寺さんも、須藤さんも、清水静子さんも、それから現在の理事会のみなさんたちも、みんなベートーヴェンのように、悩み、苦しみ、耳の障害を乗り越え、そして、この会のために努力されたのです。

すごいなと思いました。

後に続く人たちにとって、それぞれの存在が大きな励ましになることは、疑いもありません。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)  
みみより会参与・出版社総務部長(当時)  
1991年「みみより」誌 No. 376 掲載

No.42

怒りと優しさのために 13

## 変わらない熱気と、その理由

丸山一保

3月のみみより会の理事会が、2日の土曜日の夕方、三田の東京都障害者福祉会館の近くの、ルノアールという喫茶店で行なわれ、ぼくも参加させてもらいました。

### ● 理事のみなさん、ご苦労さま

いつもは、三田の会館の一室を借りて行なっているのですが、「耳の日」の関連行事のために会館が使えなかったのです。

喫茶店で打ち合わせをやるというのは、みみより会の初期のころと同じだなあと、懐かしく思いました。

その日集まったみみより会理事は、高橋広司理事長、佐藤和夫、遠藤良明の両副理事長、岡本昇蔵編集長、矢島幸雄事務局夫妻、大久保紀次、長谷川秀雄、味蓼雅美、佃征史のみなさんです。現在のみみより会を支えている人たちでした。

議題は、各担当部門についての報告。夏の合宿は、今年は岩手県の三陸海岸へ行くという準備が大変です。JRやバス会社、現地旅館との交渉結果について、佐藤さんや長谷川さんからいろいろな報告や確認が行なわれました。

それから、7月に開催される世界ろう者会議について、みみより会から茶道部が参加するという高橋理事長の報告。大久保さんからは、世界ろう者会議の情報が少ない、もっと「みみより」誌上で紹介するべきだったという指摘がありました。

また3月の末に文字多重放送に関するシンポジウムが全日本ろうあ連盟などの主催で行なわれることについて、みみより会にも案内が届いたことが、味蓼さんから報告されました。東京都中途失聴難聴者協会が、5周年を迎える記念祝典に招待状が届いたので、高橋理事長が出席することや、オーストラリア大使館でオーストラリア製の人工内耳の展示会があり、鈴木克美会長が出席できるかもしれないという報告が矢島さんからなされて、いずれも36年前のぼくらのころとは、比べものにならないくらいに、世の中の聴覚障害に関する動きが活発になっていることを考えさせられるものばかりでした。

その他、4月、5月の例会の準備、6月の総会の講演会の講師を決める問題、12月のクリスマスパーティーの会場を決める問題などが、佃さんや、大久保さんから、次々に定義されました。

みみより会の初期のころの委員会は、筆談が中心でしたが、いまの理事の皆さんは、手話を使って、まったく便利に議事を進行させています。それに嬉しいことには、高橋理事長以下の現在の役員たちの熱気は、ぼくらの青春時代とあまり変わりがありません。みなさん、ご苦労さま。思わずそんな気持ちになってしまいました。

## ● 若さが溢れた初期の合宿

雑誌「みみより」を発行し、例会を行ない、夏の合宿を企画したり、グループ活動を行なったり、本当に気の遠くなるほどの、歴代の会員、役員のみなさんの努力によって、みみより会は36年も続いてきました。

とくに、会が始まった最初の年から、合宿活動とグループ活動とは、雑誌発行や例会行事とは別に、みみより会の側面に華やかな彩を添えてきました。

合宿活動の始まりは、会員の山田康子さんのお宅で、伊東市の別荘を解放してくださったことがきっかけでした。開放というよりは会員をそっくり招待して下さったのでした。

昨年末、山田潤一先生は、95歳の天寿を全うなさいましたが、山田さんご一家のご親切によって行なわれた伊東合宿は、1955年と56年の夏の2回、それぞれ10日間ほど、延べにすれば100名を越える数の会員が泊めていただいたことになります。

そのころは、まだ戦後の復興期で、保養所での集団レクリエーションというのは、今では想像もつかないほどの、楽しい贅沢でした。

しかし、このことがきっかけとなって、普段顔をあわせることのできない地方の会員との交流を含めて、会員同士が、ゆっくりと膝を交えて友情を深める合宿の制度がスタートすることになったのです。

みんな、聴覚障害を持つ孤独の中で、真面目に人生と対決していた青年男女ばかりでした。それぞれが、悩みを持っていました。

誌上でしか知ることができなかった人たちが、一緒に寝起きし、一緒に泳いだりしたことによって、まるで子供のときからの仲間だったように、許し合いの親しさに感動したものです。

現在、竹工芸家として活躍されている杉田春男さんは、当時24歳の青年で、近江八幡市近江兄弟社にタイピストとして勤務しながら、竹工の勉強を続けておられましたが、伊東の合宿に参加してくださいました。

杉田さんは、中学1年生のときに脳膜炎で失聴され、滋賀県立ろう学校を卒業されましたが、独学で大検をパスされた努力家です。「みみより」第4号に、杉田さんの文章が掲載されていますが、それを読むと、当時の杉田青年の人生に対するしっかりとした考え方に思わず感心してしまいます。

## ● 杉田春男さんと竹工芸

最初、普通のサラリーマンとなることを望んでいた杉田さんは、ろうである自分の将来を考えると、事務職に憧れていた自分の生き方を、間違っていたと思うようになります。

当時は、現在のように障害者に対する雇用促進も社会福祉も、なにもない困難な時代でした。

子供のころから竹工が好きであった杉田さんは、好きな竹工を途中で止めた自分を反省し、24歳で、ふたたび竹工の世界に挑戦を開始するのです。サラリーマンの勤務が終わってから深夜まで、寝る暇もなく、竹と取り組む毎日が始まりました。

滋賀県に住んでいる杉田青年にとっては、金沢の越村英一さん(現在陶芸家・三ツ井詠一さん)や、東京の写真青年高寺志郎さんとの文通が、強い励ましになりました。

いま、堂々たる工芸家として一家をなした杉田さんは、30数年前に「みみより」に書かれたころの、まさに死闘ともいえるべき努力と自覚によって、今日を迎えられておられるのですが、そんな杉田青年が、東京の仲間たちと顔を合わせることができたのも、この伊東合宿の成果でした。

## ● ヨーロッパへ行こうよ

みみより会の合宿は、高寺志郎さんや、加藤光二さんらが中心となって、3年目からは会費制度で、八ヶ岳へ行ったり、沼津へ行ったり、白樺湖へ行ったり、全国から会員が参加できる行事として自主的に運営されております。

以来、36年間、いろいろな人たちが、この合宿のために奔走されました。会員の中からカップルが生まれたりして、いわば、みみより会の華やかな青春を演出してきた、この合宿の歴史については、それだけでも、いろいろな人の思い出が一杯あると思います。

前述のように、今年は新幹線に乗って三陸海岸へ行こうというわけです。時代の豊かさを感じないわけにはいきません。

準備をする人たちのご苦労は、本当に大変ですが、いまもなお、合宿が企画され継続されているエネルギーに敬意を表します。

3月の理事会が終了した後で、  
「みみより会が40周年を迎えたら、海外ツアーをやろう」

と、誰かがいい出しました。  
「ハワイ」

「いや、ヨーロッパ」

「それまで、みんな元気であるかな」

そんな心配も冗談のように出ましたが、現理事のみなさんの表情には、それが夢でないことを語る、十分な自信が読みとれたものでした。

前述のとおり、最初のころ本当にお世話になった、山田潤一先生がお亡くなりになりました。ここからご冥福をお祈り申し上げます。

## ● ひととき欄の女性たち

さて、みみより会のグループ活動を代表する手芸グループの仲間は、実は、みみより会の開始よりも早く、朝日新聞の家庭欄「ひととき」に投稿した人たちの間から生まれたものだったということです。

ストマイで失聴された須藤多恵子さんの投稿が掲載された昭和28年ごろの同じ紙面に、飯田光子さんの記事が載りました。

飯田さんも入院中にストマイで失聴し、離婚されるという過酷な経験を持っておられました。

お二人の紙面を見て連絡された新堀昭子さんなど、ストマイ失聴者のみなさんの文通がみみより会のスタート以前に既にできあがっていたのです。

このみなさんが、みみより会に参加してくださるようになり、昭和31年に発行された「みみより通信7号」の中で、鈴木光子さん(飯田さんが離婚して鈴木姓になられた)が、手芸グループの提案をされています。

鈴木さんは、親睦ばかりではなく、みんなで技術の向上を図り、展示会、即売会を開いたり、将来は、簡易職業指導所とか、授産所のようなものを作っていこうと呼びかけておられますが、実際に、手芸グループは、その通りに大活躍する集まりとなったのでした。

刺しゅうのプロ佐藤禎子さんや、人形作りの好きだった西瀧雅子さんや、和裁の上手な鈴木さんや、会の中の手芸の好きな人、洋裁で食べていける人たちが集まりました。

マリオネットの太田君枝さん、フランス刺しゅうの高坂昌子さん、それに健聴者の中田幸子さんが、エプロンや子供服のデザイン・縫製指導をされましたし、池田紀子さんが、ろうけつの講習会を開いたりして、みんなのレパートリーがどんどん増えました。

西瀧雅子さんのお母さんも手芸グループの一員として、バザー会場の交渉をしてくださったり、自宅を開放して会計を受け持ってくださったりして、グループの耳の役目を引き受けてください

ました。こうして、手芸グループのバザーは、いつも新宿の東電サービスセンターで開かれるようになったのです。

耳の障害にもかかわらず、女性たちが活発に展開したこのグループの素晴らしい活躍については、須藤さんや鈴木さんが努力して、当時、新聞やテレビでも話題として紹介されるようになりました。

須藤さんによると、手芸グループは解散するまでの20年間に、毎年欠かさず春秋のバザーを開催し、総勢60名ほどのグループ員が、常に、和やかに集まり楽しく運営されたということですが、私利私欲を捨て、みんなが一致して正直な心のこもった作品を作り続けたことが、買う人に喜ばれ、グループの発展の基本ともなったのです。

まとめ役のみなさんが、年をとられた関係で、手芸グループは現在解散しておりますが、当時、鈴木光子さんが提唱した授産所建設の理想までは実現できませんでしたが、解散に当たり、みんなのエネルギーの結晶のようなバザー積立金1,000,000円を、みみより会に寄付していただきました。

ちなみに西潟さんは高寺志郎氏と、高坂さんは長谷川洋氏と、太田さんは山本義治氏と、それぞれ華やかに「みみより結婚」され、この運動が、若い人たちの青春の必然だったことを証明してくださいましたが、一方では、悲しいことですが、その山本君枝さんを始め、渡部若枝さん、田代孝子さん、西潟春子さんらのみなさんが、長い年月の間に、すでに故人となってしまわれております。

## ● 優しさという宝物

永続と発展には、さまざまな理由がありますが、みみより会が、人々の生涯の消せない1ページとして、それぞれの生きる足跡と共にあるのは、基本的には、この会の運動が、欲得づくではないということでしょう。

個人差はあるにしても、みみより会に集まっている人たちは、利得を離れて会のために奉仕して下さった人たちばかりです。それが、会を永続きさせている基本であるとするれば、利得のために狂奔する世相とは、また実に違った世界といわなければなりません。

むかしから、いままで、この会には、前述の山田さんや、西潟さんのご家族以外にも、善意に満ちた健聴者の人たちが、いろいろと協力して下さっております。創立の当初でいえば、初代の会長を引き受けて下さっていた岡田秀穂さん、教育大の学生さんだった旧姓中屋恭子さん、例会や手芸グループに協力して下さった旧姓鎌田久子さんなど。

年月が移り変わっておりますが、元手芸グループのみなさんは、年に一度、今でも三田で会合し、楽しかった思い出を確かめ合っておられるということです。みみより会が教えてくれるのは、この世の優しさの体験です。

その優しさを感じるために、みんなが、いまなお、この会に集まり、ときには、ほっと一息つくのではないのでしょうか。

まるやま かずやす(千葉県習志野市袖ヶ浦)  
みみより会参与・出版社総務部長(当時)  
1991年「みみより」誌 No. 377号掲載

# みみよりは心のふるさと

團 順一・高橋 広司

## ● プロローグ

この人のことを忘れていた、いや、忘れていた、なんて言ったら失礼に当たるほどの大物である。我が「みみより会」にあつて正に「中興の祖」であり、歴代理事長の中でも、この人ほど会員に親しまれた人はいない。

古い会員なら誰でも知っている。ご存じ團順一参与である。理事長歴10年を越え、岡本編集長にバトンを渡すまで編集長兼任の時代もあり、文字通りみみより会の大黒柱的存在であった。

高橋は思う。團さんなくして今のみみより会は語れない。その團さんを今年はお迎えすることにした。團さんは個人的には冗談もうまく、気さくな人ですが、対談のような公的なハナシになると、優等生に変身してしまうので、少々堅いやリトリになるかもしれませんが、堅いところはよく噛み砕いて、人生の妙味を味わいながら最後まで読んでください。

理事長 高橋 広司

◆高橋 今日是我があこがれの人、團さんを迎えてまるで初恋の人に何十年ぶりかで逢うような気持ちです。少々緊張しております(笑)。この対談どうぞよろしく。

◆團 こちらこそどうぞよろしく。今日は自分が白羽の矢を立てられようとは(笑)高橋さん、まあ、お手柔らかに願いますよ。

◆高橋 なにを言ってるんですよ！ 白羽の矢だとか、お手柔らかに、だとかうまいこと言って(笑)。大先輩を前にしてビビっているのはこっちの方ですよ(笑)。

ところで、対談に入る前の大変失礼な質問ですが？ 團さんのお歳を聞いていいですか……。

◆團 お歳ですか(笑)実は今年が僕の歳なんです。今年が平成3年、西暦1991年で右から読んでも左から読んでも同じですね。干支は未(ひつじ)です。

◆高橋 そうすると團さんは年男ですね。エート高橋が昭和7年生まれで申年だからエート？ネ・ウシ・トラ……ウマ・ヒツジ・サル・トリ・イヌ……と、あれえ、團さんは昭和6年生まれの還暦？(笑)。

◆團 そうなんです。早いもんですよ、まったく(笑)。昔なら赤いチャンチャンコですが、でも、今は50・60は洩垂れ小僧の時代ですから、60なんて一つの区切りであつて、ここで一旦リフレッシュ、人生これからですよ。

◆高橋 そうだ、その意気！(笑)。今は人生80年の時代ですからね。歳がひと回りしたところで新たなる出発点の記念すべき年の初め、というわけですよ。

さて、そろそろ対談に入りましょう(笑)。まず順序として耳のことを伺いたいですね。

## ● 失聴時の心境

◆團 僕が失聴したのは昭和28年の6月ですが、そもそもの始まりは昭和24年、歯科医の卵だった学生の時に結核菌に感染してしまつて、その時に打つたストマイの副作用によるものです。つまりその頃の言葉でいえばストマイツンボって奴ですよ。

◆高橋 ストマイでやられた人は多いですね、結核と引換えに、つまり命と引換えに耳をやられたわけですね。團さんの耳のことは昔のみみより誌には何回も掲載されていますが、もう少しお話ねがえませんか。

◆團 そうですね、ストマイを使っているうちに耳鳴りが始まつて、少しずつ聴力が落ちてきま

したが、まだ初めの頃は軽度の難聴でしたよ。まあ、この程度なら、と安心していましたが、気がつかない内に聴力の低下が進んでいたらしく、昭和28年の春ごろになってね、スーと言葉が割れて聞こえるようになったり、また元に戻ったりして、そんなことを繰り返すようになったのです。

◆高橋 するとその頃はまだ聞こえていたわけですね。でも聞こえが良い時もあったり、聞こえが悪い時もあったりなんかすると精神的に不安だったでしょうね。

◆團 まあね、ところが、そういうことを何回も繰り返しているうちに、聞こえが悪い時の方が多くなって遂に元に戻らなくなってしまったのです。ですから例えば、高熱でうなされていて、意識を取り戻したら聞こえなくなっていたのではなく、徐々に軽・中・高と、ステップを踏んで失聴したわけですから、ろうになるまでに各ステップの感覚的な違いを味わったわけですね。

◆高橋 徐々に悪くなっていったのでしたら、その過程で失聴に対する「心の準備」というものは出来ていたわけでしょうね。その当時の心境はどんなものでしたか？

◆團 そうですねえ、日常生活では軽い時はね、さほど不自由は感じなかったし、中程度の難聴になった時でも耳鳴りはうるさかったけれど聞きなおせば話は分かるのでまあまあでしたね。

だけどね、それがもっと進行して高度になった時にはコトバが雑音のように、こう何とかなかな？ ガアガアという、こわれたラジオかテレビみたいだね、人のハナシが分からなくなってくると精神的にはとても不安定でした。かなり強いコンプレックスを持つようになってきたものでしたよ。

◆高橋 耳がダメになってしまった当時というのは、誰だって強いコンプレックスを感じるものですよね、高橋も失聴当時は友人や知人に会うのが怖くて、心を閉ざしてしまった時期がありました。なにを見ても面白くなかったし、本を読んでもね「この本の主人公は耳が聞こえて、どうして俺の耳が聞こえてこないんだ、不公平だぞ」なんて思ったりして。

◆團 おやおや、本に八つ当たりしてたの(笑)。僕の場合ね、聞こえなくなった当時、こりゃ大変だぞ！ と思ったけれど、今考えてみるとそれだけであまり落ち込むこともなかったですね。少しは医学を齧っていたこともあって、こうなった以上慌ててもどうにもならないものだ、という気持ちと、もともと聞こえていたのだから、またいつか聞こえてくるだろう、という希望が心のどこかにあったからでしょうね。

◆高橋 そう、そう、あったね。高橋も失聴当時は「また聞こえてくるだろう」と思ったものね。でも6カ月もたつと「やっぱりダメか」と思ったりして、少しずつ諦めていったようでした。

◆團 僕の方も「やっぱりダメ」でしたが祖母は助産婦でしたし、父は歯科医という家庭でしたから、表面は平静でしたが両親はさぞ心を痛めていただろうと思いますよ。

でも自分としては歯科医として父の後を継ぐことが出来なくなったことは、非常に残念だと思うが、歯科技工の方は出来るし、健康でさえいれば何とか出来るだろう、と考えていましたよ。まあ、腕に技術をもっていたこともあって恵まれていたようです。

## ● 聞こえなくて困ったこと

◆高橋 耳が聞こえなければ困るのは当たり前だし、ヤボな質問ですみませんが(笑)、個人によって困り方？ も違うでしょうから何かありましたら……。

◆團 耳が聞こえなくなって一番困ったことはね、これは誰でも同じでしょうが、やはり人の話すコトバが聞こえなくなったことですね。それが、家の中でも、外へ出てもですからね。まったく不自由なもんでしたよ。家の中では、まあ空中文字と筆談ですませても外ではダメでしたよ。

◆高橋 聞こえなくなった当座はね。困りますよね。道で知っている人なんか会うとね。そり

やもう困っちゃうですよ。

◆團 そうそうこまっちゃうですね(笑)。近所の人なんか会ってもね「実は耳が聞こえなくなってしまうって……」という一言すら言えなかったもんですよ。つまりコンプレックスの塊みたいなもんだったですね。

買物にしても、当時はスーパーなんかなかった時代だし、近所の店なんか「へいっ、いらっしゃい！ 何を、……」で始まる対面販売ですからね。

◆高橋 対面販売？ うまい表現ですね。へーい！ いらっしゃい(笑)、それから……。

◆團 それからね、以前なら顔なじみの店ではいろいろと世間話でもしながらの買物でしたし、それが楽しみでもあった訳ですが、今度はそれが苦痛になってしまってね。受け答えできない寂しさを感じましたよ。

◆高橋 まったく、その通りですよ。床屋さんになんか行ってもね、耳が聞こえていたときになれば気楽に世間ばなしなんかして、結構楽しかったんですがね。いま床屋に行っても楽しくないですよ。話しかけられたらどうしよう！

早く終われ！(笑)、なんて思ったりしてね。気を使うね(笑)。

そういえば以前、友達が間違えて坊主にされたことがあるんですよ。何だか知らないけれど床屋さんが何か言っているから、ウンウンとあいづちを打っていたら頭がツルツルの坊主に……(笑)。

◆團 ほう、それは、坊主とはヒドイね(笑)。あのね、買物でね、値段が書いてないと幾らだかわからないでしょ。普通なら「これいくら？」「ああそう、じゃそれ」で済むんですがね。聞こえないと「いくらですか？」なんて気楽に聞けないから、いつもお札を出してオツリを貰ったんですよ。今じゃ聞き返しても分からない時には、分かるようにしてもらおうけど、当時はね……。だからポケットの中は小銭がジャラジャラ！ 重くってね(笑)。

◆高橋 いつも小銭がジャラジャラでね(笑)。

◆團 最近では、消費税のせいで正札のうえに消費税が加算されたり、そうかと思うと消費税はサービスだったりして、とっさに計算出来にくくなって困りますね。

その点、高橋さんは珠算一級の腕前だからその素晴らしさは昔から有名で、グループでの飲み食いの勘定のときにさんざんお世話になっているので知っていますが、消費税加算の暗算なんかお手のものでしょうね。羨ましいですよ。

◆高橋 まあ、お手のものには違いありませんが、そう羨ましがられるほどのものでもありませんよ。それよかホンマに消費税はメンドウでんな。反対でっせ(笑)。

1,000円と書いてあるから、1,000円払って行こうとしたら、「もしもし、消費税を……」なんて言われてもね、こっちは聞こえないから恥ずかしい思いをしますよマッタク。その逆もあってね。こっちが気をきかせて、消費税30円を払って行こうとすると「もしもし、ウチは消費税とりません」と、まったくアタマにきちゃうよ。

◆團 まったく、折角の売り手の好意がわからないと、お互いバツの悪い思いをしてしまうものですね。

## ● 同障の仲間たちと

◆高橋 さて、頭にきっぱなしじゃ困るので話題を変えましょうか(笑)、われわれは耳がダメになって、まず思うことは同じ障害を持った友が欲しいと考えますね。それは自然の感情と思うのですが、團さんが「みみより会」を知ったキッカケはなんですか？

◆團 そうですね、ある時ね、やはり結核にやられて診療所のにいた歯科医の友達から手紙がきましてね、保険同人という雑誌に「昨今増加しているストマイなどで失聴した中途失聴者を対象

にした読話講習会が、東京の桜上水にある日本ろう話学校で開かれている……」という記事が出ているが團君にどうかなあと、切抜きを送ってくれたんです。

◆高橋 その切抜きのコラムが、つまり運命との出会い……になったのですか？

◆團 そうです。この小さな記事のおかげで今の僕があるんですよ。この記事から日本ろう話学校→僕の仕事になった耳型(イヤーマールド)の研究・製作→そして、みみより会とつながっているのですからね。

もしも、友人がこの雑誌を読まなかったら、もしも、日本ろう話学校へ行く気持ちにならなかつたら、と考えると縁とは不思議なものだと、つくづく思いますね。

◆高橋 もしも、クレオパトラの鼻がもう少し低かったら……(笑)、そして高橋がもう少しハンサムだったら(笑)、みみより会の歴史は変わっていただろうか？ これ、冗談(笑)。

◆團 まあ、そういうわけで日本ろう話学校へ半年間、週3回、夜2時間、読話の勉強に通いましたよ。あれは昭和30年8月でしたが、その時に望月教頭先生がね「今、みみより会という中失や難聴の学生さん達が集まっている会があって、役員の学生さんが時どきここへ来るから会ってみませんか」と言うんですね。

そして、ある日、ガリ版刷りの「みみより通信」を抱えて学校に来た東京水産大学の学生さんがいたのです。誰だと思いませんか？

◆高橋 東京水産大学なら鈴木会長ですよ。

◆團 そう、その時に鈴木克美さんと初めて会いました。例会に誘われたので、12月に会場の杉並ろう学校の新宿分校へ行ってみたのですが、30人くらい居ましたね。みんな若くて、明るくて、とてもいいムードでした。

その時、当時の会長の岡田秀穂さん、東大生の丸山一保さん、明治学院大学の外山和郎さん、伊藤由吏代(矢島秀子)さん達とも初めてお会いしました。一人ひとり名前を挙げたらキリがないけど、鈴木さんより紹介され、みみより会がいつまで好きになり、皆が耳の障害に負けずに頑張っているのを見て、とても励まされましたよ。高寺さんは僕より1年あとに、やはり日本ろう話学校に相談にきて仲間に加わったのです。

## ● みみより会のこと

◆高橋 高橋が入会した頃(昭和35年)は團さんが理事長(当時は委員長とっていた)でしたね。あの当時の團さんの笑顔に誘われて、ズルズルと今日まで役員をやってきたのですが(笑)、みみより会についてお話ねがえませんか。

◆團 みみより会はね、初め京都のろう学校生徒がね、朝日新聞に「耳の聞こえる大学生と文通したい」と投稿したのがキッカケです。「文通したい、話をしたい」という声に参与の丸山さんや前会長の岡田さんたちが応えて「じゃ、一度集まろうではないか」ということになったのです。

そして、昭和29年の秋に、東京の朝日新聞社の一室で学生たちが顔を合わせたのがみみより会の始まりでした。その翌年、昭和30年の4月に「聞こえない耳、聞こえにくい耳、そして聞こえる耳、この三つの耳が寄り集まって進んで行こう」という意味で「みみより会」と名付けた会が発足したのです。

◆高橋 そうですか、いい話ですね。いろいろな耳が寄り集まる。聞こえる耳も聞こえない耳も皆が仲良くして、励まし合って行こう。特に耳の悪い人間はひがみっぽくなりがちですからね。明るく生きる為には仲間が必要です。仲間がいれば人生航路の荒波も乗りきっていけるでしょう。

◆團 そうですよ、僕はみみより会に入ったときね「耳で苦しんでいるのは自分一人ではなかつ

た」という嬉しさと共に仲間と一緒に動けることに喜びを感じたものでした。

ああ、そうそう、高橋さんが桜上水の日本ろう話学校で開かれた例会に初めて来たときのこともよく覚えていますよ。頭に真っ白な包帯をぐるぐる巻きつけてね(笑)、和服の着流し姿も、なかなか板について、といった格好でしたね。

◆高橋 和服の着流しですか？ まるで渡世人みたいだね(笑)。あの時はまだ病院に入院中でしたが、みみより会の例会を知ったので矢も盾もたまらなくなってコッソリと病院を脱走してきました(笑)。

◆團 そりゃ、脱走兵、銃殺ですぞ(笑)。とにかく目立つ格好でしたから、よく覚えているんです。聞けば専修大学商学部卒の27歳で、中耳炎の鼓室整形術を受けて、それが失敗して全然ダメになったとかでしたね。

僕のほうは司会やら雑用に追われていて、高橋さんのことが気になっていたんですが、休憩時間になったので話しにいかうかと思って捜したけど姿が見えなくなってしまったんですよ。もう、帰ったのかな？ と考えながらね、ふと中庭の方を見たらね、いやマッタク……。

◆高橋 いや、まったくどうしたんですか……？ 自分じゃ、そんな細かいことまで覚えていませんが何かあったんですか？

◆團 それが何と、一人で悠々と足を伸ばしてね、ブランコに乗っているじゃありませんか(笑)。一瞬、あっけにとられました。

◆高橋 タカがブランコに？ まさか！(笑)。

◆團 いや覚えていますよ。タカが無心にブランコで揺れている姿をみてね、この男なら心配ないな、前向きに生きて行く気力があるようだ、と安心したものでしたよ。どうしてかということ、普通ならみみより会に初めて来た人はね、ほとんどの人は緊張しているので、役員はまず心を解きほぐして会員の中に溶け込んでもらうように気を遣うものです。だから僕が安心した、というのは、そういう心配が高橋さんには無かったということですよ。

◆高橋 そんなことはないですよ。やはり人並みに慰めて頂けませんと(笑)。でも自分で言うのはナンですが、あまりくよくよしない性格なのかも知れませんね。でもみみより会に入会して精神的に救われたことは確かです。ですから自分にとって、みみより会は神様のようなものです。

◆團 入会後の高橋さんには大森節子さんの後の会計をやってもらったり、今もこうして理事長としてみみより会をまとめてくれていることは、感謝あるのみです。

あのね、これは黙っていようかと思ったのですが、高橋さんの母上には一度お会いしてお詫びしなければ、と思いつつ生前に機会が無く過ぎてしまって申し訳ない、といつも頭から離れないことがあるんですよ。

◆高橋 何だろうな、お袋のことで何かあったんですか？

◆團 生前の高橋さんの母上との約束で黙っていようと思ったのですが……。

それはね、むかし僕が委員長で高橋さんが会計委員として協力してもらっていた時の話なのですが、母上から手紙を頂いたのです。「広司がお世話になり、みみより会のおかげで元気になってくれていることはとても嬉しいのですが、みみより会のことに夢中になって、いつも勤めから帰ってくると疲れた、疲れたと言いながらも、毎晩、夜中まで会員の方への手紙の返事やら、その他の会務などでもう身体をこわさないかと心配しております。広司は会計士の資格を取るために勉強しなければなりません、これでは勉強する時間ありません。

広司はなんでもすぐ夢中になる性格ですが、今は広司にとって一番大切な時ですから、申し訳ありませんが、みみより会の会計係を辞めさせて頂けませんかでしょうか、どうぞよろしくお願い致します。親として見かねてこんな手紙を出しましたことは広司には黙っててください」こんな内容でした。母親の我が子を案じる心には打たれましたが、高橋さんがいなくなったら、みみ

より会の経理面を安心して任せる人はいないので、母上には「誠に申し訳ありませんが、もう少しの間お待ちねがえないでしょうか」と返事を出したのですが、結果としてそのままになってしまったことなんです。

◆高橋 うん、(しんみり……)そうですか。実はね、お袋が團さんに手紙を出した、ということは知っていたのですが、その内容までは知りませんでしたよ。たぶんお世話になっています。有難うございます。という礼状のような手紙だろうと思っていましたが……。

あの頃はね、失聴したばかりでみみより会に助けを求めなければ生きて行けなかったんじゃないかな、と思うんですよね。だから……だからね、会のことを夢中でやるのが、それが生き甲斐になっていたんじゃないか、と今でもそう思うのです。

## ● 会の役割と、これからの方向

◆高橋 さて、そろそろ紙面も尽きてきたようですが最後に團さんが日頃お考えになっているみみより会の役割とか、会の方向とか、についてお話ねがってこの対談のしめくくりとしましょうか。

◆團 今ね、高橋さんが会のことを夢中でやること、それが生き甲斐になっていたんじゃないか、と言われましたね。

それなんですよ、まったくの話。昔も今も、みんなその気持ちを持っていたからこそで、そして、その気持ちを失わないかぎり、みみより会は続くでしょう。

僕だって、そうだったんですから。今でもそうですが自分のことよりも「みみより」をと、やってたことが回りまわって、結局はすべて自分のためになっているんですね。何だか禅問答みたいですが。

◆高橋 会のために何かをやるのが、結局自分のためになっているんですね。親睦とか福祉とかも人間一人ひとりの生き甲斐に結びつかなければ意味がないですよ。

◆團 親睦か、福祉かとはいつになっても古くて新しいテーマですね。どっちかといえば親睦は広義の福祉に含まれ、親睦面の充実があつてこそ福祉面も充実するわけです。親睦と福祉は車の両輪みたいなものです。

みみより会は、まず親睦面が中心だったわけですが、35年間続き、みみより誌もこの新年号で374号ですね。これは本当に素晴らしいみんなで作ってきた財産ですよ。

◆高橋 みみより会の役割はいろいろありますが、みみより結婚も重要な役割の一つですね。

◆團 昔、みみより結婚そしてベビー誕生の頃この子達が親を語る年齢になる日には、遥か遠い先のことだと考えていたのに、もう孫までが合宿に参加するようになったのですからね。この長い年月の間に、みみより会から数多くの者が巣立ってゆき、各方面で活躍しているし、そして子育てが終わり、子が親ばなれをして夫婦二人に戻った古い仲間がまたフラリと顔をだすようになり始めましたね。

こういうことから、みみより会はおふくろさんの役目を果たして来ているんだなあと思いますね。ぶきっちょだか暖かさのある故郷のおふくろさんですよ。

◆高橋 おふくろの味？(笑)。確かにそうですね。高橋にとってもみみより会は「心のふるさと」ですよ。今は全国各地に難聴団体の結成が相ついでおり、みみより会でも他団体との連携が大切になって、会の方向が問われている時代ですが、團さんはどのようにお考えでしょうか。

◆團 いま、各地に中途失聴・難聴者団体が生まれていることは福祉向上のために、実に喜ばしい事です。そういうところからもう、みみより会の役目は終わったんだ、という見方もありますが、それよりもこれからは価値の多様化が進む時代になるだろうと思います。

そうすると、みみより会の良さも浮かび上がりますよ。最近ファジー、ファジーとあいまい理

論が家電製品にも取り入れられ流行のようになっていきますね。コンピューターに、より人間に近いあいまいな判断を持たせようというわけです。みみより会は今までもこの傾向を持っていたのですが、これからも、このファジーでいくのが良いと思いますよ。

◆高橋 そうですね、今日の様に時代というものが多様化してくると親睦か、福祉か、右か、左かで割り切ってしまうことも考えものですね。もっと時代のニーズに沿った方向に進むことも必要だということですね。

◆團 そうですね。すべてを○か×か、右か左か、正か邪か、またコンピューターのように1か0か二者択一的に考えてしまわずに、あいまいさを大切にすることですね。

そこに疲れたときには、身体と心を休める事が出来る暖かさのある、故郷の味をもった「みみより会」として存在価値もあるわけでしょう。そう思いませんか？

◆高橋 なるほど、そう思いますよ。そういう面がとても大切ですね。

それでは、まだまだお聞きしたいことがあるのですが時間がありませんので、この辺で対談を終わらせていただきます。

どうも有難うございました。

1991年「みみより」誌 No. 374 掲載

No.44

## 「辞書」も世につれ

鈴木克美

玄関で近所の奥さんと立ち話していた家内が、ようやく、居間へ戻ってきた。

「どなた？」「〇〇さん」「ご主人はなにをされている方なの？」「〇〇きんぞく」「え？なにを？」「〇〇きんぞくヨ」「だからなに？」

夫婦の会話がかみ合わないときのパターンの一つである。穏やかに始まった会話が、行き違って進み、二人で笑い出してしまえばいいが、どっちかが不機嫌になって、不本意に終わることも少なくない。職場でも、似たような場面は数限りなくあった。補聴器をつけてもだんだん聞き分けがむつかしくなった、こちらの耳のせいである。

わたしは、読話ができるほうだと、自分では思っている。最近、ある病院で、補聴器をつけての単音の聞き取り検査で、口を見て68%、口をかくして5%だった。

ただ、相手が話し始める最初の言葉をとらえるのが苦手である。人名、地名、施設名などの固有名詞が、とくに弱い。だが、日常会話は一般に、ポツリと出てきたそれからキャッチボールみたいに始まるので、最初につまずくと、楽しげな気分が台無しになる。

と、それはよくわかっているのに、話の腰は折りたくない。最初を聞き漏らしても、話が進むうちにわかってくるさと、そのまま聞いているうちに、ああ、その話かと気づいて、会話に入ってゆけるときの少なくない。

もちろん、一生懸命聞いていても、ついに何の話かわからないときもある。そんなときは、話があまり長くならないうちに、さっさと降参して「何の話か」と聞きなおす。

「何の話かって……」「いや、話の中身はわかるんだけど、ただ、だれが、何が、どこが……の主語がわからないだけなんだ」

こちらとしては、最初の「だれ(何)」だけがわからなかったもので、それさえわかれば、あとは全部つながると思うのだが、一般の受け取り方はそうではでない。

主語がわからなくて、どうして「話の中身がわかる」のか。最初の「だれ」「何」「どこ」がわからなかったってことは、話全部がわからなかったのではないか。

それどころか、話全部をいいかげんに聞いていたのだろう、わかったふりをしていたんじゃないか……と疑う人もいるようだ。他人の話のいい加減に聞く不誠実な男……と受け取られるのは困る。

で、善意の相手は、また、最初から話を全部繰り返してくれる。そうでない相手は話を打ち切ってしまう。全部を繰り返させるのも心苦しいし、話を打ち切られても困る。

たぶんそれは、わたし個人の特殊事情ではなく、難聴者は多かれ少なかれ、そうして、毎日の会話を追いかけているのではないか。そこが、音が自然に「聞こえる」健聴者と「聞こうとする」難聴者の違いだろう。

難聴者は長い話について行くのがつらい。途中で聞くのに疲れて、集中力をなくすこともあるのに、ある程度長い話でないと中身がわからないというのは矛盾している。でも、話が進むうちに、「話の運び」が読み取れる場合も多いのだ。ときどき、合の手を入れて、自分の「理解」が方向違いでないかを確認めて……、わたしは、そうしてやってきた。

だから、話を細かく区切って、いちいち「聞こえましたか」「わかりましたか」と確認されるのは、つらい。さすがにこの歳になったからか、近頃は面と向かってそうする相手はいなくなった。失礼だと思ってくれるのだろうか。すると、一言いっては「わかりましたか?」「わかった?」と念押しされたあれは、「失礼なこと」だったのか。

とにかく、委細かまわず話してくれる相手が有難い。難聴者は、「類推の技術」で生きているのだから、できれば「どんどん話して」いただきたい。そうして、その「技術」を磨くチャンスをたくさん与えてほしい。

それでも現実に不自由な聞き取りは「辞書」で補うことになる。紙に印刷された辞書ではない、パソコンのそれでもない、皆さんもお持ちであろう、長い時間をかけて生身に蓄積した「無形の辞書」である。

家内とわたしの「〇〇きんぞく」の会話が行き違ったのは、彼女が「軽金属」といったのを、わたしが「転勤族」と勘違いしたからだった。わが住む町に日本軽金属という会社があり、「ご近所の奥さん」のご主人はそこにお勤めだと、家内はいったのである。

ところが、わたしの脳裏の「辞書」には、「ケイキンゾク」という字がなかった。日本軽金属という会社名は、一般には「日軽金」と略称され、わたしの辞書でもそうだった。「ニッケイキン」といえば一発でわかったのに、家内がご近所での通称にしたがって「ケイキンゾク」と言ったばかりに、話がずれてしまったのだった。

もう一つ、わたしが「隣は何をする人か」と思うときは、「事務屋さんか、技師さんか……」と職種を知ろうとするのに対して、家内が「どこそこにお勤め……」と所属を重視する、ものの考え方の違いが、根っこにある。

わが「辞書」の職種一覧で「〇〇キンゾク」というと「転勤族」しかなかった。

今は? 今はもう大丈夫。あれ以来、「軽金属」も、しっかり、「辞書」に加えてある。

いつものように空中文字を書いてもらって話のけりはついたが、指文字のカタカナ(?)も、「辞書」にない言葉だと、すぐには漢字に置き換わらないものだ。

「わたしの耳はね、アカサタナハマヤラワと素直に聞き取れないんだよ。アカカカカハマヤヤヤとか聞こえるのを、口の形を見て、前後をつないで、言葉にしているんだ……」

難聴者の耳の聞こえは、どう説明しても、本人以外にはわからないだろうな。個人差もあるし。

それと、聞き違いも許してほしい。

聞き間違いは可笑しい。落語、漫才、バラエティ……いつも笑い話の種である。事実、可笑しいのだから仕方がないが、若いときのわたしは聞き間違えて笑われるのがつらかった。可笑しいものは可笑しいと、いっしょに笑い飛ばせるようになったのは、ようやく中年過ぎてからである。

と、いう話をすると、「手話を教えればいい、なぜ手話をしないのか」という人がきつといる。手話もいいと思う。でも、わたしはこんなとき、すぐさま「会社の名前・日本・軽い・金属」[「キンゾク」と「キン」はどう区別するのかな)と言い換えて貰える]手話環境で生活していない。

特殊な漢字の「読み」も難物だ。

この原稿を書いている今は、大相撲秋場所の中日で、その相撲取りの四股名の読みがむつかしい。追手海と書いて「はやてうみ」とは、普通の常識では読めない。もともと、蒼樹山を「おおぎやま」と読めようが読めまいが、どうだっていいことかもしれないが、わたしは相撲が好きなので……。

その点、最近嬉しくて有難いのは、本場所前の新聞に出る力士一覧表や、テレビで紹介される力士名に振り仮名がついたことだ。

かなり前の『みみより』に書いたことだが、以前、『鬼一法眼』というテレビドラマがあった。わたしはこれを「きいちほうげん」と読んでいた。すると、まだ中学生だった娘からクレームがついた。

「お父さん、間違っているよ。あれは『きいちほうがん』って読むんだよ」

「お前のほうが間違えているよ。『ほうげん』ってのはね、坊さんの位(くらい)なんだよ。最高位が法印で、その下が法眼で……」

「だって、テレビのナレーションは『ほうがん』って、言っているんだよ」

「そりゃ、テレビが間違っているよ。ホラ、広辞苑にも、ホウゲンって書いてあるよ」

「そんなら、テレビ局に言ってよ。お父さんってガンコ……」

「テレビでそういつている」「テレビが間違っている」という言い合いは、我が家では日常茶飯事であった。中学生の娘は「テレビが間違っている」とは疑いもしないし、こちらはテレビが何といつているか知らないから、辞書の通りに読む。言い争いの結果は、たいてい、娘が泣き出し、家内が口をきいてくれなくなって終わった。

テレビの影響力は恐ろしい。以前、「〇〇唯」という女性タレント名に首をかしげた。まさか「タダ」ではあるまい。すると「ユイ」しかないが、「唯」という漢字が、わたしの感覚では、女名前に結びつかなかった。

ところが、最近はもっとすごい。読みもでたらめに近い。ある人気タレントカップルの子どもの名が心美(ここみ)ちゃん、別のタレントのそれが初一音(はいね)ちゃん……。

今は二児の母親になっている娘にその話をしたところが、「うん、そうだよ、わたしの友達のお嬢さんは、彩音理ちゃんっていうんだよ。何って読むかわかる？」

うん、そこまでくれば、もう驚かないよ。「さおりちゃん」だろう。路望(ろみ)ちゃんなんてのは、ちょっときついが、要は、ブラジルから帰化したサッカー選手なみに音を拾って読めばいいんだ。

でも、娘よ、きみもおとなになった。「そんなことにこだわるのは、お父さんだけだよ」とは、言わなくなったものね。

子の名付けも、以前は好みの字があったり、なければ姓名判断とかに頼って、先に字がきまるのが普通だった。「名詮自性」(みょうせんじしょう)といて、「ものの名は自ずから体を表わす」という仏教思想も影響して、「立派な名前」「バランスのいい字」に、日本人はこだわってきた。漢

字は、もともと、字自体に意味のある表意文字なのだから。

ところが、タレントたちの好みの名前は、全然、そうではない。帰化外国人の名と同じ、読みに合わせた当て字である。日本人の名は、これから、こんなふうになってゆくのか。

JRに難読駅名というのがある。北海道に多い。なかでも、長万部(おしゃまんべ)は有名だ。宮城県の石巻線で、渡波(わたのは)という駅名を読んで感心したこともあった。

西伊豆も難読地名の宝庫である。木負(きしょう)、重須(おもす)、来海(くるみ)、安良里(あらり)、妻良(めら)、波勝(はかち)……。大昔の字のない時代の先住者たちがつけた地名が先にあって、漢字をあとから当てこじつけたから、こうなった。

昨今の当て字流行は、まるで、千数百年昔のその時代に戻りつつあるようだ。困る。が、字の読み方に戸惑っているのは、聴覚障害者だけではないらしい。ある新聞に連載中の作家の猪瀬尚紀さんのエッセー「猫舌三昧」に、次のような文章があった。題して「W杯」。

「W杯。これをずっと『ダブリューはい』と心の中で音読していた。ところが『ダブリューはい』の音を全く耳にしない。聞くは一時の恥。思い切ってある編集者に……『ダブリューはいって書くでしょ。あれ何て読むの?』『ワールドカップです』……これで末代の恥を免れた……でもやはり『ダブリュー杯』をふっきれずにいる」と。

猪瀬さん、あなたも、ですか。

わたしは今でも「鬼一法眼」は、「きいちほうげん」と読むべきだと思っている。「W杯」を「ダブリューはい」でなく「ワールドカップ」と読ませるのは乱暴だとも思う。でも、「『辞書』は世につれ」だ。そろそろ、わたしの「辞書」も、でたらめな読みや無意味語を入れた大幅な改訂増補をしないと、実用にならなくなってきたのかもしれない。

それで思いつくことがある。前にも書いたことだが、わたしは小学生の頃から、意味もわからず大人の本を読んで叱られていた。のちに「耳が聞こえなくても、本は読める」と言われて喜んで信じたのも、本好きだったからだろう。そして、子どものくせに、あんなに本が好きだったのは、昔の本が全部、振り仮名付きだったからではないか。総振り仮名だったからこそ、小学生にも、意味もわからぬままに、18歳禁の小説が読めたのだ。

今だって、振り仮名なしでは、面白い本も、ためになる本も、あやしい本も、小学生には読めない。小学生のとき読まなければ、本を読む習慣もつかないだろう。昔の本みたいに総ルビとまでは行かなくても、振り仮名を積極的につけることはできないものか。こんな情報過剰の時代に耳が不自由なのは、目から入る情報、読み書きは、なお大切だ。

ただし、ここではあえて「聴覚障害者のため」とかはいうまい。活字離れの次世代日本人のために、ぜひ、振り仮名の復活を！

すずき かつみ(静岡県清水市三保)  
みみより会元会長・東海大学名誉教授  
2002年「みみより」誌 No. 492号掲載

No.45

わが心の遍歴 1

聞こえなくなるまで

# 木下幸雄

東京オリンピックの年(昭和 39 年)に、私は聴障者として第二の人生のスタートをした。27 年も昔のことである。

人は一生に一度、物語を書けると思う。私も聞こえなくなるまでの人生を、そんな気持ちで書き残してあった。記憶が薄れない若いときだからこそ書けたのだろうが、いま読み返すと、幼く拙ない。しかし当時の自分のありのままの姿として、敢えて原文のまま発表させて頂いた。

## (1)

Aは今年で 30 歳になる。彼は 7 人兄弟の末子であるが、世間で言われるように可愛がられた記憶はない。一番上が女であとは男ばかりの子供の親としては、育てるだけで手一杯だったのかも知れない。

栄枯盛衰は世の常と言え、Aが小さかった頃の家は生活は裕福ではなかった。とは言え戦前のことで、庭なんか結構広く、色とりどりの花が植えられていたり、犬と遊ぶような場所もあったし、のんびりしたものだった。

Aは今の北区の志茂町というところで小学校へあがる頃まで育った。2、3歳の頃、重い病気を併発していつもピイピイ泣いていたので、時たま休暇で帰ってくる長兄に、もう死んじまえ、とよく言われたそうである。

Aを背負って、毎日病院へ通ってくれたお袋さんのお陰で、その後は不思議に大病をしなくなった。Aは病気についての記憶は何も残っていないが、病上りの頃、よその子がカケッコをするのに、自分はどうしても出来ないのだろうと、電信柱につかまっていたことを憶えている。それよりやや大きくなってからのことは、アルバムと実際の記憶が補い合ったものとなっている。

お正月のこと、お餅が来たっ、と玄関へ飛出し、勢い余ってタタキへ頭からダイビングしたときの怖さは、今でも覚えている。グルグル巻の包帯姿で動物園に連れて行ってもらい、その時写した写真が、アルバムにある筈である。

小さなガールフレンドのお家を見た、ガラス張りのオルゴール時計、縁の下にあったベーゴマの山、バケツの中から出てきた蛇、道の真ん中に立っていた大きな木。等々、どうして憶えているのか、説明のつかない断片的なものであるが、子供らしい思い出だ。父や兄が、どこで、どんな仕事をしていたのかも知らないような、幸福な時期であった。

Aはその頃、中耳炎を患ったようだ。後で聞くとところによれば、ドブ川に落ちたためと。一説には病気の時、泣いた涙が耳に入ったためとも言う。いずれにしても 28 歳にして、突如音を失う遠因は、この頃すでに萌芽していたのである。

Aとしては、以前病気を治してくれたときの熱心さで、その時期のうちに治してくれたらと思うが、決して親を責めるつもりはなかった。現在のように医療知識が普及していない、明治半ば生れの人達では致し方ない、これも運命かと思うのである。

## (2)

Aが小学校へあがるとすぐ、家は赤羽は引越した。兄達の活躍があり、暮し向きもどうやら良くなって、広い家へ移ったのであるらしい。

太平洋戦争が始まったとき、彼は小学校 2 年生であった。それより 1、2 年前から 4 人の兄たちが次々と出征して行った。近くの駅まで旗や幟を立て勇ましい行列を作り、軍歌の大合唱やら万歳を何遍も派手にやり、景気よく送るのである。チビのAは喜ばしくない筈はなく、大はしゃぎであった。ただ行ってしまった兄が、すぐ帰って来たのには驚いたようだ。

本当の入営は2、3人の友人と、ひっそり行くのだとあとで初めて知ったのだ。そんなことを4回もやる家はめったになく、時局柄、Aは、すぐ上の兄ともども鼻高だかであった。戦後、4人共無事帰ったのは、奇跡的だとよく言われたものだ。

5年生の時、一家は浜松へ疎開した。その頃までのAの学校の成績は、あまり芳しいものでなく、優秀な兄達になんとも似つかわしくない弟であった。少し耳が遠いと自覚し始めたのはその頃で、学校が変わった気分転換もあり、席を最前列に希望するなど性格的にも積極的になり、卒業するときは優等生に選ばれるようになっていた。

疎開してから、戦争は益々激しくなり、身近なものになって来た。毎日の通学に必ずと言ってよい程、戦闘機の空襲を受け、やがて学校も焼かれてしまった。小学校5年生に塹壕の土運びのモッコを担がせる時代であり、鞆の代りにミヤクワを持って出かけたものである。食糧増産のために、A達は農家へ数人ずつ割当てられ、農作業の手伝いをさせられた。都会育ちのAが百姓の子らの間に入って、うまく手伝わせたかどうかはさだかでないが、それでも、田植えや稲刈り、縄ないや草履作りの経験は楽しい思い出となっている。

満州国皇帝の前で演奏したという、天才的の少年バイオリニストが、同級に疎開して来てAと大の仲良しになったが、家庭的に薄幸な子で、いつもお腹を空かしていた。誰でも空腹を抱えていた頃とは言え、それはひど過ぎだった。

学校の芋畠の取入れが終わり、先生が皆の労をねぎらうために、焼芋を始めたことがあった。たき火を囲んで、クラスの全員で喰べた芋は本当にうまかった。砂糖一匙ない頃の話である。いまの子供には想像もつかないことだろう。

先生が冗談半分に、歌を唱うならもうひとつやるぞと言うと、その天才児は、ためらうことなく進み出て、焼芋を片手に、ちょうど暮れかかる夕空を見上げて、美しい声で、Aなどとても真似の出来ない上手な、夕焼けこやけを唱い始めたのであった。紅い夕陽が彼の顔から消え、あたりが薄暗くなると、今度はたき火の明りが、彼の顔をあかあかと照らし始めた。その美しい情景と、哀しい彼の姿のコントラストが、あまりにも強烈であったので、いつまでも強い印象となってAの心に残っている。

戦後暫くして、ドイツに渡り、ベルリンコンサートマスターや音楽大教授になるなど華々しい活躍をしていることを新聞で知ったが、彼とはそれっきりである。

### (3)

県立の中学へ入るには、それなりの勉強が必要であった。日の暮れるまでの居残りは、昔も今もそう変わりのないものである。ただ当時は如何とも致し難き食糧難で、体力的に参っていた。農村に生活して居てさえ、小皿1杯の大豆がおやつであったり、フスマパンや芋パンなら良い方であった。百姓の子が元気よくかけ出すのに、自分はどうも力が入らない。

Aはふと、小さな頃に同じような経験があったことを思い出したりした。しかし、それが食糧事情によることを知るにはまだ幼く、理由が分からなかったことは、小さな頃とまったく同じであった。

中学も20番以内の成績で合格、すでに同じ学校に入っていた、すぐ上の兄も大喜びしてくれた。大勢の兄弟なのに、あまり年齢が離れているためか、Aにとって本当の兄弟の味はこの兄との間だけにしか感じなかった。

魚釣りやトンボ取りで、ドロンコになって遊び回る仲であり、またよく喧嘩もした。いつも言い負かされ、組み敷かれ、何をしても兄に頭が上がらないくせに、表面では服さない。兄の方も罵詈雑言を浴びせはするものの、心の中では弟のことをいつも心配しているのであった。まだ腹を割って話合う年頃ではなく、あってもそれはずっと後のことである。

学校も決まり、小学校の卒業式を前日に控えた或る日、いつもの近道である淋しいお宮の裏に通りかかったとき、Aはいきなり暗闇の中へ引き倒された。続いて鉄拳の雨、あまり突然なので痛みも感ぜず、涙も出なかった。見事な袋叩きに遭ったのだ。しかし或る決心をしたAはそのことを誰にも話さなかった。

翌日の式が終わり、賞状と賞金2円也と証書を手にしたAに、けしかけるように知らせる者がいた。暫くたった学校裏の林の中は只ならぬ気配となった。Aを応援する者、相手に味方する者、両者は二人を中心に等しい半円を作った。相手は想像通り、東京から疎開して来ている先生の弟であった。Aのために自分が賞を逸したと、悪童を頼んでAを袋叩きにしたのである。

二人とも喧嘩にはなれていない。ただ水車のように両手を振り回すだけ、そのうちAの拳がひとつ相手の頭に命中すると、その物々しい決闘は終わってしまった。ワァワァと泣き出して行ってしまったので、悲壮な決意でのぞんだAは、拍子抜けしたかっこうであった。後年のAは、俺は江戸っ子だ。いざとなりゃやるんだ、と事あるたびに心中で思うのはこのときの経験があるからだろうか。

ひよろひよろのやせっぽちのAは、スポーツより演劇とか音楽が好きであった。音楽好きの先生がいて、校歌をレコーディングして生徒に販売することになった。全校から合唱する者を5、6人選ぶことになったが、東京に泊ることが出来る者を条件に選んだため、A兄弟はその中に入ってしまった、期せずして東京へ行ける幸運に有頂天になってしまった。

今でこそ、レコーディングは珍しくはないが、当時としては画期的なことであった。専門家に一日レッスンを受け、いよいよ三越デパートで吹き込むことになった。首尾は上々のようであった。肝心の販売の方はどうであったか、A等の関知するところではなく、吹き込みをやったんだという、誇りみたいなものが胸の中でうずくだけであった。

その日、雨の煙る東京を数年ぶりで眺め、ただもうわけもなく、東京だ、東京に来ているんだと、大声でわめきたいような気持ちだった。現在のように殺伐とした光景ではなく、自動車の警笛もしない、時たまチンチンゴォー、と電車の音が聞こえてくるだけの静かな三越境界であった。今のAには、当時の東京がとてつもなく懐かしく思えてならないのである。

当時、新聞紙のような教科書を使っていた。自分で切って製本する薄っぺらな本とも言えないような代物だったが、東京へ疎開から戻った2年生の頃は、そんなものもなくなり、焼跡やら道路に盛上げられていた残土も、いつの間にか消えたのは3年生の頃だったろうか、関東大震災後、ホームグラウンドを離れて、転々と居を変えたA一家は、やっと本拠地の浅草に落ち着くことができたのであった。

#### (4)

自立独学する兄達の伝統を受け、Aも夜学の高校を選んだ。爾来、大学を卒業するまで、他人から一銭たりとも援助は受けていないと、些かな自負心を抱いているようだが、当時としてはごく普通のこと、人に誇る程のことではなからう。

高校へ入る頃、Aの中耳炎はかなり悪化していて、医者から手術を奨められたのだが、そのときのAには知らされず、いろいろな事情で沙汰やみとなり、通院での不徹底な治療が繰り返されていた。たいした聴力障害もなく、痛みもなかったのが、かえって良くなかったのだろう。家族も何ともないのだからやらない方が、という態度であった。

進学する意思のなかったAは、商業高校へ入り、徹底的に学校生活を楽しんだ。長兄の経営する会社の勤めを終わってから、学校へ行くのが待遠しかつたほどだった。

すぐ上の兄はNHKの放送劇団員(黒柳徹子さんと同期生)になっていたが、その影響も多分にあつて演劇部へ入った。春の演劇祭のために新入部員50人の中から主役に抜擢され、一躍校内に

知れ渡ったが、少し天邪鬼の気があるAは、可愛がってくれた先輩が卒業すると、我事終れりと退部してしまった。

以前から胃を患っていたAの親父さんは、その頃、床に入ったきりになってしまった。そしてガンと診断されたときは、すでに手遅れの状態であった。それから3カ月の間、毎夜家中が叩き起される状態が続き、親父さんの苦しみは分かっているものの、これでは家中の者が参ってしまう、死ぬものだったら早く死んじゃえ、と考えるようになったAの気持ちも、哀れではあった。

一度死んだ親父さんは生き返った。医者がお別れのお水をとったので、かけつけた兄弟のすべてがお水を含ませてやった直後、急激に持ち直し、歩けるまでになったのは、まさに奇跡としか思えなかった。それはこの病気によくあることで、長くは続かず、再び床につき、間もなく不帰の人となった。俺は一度死んで生き返った、生き返ったんだよと子供のように言って喜んでいた親父さんを見て、Aは自分の良心に釘をさされる思いがしたものである。

亡くなる少し前、Aは親父さんからお前が一番馬鹿だったといわれ、何のことかさっぱり分らず、付っきりのお医者さんも、こんないい子をどうして馬鹿だというんだろうと不思議がっていたが、何だか気にかかって仕方がなかったのである。

## (5)

親友達が皆大学へ行くことを知り、突如として向学心が燃え上がったAは、猛然と勉強を始めた。途中、交通事故を起し、相手が全治2カ月の重傷を負い、暫くは勉強が手につかぬアクシデントもあったが、とにかく第2志望のM大学へ入ることができた。

大学とは、それまで勉強したことを忘れる所であると言う人もいるが、Aもご多分に洩れぬ凡人で、適当に授業をサボり、麻雀を覚え、喫茶店へ足を運ぶ学生であった。就職は耳が悪いから駄目だろうと、テンから受けもせず、受けても必ず落ちることが分っているところばかりで、結局、高校時代から引続いて兄の会社へ納ってしまった。

高校の担任の先生が、クラシックギターの大家で、現在は若手の最右翼とされているが、送別会の席上で卒業生全員に懇望されて、弾いた先生の見事なギターに魅せられて、いつか自分もと心に決めていたが、大学卒業祝いにと、義姉からギターを贈られてからは、文字通り、朝から夜までギターに明け暮れたのであった。

日本のギター界の草分けと言われ、今の天皇にも教えられていた、高名な先生に師事して5年余、彼にはギターが唯一の生甲斐となり、弾けなくなることだけを恐れるようになるまでになってしまった。ナイフを使うことも、指を傷つけてはと避けるような具合で、Aのギターに対する傾倒ぶりは本物であったが、聴力を失って、弾けなくなろうとは夢にも考えていなかったことである。

## (6)

その運命の年がやってきた。縁故の医師から手術を奨められ、今度はA自身の意志で手術を受けることになったのである。長い間苦しめられてきた中耳炎から開放され、しかも聴力改善が望めるとあって、はずむ胸を押えるようにN大学病院へ入院したのであった。

手術は非常にうまくいった。Aは自分の幸運を感謝したのであるが、翌日どうも手術した耳が聞こえないような気がしたが、いずれ聞こえるようになるのだろうと泰然としていた。

約20日後、主治医の教授の都合で明日、別の方を手術をすることになったが、現在片方が聞こえないようだから、家の都合とか理由をつけて一応退院したらと思うが、どうするかと聞かれた。あわててAは早速、縁故の医師へ電話をかけ相談したのだが、逆にたしなめられ、中耳炎の怖さを強調され、そうだった、両方治すのが目的だったのだと、聞こえない心配など雲散霧消と化し

てしまった。

手術中の教授が、上機嫌で釣りの話をされていたのは手術が順調に行われている証拠であったし、実際にうまく行った。これはよく聞こえるよと独言されたのを、Aは覚えている。手術室から運ばれる途中、それまで感じなかったような音まで聞こえ、かえってうるさいような感じなのですっかり安心し、やがて眠りに落ち込んで行った。

では帰りますよ、と言っているらしい。少し前に目覚めたAは、まだ夢を見ているのかと疑った。美しい義姉の唇が動いているのに音が伝わって来ないのだ、はてな、包帯のためかと耳をそば立てるのだが、事の重大さに気がつくのには暫く時間がかかった。

何も聞こえない、と声を出して、アッと息を呑んだ。自分の声すら聞こえない。シマッタ！ 全身から冷汗が吹き出る、瞬間、悔恨の念が胸を突き上げる。親父が馬鹿だと言ったのかこれだったのかと、とんでもない連想が起きる。まさに度を失ってしまったのだ。その後は、めまい、嘔吐などがあり、何も分らなくなってしまったのだ。

入院中に、二度誕生日を迎え、退院したときは30歳になっていた。結局あらゆる治療も徒労に帰し、長い、それは長い入院生活にピリオドを打ったのである。

最近、都心へ出てみたAは、オリンピックによる工事で、東京がガラリと変ってしまったのに驚き、今浦島太郎の如き感を禁じ得ないのだった。

とあるビルの屋上で、生れて初めて、耳を心配せず吞めるようになったビールのジョッキを手にしなが、爽快な気分とは言え、断ちがたき過去への未練の思いが入りまじり、ほろ苦い味がいつまでも舌に残るのを覚えるのであった。

きのした ゆきお(東京都台東区西浅草)

会員

1991年「みみより」誌 No. 376号掲載

No.46

わが心の遍歴 2

## 旅行ノート その1

木下幸雄

東京発 17時24分のこのヒカリは、あと1時間半ほどで新大阪に着く。今朝、みみよりが届いて、仕事中に拾い読みした時、そうだ今夜のヒカリの中で、何か書いてみようと思い立った。そう思いつつ、バックからノートを取出すのが億劫というわけではないのだが、棚に手が行かず、発車間際に買った写真集を2時間近くも見てしまったのだ。

去年の8月に独立して以来、本当に落ち着いてものを読み、書きすることができなくなってしまった。ただでさえ耳から入る語彙が無いのだから、覚えるより忘れる言葉が多く、会話にしても文章にしても、すぐ表現に合う言葉が出て来なくて、頭の中で探すことが多く、はがゆい思いをしている昨今である。

——自分の顔が反映している窓の外の闇を眺めながら、いろいろと考えてみるものの、なかなかまとまりがつかない。点々とした灯が後へどんどん流れて行く——

今日、12チャンネルテレビで「手話ドライバー」の放映があった。この夏、私もその番組のた

めに、音を光に変える装置をつけた車を運転し、その感想を求められる取材をされた。私に関してはその事だけのホンのワンカットだったが、番組に登場している黒崎という人が、私と同じ自動車学校で教習を受けていることが興味深く、画面に出てくる教官達が顔見知りでとても懐かしかった。

3年前、私が在籍していたときの指導員は筆談だった。教務課長の配慮で2名の専属指導員を決めてくれたので、教程の進行がよく把握されて重複がなくスムーズにいった。

私の場合は再取得なので、当然のことながら最小単位で卒業したけれど、教務課長の強いバックアップがあったことにもよる。面識があったわけではなく、突然の来訪者である私に本当に親身になって面倒を見ていただいたことは、思い出す度に胸が熱くなる。

その市角さんと言う課長さんは定年となったが、第2コースの所長として勤続されていた。テレビには登場されなかったが、私との出会いを契機に、手話を勉強され始め、2ヶ所の通訳養成講座に通い、中級を修了したと便りを頂いたのは、もう1年以上も前のことである。

あまり書くことを好まなかった一人の指導員は、私が手話というものがあることを説明してからは、自らメモして来て、この言葉はどうやるのかと、積極的に驚かされたものだった。だが少ない手話での説明にどうしても不満が残り、なまじ教えなければよかったなあと思うときもあったが、よくしたもので別の一人は実にこまめに、始める前と修了前に筆談をしてくれた。結果的には筆談をしない指導員は、鋭い観察力で私の欠点を指摘してくれたし、筆談が必ずしも最善とは言えないとも思った。

その手話の方の指導員が黒崎氏の担当で、僅かな登場シーンであったけれど、手話ぶりが板について、聴障者に対する指導方針と、受け入れ態勢の進歩がほどよく現われていた。市角さんから貴方のときは、ほとんど初めてのケースだったので、いろいろと迷惑を掛けたが、現在では卒業、在校合せて60名ほどのろう者がいるので、相当良くなったと思うから、是非一度来校下さいと便りを頂いていたのだが、どうしても暇を見出せず、今日に至り、計らずも久し振りに、懐かしい教習所を見ることができたという次第だ。

——書いては休みしているうちに、白いくっきりとしたタワーが暗闇の中に浮かんで来た。もう京都だ——

この9月、大阪で開業している後輩の結婚式に、京都にいる同輩と一緒に出席した帰り、大阪にある同業のしみ抜き店を、見学に行ったことがある。

東京ろうあ写真集団に、首を突っ込んで7年余になるが、いろいろな分野から集まっているろうあ者のグループだけに、みみよりとはまた違ったろうあ文化に触れることもある。

大阪のしみ抜き店見学も、写真グループの友人の紹介だった。60歳位の白髪で美髭を貯えた、小柄ではあるがなかなか立派な風貌のろうあ者の主人であった。使用人も運転者を除く全てがろうあ者で、20人近くの人が働いていた。この種の仕事では珍しく、大規模な分業方式を採入っていた。

技術的には見るべきものはなかったが、元来、手仕事とされている和服の手入れを、クリーニングに近い形で、システム化していることに驚かされた。社内のコミュニケーションが手話で足りるのだから、働いている人達はとても明るい感じだった。

来訪者が聞こえないと知って気が軽いのか、よく受け答えしてくれた。独立したばかりの私だけけれど、機械化には先進的だと自負しているが、程度こそ違え、ここでは20年も前からと言うので偉いと思った。大阪の業者では多分一番大きいだろうと言う。

——遅筆の私には時間が過ぎるのが早い。もう大阪である。一月半前、和歌山、田辺市の家内の父が亡くなったとき、上の娘を連れて新大阪から天王寺まで、時間が30分しかなくて、駅のホームを、二人で手をつないで走りに走ったことがある。天王寺で階段を間違えて、やっと改札口

にたどり着いたとき、特急列車はホームをすべり始めていた。一足違いで無にしてしまった指定席券を握った私を見上げて、小3の娘は何も言わなかった。今日はどうかな、30分で行けるかなと、そのときを回想した。

大阪に用があることはないの、いつも素通りだ。この夏の後輩の結婚式の時、初めて数時間滞在したに過ぎない。だから、家内の里へ行くたびに乗る地下鉄の30分位の間だけ、いつも大阪のニオイをかぐことにとても珍しさを感じている。

おかしなことを言うと思われるかも知れないが、この地下鉄に乗ると、私は大阪の空気を感じるのだ。乗客の顔を見ても、どこか東京の人と違うように思えてくる。他の土地へ行っても、余り感じないのに何故だろう。広告の文体がどうも少し違う。「ドアーに注意」というラベルが左右のドアーに2枚ずつ2種類も貼ってある。

ホームは平らではなく中央に盛上がっている。動物園前の駅の壁には、写真的な動物の絵が描かれている。改札口は無人化で、切符を入れたとたん、1メートル先の出口に飛出す仕掛けになっている……と、まあいろいろと感じの違う理由がある。

今日は階段を間違えなかった。30分にはまだ2、3分あるなあ、などと考えながらホームに入ろうとすると、見覚えのある歩き方をする人がいる。ヤア義兄さんと後ろから肩を抱いた。彼は小児マヒで足が不自由である。私と同じ目的で明日の義父の法要に行くため、神戸から来たので、偶然の一致であった。

土に帰るといふ言葉があるが、義父のお骨を、土に直接木箱ごと埋める際に初めて実感した言葉である。また骨を拾うといふ言葉も、義父の骨を家族全員で木箱に納めるときに実感した。と言ってもそのときは否定的である。本当の意味で分ったのは、あとで土に帰るといふ思想が理解できてからであった。

肉親の骨を箸で上手に拾って、木箱へ入れることができるはずがない。実父のとき、東京の焼場では家族はほんの真似だけで、あとは係の人が手際よくやってくれた。それに東京では、瀬戸物の壺に入れてから木箱へ入れる。そうしたことが当然と思っていた。それなのに、ここではどうして直接木の箱へ入れるんだろう、新聞紙などで包んで何だ、それに全て遺族任せで残酷ではないか。と実際に口に出して風習の違いを言ったものだ。

ところが、そうした東京風のスマートさは結局、コンクリートの墓に入れられることに起因していること、また焼いてすぐ木箱に納められないから瀬戸物の壺を使うので、時間短縮の合理化から来ていることに気づき、時間をかけて骨が冷えるのを待ち、木箱に納めて、本当に大地に帰すといふ思想が、たまらなく羨ましくなった。

つい最近亡くなったジャン・ギャバンが、地中海に自分の骨を撒いてくれと言ったその気持ちがよく理解できる。18歳で父を亡くしたときの、私には考え及ばなかったことである。

——真夜中の1時過ぎたこの「キノクニ」は、暖房が強過ぎて暑い。ヒカリでは少し冷え気味だったが、その方が快適だった。義兄が不自由な足を引ずりながら、コーヒーと甘栗を買って来てくれた。

東海道メガロポリスと違って、この紀勢本線の沿線は灯が少なく、窓の外は暗黒で何も見えない。乗客の大半が釣人で、皆、寝入っている。揺れ動く座席でここまで書くのはなかなかしんどいことだ。あとは帰りの車中にすることにして、ひとまずノートを閉じよう。

(以下続く)

わが心の遍歴 3

## 旅行ノート その2

木下幸雄

——法事と会食をそこそこに、再び夜行列車の人となる。帰路は家内と下の娘、それに昨夜一緒になった義兄の息子と4人連れだ。家内は、“みみより”をひろげ、娘は白河夜船、甥は文庫本を開けたり、閉じたりのある所だ。

帰る少し前、仏間に先月の告別式の弔辞の束が置いてあったので、改めて読ませて貰うことにした。式の時はずいぶんシビレを我慢して辛抱するだけだった。10通近くあった弔文のうち、紋切り調のものは殆ど無く、切々と故人を偲ぶ素朴な文章に接し、涙を止めることができず、感極まってしまったが、もし告別式の時手話通訳を付けたとしたら、自分で読んで受けた悲しみ、哀惜等の感情が素直に出てくるだろうか、妙な疑問が浮かんで来た。

手話に限界があるから、駄目なのではなくて、手話には限界があることを受容して、初めて生きてくる。だからこういう場合は、通訳より原文を見たいと思うのは仕方ないだろう。などと知ったような顔をするのも、本当はできないのだ。と言うのは手話を一応は使えるようになって、限界があるのだと断じるようになった私の観念を、見事にひっくり返された経験があるからだ。

失礼な言い方を許して頂くが、手話で歌を唱うと言って、幼稚園のおゆうぎみたいなことをよくやっているのを見るが、所詮手話で唄うなど無理なことと、半ば軽蔑感を持っていたのだが、あるみみより大会の折の、大槻芳子さんのそれを見て驚いた。

この人は歌っている！

本物だ、聞いたことのない歌をどうして唱えるのだろうかと思嘆した。彼女に訊ねるといとも平然と、手話の可能性を見て貰うために、ちょっとやってみただけと言われたものだ。以来、私は手話についてあれこれ偉そうなことを言えなくなってしまった。

認識不足というのではなくて、自分が当事者になるか、或いは深く関わりを持つことになって、初めて理解できるということは、いろいろあるだろうと思う。耳の聞こえないという世界は、特にそれを強く感じる。

よい例が、ろう者は全て、シーンと静まり返った世界に居るのだ、と思込んでいる人が多い。いや殆どではないかと思う。静かだという観念は、騒々しいということとを感知できて、初めて静かだと感じるのである。かつて私はマンションの10階に住んでいたが、友人が訪れて、静かですわねと言われ、ああそうなのか、高いから車の音がとどかないのだなあ、初めて自分の家が静かなのだと認識し得た。ところが家内は、風がいつも吹いて窓に当たるので騒々しいと言う、音というものはかくも相対的であり、主観的なものなのだ。

全日本写真展という、朝日新聞社が後援して、かなり権威のある写真コンテストが、毎年行われているが、その第1回の最高作品にろうあ者の写真が選ばれた。「公害」と題するその写真の画面の殆どを暗い湖水で占め、手前に死んだ魚が1匹浮び、それを知らぬげに釣人の後姿を、遠く小さく写し出したものである。

選者の一人である高名な音楽家は、その選評で、この写真だけに音を感じなくて非常に注意をひかれ、後でろうあ者の作品と知って、なるほどと思ったと記してある。その後も、その作品が何度か話題になり、その音のない写真という意味に賛意が集まっていた。

だが私の知人でもある当の作者が、たくまらずして音のない写真を写したかどうかは別として、ろうあ者だから、なるほど音のない写真が撮れたのかという合点の仕方に、とても抵抗を感じない訳にはいられないのだ。彼等は本当に聞こえないということはどういうことか、理解していないからだ。盲人は針の落ちる音にも耳をそば立て、ろう者は平気で大きな音をたてて戸を閉める。

——ヒカリのエアコンコントロールは素晴らしい。ムシ風呂のような、ローカル特急から乗り換えると、生き返ったような気がする。さっきは寝呆けていた娘が、パッチリ目をあけて、好物のサンドイッチをほうばりながら漫画を読んでいる。日曜日の夜8時半のヒカリともなると、指定席も空席が目立つ。前の席を倒して親子3人足を投げだし、お行儀の悪いことである。上の娘とお婆ちゃんはもう寝たろうか。

私達は結婚して10年になる。今の東上野に小さな店を構えるまで、2度住居が変わった。住めば都とよく言ったものである。馴れてしまえば、初めの不満はどこへやらである。

去年の夏、大ゲサに言えば清水の舞台から飛び降りる心境で独立した。良い先輩と親友の助力で、小さな失敗はあったが、あまり遠廻りすることなく、一応の軌道に乗せることができたのは、本当に幸運だったと思う。

でも、営業方針にしろ、作業方法にしろ、また渉外にしても、やるのは自分であり、尻は必ず自分に帰ってくる。失敗したとき、先輩や親友はこうしろ、こういったと言っても始まらない。ちょうど結婚と同じで、人に奨められても最後に決めるのは自分でないと、悔いが必ず残る。それがこの1年で得た教訓であった。

仕事の機械を採り入れることに、迷っていた私に、亡くなった義父が、そんなことに気後れする位なら、商売なんぞ始めからやらぬが良い、と気合を入れてくれたが、流石、紀州商人、立志伝中の人の言うことは違うと、肝に銘じたことだった。私は耳が不自由であるということ、初めから前面に出し、開業挨拶状にもその旨を書き入れた。電話が使えないと商売は難しいのではないかとの危惧もあったが、半ばやむを得ずという気持ちから、耳が不自由では困るという客は相手にせずと、居直った方針でスタートしたのだった。

長い間修行をしていたのだから、客は必ず来ると断言していた、義父の言葉は正しかった。何に彼につけて、不便を感じるだろう私の店へ、仕事を持ってきてくれる客はいたのだ。多少の波はあったが、どうやら人並みに生活が続けられるようになった。

もし、自分は耳の聴こえる人の助力がないから、独立は難しいと考えている人がいたら、それは杞憂だと励ましてあげたいと思う。耳が聞こえなくたって自力で、私なんかよりもっと立派にやっている人は沢山いるのだと。

——書いていると、時間のたつのは本当に早い、ヒカリはいつの間にか名古屋を過ぎて、一路東京へつつ走っている。いまなんじ？

と娘が言って、大きなアクビをひとつして、ゴロンと座席に横になった。

ずいぶん沢山書いたものだ。みみよりに投稿する決心がつけば、皆さんの目に触れることになろうが、清書が大変だなと、明日から暮の多忙な仕事のことを考えると、ひるんでしまう。とめどなく首尾一貫せず、お恥ずかしい限りだが、これで私の旅行ノートを終りとすることにしよう。

1976年11月28日記

いつか清書しようと思っているうちに、15年の歳月が流れてしまった。また住いが変わって古巣の浅草へ落着いた。私も家内も母を亡くし、下の娘は今年成人式を迎えた。相変わらず多忙な毎

日を過ごし、すっかりみみよりも御無沙汰をしてしまったので、借りを返すような気持ちで清書している。古い文章で失礼な気もするが、言っていることは今も少しも変わらない。

1991年2月記

きのした ゆきお(東京都台東区西浅草)

会員

1991年「みみより」誌 No. 378号掲載

No.48

わが心の遍歴 4

## 近頃のこと

木下幸雄

### 1 命題

窓を開けると、長湯で上気した頬に海からの冷たい風が心地よい。ここ北川温泉は目の前に大島が浮び、さえぎる物のない大海原が広がっている。さながら舞台の暗転を見るかのように、日没は早い。つい今しがたまで見えていた島影は闇に消え、点滅する漁火と庭の常夜灯が明るみを増して来る。

新婚旅行以来、25年ぶりの夫婦だけの温泉旅行である。そもそも娘が総てお膳立てしてくれたプレゼントなのだ。というといかにも親孝行な優しい娘に聞こえるが、日頃の罪ほろぼしの気持ちなのではないかと思えて仕方がない。が動機はどうあれ、親として嬉しく、有難く頂戴した次第である。

子供の頃、遠い将来のことを考えていた不惑など、遙か彼方に過ぎ去り、正に光陰矢の如く、既に人生の秋を迎えている。それにしては稔りが少ないんじゃないか、とは胸の内である。

予想では、今頃は仕事をのんびりやって、趣味と半々の、悠々自適の生活だった筈なのに、現実はその甘くはない。だがこの年に至るまで大過なくやって来れたことを感謝するべきではないだろうか、と思えるようになったのは、やはり歳月なのだ。亀の甲より年の功、俗っぽいが本当にそうなのだ。

最近の新聞紙上で、女流作家のS氏が3秒の感謝ということを行っている。ヒルティの有名な言葉に、今日のみ生きるが良い、明日は己から来るのであって、思いわずらうことはないと言うようなものがあるが、S氏のはもっと具体的だ。つまり、毎日寝る前に今日一日無事過ごせたことを感謝すれば、人間いつ死んでも悔はないということなのだ。それを読んで、私は目からうるこが落ちる思いだった。でも、10年前にそれを読んだとしても、果たして同感したかどうか分からない。

私は死について、怖れを持つのが早かったのではないかと思う。小学校2、3年の頃だった。夜中にふと目覚め、死ぬのが怖いと泣き出し、家中の人間が集まって来て、慰められたことを今だにはっきり記憶している。

それから何十年の間、折につけ襲ってくる死の恐怖に、色んな理由を考えては逃げていた。しかし明確な答えは出ず、年を取れば、死に対する心の準備が自然にできてくるのではないかと、漠然と先に期待をかけていた。今日を感謝するという気持ちに素直になれたのも、あるいはそう

ゆうことのひとつかもしれない。死を克服する支えになり得るかも知れない。

死ぬということは、一体どうゆうことなのか、永遠の眠りというが、毎日の眠りは決して死ではない。どこかに意識がある。夢を見ても見なくても死とは違う。

ところで、最近私は、声帯ポリープの手術をしたが、その際全身麻酔された。それは眠りとは明らかに違うものだった。今意識がはっきりしているものが、1、2の3秒で強制的に意識が失われてしまうのだ。完全に無だった。あれは死と同じものではないか。だとすれば、死とは楽なものだ。そう思った。非業の死や病苦の末に亡くなられた人を見つめて来た人から異論が出るかも知れない。

しかし、生まれて来る時も意識できなかつたし、死もまた意識できない訪れなのだと確信している。死を怖れるより、今日を感謝しようとして心に決めてから、気持ちが楽になった。とは言え、人間の死なんてそんな軽いものではない。簡単にこうだと決めつけて、大丈夫だなんて思っている、いざとなればどうなのか分ったものではないが、ある程度の達観もまた必要のように思える。

ここ十何年ほどは、仕事に追われ、落ちついて物事を考えるゆとりも無かつた。仕事以外のときは趣味のことしか頭になかつた。それでよいのだと思う。

しかし、娘の贈ってくれた1泊旅行は、久しぶりに人生の命題を考える時間を与えてくれた。さて、ひと風呂浴び、今日を感謝して眠りにつくとしてしよう。

## 2 入院

今、私は駿河台のN大学病院のベッドの上に座っている。声帯ポリープが再発したため、昨日2度目の手術を受けた。半年前と同じ部屋、同じベッドで、両隣は当時から入院している人で、まるで古巣へ戻ったみたいだ。それにしても、長い入院で大変なことだと思う。僅か6日間の予定の私は申訳ないみたいだ。

大部分のナースは変ってしまったが、それでも顔見知りの人は何人か居る。特に一番美人で親切な人が残っていたので、嬉しくなってしまった。皆丁寧に筆談をしてくれる優しい人達ばかりだ。2度目とあって気分も軽い、すべて前回と同じ手順で行われた。また1、2の3で意識が失われるのかなと、仮の死を楽しむ余裕もある。今回はそんな急激なものではなくて、酸素マスクを口に覆われてから、極く自然に知らぬうちに意識が無くなった。

部屋に戻ってベッドに落ち着くと、通訳して下さったSさんが「今は9時55分、手術は成功ですよ」と教えてくれた。手術そのものは15分位だそうで、麻酔から醒めるのも比較的早かつたようだ。トータルで50分程の簡単な手術だ。やっぱり、時間、空間のない完全な無だった。

主治医が、親指ほどの液体の入った小さなプラスチックの円筒形のケースを差出した。透明なそれを手にして、私はいぶかつた。何も入っていないではないか、と思った位。米粒の半分ほどの小さなピンク色をした、ポリープが底に沈んでいた。こいつが半年の間、私を悩ませた奴か、と思う反面、きれいなポリープに何故か愛着のようなものを感じる。普通のポリープです。手術は100%とは言わないが99%大丈夫です。念のため細胞検査に出します。と主治医が言った。

30年前に比べると、病院の設備、医療態勢は雲泥の差がある。大部屋でも、賃借ではあるが一人ひとりテレビが見られ、カーテンで仕切られてプライバシーが保たれている。ところが、そのテレビを消灯後の深夜まで、皆んな見ているので、耳の聞こえない者にとっては、音のそれに勝るとも劣らない暴力となるのだ。

手術の前夜、術後にテレビの点滅が神経を苛立たせ、眠りたくても眠れない。ナースに頼んで注意して貰っても、暫くしてまたつける。再三なので頭に来る。よし明日は婦長に言ってやると決心したのだが、くだんの隣人が翌朝、ニコニコ顔で新聞を差し出す。

つまり彼等は、迷惑をかけているという、意識がまったく無いのだ。イヤホーンで音を出さなければ、迷惑はかからないと思っている訳だ。こちらが怒り心頭に達しているなど、露ほど思っていない。そう分ると怒りも萎えてしまい、有難うと言って受け取ってしまった。人が善人に見えたり、悪人に見えたりするのは紙一重、お互いの立場の理解不足で、まるで逆になってしまうのだと、改めて考えさせられた。

### 3 趣味

私はゴルフが好きだ。ひと昔前なら耳の聞こえない分際でと言われたかも知れない。しかし、現在はゴルフも大衆化されて、あらゆる階層の人が愉しんでいる。確かに今だにベラ棒な金を使うゴルフもある。それに自然を破壊して無理なゴルフ場を作っている例もあり、農薬問題もはらんで、ゴルフをやらない人からは目の仇のように思われている節もある。だがやるスポーツとしては、ゴルフが最も多いと聞く、それだけ多くの人に受入れられている訳は、やはり面白いからなのだ。

5年ほど続いた、みみよりゴルフクラブを母体にして、私達は聞こえない者を中心とした、すべての耳の人と、本当にゴルフを好きな人だけで、「オール・イヤーズ・ゴルフクラブ」という会を創った。20人で始めて、2年間で27人となった。年に数回しか参加しないので、もう熱が冷めて辞めるのかなと思った人が、クラブを新調して月例にやって来る。やっぱりゴルフが好きなんだ。

これまで独りでやっていたらあ者が、会の存在を知って入会して来る。そして聞こえない者同志でやるゴルフの愉しさを知り、色んな人との交流を深めたと喜んでいる。会社などで一人だけ聞こえない人がやって来たゴルフは、概して、マナーが甘い。聞こえる人達が、彼は聞こえないからと放置されていたのではないかと思える。

私達は、まずそれを叩き直すことを考えている。技術より、エチケット、ルールを優先する。それに耐えられない人は辞め、魅力を感じる人はどんどん成長して来る。前者は少数派、向上心を持つ人は多い。聞こえない人はと、後指を指されないゴルフをしようというのが、私達の主張である。

きのした ゆきお(東京都台東区西浅草)

会員

1991年「みみより」誌 No. 379号掲載

No.49

## 「Take it easy!」はこうして生まれた

橋本英憲

昨年1月に掲示板が生まれてちょうど1年が経ちました。そして、この掲示板に集う人たちの共同作業で一つの歌が生まれました。誰にとっても一人では出来なかったこと。それぞれの連帯と協同がうまくかみ合っただけで生まれた歌です。

きっかけは、この僕が落ち込んだことなのです。東京暮らしを止めて京都に帰ったものの、先の見えない介護の生活。なかなか治らない身体の不調。それやこれで少し落ち込んでいました。

そうした気持を掲示板に書き込むとき、ぽろっと漏らしたわけです。すぐさま、何人かから励ましの書き込みが返ってきました。これが掲示板のいいところです。その中の「はまのせいご」さん(以下名前は全て掲示板上的のニックネームです)から「あまり深刻に考えないで行こうよ、Take it easy!」という励ましを頂戴したのです。

「Take it easy!」とは「気楽にいこう」といった意味ですが、これを読んで、「そうだ Take it easy だ、くよくよしても仕方がない」と頷かされる思いでした。そして、翌日の僕は、折りあるごとにこの「Take it easy!」を思い出しては呪文のように唱えていました。自転車に乗っているときも「Take it easy、Take it easy」。おかずを近くのスーパーに買いに行くときも「Take it easy、Take it easy」といった具合に。今から思うと落ち込みそうな自分の気持ちを奮い立たせたかったのですね。

呪文のように何度も唱えていると、自然とリズムカルに前後の言葉がくっついてきて歌みたいになってきました。これは、ふだんからいろんな歌を人工内耳の耳で聞いているせいらしいです。

即興的に4番まで作れたので、まとめたばかりの、生まれて初めて作った歌詞を掲示板に書き込んでみました。これを見た「越後姫」さんから、友人に歌を作るのを生きがいにしている難聴者がいるのでその方に曲をつけて貰ったら、と掲示板で申し出がありました。

この申し出があったときは、難聴者でも作曲が出来るのかと驚きながら喜んでやって貰うことになったのです。そして、「越後姫」さんをとおして友人の「大山明美」さん(これは本名)に曲をつけて頂き、できあがったのが「Take it easy!」。

大山さんについては、いずれまた詳しい紹介があると思いますが、難聴でありながらその天性的なすばらしい音感で作曲を幾つもされている方。健聴者に混じってのコンクールで入選されたこともあります。

大山さんの手で歌を吹き込んだテープができあがり、それを先日送って頂きました。二度三度聞いたあとは自然と自分でも口ずさめるような、伸びやかで軽快な歌になっていました。

大山さんも今では常連になっていますが、みみより会の掲示板に集う仲間の思いやりと協同が実って出来た一つの歌です。今回のことが示しているのは、一人一人の力はちっぽけでも、それがうまく連携したときにはすばらしいものが生まれるということ。掲示板の管理人「ほーたん」から、この話を聞いて一人で何回も乾杯したとの書き込みがありました。まさに、仲間に乾杯、掲示板に乾杯！。

## 1 急いでいても

ゆっくりしていても

地球は回るよ

同じ早さで

Take it easy!

Take it easy!

気楽に行こうよ

Take it easy!

2 仕事に追われて

毎日くたくた

それでも昇るよ

太陽は朝

Take it easy!

Take it easy!

気楽に行こうよ

Take it easy!

3 嘆いてみても

ため息ついても

時間は過ぎるよ

あなたの人生

Take it easy!

Take it easy!

気楽に行こうよ

Take it easy!

4 あくせくしてて

気が付かない間に

庭に咲いていた

玉すだれの花

※ Take it easy!

Take it easy!

気楽に行こうよ

Take it easy! ※

※～※ 繰り返し

はしもと ひでかず(京都府左京区)

会員

2003年「みみより」誌 No. 496号掲載

No.50

みみより500号の年に思う 1

## そこに聞こえない友がいるから

江 時 久

「みみより」が、今年の9月で500号になるというのは、夢のような話です。

100号、200号、300号。とても、一人、二人の情熱だけでは、この歴史は作れません。400号、そして500号となると、もう時代さえも完全に変わっています。

どっちにしても、みみより会の長い時間が、そのときどきで、さまざまな「みみより」を作ってきたのです。400号につづいて500号をやりとげようとしている岡本昇蔵現編集長をはじめ、大勢の通常でない情熱家たちのエネルギーの集積といわなければなりません。

これは、すごい。いずれにしても、そこに耳が聞こえない友がいるから、お互いの情報を集めて、お互いに励まし合う雑誌がつづいてきたのです。

ぼくが、みみより会の仕事に、中心となって係わったのは、20代だった若い時期、会の初期の5、6年の間のことです。今年の干支(ヒツジ)がぼくと同じですから、愕然とするくらい古い話です。30代から50代の半ばまでは、残念ながらみみより会の運営については、ほとんど関係できませんでした。だから、中期のみみより会について、知らないことも多いのです。

「みみより」500号の歴史については、あまりにも長い年月ですから、ある時期には私生活を投げ出して活躍したけれども、ある時期には手伝えなかった人たちも、たくさんいるはずですよ。

500号の金字塔を書き尽くすためには、いろいろな人たちに、そのときどきの困難や波乗りの事実を語ってもらわなければ、これほどまでに長くつづいたよるこびの歴史がわからないでしょう。

みみより会は、それぞれの青春の時間に、この会を人生のともしびとしてきた人たちの連鎖によって歴史を作ってきたのです。

最初は、青年の集まりでした。恋の花がいっぱい咲いて、愛し合うカップルが何組も誕生しました。

みみより会は、京都市立ろう学校の高等科の生徒だった清水昭雄さんが、職業教育に反抗して、「ぼくも勉強したい。全国の学生みなさん、ぼくのペンフレンドになってください」と、1954年8月に朝日新聞に投書したことからはじまった集まりです。

貧しくて、耳が聞こえず、そして職場もない。そんな時代でした。

清水さんを応援してやろうと考えた学生たちが、その投書をきっかけにして集まりました。

1955年1月に「足踏み」という刷り物を出して、あちこちに配りました。

ろう学校へも行きました。最初の集まりを1月30日に朝日新聞の部屋を借りて行いました。16名集まりました。

印刷は、謄写版です。

和歌山ろう学校出身の前坂典彦さんが、じつに綿密な手作業で創刊号を印刷してくれました。創刊号は五月に出ました。編集者は、ぼくの他に、岡田秀穂、鈴木克美、中屋恭子、関根真明、武井利文、外山和郎、加藤光二のみなさんが、それぞれ分担してやりました。

謄写版なので写真が載りません。

近所の印刷店に頼んで、顔写真だけを写真版にして刷ってもらいました。それを一枚一枚、ハサミで切り抜いて、謄写版印刷の誌面に貼り付けたものです。全国の仲間に、せめて顔写真だけでも届けたいという気持ちでした。

発送のときには、板橋の山田庸子さんのお宅に大勢の会員が集まって楽しみながら処理しました。山田さんのお宅では、伊東にある別荘で最初の合宿を実施させていただきました。会計係は外山和郎さん、西潟雅子さん、島田節子さん、矢島秀子さんというように、交替しました。

1956年の秋から一年ほど、編集所を町田市の加藤光二さんの家にして、やがて「みみより」は、手書きではなくてタイプ打ちの謄写版印刷になりました。でも、結局、謄写版印刷だと写真が入らないし、広告もとれない。第三種郵便物の認可もむずかしいのです。

そこで、同年の11月号から、創己堂さんと交渉して、特別割り引きで活版印刷してもらえるようになりました。編集部を新宿百人町の三畳のぼくのアパートに決めました。団順一さんが、熱心に情報収集を手伝ってくれました。

表紙は、後に文化勲章を受賞された漆工芸家の高橋節郎先生が、無償で華麗なデッサンを描いてくれました。

巻頭には写真ページをつけ、高寺志郎さんや指田実さんが仲間の笑顔を、写真にして発表してくれました。

活版印刷になってから、「みみより」の部数はどんどん伸びました。

最初の五年の間に、最高で2,000部に近く刷ったと記憶しています。会費を払ってくれる会員数は千名を超えました。

当時、「聴力障害新聞」の編集長の古海巨さんが、よく、みみより会を覗きにこられましたけれども、そのころの聾啞連盟は、まだいまのような堂々たる組織ではなかったのですね。全難聴が

組織されたのも、ずっと後になってからのことです。したがって当時は、「MIMI」も「福祉《真》時代」も「いくおーる」のような生活情報誌也没有。「手話通訳問題研究」のような雑誌也没有ませんでした。NHKが、聴覚障害者のための放送を行うようになったのは、ずっと後のことなのです。人工内耳友の会の「ACITA」也没有。

1950年代末期においては、第三種郵便物の認定を得た定期刊行の雑誌としては「みみより」だけでしたから、部数も伸びたし、例会に集まる人たちも大勢いて賑やかでした。

編集の関連でいえば、当時はワープロとかパソコンとかの便利なツールはなにもありませんでした。全部、手書きです。FAXもなかった。よく考えてみると、電話だって、家に電話がある人は限られていたのです。コピーも、録音機も、計算機もない。写真機だって、持っている人は少なかった。

みんな若かったから、そんな困難な条件の中でも連絡して、毎月「みみより」を出すことができたのですね。

そうそう、はじめたころは、難聴者も、まだ補聴器を使っている人はごく一部だったんです。

トランジスタ補聴器は、1954年ごろから市販されるようになりました。でも輸入品は、30,000円、40,000円。大学卒の初任給が月10,000円の時代でしたから、貧乏なぼくには買えません。小林理研の普及型が12,000円でした。

最初からみみより会は、聴力によって差別をつけない集まりでした。ろう者、中途失聴者、難聴者、健聴者が協力して、雑誌「みみより」を中心に、お互いに情報を交換し、励ましあって聴覚障害者の幸せのためにがんばろうということが目的でした。四つ葉のクローバーという提唱を思いついた人は、だれだったのでしょうか。ぼくの時代の後でした。

また、地域にも格差をつけませんでした。全国どこの人でも参加できる集まりでした。県単位とか、難聴者だけの集まりというように会員を限定して行政に支援を仰ぐという方向は、最初から考えなかったのですね。

ただ、例会の会場がろう学校の教室でしたから、手話は使いませんでした。手話の時代は、みみより初期のころは、まだだったのです。そして、会員の支えだけで運営する財政は、いつも貧乏で、役員は自己負担で活動してきました。

500号にいたるまでの原稿は膨大なものですが、耳の医療、補聴器、就学、就職、仕事、恋、結婚、育児、手話、読話。みんな、その切実な思いを、文章に書いて「みみより」で叫んだのです。自立した「みみより」は、貧乏ですが毅然としています。

そして、その「みみより」を安い費用で印刷してくれた創己堂印刷さんの長い間のご協力については、ただただ深い感謝を申し上げるばかりです。

とにかく、500号を目前にした「みみより」は、いま遠藤良明会長以下の理事会で、岡本昇蔵さんを中心とした編集部の並々ならぬ奮闘でつづいてきました。

幸い今年の春から、みみより会のホームページがスタートしました。そこには、これからみんなまで書いていく「みみより会の歴史」のページを、味蓼雅美副会長が準備してくれております。ホームページの新しい展開と、岡本編集長がまとめあげる500号の誌面とを、みんなまで書き込むことによって、「みみより」の歴史やこれからの進路も、しだいに再確認されていくことでしょう。

しかしながら、前途は、いままでに増して多難です。現代では、高齢化し仕事も定年になった人たちが増えていきますが、聞こえない人たちが引きこもりにならないためにも、会員全員の協力によって、元気な「みみより」のエネルギーを、ぜひ維持し継続していきたいものです。

21世紀には、人工内耳から内耳再生医療へと思いがけない医療の開発も進むことでしょう。しかし、そこに聞こえない人がいるかぎり課題は絶えません。

みみより会に未来があるとすれば、それはみんなで掴む500号こそが希望なのであり、その雑

誌が生き抜いてきた不屈の明るさこそが、これからの希望を物語るものなのだと思います。

えとき・ひさし(本名・丸山一保 千葉県習志野市袖ヶ浦)  
みみより会参与 みみより誌初代編集長  
2003年「みみより」誌 No.494号掲載

No.51

みみより500号の年に思う 2

## わたしが『みみより』編集長だった頃(上)

鈴木克美

みみより会の出版物第1号は、たびたびいわれているように、ガリ版刷りの『足踏み』という名のパンフレットである。14ページ、昭和30年1月20日。次が『みみより』15ページ、昭和30年2月20日、この2冊は「ろう者と若い人々の会」の発行である。その次が『胎動』16ページ。昭和30年3月27日、この号から「みみより会」発行に変わった。所在地は「日本ろう話学校内」だった。

『足踏み』『みみより』の発行責任者は丸山一保・清水昭雄、『胎動』は丸山一保。この会に参加しようと、わたしが丸山さんに手紙を出したのが、『胎動』の出たこの月だった。

そして、『胎動』の次の『パンフレット第4号』で、突然、わたしが会誌の編集をしている。これもガリ版で、13ページ。昭和30年7月3日発行。発行責任者は鈴木克美・関根真明とある。正直、どんな仕事をしたのか忘れてしまった。21歳になったばかりのわたしは、みみより会という若さに満ちた会の魅力に惚れこんでしまって、とにかく、元気がむしゃらだった。

先の3冊のパンフレットには、「会誌の発刊をめざして」という合言葉のような副題がついていた。その待望の会誌が、昭和30年5月20日発行の『みみより』創刊号である。つまり、第3と第4のパンフレットのあいだに、最初の「会誌」が誕生したのだった。和文53ページ+英文7ページ。美術孔版といって、きれいな仕上げのおしゃれな雑誌だった。編集責任者は丸山一保・岡田秀穂・清水昭雄の3人になっている。

このあと、やはり丸山さんが実質的な編集長となって『みみより』第2号が同年9月1日に、第3号が翌31年8月1日に出ている。よくもこう、次々に出せたものだ。しかも、その合間には、タプロイド新聞型の『みみより通信』を、わたしをふくむ役員が交替で、自らガリ版を切ってつないだ。ゼロックスコピーなんて便利なものは、まだなかった。

翌々32年2月1日、『みみより』第4号が出た。編集責任者はまた、突然に鈴木克美である。「また4号か」と、ちらり思ったものだった。

当時のわたしは「4」という数字に、ばかに縁があった。国立と県立と2校受けた大学の受験番号が二つとも偶然に4番だったし、受験で泊まった宿舎が4号室だった。合格した新制大学で4回生だった。

脱線失礼。とにかく、雑誌編集の経験もないくせに『みみより』4号の編集を喜んで引き受けて、走り回った。自分にもできることがあるのがうれしかった。

パンフレットも、美術孔版の『みみより』も、第4号で終わった。いや、発展的解消だった。会は若くて、ぐんぐん会員をふやし、中心メンバーの意欲もどんどん高まっていた。

次がタイプ印刷の小冊子の『みみより通信』、これも毎月発行で、編集責任者はわたしだったが、実質的な編集長は加藤光二さんだった。編集部も加藤さんのお宅に置かせていただいた。一方で、丸山さんはみみより会の柱になる、しっかりした雑誌がほしいと熱心に言い続けて、活版の『みみより』の発行にこぎつけた。

これがまもなく500号になる現在の『みみより』の原型である。

若者中心の障害者のつましい会で、あんまりっぱな会誌を毎月発行できたのは、もちろん、丸山さんの才覚と能力と気力によるものだった。

瀟洒なスタイル、内容、執筆陣、話題性……、『みみより』は評判がよかった。評判がよくて当然……とさえ、わたしたちは思っていた。思い上がりみたいだが、とにかく、そんなふう燃えて、使命感もあった。『みみより』にいることに誇りがあった。

ところが、それからしばらくして、丸山さんが個人的な都合で編集長を退き、わたしが後任を引き受けることになった……。

と、この会の歩んできた道のりを振り返る大切な話はこう書くしかありません。でも、はっきり言って、当事者にとっては懐かしい思い出も、そうでない方にはたいして面白くはないでしょうね。なにしろ、45年以上も昔の、何度も繰り返された話です。知っている方はとっくにご存じでしょうし、興味のない方にはどうでもいいことかもしれません。

わたし自身もまだ、思い出の中に埋没する心境になっていないので、また同じ話を書くのかと、PC打つ手がにぶります。で、掃き清められた表玄関の話はここまでにして、きれいごとではない、裏での失敗と愚痴をさらけだして、恥をかいてみようと思立ちました。そのほうが、読んで多少は面白いでしょう。

でもまだ、差しさわりがあるといけません。話はわたしの『みみより』編集長時代に限り、他の方には仮名で登場していただくことにします。

『みみより』が活版になって2年半ほどたったある日、Mさんから会誌の編集を「自分に代わってやってもらえないか」という話があった。

「会誌の編集」といっても、それはみみより会そのものの切り盛りを意味していた。説得上手のMさんは、こういうとき、いつも「君しかない。君ならできる」という。こちらがまた、こういう言われ方、頼まれ方に、すこぶる弱いときている。

お人よしののに負けず嫌い。うぬぼれとか、欲とかもあった。わたしはいつも、不肖の弟のような立場だったから、賢兄のMさんに負けるものか……という気持もたしかにあった。世間というものを知っていればできっこない……はずのことでも断りきれず、ついつい、引き受けてしまい、それでいつも後悔してきた。

しかし、このときばかりは、さすがに、わたしには大役とわかっていた。はっきり言って、自信がなかった。悩んで、当時のみみより会の顧問格をしてくださっていた先生方のお宅へ一人で次々に伺って、ご意見を聞いてまわった。意見を聞く……といっても、早く言えば、せめて励ましの言葉がほしかったのだろう。

しかし、先生方は、必ずしもわたしに好意的ではなかった。Mさんとの交代を認めない、君には無理だと、はっきりいう先生もいた。まあ、それも当然だった。わたしはそれまで、先生方と直接コンタクトをとったことがなかった。それはMさんが一手にやっていたのだから、突然、よく知らない相手から相談されても、そっけない返事しか出てこないにきまっている。そんなことは承知の上で、どんどんやればいい。それだけの覚悟が必要だ。そこまで考えていなかったのは、若者の甘えである

それはそうでも、その程度の能力しかない、君は信頼できないといわれたみたいに受け取ったわたしは、すごくがっかりして、くやしかった。聞かなければよかった。後年、人から相談を受ける立場になったとき、あのときの光景をよく思い出した。

それでももう、とにかくやるしかない。わたしの「編集経験」といえば、上に書いたような程度でしかなかったのだから、向こう見ずな、乱暴な話であった。

Mさんは編集部を自分のアパートに置いていた。編集長交替で、そこは引き払うことになった。編集スタッフはもう一人のMさん(M2さん)と、あと難聴者のAさんと、ろうあ者のIさん。健聴者のM2さんが編集の割付や印刷所との交渉をやり、Aさんが広告スポンサーの開拓を引き受け、Iさんが情報面をと分担していた。それはそのまま、引き継ぐことになった。

M2さんは、わたしに仕事を引き継ぐまでのしばらくのあいだ……という約束で、編集のノウハウについて、いろいろ教えてくれた。あんまりなんにも知らないのだから、びっくりしたのではないだろうか。

わたしは藤沢に住んでいたのだから、休みの日に東京に通って、みみより会の仕事をするようになった。それならまあ、経験の浅い自分にもやっていけるだろうと、わたしは楽観していた。これから始まる新しい仕事に、人生の希望を見つけようと思っていた。まあ、甘く見ていた。

一か月もたたないうちに、最初のアクシデントが起きた。

『みみより』編集スタッフのAさんとIさんは、もともと、仲が悪かった。それはほとんど、当時の難聴者とろうあ者の対立確執をそのまま、編集部を持ち込んでいた感じだった。売り言葉に買い言葉で、つまらない些細な会話の行き違いが、すぐ、はげしい口論に変わっていた。

ある日、勇んで東京へ出てみると、Aさんが顔をすごく腫らせている。Iさんに殴られたのだという。わけは聞かなくてもわかっていた。「殴られてまでみみより会の仕事はできません」と、そのままやめてしまった。

まさかそこまではと思っていたので、引き止めようがなかった。その数日後、今度はIさんが「責任を感じる。申しわけないのでやめたい」と、これもやめてしまった。

「えっ」と、びっくりするひまもない出来事だった。ショックだった。わたしの『みみより』編集長の、前途多難を思わせる門出だった。

3号雑誌という言葉がある。創刊してから3号までは出版できても、そこで終わってしまう弱小雑誌のことである。

『みみより』は3号雑誌にせずすんだと、たまたま初期の頃の「第4号」を2回も引き受けて、無事に役目を果たせたときに、ちらりと思った記憶がある。

あの『みみより』が、まもなく500号。その日暮らしたあの頃を振り返ってみれば、夢を見ているような気もする。あと、何号まで……などと考えるゆとりもなかった。

『みみより』は出しつづけなければと、そればかり思っていた。やむにやまれぬ毎日だった。あんな情熱が、いったい、どこから湧いて出てきたのだろうか。

すずき かつみ(静岡県静岡市)

みみより会元会長 現参与

2003年「みみより」誌 No.495号掲載

## わたしが『みみより』編集長だった頃（下）

鈴木克美

Mさんがアパートを引き払ったあとのみみより会には、決まった事務所がなかった。常勤の事務員がいるわけでもなく、ファックスもケータイもない時代だから、意思疎通のためには、はがきを速達で出して会う場所を指定するか、直接訪ねてゆくしか、連絡のしようがなかった。それもこう、感情がもつれて話がこじれて、相手が会いたがらないとなると、困ってしまう。

このときはじつに困った。東京は遠かった。M2さんから最初の約束どおり引継ぎを終わると、編集部はわたし一人になった。仮の事務所も決めなければならなかった。藤沢住まいというのは、不便だった。

それでも、会誌の発行を止めるわけにはゆかない。編集部はわたし一人でも、委員や有志の人たちに助けてもらって、『みみより』は出し続けなければ……。原稿執筆を頼み、広告スポンサーを回り、のちに朝日新聞のカメラマンになった徒弟に写真を担当してもらって、取材に行つてグラビアページもつづけた。編集部に送られてきた手紙や便箋書きの投書を原稿用紙に書き写して、穴埋めをした。「バイオレット日記」など、ろう学校の先生から送られた教え子との交換日記から、思いついて連載にしてみたこともあった。

自分でもよく奮闘したと思う。若かったからできたのだろう。わたしは20代半ばを過ぎつつあった。

そのうち、ある日突然、職場へ神奈川県警の刑事が2人やってきた。話を聞きたいというのである。後ろ暗いことなど何もなかったが、いい気持はしない。もしかして会のことかと、心配しながら逢ってみると、横浜に住んでいる難聴者が窃盗事件を起こして、みみより会員というところから、会の責任者のわたしに事情を聞きにきたという。

会の責任者といっても、面識程度の会員の生活まで知っているわけではない。警察も事情がわかって、すぐ帰ってくれたのだが、それ以来、みみより会で走り回って、休日出勤はせず、当直明けはさっさと帰ってしまうわたしに対する職場の眼が、微妙に変わってきた。

わたしは藤沢の海辺にある水族館に勤務していた。「水族館のおじさん」というと、のんきな職業のように思われがちだ。気分的にはたしかにそういう面があるが、しかし、ひまな職場ではない。

水族館は、年中無休で日曜祭日が忙しい。そのころは、一般の人の休む日曜には原則として休めなかった。日曜に休むには理由を申告しなければならなかった。週に一度、半夜交替の当直がある。魚をとりに海へ出るし、出張も多い。水槽掃除の残業もある。一ヵ月単位の勤務表があつて、定休という日がない。しかも、これがまた、しょっちゅう変更があつて、つまり、休みを利用しての予定をきちんとたてられないのが、会の仕事をするには不便だった。

当直の代休と公休を利用して東京へ出て、みみより会に行くのだが、役員のほかの人たちとのペースが合わないのがいちばん困った。なんとか都合をつけて出てゆくと、留守のあいだに話が変わっていたりした。東京と藤沢を往復する電車賃も、薄給の自分には、じつはつらかった。

わたしは水族館をやめようと思った。会社にも会の同志にも内緒で二度、よその会社の求職に応じてみたが、どちらも書類選考で断られた。そっけない断られ方だった。

それも当然で、理系のわたしには、普通の会社で他人に差をつけて自分を売り込めるものがなかった。

「他人との差は問わない。普通であることが第一条件」の職種もあることも改めて痛感した。か

とって、転職の当てもなく、せつかく好きで就職した水族館をやめる決心はつかなかった。難聴者の就職難はもう、経験済みだった。

なんとかやりくりして東京へ通っているうちに、おかしなことに気づいた。どうも会の仕事が進んでいない。先週来たときに頼んだことができていない。スポンサーから叱られて謝りに行ったこともあった。事務所を置かせてもらっていた会員が、こちらが行くとわかっている日に不在で会えず、帳面を見られなかったこともあった。これはあぶない。

だんだん、疲れてきた。まず、食事がとれなくなった。もともと、やせっぽちなのに、なお、やせてきた。それから夜、眠れなくなった。毎晩眠れないので、昼間はぼんやりしていて、注意力が落ちた。耳の遠いものがこれでは、上司も同僚も困る。

ものごとにおびえやすくなった。好きだった怖い映画が、怖くて見られなくなった。その頃始まった3D映画のハシリだった『モガンボ』という、たかが猛獣狩の映画を見ていて、すごく気分が悪くなった。両脇の下にじっとり冷や汗をかいて、座席にすわっていられなくなった。いっしょにいた女友達が、「へんねえ、顔色がとても悪いし、どうしたの」と、しきりに心配してくれた。

忘れてきもしないものを、忘れてきたんじゃないかと気になって、何度も見に行ったり、呼ばれもしないのに勝手に「ハイ」と返事して笑われたり、動作がにぶくなってウロウロしたりして、こりゃ、ノイローゼだなと、自分でもわかった。

水族館の屋上からは、道路をへだてて海が見えた。昼休みには、毎日のように屋上に上がって海を眺めた。あれこれ、混乱して、考えがまとまらず、どうしていいかわからなくなっていた。海を眺めていると、ずっと、心が安らいだ。

好きだったヘルマン・ヘッセの詩に「海の波に向かって問いかける……君はいま、ぼくのものか、ぼくは今、きみのものか、君のすべてはぼくのすべてか、君はいつまでもぼくのものか……すると、波はキラキラ光りながらほほえんで、何も答えてくれない」というのを読んで、はっと、何か教えられたような気がした。

それからふと、気がついた。自分はなぜ、水族館にいるのだろう。自分は今、高校生のときにさんざん悩んで選んだ道を、幸運なことによりやく歩き始めている、それをもうやめてしまうのか、やめるだけの別の将来があるのか……と。でも、その答もすぐには出なかった。

ある日、水族館の裏側で、いつものように水槽のへりを歩いていて、突然、水槽の中に落ちた。外から見ていたお客さんは、さぞ、びっくりしただろう。笑い出した人もいたかもしれない。魚を見ていたら人が落ちてきたなんて……。

こちらは、どうして落ちたのかわからなかった。びしょ濡れで這い上がった。大切な補聴器もダメになった。ふるえながら着替えていて、そのときにわかに、何か憑き物が落ちたように思った。

もう、これ以上は無理だと、濡れた作業服を絞りながらきっぱり思った。くやしいし、皆さんには申しわけないが、仕方がない。委員長をしてくれていたDさんに手紙を書き、『みみより』編集長からの撤退を許してもらうことにした。残念だったが、もう、本当によれよれだった。

ただ、編集長を引き受けてからここまで、まる3年はたっていなかったというのは、今になってみると、どうしてもふしぎである。

今では2年3年、なんとなく過ごして、すぐにたってしまう。これにくらべて、喜怒哀楽、変転起伏、良くも悪くも、なんといろいろな思い出のぎっしり詰まった、密度の濃い2年だったことだろう。若い時代には、時間もゆっくりと過ぎるというのは、本当のことなのかもしれない。

その後、わたしは少し勉強して、新しい水族館をつくるために、藤沢から金沢へ移った。みみより会とわたしとの蜜月時代は、それで終わったはずだった。

さらに後年、次の新しい水族館をつくるために、金沢から清水へ移ってきた。しかし、やがて

また、Mさんから「君しかいない」と、あのときとそっくり同じ文句、同じ口調でくどかれて、こんどはおめおめ会長を引き受けてしまい、13年も名前ばかりの恥をさらすようになるとは、予想もしないことだった。

とにかく、あのころ、なぜ、あんなにみみより会に熱中したのだろう。なぜ、あれほどにみみより会に熱中できたのだろう。いまだによくわからない。わからないからこそ、あそこまでやれたのかもしれない。

みみより会の原点は、短距離リレーだった。息が切れるまで眼一杯走って、次の走者にバトンを渡していた。いや、押し付けてきた。それを喜んで受け取ってくれる次走者が次々に現れてくれた。そこから次々にバトンが渡ってゆくうちに、いつのまにか、マラソンリレーの駅伝に変わってきた。それが『みみより』の「走り」の原動力になってきたのだと、今、あらためて思う。

思いがけなくも『みみより』は500号間近まで続くことになった。すごいことだと、改めて思う。

駅伝リレーのメンバーになってくださった皆さんに、短距離ランナーの一人だった不肖の先輩から、厚くお礼を申し上げたい。

どんなことでも、細くてもいいから長くつづけるということが大切だと思う。でも、それがむつかしい。

ましてや、『みみより』は500号。血気にはやり、若さにまかせて走り出した、私たちのささやかな雑誌がここまでつづいてきたのは、この雑誌のどこかに、時につれ、人に合わせてゆける、しなやかなたくましさがあり、人をひきつける魅力があったからだろう。

『みみより』は50年近い昔、「聴力障害者の明るい生活のための雑誌」として姿を現した。その志は変わっていないはずだ。昔も今も。これからも、求める人がいる限り、時代の変容を超えて『みみより』はつづいていってほしい。

すずき かつみ(静岡県静岡市)

みみより会元会長 現参与

2003年「みみより」誌 No. 496号掲載

No.53

みみより500号の年に思う 3

## みみより400号 よくぞここまで……

團 順 一

昭和29年8月18日の、朝日新聞の投書欄に寄せられた「耳の聞こえる大学生と文通したい」という、京都の聾学校の生徒の声に呼応したメンバーが、顔を合わせ、何かやろうと蒔かれた一粒の種。夢と希望の意味を込めてその名も「胎動」「足踏み」と名づけたパンフレットを作り、そして、昭和34年4月に「みみより会」として発足し、みみより誌も「みみより通信」の名で生み出されてから38年余、ここに400号を迎えたことは、昭和40の新年号を、100号としてまとめた私には、良くぞここまで続けてきたものだという感がします。

これも、前会長の岡田秀穂氏を始め、役員や、編集を続けて来た歴代のスタッフの努力もさり

ながら、根本には「みみより」を皆が続けようとの願いがあればこそです。それに加えて、ここまで続けられた陰には会員のみならず、それとなく、援助の手を差し伸べて下さった多くの方々の力もあることを忘れてはなりません。わけても、印刷を引き受けて下さっている創巳堂の社長の和南城氏や、木村氏のご厚意が無ければ、ここまで続けられませんでした。

創巳堂との縁は、その頃、みみよりの生みの親でもあった丸山一保氏(現参与)は新宿区の新大久保駅に近い百人町に住んでいました。そして、いつも歩く近所の裏通りに小さな印刷所があることに気がついていたので、「みみより」誌を出そうと考えたとき、頼みに行ったのでした。

突然、見知らぬ若者が飛び込みの形で頼みに行ったのに、気持ち良く引き受けて下さったのが社長の和南城氏でした。その後は、昭和33年4月に新宿区の戸山町に設立された国立聴力言語障害者更生指導所(通称・国立ろうあセンター)の印刷科の指導にも協力され、入所生のためにも大きな力を注いで下さったのです。

また、一時、タイプ印刷にした後の、再度の活版化の折の丸山氏の依頼にも、快く引き受けて下さった時は、どんなに有難かったか、今でも忘れられません。

みみより会が昭和30年4月に発足した頃は、敗戦後十年目で、まだ世間は戦後処理に大童だった時でした。同じ年の11月には吉田茂の自由党と鳩山一郎の日本民主党が合併して自由民主党となったのでした。その自由党も、現在、地割れから分裂が始まりましたが、みみより会にとってもこの間の歩みは、決して平坦なものではありませんでした。

みみより会が、小さなサークルとして、学生や若者が中心になって動き出してから二年目、当時は、難聴者、中途失聴者にとって、今のように数多くの聴力障害者のサークルが無かったこともあり、「みみより会」のことが、新聞などのマスコミで紹介され、口コミにより会員も増えて来ました。

その昭和32年11月、それまではガリ版印刷のタブレット版の月報「みみより通信」を、そして、文集の「みみより」を不定期に発行していましたが、お互いの励ましのためだけではなく、我々の声を社会の人達にも伝えて、相互理解の道をつけよう、それには活版の雑誌としてより多くの人々に読んで貰えるようにすべきだ、と編集を引き受けてくれた丸山氏の意見により、活版印刷に切り替えたのでした。

それと共に、編集部も町田市に加藤光二氏宅から、丸山氏のアパートに移しました。

当時、彼は東大の英文科を卒業して、出版社につとめ始めていましたが、難聴でもあり「みみより」誌の編集を生涯の仕事として続けて行きたいという考えを持っていました。

私達としても丸山氏の優れた才能からも「みみより」誌の編集発行は彼に任せておけば安心だとも考えていたのでした。

ところが、丸山氏の耳が、東京医科歯科大学の角田忠信博士の手術を受けたことで、聴力が回復したのです。そしてフジテレビに入社、結婚という喜ばしいことになりました。

しかし、そうになると、彼も悩んだ結果、「編集に当たるには、耳を切実に感じる魂が必要だ、耳が治ったのも、みみより会の仕事が縁なのでそのためにも続けて行きたいが、切実な叫びが今の僕には無くなってしまったので、これ以上編集にあたることはみみよりのためにならないから」との痛切な声を残して35年9月に辞任したのでした。

その丸山氏の後を引き受けてくれたのが、現在の会長の鈴木克美氏でした。当時、彼も東京水産大学を卒業して江の島水族館に勤めたばかりでした。水族館の飼育係として一瞬も目を離せない生き物と取り組む仕事と研究の合間を縫って、徹夜勤務が明けると藤沢から東京まで飛んで来て編集という、無理に無理を重ねるような努力を続けてくれました。

「みみより」誌の発行も、35年の9月号以降、どうしても遅れがちになりながらも、必死になって取り組んでくれていた鈴木氏でしたが、やはり、オーバーワークになり、健康も害したり、過労から水槽の中に落ちたりで、一時は水族館を辞めて「みみより」誌に専念しようかと悩んだ末、36年の3月に結婚することになったことで、結局、このままでは身体が持たないからと、3月の任期完了をもって、編集を断念せざるを得ませんでした。

その頃には、それまで殆どが学生だったメンバーが、社会人としての第一歩を踏み出し始めたのです。そうなると、情熱はあっても、学生の頃のように、暇がとれなくなることでした。

私も結婚したばかりであり、また、スタッフも大半が適齢期を迎え、続々とゴールインで、学生時代、新社会人、そして家庭を持つステップ毎に、みみより会のこととのバランスの維持に、皆それぞれ頭を悩ましたものでした。

また、それまでの編集部は、丸山氏が学生時代から結婚まで借りて住んでいた新大久保のアパートの3畳の部屋を、引き続き貸して貰っていましたが、昭和36年1月には立ち退かざるを得なくなりました。

その時、他を探す余裕も無かったので、ある会員の申し出を信じて、その板橋の会員宅に移しましたが、横領などで多くのトラブルを起こされて、会として多大な損害を蒙ってしまったのでした。活版印刷の最終号になった3・4・5合併号(通巻第63号)も、発送せずに大半を捨てられていて、幻の号となってしまったり、この時期がみみより会にとって、初めての大きな危機でした。

そこで、4月に委員長を引き受けてくれた高寺志郎氏が、会を精神的なバックボーンになるようにしながら、「みみより」誌も役員がやれる範囲で会誌として続けて行こうと、副委員長として迎えた阿部正庸氏にタイプ印刷を依頼して発行を再開したのでした。もちろん、それまでの第三種郵便物の許可は取り消されました。

そして、翌37年4月22日に、創会7年目に第1回全国みみよりの集いを国立聴力言語障害者更生指導所にて開きましたが、全国から150名もの参加があり、改めて、みみより会の存続の意義を、皆が肌で感じました。

そこで再び、委員長を引き受けた私をはじめ、役員全員で考えた結果、この一年間、機関紙として無理の無い範囲でと、不定期刊行に近い形で、タイプ印刷で出して来たが、やはり、せっかくの僕らの声を仲間内だけのことで終わらせてはいけない、どうしても、多くの社会の人々にも聞いて貰い、相互理解の向上を図って行かなくては駄目だ、そのためには、誰でもが、手にとって読んで貰えるものを出すべきだから、やはり、タイプよりも、写真や凸版も入れることができ、同じページ数でも内容も豊富になり、また、送料の面でも第三種郵便物の許可が取れば助かるから、活版に戻して定期刊行を心掛けるべきだ。との方針を立てて、大会記念号の37年3・4・5月号から、一年ぶりで活版印刷の「みみより」誌を出したのでした。その結果は好評でした。こんなにも、皆が楽しみにしているとは、スタッフ一同も張り切り、遅れを取り戻してゆき、定期刊行に漕ぎ着けました。

そして岡田前会長が、早稲田大学の助教授として多忙な中を割いて、東京中央郵便局へ何回も足を運んで交渉して下さったお陰で、11月22日付で待望の第三種郵便物の認可も再び得られ、12月号から現在まで継続されているのです。

私は、委員長、兼編集長として続けて来ていましたが、昭和40年4月に制定された新会則により、編集部を分離して、理事長として会の運営に当たるために、42年の3月号(通巻125号)で編集長を辞し、4月号から編集スタッフの岡本昇蔵氏にバトンタッチしました。

彼はそれから、編集長として6年近く続けた後、交代した千葉登美雄氏が200号、その次の佐

藤和夫氏が250号、そして、300号は再び引き受けてくれた岡本氏が…、と言うことで、岡本氏は通算20年以上の長い歳月、編集にタッチしてくれているのです。

このことは、長年にわたり、会計委員や理事長として同様に力を注ぎ続けている高橋広司氏、同じく、創会以来の会員で、事務を引き受けてくれている矢島秀子さん共々に、感謝あるのみです。

活版「みみより」第1号、昭和32年11月号の後記の本年度の役員欄には、会長岡田秀穂(40)、委員長丸山一保(25)、委員団順一(26)、高寺志郎(23)、高橋慶子(21)、会計委員外山和郎(26)、手芸グループ代表須藤多恵子(30)、読話グループ代表藤川浩一(28)と出ています。鈴木克美現会長も当時23歳でした。役員も会員も、皆、若かったのです。

このように、若さと情熱だけをエネルギー源として、会に集まったお互いが夢を持ち、試行錯誤を重ね、紆余曲折を繰り返しながらも、青春から初老期迄の齢を重ねて、ここまで来た「みみより」ですが、これからも、皆が気持ちを寄せ合って、引き継がれて行くことを心から祈っています。

(1993・6・30)

だん じゅんいち(横浜市神奈川区西神奈川)

当時・みみより会参与 故人

2003年「みみより」誌 No.496号掲載

500号記念編集長シリーズ3回目の今号は、本来ならば団編集長が執筆予定でしたが、ご逝去の報に接しかなわぬこととなり、このため「みみより」創刊400号(平成5年8月号)から、ほぼ原文通り再録しました。

したがって、文中に登場する方々の役職は発表当時のものです。

(編集部)

**No.54**

みみより500号の年に思う 4

## みみより20年(はたち)のころ

千葉 登美雄

先ごろ分厚い400号に瞠目したのに、もう500号発行とはまさに光陰矢の如しです。ここに偉業を慶祝し、永年ご尽力戴いた方々に感謝致します。

私が入会したのは昭和34年で、すでに立派なみみより誌が刊行されおり、同じ仲間の記事に啓発され、例会出席のたびに知己も多くなりました。時にはイベントに参加したり企画を担当しては結構楽しんでいました。のちに会活動に関わり紆余曲折を経て本誌編集を担当したのは30年も前のことです。その道程にある200号前後の有り様を振り返ってみれば感慨無量です。

昭和44年ごろ会活動の拠点にしていたベル会館が閉鎖され、交流の場である例会場確保に難儀した。東京支部委員を担当したこの時期、みみより会は財政面の悪化、組織活動が些か低迷、本誌発行の難渋など、継続についてなにかと苦境にあったと記憶している。

昭和46年、この窮状を立て直すべく高寺理事長以下役員は大車輪の活動であった。対外的に団体交流や行政交渉が広範囲になってきたので、改めて会務全般を各部門に分担して行うカタチが

スタート。活動を通して意識を変革させよう、充実した会として存続させようという気概にあふれた人達によって、数年のうちに各部とも軌道に乗った。手話が普及して情報多く厚みのある会議がもたれるようになったのもこの頃である。

本誌には岡本前編集長退任に伴い、有志7名が新編集メンバーとして参集。自来私は編集長、顧問、部長として10年近く携わった。中途から佐藤君が編集長を歴任するなど、多数の方が入れ替わりに協力してくれ、自ら売り込んできた闘志の人もいて、いつも活気にあふれた日々であった。

編集は取材、割付、校正、印刷会社へ出向と分担して1冊に集約する方法にした。部員と奉仕時間を相談して組織的活動を維持する、毎月の編集会議を開く、後輩が随時取り組める技術内容で進行するなど腐心。みみよりは「聴力障害者のあかるい生活のため」が主旨の機関雑誌なので、青臭いけど会員が自己表現して学び合えるような誌面づくりを実行。肝心の自由投稿は少なく、テーマを模索して寄稿依頼することが常態化。それなりに原稿を確保しての定期刊行は容易でなく、再三締切り直前に原稿欠乏症でパクパク。発行内容にもっと読者の要望や批評を期待していた。

輩出する都公認の手話通訳者に取材や寄稿を依頼したり、各地に誕生した手話サークルの活動ぶりを伝えている。聴障者の運転免許獲得運動はろうあ連盟の主導であるが、当会も協力して微力ながら世間に呼びかけ得た。難聴児の持つ諸問題、字幕付のテレビ放映、私達聴障者の日常に身近と思われる事柄など出来る限り取材。有意義な情報記事は即座に掲載。許可を得ての転載もあった。

固定欄として人物帖は親睦のより所なので継続。人柄が表現できればと質問設定したが、毎回の返信未着には右往左往。依頼原稿では生活記録の意味をこめて「リレー随筆」、失聴の頃と回想をテーマに「もうひとつのリレー随筆」、勤務者の「私の仕事—その喜びと苦しみ」などがシリーズとなった。

先達の方と対談した記事、座談会、例会の講演などを各部の協力で誌上載録できた。健聴の方(通訳)が同席して、手助けしてくれたので実現。筆談でやりとりした纏めの苦労が軽減。女性部員が手がけた「ふじんらん」や生活の知恵、経験談などは誌面を柔らかかにしてくれた。詩話グループは活発に創作していましたが、編集意向から寄稿は限定か割愛せざるを得なかった。

記念の200号は初めて増頁を手がけた。みみより揺籃期からの歩みをリレー式に綴って貰う試みで、先輩編集長面々の熱意に満ちた活動と会の歴史を伝えた。素人集団にしては上出来の発行だった。

部員一同で息抜きに行楽したり、静岡支部や茨城支部の皆さんと親睦交流をかねた取材旅行としゃれ、大挙おしかけたこともあった。みみよりファミリーが多数集まり、侃侃諤諤のにぎやかさで溜まったストレスは霧散。

旧態は脱却していたが役員間に多少認識のズレがあった。会員による「みみよりのあり方について」が問われる一方、「みみより会への一考察、その内と外を衝く」という現状を誤解されているような一文が投稿された。これについては理事会で検討し、討論部が「会の姿勢と見解について」として纏め次号に掲載。会の趣旨、姿勢を啓蒙する一助ともなった。また20周年記念大会では4項の「みみより宣言」が発表され、本会の活動指針がより明確になった。

各位の尽力で、順調に発行を重ねておりましたが、当時は通信や編集に便利な機器は未だなく、すべて手作業でかなりの時間を費消した。まず挑戦してみようという若さ、いささかの使命感や心意気があって続けられ、ハードワークによく耐えたものです。このような厳しいなか、編集責務をもって担当された方の氏名を記し、改めてその労に感謝致します。

前田 精      岡崎 弘樹      針田 昌治

|       |           |       |
|-------|-----------|-------|
| 田中 紀子 | 森 芳江      | 富川 哲次 |
| 中園 秀喜 | 佐藤和夫(編集長) |       |
| 伊藤 敏一 | 大久保紀次     | 大川 豊  |
| 市川 明  | 大槻 芳子     | 青木 紀子 |
| 橋本 英憲 | 黒須 照夫     | 高野 年充 |
| 内ヶ崎明子 | 成井 信子     | 横田三枝子 |
| 高寺 志郎 | 渡辺貴美枝     | 岡本 昇蔵 |

(順不同)

10年目のあとがきに「編集長を引き受けた時から毎月1回の編集会議が定着し、今度で通算100回目になる。目的は編集に関わる企画、進行予定、分担と全てにわたって意見交換すると同時に、チームワークを培う場というわけです。こうした時に部員の持ち味を引き出してやる細心さと、先を見通した判断力が要求され、私には学ぶべきことが多多ある」とおこがましいこと書いているが、前向きな取り組みは長く続かなかった。

どんな組織にも起きることだが、あるとき理事会内にもめ事が突発。甚だしい会則の無視、同僚の仲間に思慮を欠く言動の数々、責任転嫁の強弁。これがきっかけとなって、私は意欲が薄れ活動から手を引いた。ほぼ同時に実績ある高寺参与、遠藤理事、前田理事、大槻理事も活動から離れたのは、みみより会のために惜しかった。

時代とともに社会環境は変わってきたが、みみよりは当初の志に思いを致し、次代につなげて行くことを願っている。会員の熱意を結集している本誌で、いささかなりと手助けして上げられる未知の人がいるだろうから。

ちば とみお(埼玉県草加市)  
東京支部長、編集長を歴任 会員  
2003年「みみより」誌 No. 497号掲載